

第三章 時間と生活

第一節 生活の時間・生産の時間

(一) 稲作

裾野の稲作

市域は稲作地帯であろうか。黄瀬川東岸の深良地域では、農家自らがゴタンビヤクシヨウ(五反百姓)とかサンタンビヤクシヨウ(三反百姓)と自称するように各農家の水田面積は少なく、いわゆる市域には、タドコロ(田所)と呼ばれるような純粋稲作地帯という意識は希薄であるように見える。例えば御宿村の近世史料によれば、寛文年間(二六六一—七二年)の同村の田・畑反別は、田が七町余りに対して畑は一二〇町歩で、畑は田の一七倍の面積があったという(ただし、米の収穫高に置き換えた村高では畑の石高はわずか一、二倍強にすぎなかったというが)。また、黄瀬川西岸の旧富岡村地域では、富士・愛鷹山麓の丘陵地が大部分を占めていて、地形的にも水稻に適している土地とは言えない。そのためか、この地域の、水稻栽培からシバハタ(芝生育成畑)などの畑地への切り替えは黄瀬川東岸よりも早く進んでいる。このような点から、市域は一般的に見て、純稲作地帯とは言えないように思える。

愛鷹山麓の下和田^{しもわだ}では、老人たちが「むかしや、下和田川(佐野川支流)にも水が流れていて、子供らはハヤやメンザッコなどの小魚を捕って遊んだこともあるし、ヤマガ(下和田集落の西)の方では田んぼも作っていたこともあった」という。しかし、現在は下和田川に水の流れはなく、流域には水田もほとんどない。その原因は一九二三(大正一二年)の関東大震災にあるという。地震後に川から水が消えたという話は富岡地区で広く伝えられていることであ



写真3-1 稲刈り (深良)

るが、こうした思いもよらない天災がもたらした影響も地域の稲作を畑作に変えさせた一因であろうと思われる。

しかし、市域が純稲作地帯ではなくても、人々の暮らしを時間と生活という視点から眺めるとき、その基軸となる生業が稲作であることは否めない。それは、近世の農村が村高の基準を米の収穫高に置き換えて算出し、それを貢納基準としてきた歴史と関係が深いのであろう。事実、市域では畑地を水田化するための深良用水を江戸時代初期に掘削し、箱根芦ノ湖の水を引き、米による村高の割合を高める努力を図っている。そうした歴史的な背景もあって、稲作が生業全体に占める収穫量の割合は大きくなく、たとえ三反とか五反の小規模零細稲作農家であっても、稲作に従事する人々が稲作りにかかる時間は一年の大部分を占めているし、稲作に対する意気込みはよその稲作地帯と同じように大きいのである。まるまる一年間が、稲作のための時間であるといっても過言では

ない。秋の稲の刈り入れがすみ、脱穀・籾すり等の調整作業終了後に翌年度の種籾を選別し、それを大切に保管するところからすでに次の稲作の一年が始まっているのである。稲作の生業時間には一年の区切りがないとも言える。そして、それに伴う種々の行事もあり、生業の時間とともに人々の生活のリズムを刻んでいるのである。このことは、日本の農村がもれなく米作り農村であったように、市域においても、米作りは人々の生業の中心に位置づけられてき

た証拠なのである。

以下、このような市域の米作りの一年を、順を追って眺めてみることにする。

生活の中の水と土 水田にとって水と土はかかわりが深い。ことに、引水方法や土質が稲の生育や収穫量、作業方法等に大きな影響をおよぼすといわれている。

市域における引水の仕方と土質は全域にわたって一様ではない。引水方法ならば用水とジミズ(地下水、あるいはジスイとも称する)、土質ならばカンデン(乾田)とシツデン(湿田)などの相違や地域差が各所に見られるのである。そうした水質・土質の相違はそこに生きる人々の生活に微妙な影響をおよぼすものであり、同一市域の中であっても、それぞれの地域の土や水に適合した生活が生まれ、営まれている。

ところで、一般に「水になじむ」とか「土に還る」という言葉が使われる。人がその土地土地の環境に溶け込むことをいい、そうあってこそ共通の基盤に立って生きる(あるいは生きてきた)資格を獲得できるとされる認識である。

市域にはかつて「デロブチ」と呼ばれる民俗があった。田植えの際、ムラに嫁いできたばかりの新婚の夫婦に水田のデロ(泥)を掛けたり、手荒にデロッタ(泥田)の中に転倒させたりしたものだだったが、こうした民俗なども、新参の仲間に早くムラの土になじむように願いを込めた意味をもつものであろう。

市域の各地区で、人々はどのように水や土に対処し、生活したものであろうか。ここでは、まず稲作とのかかわりに主眼をおいて、水と土について述べてみる。

水 市域では、水の種類は大きく用水とジミズに分けられる。用水は箱根芦ノ湖の水を隧道を通して引いた深良用水の水であり、ジミズはそれと区別して通称する水で、背後の山を源流としてムラに流下する文字どおりの地

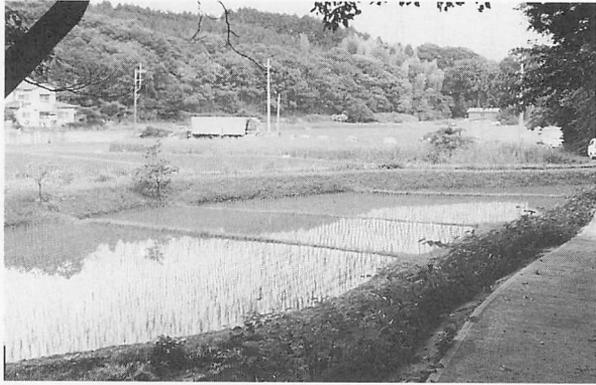


写真3-2 ジミズの水田（富沢）

元の水を指している。

市域のジミズにはさらに次の二系統が考えられる。黄瀬川を境に東西に分される両岸では、ジミズの源流となっている山系が異なるのである。すなわち、西岸一帯のジミズは富士・愛鷹山系を源流とするが、東岸のそれは箱根山系を源流としている。つまり、源流となる山系が異なっている。

例えば、黄瀬川西岸の富沢ではジミズと用水の両方の水によって地域の水田を潤しているが、ジミズを引いている水田は集落西側にあるので、土地では「西側の山の向こうの田んぼ」、「不動さんまわりの田んぼ」、あるいは「ヨコミゾ」などと呼び、深良用水利用の水田がある黄瀬川沿岸の水田のある場所とを、ことさらに区別しているのである。

ジミズの田にはフカダ（深田）あるいはハデヤーと称される、いわゆる湿田が多く見られる例が市域には多いが、これも例外ではない。したがって、湧き水は豊かで、それゆえ「浸み出る（湧き出る）水で、田は間にあった（稲が作れた）」とか「ヨコミゾ（不動さんの水）はフカダ（深田、湿田）だった」とかいい、富沢にはこの土地を特別視する傾向がある。湿田を、市域ではハデヤーと称することが一般的である。ハデヤーに対する水田はカンデン（乾田）と呼ぶ。一般的に、乾田は良い田、ハデヤーは悪い田という認識がある。「ハデヤーには馬も入らなかったので、田植え前の耕作には膝まで土に潜って、マンノウグワ（万能鋏）を使って、手で起こしていた。また、田植えの際は泥にはま

らないように、トマリギ(止まり木)と称する棒を土中に埋めておき、ソートメサン(早乙女)はこのトマリギを頼りにハデヤーに入って田植えを行ったものだ」と、ハデヤーでの苦心の作業の思い出を語る。ハデヤーでは裏作の麦は作れなかった。ハデヤー対策としての稲の品種は、浸み出る冷たい水にも耐える早稲種が適当だったという。また、次のような話もある。あるとき、ハデヤーを起こしていたら、手シャベルのような道具が出てきた。現在は作られていないが、かつてのハス栽培の名残であろうという。これらの伝承の中に、富沢地区のハデヤーに対する対策の知恵がうかがえる。

しかし、前記してきたように、ジミズはハデヤーを作るなど、水田用水としてはきわめて扱いにくい水ではあるが、飲料水としては清浄で、かつ豊富な水として、暮らしの中には極めて役に立つ水として大切に考えられていた。したがって、市域の場合、ジミズの湧き出る山麓周辺には多くの集落が古くから成立してきたのである。

黄瀬川東岸にもジミズの影響によるハデヤーは見られる。深良地区の箱根の山すその小さいホラ(洞)には公文名、稲荷などの小集落があるが、こうした集落が存在する洞の奥にはジミズの湧き出る場所があり、その流路の先に広がる水田が湿田である場合が多い。公文名の洞、江の浦にある中坪や芹田という小字名を持つ地区がそれである。ハデヤーでの農作業は困難を極め、乾田とは異なったさまざまな工夫が必要だったようだ。田植え前の代掻きでは、「代でこねすぎると深くなってしまうので適正な代掻き具合が要求された」し、「牛や馬で代を掻いた後に、田をはい回るように手ならしした」り、「田植えの際には土中に松の木のトマリギを埋め込んだ」りもしている。トマリギに松の木材を使うのは、松材には油脂気があって腐りにくいからであった。また、公文名で採集されたオオアシ(大足)は、かつてこの地区で、田植え前のカチキ(山から刈り取ってきた小枝や草のことをいい、緑肥とも呼ばれる)の埋め込み

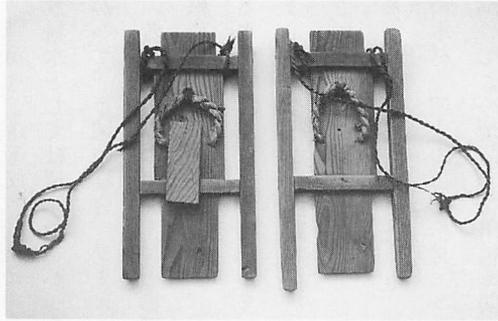


写真3-3 オオアシ (公文名)

に使用したことを物語るものであり、同時にこのあたりにハデヤーがあったことの証拠とも言えよう。「オオアシを使って、カチキを土中にフンゴンダ(踏み込んだ)ものだ」と伝えている。

市域で用水といえば深良用水を指す。深良用水は江戸時代初期に箱根山腹に隧道を掘削し、新川しんかわを造って芦ノ湖の水を裾野市域をはじめ、黄瀬川下流三カ郷・三〇カ村に流下させて流域の水田に灌漑した歴史的用水路である。市域で用水を水田に引いている地域は富岡地区の標高の高い地区や箱根山麓の洞地区を除く、黄瀬川流域の大部分の地域である。水稻栽培におけるこのヨウスイミズヨウスイミズの質については「下流に行くほど肥料が効いていて良い」などといわれるほか、「ジスイジスイに比べると水温が高くて稲作には良い」などということが聞かれる。つまり、深良用水の水は、それだけ多くの下流域の水田を潤しているということであろう。

ヨウスイミズは豊富だから、水田に引くばかりではなく、生活用水にしているところも多い。屋敷脇や屋敷内に水路がある家では、カワバタ(川端)と呼ばれる水辺の施設を独自に設置し、そこで野菜を水洗いしたり、使用したばかりの鍬くわの泥を落としたり、鎌を研いだり、また風呂水に使用したりなど、さまざまな水を使った作業や生活を見ることができると言える。

旧富岡村の御宿新田では、土地は溶岩ばかりで井戸も掘れなかったために、戦前くらいまで、飲料水は黄瀬川の水をくみ、家まで担いで運んだ水を使っていた。水運びは女の仕事で、朝早く、家族が起きないうちに、くんで運んだ



写真3-4 カワバタで芋洗い（深良）

ものだった。雨水をためる井戸もあり、それを使ったこともあったという。

土

土地の土質の良し悪しと稲作の作柄の成否はさらに密接な関係にあるといわれる。良い土には稲はよく実り、悪い土ではあまりうまくできないのは当然であり、人間の力ではどうしようもない与えられた自然条件である。そうした与えられた条件の中で、その土地に生きる人々は少しでも自分の土地を良くしようと努力をしてきた。また一方、初めから良好な土質を持つ地帯では自分の土地の肥沃さを誇る。例えば、富沢には「富岡の火山灰の土地よりは良い」というようによその地域とを比較して自分の土地を良く言う。こうした自分の土地自慢の例は市内各所で言い伝えられることである。

富沢の土質について、地元では、次のようなことが言われてきた。「ジ（地）が浅い。地に力がないので稲の育ちが悪い。しかし（稲が短いために、穂を付けても）転ばないという良い点もある。石が多い。ところによって深い田もある」。石が多いのは昔は黄瀬川の河原だったからであるという。

同じ黄瀬川西岸の地、下和田では、愛鷹と富士の土が混じった火山灰土がありクロツチ（黒土）と称している。この土は乾燥時には白く灰のように見える。保水力がなく、決して良い土とは言えないと土地ではいう。これを肥沃な土に変えるために、落ち葉や草などを一生懸命に



写真3-5 クロツチと火山灰の層（下和田）

るが、それに対してハデヤーと呼ばれる湿田は悪い田となっている。乾田になるか湿田になるかはその土地を潤す水と関係がある。ジスイと呼ばれる湧き水の源流に近い地点でハデヤーができやすい。水稲栽培には作業がしがたく、手に負えない湿田ではあるが、この「粘る土」は野菜などはよくでき、良い土だという。

「イツキ（居着き）が早い」という土質も稲作には良くないとされる。黄瀬川流域に多く、砂が混じっている土を指す。水を張っても「水持ちが悪く」、すぐ堅くなってしまいう土質の田を指す。こうした田では代を掻いてもすぐ堅くなってしまいうので、作業の際、足が痛くなって難儀をしたという。良い土質の田畑として、「水掛かりが良い土地、小石が少ない土地（佐野）などといわれる場所が市域では一般的な基準である。

御宿新田の田は「火山灰土で、水持ちが悪く、ところどころに溶岩が出ているダタラがある」と、地元ではいう。

入れてきたという。須山^{すやま}で、最近シバハタ（芝畑）を普通の畑に戻したという場所で、「芝のために土がやせてしまったので、サファリパークから肥料をもらって埋め込んだ」という話を聞いたが、元より肥沃ではなかった土地が芝によってさらにやせたからであるという。また、同じように、同地区で、近年芝畑から再び水田にもどしたという田では、明らかに稲の生育が悪いように見えた。

カンデン（乾田）と呼ばれる土質の田は良い田とされ

しかし、地域全域ではなく、同じ御宿新田の中にも、石の多い場所と少ない場所があり、地元では区別されて知られている。

種 粳

優良な米、豊穰な収穫を得るために、稲作にかかわるあらゆる事柄が一つ一つ大事な点であるが、まずは種粳の品種の選定であり、そしてその取り扱いであろう。茶畑ちやばたけの旧家である柏木家の江戸時代の古文書に、年初、その年に使う種粳を分配したという史料があるが、これを見ても当時いかに種粳が稲作に重要だったかが理解できる。以下、稲作の出発点である粳の調達から述べてみる。

粳は、稲を刈りあげた後の一〇月から十一月にかけて行う脱穀の際にテコキマンガ(手抜き馬鋏)を使って脱粒させ、良否を選別して確保しておくものであった。稲作りの後半部に属する作業であり、それは、言い替えれば来年に継続する最初の作業でもある。

粳の入手は、従来作ってきた品種を前年から確保しておくことが昔からの一般的な方法だったようである。そのために、脱穀時に注意すべきことは粳を傷つけないようにすることであった。その場合、テコキマンガを使用して脱粒させ、足踏み脱穀機や、後の自動脱穀機で脱穀した粳とは分けて保管している。「手抜きで別にとった種粳は、カマスに入れ、折り曲げ、カマスの真ん中を二まわし縄で結わえ、米と一緒にクラヤ(蔵屋、蔵のこと)へ保管した。クラヤでは、厚い五分板の上に置くなど、湿気とネズミの害に注意を払った」(葛山かつらやま)。

このように、種粳の保管にはとりわけ注意を払っている。特に粳を入れるためには藁製のカマスが良いとされた。空気は流通するし、粳のような「生き物」には最適だといわれている。



写真3-6 三嶋大社のお田打 (三島市)

「三嶋大社のお
田打」と種籾 毎年正月七日に行
われる三嶋大社

(三島市)の年中行事のオタウチ(静岡県無形民俗文化財「三嶋大社のお田打」)は、古くは、神社をとりまくように居住していた「社家」たちだけで行う神領の豊穰を祈願する予祝民俗行事であった。これが、三嶋明神の権威の拡大にともない、しだいに周辺の農民たちにまでも大きな影響をおよぼすようになった。現在では、三島市をはじめ、田方^{たがた}、駿東地^{おんとうち}

域の各農業協同組合が代表者を送り出し、お田打に列席することが習わしとなっている。もちろん市域の裾野市農協からも例年代表者が列席している。

昔、三嶋明神の「お田打」は、稲の収穫を予祝する祭りにとどまらず、周辺の農民たちが各種の農事に関する情報交換をする場所であり、その主なものに、その年に使用する優良な種籾情報と籾を手に入れることにあったという。

市域では、現在はずでに「三嶋大社のお田打」まで出かけて種籾の新品種を手にしたという話は聞くことができた

いが、昔は明神まで詣でて、稲作に関する何らかの情報を手に入れていたであろうと想像できるのである。深良・公文名で「むかしや、年寄りたちが明神さん(三嶋大社)のお田打には必ず出かけたものだ」という話を聞いたが、市域の農民たちの農業神としての三嶋明神への伝統的な信仰を物語るものと言えよう。

このように苦心して確保したり、入手した種粃は、翌年の苗代作りまで大切に保管されるのである。

苗代

いわれるのである。

苗代には水利の良い場所、家や道路に近く、監視の行き届くところに田を選び、毎年決められた田をナエシロダ(苗代田)としている場合が多い。苗代用の田には前年の刈り入れ後にレンゲの種を蒔いておき、苗代を耕作するときには鎌で刈り取って肥料として田に埋め込んでしまう。緑肥である。耕作後、水を掛け(入れ)、次にマンガ(馬鍬)を使って土を細かくどろどろにし、さらに田の面に凸凹がないように手でならす。田が平らになったところで泥が流れ出さないように注意を払いつつ水を抜く。同時に田の畔の草のクログリ(畔刈り)も行う。

こうして種粃蒔きとなるが、種蒔きの日は暦を見て選ぶことが多かったという。例えば「酉の日は鳥が飛ばんでしまうから蒔かない」などといい、酉の日を忌むことがあった。一般的には、ムラの年始めの初集会で、例年四月二九日頃から五月三日頃の間と決めることが多かった。しかし、この時期はそれぞれの家の都合もあり、必ずしも一様ではなかったという。

蒔く種は保管された物すべてが良い種というわけではなく、蒔く前に塩水選で粃の選別を行っている。塩水に粃を入れ、浮き上がる粃は除き、沈む粃を良い粃とした。すなわち、塩水に浮き上がるような粃は、実が充実していない

不良の粃であると判定したのである。塩水の濃度は卵を入れて計り、卵の頭が水面に少し出るくらいの濃度にした。選ばれた粃はカマスに入れて約四日間、川に沈めて粃の発芽を促した。塩水選は共同で行う場合もあったし、個人で行うこともあったが、その時期は四月の末頃であり、苗代の準備等と並行で進められた。

蒔き残った種粃を炒り、ヤコメ(あるいはヤキゴメ、焼き米)にして苗代のミノグチ(水口、水の入口)に置いてカラス避けとした。粃が芽を出すまでの管理がきわめて肝心であったのである。ヤコメは香ばしくておいしいものであり、子供たちなども喜んで食べている。しかし、近年では苗代を作るという作業が省略された。田植機による機械化田植えに合わせて、苗は各戸が苗箱で育苗するようになり、ナエシロダを作る必要性がなくなったためである。ヤコメについても、「最近の種粃は薬剤づけで食べられない」ということであり、これも失われた民俗となった。このように、種蒔きおよび苗の育成には、単なる技術以上に、信仰の力に負うところがあったものである。

代掻き

あらかじめ耕運機やトラクター等で耕作してあった田に、田植え直前になって水を掛け(入れ)て、マンガを入れて田の土をどろどろの状態にし、さらにその面を平らにならすことを代を掻くという。

市域では「代掻きは大事だ。水持ちを良くする」といわれ、田植え前の大事な仕事に位置づけられている。土質に応じて、それぞれの代掻きの技術が伝えられる。

火山灰土で、水持ちの悪い水田(水を張ってもすぐ引いてしまい乾燥しがちな田のこと)では、アラジロ(一回目)、ホンジロ(二回目)というように、二度の代掻きを行っている。また、ハデヤーと呼ばれる湿田では、泥田のために牛馬を入れて作業することができなかったから、鍬やエブリ棒を使って、人手による代掻きが行われてきた。牛馬を田に入れての代掻きでは、鼻取りはなどと代掻きが交互に言葉の掛け合いをしながら代を掻いた。次のような掛け合い言葉で



写真3-7 田植え前の代掻き(茶畑)

あるが、詞の中にも代掻きの段階が歌い込まれているなど、代掻きはていねいに行うことが重要であったことがわかる。代掻き作業の際、代を掻くのが大人で、鼻取りは子供の手伝いとされた。

代掻きの掛け合い言葉

一番

代掻き「それ、よんやさ、よんやさ」

鼻取り「たいぎだ、たいぎだ」

代掻き「それ、かい出せ、かい出せ」

鼻取り「おしきれ、おしきれ」

代掻き「かいこめ、かいこめ」

鼻取り「たいらだ、たいらだ」

二番

代掻き「こぞうのせっくだ」

鼻取り「さわじのほらでもあさひがさすよ」

代掻き「さすとも、さすとも」

田植え

現在の田植えは動力田植機を導入して行う機械化田植えになったから、田植えを行うのも、五月中の祭日や日曜日を利用して、いわゆるウチニンスウ(家人数)で終わらせることができるくらい



写真3-8 現在の機械田植え（茶畑）

の軽作業となり、手植え時代の昔と比べて、きわめて簡単に、かつ短期間で済むようになってきている。

しかし、かつての田植えは一年でいちばん忙しい作業であり、大事な農作業と考えられていた。田植えの時期は現在より約一カ月くらい遅い六月中旬から下旬にかけて行われた。田植えの終了は七月に入ってからで、そこでタウエジマイ（田植え終い）を祝うマンガアライ（馬鍬洗い）が行われ、これを期に超農繁期が終了した。ようやく一息つけたものである。

また、一九五五（昭和三〇）年前後までは二毛作が行われており、田植え前の田には麦があり、田植えは麦を収穫してから行わなくてはならず、麦の収穫作業が繁忙さを倍加させていた。麦を刈り、田を起こし、代を掻いて、その後に田植えとなったのである。

田植えの時期

御宿の湯山家の『湯山半七郎日記』一八七六（明治九）年六月一〇日の条に「初田植手人のミ」とある。現在では年々田植えの時期が早くなっていく傾向があるが、同日記における田植えの時期は昔の田植え時期を知る手がかりとなる。

現在の田植えは五月頃行われることが標準となっている。湯山半七郎の時代と比較しても約一カ月早まっている。その原因は、苗代を作らなくなったこと、裏作としての麦を作らず田が空いていること、機械化により作業が軽減さ

れて早くなったことなどがあげられる。しかし、時期は早くなったが、田植えが御殿場・小山などの山間方面から始まりしだいに裾野市域などに下ってきて、いちばん遅いのが三島などの低地になるという傾向は変わらない。これは、山間部の夏が比較的短いということと関係があるうとされる。すなわち、少しでも早く出穂期を迎え、収穫を終わらせる必要があったからであろう。

かつて、ヤトイド(雇人)としてのソートメサンが御殿場方面から市域にやってきて、農家に泊まり込むなどして田植えを手伝ったということも、御殿場などの山間地の田植えが早くすんだからであったが、現在はそうしたソートメサンの交流等はまったく行われなくなっている。

イイダウエ

前記したように、水田耕作面積の大きい家では、田植えが市域より早い時期に終了した御殿場方面から田植えの作業を請け負ってくれるソートメサンを雇って行う家があったが、市域の多くの農家では、近所や近くの親戚などが寄り集まってイイを結び、共同で田植えを行うイイダウエ(結い田植え)を行っていた。イイは「結い」で、労働力の相互交換である。イイは近所同士で組むことが多く、ときには親類なども結んでいた。最初にイイが行われた家では、次にはイイガエシ(結い返し)といって労働力を返すことが原則である。この場合、水田一反につき何人が必要だったかという労働量を基準にイイガエシが行われた。イイを組む家は毎年決まっていたが、正月の初集会で相互に確認し合うことが習慣となっていた。

田植えの方法は縄送りによる条植えの場合が多く、張られた縄に沿ってソートメサンが一列に並び、水の掛かり始めるミノグチから植え始め、後ろ下がりに植えていった。このとき、ソートメサンの間には技術の上手、下手による植える早さの相違が出たので、早い植え手は縄の両脇に位置し、遅い者は真ん中という並び方をとった。市域のソ-



写真3-9 田植え(茶畑・1970年代か)

トメサンは「御殿場のソートメサンが来たときは真ん中に入れてもらった」などという。御殿場から来るソートメサンは田植えがうまいことで知られていたのである。縄送りによる条植え以外、スジビキボウ(筋引き棒)を用いて田の面に筋をつけておいてから植える、いわゆるスジビキウエ(筋引き植え)を行う場所もあった。この場合は代掻きの後、いったん田から水を引かせてから植えるものである。女性の植え手をソートメサンと称するのに対し、男の働き手をトネと呼んでいる。ヘラックワ(平鍬)を用いて田の面を直すことがトネの主な仕事とされた。

茶畑の本茶ほんちゃの庄司麻一さん(一九二二年生)から聞いた田植えの一日は次のようである。「朝の五時頃、イイを組んでいる家まで手伝い人を呼び出しに行き、アサメシを食べてもらう。労働人数はソートメサン、トネをはじめ、縄張り役二人、苗運び役一人を含め、総勢一二、三人だった。ヒルメシまで(午前一〇時頃)に約一反五畝くらいを植え終える。ヒルメシは家に来てもらい、野菜や魚を煮たもの、オコワ、餅などを食べた。ユージャは二時過ぎに軽く食べた。ユーハン前には風呂に入ってもらい、身体をきれいに洗い、酒を飲みながらのユーハンだった」。

また、市域の田植え習俗としていくつかの田植え唄が残っている。

「一つ出しなよ 宿屋の役に 宿で出さなきや 座が持たぬ、唄は良いもの ひとつと言わず 仕事はかいく

面白い」(伊豆島田)

田の草取り

田植え、マンガライ等がすみ、稲が成長を始める頃になると田の草取りが行われる。現在の田の草取りは除草剤を使用するもので、昔のように人間が田に入って行うことはなくなった。除草剤の散布を行うのは田植え後の、田に水をできる限り張った頃である。

かつての田の草取りは七月から八月にかけて三回行っていった。最初に行う田の草取りを一番といい、続いて二番、三番と、合わせて三回の草取りが行われる。この頃は一年でもっとも暑い季節でもあり、苦しくかつたいへんな作業であったという。田の草取りの道具の進歩も著しかった。ガンヅメは鉄製の爪を持った道具で、これを使って田を掻き、草を拾い除き、稲の成長を促した。しかしガンヅメによる作業は腰を曲げて這うように歩を進めるもので肉体的な疲労が大きかった。次にはタコログシ(田転がし)が考案され、使用された。文字どおり田の地面上を転がしながら押して行く道具であった。これだと中腰にもならず、かつ効率も上がったのでほとんどの農家では複数のタコログシを導入したものである。除草剤の使用が始まるまでの間、タコログシは何種類かの改良を重ねながら、田の草取りには欠かせない道具であり続けた。

稲の生育

田の草取りがすめば、稲の生育の世話は主に水の管理となる。いわゆるミズガカリと呼ばれている、昔も現在もきわめて重要な生育管理過程である。

現在は、田植えがすんでから約二五日間はかなり多めに田に水を張っておいた後、一度水を干す。いわゆる「ガス抜き」で重要な作業過程である。直後から再び水を掛けるが、その期間は約半月くらいで、最初のミズガカリよりは少なめに掛ける。その後、出穂の前までは「中干し」となり、約一カ月間は水を掛けない期間が続く。それから、刈



写真3-10 稲干しをするウシ(深良)

り取り直前までは「間断灌水」といって、水を掛けたり、干したりが繰り返される。

ところが、こうした細かいミズガカリは現在になってからのことである。水が不足しがちだった昔は、水を掛けることが第一であり、現在のようない微妙なミズガカリは行われなかった。

稲刈り・乾燥

稲刈りの時期は一〇月から一月である。ワセ(早稲)からオクテ(晩稲)へと刈り進められる。最近では稲刈り機やコンバインの導入があり、農家はそれぞれ独自に、日曜などの休日を利用して一気に刈り入れをすませることが多い。刈った稲はウシ(牛)と呼ばれる稲架を組んで、架け干しにし、十分に乾燥がすんだ時点で、田んぼで、動力脱穀機を使って脱粒させる。また、粃すりは共同で所有している粃すり機を使って行う。

昔の稲刈りは動力機械もなく、多くの出人を要した繁忙な作業であった。田植えと同じようにイイを組んで行い、刈り手はそれぞれが稲刈り鎌を使って一株一株を刈っていた。稲刈り鎌は刃の部分に鋸状のギザギザがあるもので、形状からノコギリガマと呼んでいる。また刃と柄の角度が鈍角になっていて、稲株の根本を引き切るように使用する点も鋸と似ている。刈った稲は地面に並べておき、乾燥も地面に並べたままの状態で行っていた。いわゆるジボシ(地干し)である。後に、木材や竹を三本使って足を組み、それに長い竹を渡して作るウシが主流となり現在も続けら

れているが、比較的新しい稲の乾燥法である。組んだ足と竹に架け干しされた稲から牛の姿を想像できるところからついた呼称であろう。ウシでの稲干しは七日間から一〇日間続けられる。

脱穀

次に、刈り取られ、乾燥が終わった稲は農家に運び込まれ脱穀される。道具にはマンガ(千歯抜き)、アシブミ(足踏み脱穀機)などが使用された。この際、翌年の種粃となる稲については、動力機械を使用しないで、マンガを使って手抜きで、ていねいに脱粒した。粃を傷つけないためであった。こうした稲刈りの仕事が終了したところでカリアゲ(刈りあげ)などの収穫祝いが行われ、小麦まんじゅうを蒸かして食べるなどの簡単なごちそうが供された。また、脱穀後の粃干しは、オモテ(千庭)にむしろ苧を並べての天日干しであった。たいていの農家に広いオモテがあり、ここには野菜などを植えたりしないで広場のままでおいた。稲の天日干しなどの場所として必要であったからである。また、粃の天日干しで大量に使用する苧は、自家でムシロバタ(苧機)を使って作ったり、あるいは購入したりしていた。苧は何年にもわたって使用する道具であり、稲作農家の財産であった。

粃すり

天日干しの終了した粃はカラウス(唐臼)にかけて玄米とする。かつて、カラウスは夜なべをして作業したもので、ムラの若い衆たちは家々をカラウスひきの手伝いに回っている。米の収穫のもっともはなやぐ作業であった。若い衆が特に喜んで行く家は若い娘がいる家だった。できた俵の担ぎっこをしたり、唄を歌ったり、カラウスひきは深夜まで続けられた。

カラウスひきの唄

やりぎのもとで、おあおげあれ
おいらがあとを、つけてやる

カラウスひきに、雇われて

カラウスはひかねど、女の手を引く

曇れば曇れ、箱根山

晴れたとてお江戸は、見えるでもない

一番びきが、今終える

あらもとをひき寄せ、米が八石

七つ八つで、文^{ふみ}を書く

愛らしやこの手を、親に見せたい (葛山)

田起こし

稲刈りがすみ、脱穀等の調整作業がすんだところで、田起こしとなる。現在でこそ稲の生育が早くなり、一〇月の半ばにはトラクターが田に入れられるが、かつては一一月の作業であった。

田起こしは「土作り」のための作業であり、これを行うことよって翌年もまた稲が無事に作られるという。かつては堆肥が埋め込まれた。現在でも薬を刻んで埋め込み、土壌改良剤を入れて耕作を行っている。

イナブラと 刈り入れの終わった田んぼには穂を刈り取られた稲藁でイナブラ（いなむら）が生まれ、それが広野原藁の利用 一面に点々と眺めることのできる景色は、秋の深まりゆく農村の風物詩であった。

藁が稲の副産物として重用されたのは近年までのことである。畳や蓆、縄をはじめ、注連縄しめなわや正月のお飾りにいたるまで、生活のさまざまな場面に藁製品が使われていた。また藁製品以外にも、農家の動力であった牛や馬の飼料として、また牛馬によって作られた堆肥は田畑に用いる肥料としてなど、藁の利用はきわめて多様かつ有効だった。しかし、近年にいたり、藁はかつてほど有効に利用されなくなってきている。その理由として、稲の品種改良の進歩による藁の短茎化、化成肥料の多使用による肥料用の藁の不要化等々があげられる。

(二) 畑 作

「ヤマへ行く」 市域で、畑に出かけることを「ヤマへ行く」と表現する例にしばしば出会う。このことは、かつて山林だった場所が、現在は畑に変わっていることを物語るもので、そこでいわれる畑はカイコン

（開墾）によって山が畑地になった場所なのである。すなわち、山↓開墾↓畑という変遷の図式の中で、かつての山林をヤマと呼ぶ習慣になったのであろう。または、畑をカイコンと称する例にも出会う。カイコンという呼称は比較的新しく、古くはアラク（開墾すること）をアラクオコシあらかおこしという）と称していたようである。富沢の場合、集落の西側の愛鷹山たかやまに続くなだらかな丘陵地が開墾地であり、現在は茶園が主体の畑地となっている。ここに出かけて農作業を行うことを「ヤマに行く」と言っている。かつては富沢のヤマにもサツマ（サツマイモ）などが盛んに栽培されたものだが、現状は茶園、芝畑に変わってしまった。その原因の一つに、野生のサルなど獣害による農作物の被害が



写真3-11 ヤマのサツマ畑（富沢）

あったのだという。

市域における畑作ではさまざまな物が作られてきた。オカボ（陸稻）は水稻栽培における米の代わりとなる大事な畑作物であり、特に旧富岡村などの丘陵地で栽培された。須山をはじめ、市域各地ではモロコシ（トウモロコシ）栽培が盛んで、モロコシを使っての各種の食生活が営まれてきた。

サツマは市域におけるもっとも主要な作物であった。そのほか、戦後（一九四八、九年以後）、佐野、石脇、葛山などで始められたタバコ栽培なども市域の換金畑作物にあげられるであろう。しかし、タバコ栽培は一九六〇年代には終わりを迎えている。同年代には、それまで二毛作の水田裏作として行われてきた麦作等も市域の農業から姿を消し始めたといわれる。

同じ頃、農村からも務めに出る者が増え始めており、農家の兼業化が進行していたときであった。肥料代くらいにしかならなかった麦作に見切りをつけ、務めに転業していった人々が多かったと聞く。

一九四〇（昭和一五）年に伊豆島田へ嫁に来たという瀬戸みどりさんは、そのころ、嫁ぎ先では水田で米と裏作の麦を作り、屋敷周りの畑では自家用野菜としてナツパ（菜っ葉）、ソバ、ダイコン、サトイモなどを作り、ヤマの開墾地（現在の三島市芙蓉台付近）では、ニンジン、ゴボウ、ダイコンなどの根物を作っていたという。

以下、市域の主要畑作物について述べてみる。

陸稲

水田の少ない丘陵地の旧富岡村地区では、水稲の代わりとして陸稲栽培がかなり行われていた。

陸稲の種蒔きは、畑に前作の麦が刈り取られないで残っているときから始められる。麦の畝うねの間に、鋤でさくって筋をつけ、堆肥を入れ、その上に種籾を蒔き、足を使って土をかぶせる。五月一〇日から二〇日頃の間の作業である。芽は約一〇日間で出た。六月の中旬頃、芽の長さが約一〇センチから一五センチになると、他方では麦の刈り取りが鎌で行われる。八月の出穂時期までの世話は、追肥とチュウコウ(中耕)である。一〇月上旬から中旬にかけて刈り入れとなる。

陸稲にはワセ(早稲)、ナカテ(中稲)、オクテ(晩稲)という刈り入れの時期の相違による種別があった。また、農林一号とか、農林二〇号という陸稲のモチ(糯米)の種類があり、これが一般的に栽培された。陸稲のモチは売り、その代金で水稲のウルチ(粳米)を買った。

陸稲の藁は、藁の加工品に使用するにはねばりがなく不適當であつたから、もっぱら牛馬の飼料用にされている。藁に腰がなく、柔らかなことをねばりがないという。

モロコシ栽培

市域における畑作物の主要作物の一つにモロコシがある。市域では「とうもろこし」という標準的な呼び方はしない。モロコシが普通である。モロコシの粉を練ったものを焼いて食べるモロコシのオヤキ(お焼き)など、食料としてもなじみ深く、きわめて身近な畑作物なのである。また、市域は水田に比べて畑作の割合が多く、畑作物としてサツマやモロコシ作りが盛んで、そうした作物が、水田の稲作を補う重要な生産物として位置づけられている。

モロコシ栽培の一年は、春の播種はしゅに始まり、三回の耕作と草取り、施肥を行うことが主な世話となる。一番耕作は

五月、二番耕作と、三番耕作は盆前に行い、収穫は一〇月の半ば頃となった。収穫時がもっとも繁忙期である。近所がお互いに作業を助け合うイイで、午前一時や二時は常のことであった。ときには一番鶏が鳴く明け方までモロコシの皮むきをやっていたという。皮をむいたモロコシは軒先に吊るし(冬場の架け干し)、脱粒しやすいように乾燥させる。脱粒はニワに積み上げ、木の棒で叩いて落とすという方法である。須山におけるモロコシ栽培のもっとも大きな目的は、地元では収穫されなかった米の確保にあった。すなわち、収穫したモロコシを米との交換材料にして、郡内(山梨県)地方のタドコロと交流している。交換割合はモロコシ二俵半に対して米一俵で、馬につけ、須走^{すはしり}方面まで出かけて交換してきた。

また、モロコシを食料とすることも無論のことであり、米にモロコシを砕いたものを混ぜて食べるヒキワリメシやモロコシの粉を練って焼き、醬油をつけて食べるオヤキなどの地元特有の食生活も生まれている。

須山モロコシ

このような市域の状況にあって、須山はモロコシ産地として自他ともに認めるところだった。「須山モロコシは味が良い」、「須山の土はモロコシに向いている」などの伝承も残り、「スヤマモロコシ」は須山産のモロコシという固有名詞となり、「スヤマモロコシ音頭」なども作詞・作曲されて歌われた時代があったと聞いたが、歌詞等については不詳である。

モロコシは収穫してから天日で乾燥させ、その後脱粒させ、俵に詰める。天日で干すときの光景が圧巻だという。「家々の軒先に干したモロコシでムラが黄色く染まった」という。

須山を代表する農産物となったモロコシであるが、その元となった種モロコシは御殿場の北畑^{きたたけ}から入手した「キタバタモロコシ」であったという伝承が残る。この種は通称ヤサワモロコシといわれる種類で、裁断面の円周上に八個



写真3-12 サツマガラ (富沢)

の実が並ぶモロコシであったという。須山での栽培がうまくいき、その後は収穫したモロコシから種モロコシをとって継承したと聞く。モロコシ自体は太くなく、細長い形で、色は黄色に近いだいたい橙だいだい色であった。

サツマ

市域では、一般的に、サツマイモを「サツマ」と省略形で称する。その響きには、親しみと、懐かしさが込められている。

サツマが市域の農業生産の大きな部分を占めていた時代があった。戦後に至ってもそうした状況は続いていて、現在でも「サツマを裾野駅から貨車に載せて大阪方面に送り出していた」というサツマ好況時代が語り継がれている。また、現在では、その収穫量は激減してしまい、家族や親戚で食べる程度の生産量になっているが、それでもたいいていの農家では屋敷周辺の畑に、竹で枠組みして藁を編んで作ったサツマガラを作り、芋苗を育成している光景を見ることが出来る。

サツマの生産は秋から冬にかけてのサツマガラ作りから始まる。苗床作りである。藁で方形に作ったサツマガラには、冬の間にかき集めた山の落ち葉や刈り草などを入れ、これを腐らせ、苗床の基盤となるよく肥えた腐葉土を作る。これは種芋がある程度の熱を持たないと発芽しないので、落ち葉や草を発酵させるためである。春になって堆肥や下肥と土をこれにかぶせ、保管してあった種芋を伏せる(埋め込む)。伊豆島田では「彼岸の中日に種芋を伏せる」という。

その際の熱加減が難しく、あまり高温になりすぎても芋が腐ってしまうという。サツマガラで発芽させている最中の三月頃、畑には芋を挿すためのイモジ(芋地)を用意しておく。五、六月、十分にのびたサツマガラの苗を一芽一芽切つて、イモジに挿す。この頃、畑には麦が残っていたので、麦の間などに挿した場合を麦を刈るとき注意しないと踏みついたり、切ってしまうことがあった。畑に挿した後のサツマの生育期間には特別な世話は必要なかった。

八月の盆にはサグリボリ(採り掘り)で掘った未熟な細い芋を供えることがあった。また、秋には十五夜や十三夜にも供えたが、この頃でもまだ十分に成育した芋とは言えなかった。収穫と出荷は一月、一二月の頃であった。

冬を越して貯蔵し、後に出荷する芋は、イモアナ(芋穴)を作つて貯蔵した。イモアナは地面を三尺から四尺掘つて作り、芋を詰め、藁や籾殻を上からかぶせておいた。一度掘つたイモアナは毎年使用している。

イモキリボシ(芋切り干し)は晩秋から冬にかけて作られる食べ物で、ほとんどのサツマ栽培の農家で作る。サツマを蒸かし、切つて、天日で干すのであるが、サツマ干しの風景が農村の風物詩となっている。イモキリボシは保存食となり、冬の間の副食として食されている。

茶の生産

茶は食生活に欠かせない飲み物だったから、「自分たちが飲む分だけ作る」(下和田)ほどの少量ではあるが、畑の一部を割いて生産し、収穫し、製茶していた。

「下和田のタバコ屋には、かつてホイロが五つも六つもあって、富士の方からお茶師を五、六人頼んでもんでいた」という。かなりたくさん茶を揉んでいたように思えるが、ムラの家から頼まれての茶揉みであった。お茶師は暖かいところから順に登ってきて、一週間くらいいて、最後は小山町方面まで行ったという。非常に素朴なホイロを使って揉む手揉みであったから、ある程度の茶揉み技術が必要だったのであろう。

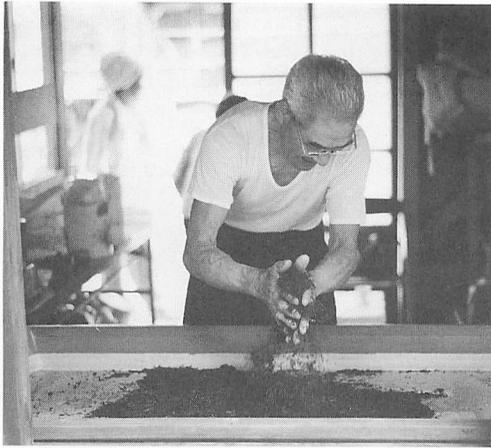


写真3-13 茶の手揉みを継承する
杉本儀直さん（下和田）

また、下和田には「終戦直後、ヒノヤ 葎山の反射炉近くの人に来て、小屋を建てて揉んでいたが、後にその道具をニイヤのオジイが手に入れて自分の手で揉むようになった」という手揉み道具の伝来話が残っていて、現在も茶の手揉み技術を継承する杉本儀直さん（下和田、一九二二年生）は、次のように伝えている。

「富岡小学校の尋常六年生のとき、初めて実習で手揉みをした。島田から来た先生が農業に熱心だった。お茶に興味を持ち始め、終戦後ニイヤ（新屋、分家）で手伝いを始め、本格的に揉むようになった。タバコヤ（煙草屋という屋号の家）では、自分が子供の頃にお茶を揉むのをやめてしまった。昭和の初めくらいまでは、静岡県産の茶の三分の一くらいは駿東地域で生産されていた。裾野では温情舎が経営していた不二農場ふじに大きな茶園があった。後に不二聖心女学院と改称したところである。この頃御殿場にも茶園が多かった。裾野でお茶工場といえば、御宿の岩瀬さんだけだった。自分の師匠は、最初は御宿の勝又良吉さんだった。それ以後は小山町おやまの生田流なまの芹沢元治さんに頼んで教えてもらった。県でも講習会があった。県では手揉みの流儀を統一して静岡県流というのを作った。マッチョマチヨウに（実際のところ）、炭おこしに二、三年はかかる。火は強くてもダメ、弱くてもダメ。朝から晩まで、最後まで同じ温度にしなければいけない。朝、炭を四キぐらい、山のように用意し、炭を丈夫に積む。藁を同じ長さにに広げ、同じ厚さに敷く。藁が厚すぎると火が効かない。少



写真3-14 茶摘み (富沢)

ないと火が強すぎる。葉に火をつけて、炭を燃やすが、ホイロを燃やしてしまふこともある。そのようなときは急いで消して、お茶をどけて、和紙を穴に貼って修復する。和紙は紙屋で買ってくるが、張り替えるときは糊を作って張り替える」。

茶は春先の一番茶に始まり、二番茶、三番茶と収穫していく。もっとも重要な収穫は一番茶である。一番茶の摘み取りは八十八夜の前後から始まり、五月の連休頃が最盛期となる。一番茶直前に突然やってくる遅霜は大敵で、これに襲われないように注意が必要である。この八十八夜の遅霜を「八十八夜の別れ霜」などと呼ぶ。遅霜に遭遇すると、冬を越して伸び始めたばかりの新芽が赤く焼けたようになってしまい、製品としての価値がなくなってしまうのである。

富沢地区では、最近、カイコンの畑に茶を栽培する農家が増えてきている。かつて、ここにはサツマやモロコシなどの作物が植えられていたのだが、それをやめて茶へと変わっているのである。その大きな理由はサルなどによる動物からの被害から逃れるためだといわれる。

チャメシ

茶の生産と仏事等に茶飯を作って食べる習慣に、地域と民俗の相関関係があるのであろうか。静岡県東駿河一帯に見られる葬式の日や法事に際してチャメシ(茶飯)を食べる習慣が、市域にもある。

チャメシは炊飯時の水の代わりに湯出しした煎茶で炊いたご飯で、炊きあがった飯は茶色をしている。

呼称にはチャメシ、オチャハン、などがある。市域でチャメシが食される場合は、葬式の終了後のキチュウに際してで(第三章第四節参照)、葬式の手伝いを行った隣組に出され、必ず食べて帰るものとされていた。

(三) 養 蚕

裾野の養蚕

養蚕は稲作と同様、日本の民族産業といわれた。したがって歴史も古く、養蚕を行っていた地域もきわめて広域に見られた。

市域も例外ではない。ほとんどの農村部で養蚕について聞くことができる。たいていの農家の納屋には何らかの養蚕関係の道具が残されていることで、かつて養蚕が盛んであったことをしのばせる。また、ごく最近までは養蚕農家独特の棟の高い主屋の家屋を見ることができた。家の中の柱や梁に養蚕を行った痕跡が残っている家屋も見られる。

佐野のイチバ(市場)というエーナ(家名、屋号)の杉山武博宅の主屋には、棟にはケブダシ(煙出し)が残り、座敷の梁には養蚕を行っていたときの蚕棚の竿を渡すための溝がまだ残っている。

杉山家ではオトコ(男、雇い人)二人を雇って、終戦前まで養蚕をやっていた。蚕のために、畳を上げ天井裏まで使ったから、家が狭くなり不便だったという記憶が未だに鮮明に残っているという。繭はズック(厚手の木綿の布)のユタン(袋のこと、油単)に入れて沼津のナトリ商会という繭問屋まで運んでいた。この問屋のことは省略してシヨウカイと呼んでいた。

蚕種の入手方法だが、伊豆を始め駿東地域の養蚕農家は、多く西伊豆から求めてきたという。伊豆島田の瀬戸みど

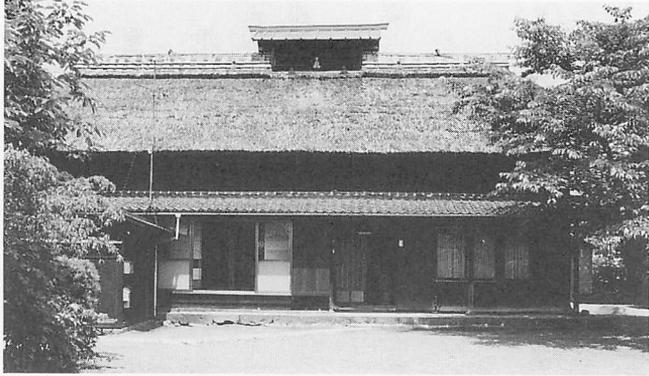


写真3-15 棟の高い養蚕のための家屋（公文名）

りさん（一九二二年生）は「西伊豆の土肥とひ、八木沢やぎさわ、仁科にしな、松崎の方から、飼育していた蚕を買ってきた」と、記憶している。こうした方法はすでに孵化ふかした蚕を求めたやり方であり、家の中に暖房設備を設置して孵化させる手間を省くことができる方法であり、養蚕農家の労働省力化を図ることができたのだという。

市域でもっとも近年まで養蚕を行っていたのは須山であろう。『すそのしうきょう』（一九八〇年五月三一日 裾野市農業協同組合発行）による須山の主要農産物生産量調査によれば、総生産高に対して繭の占める割合が、一九五一年に二六割、一九五二年に三一割、一九五三年に二八割で、戦後においても須山では養蚕が生業の中で大きな比重を占めていたことがわかる。しかし、一九五五年代以降になって、養蚕は各地の農村から急速に姿を消す。農業形態の大きな転換期を迎えたためである。

養蚕の技術

下和田の主な生業は畑作であった。養蚕は一九六五年頃まで行われてきた。冬になれば山仕事中心となり、薪や炭の生産がカセギ（稼ぎ）であった。そのような同地区における生業の中で、後に畑が芝畑に変わるまでの間、養蚕は夏の生業の中に非常に大きい割合を占め続けてきた。「戦後間もないくらいまで、桑畑が半分以上だったかな。いや三分の二だったかも知れないなあ」と言うのは杉山弥一郎さん（一九〇五年生）である。同地区を例として、養蚕の技術などを

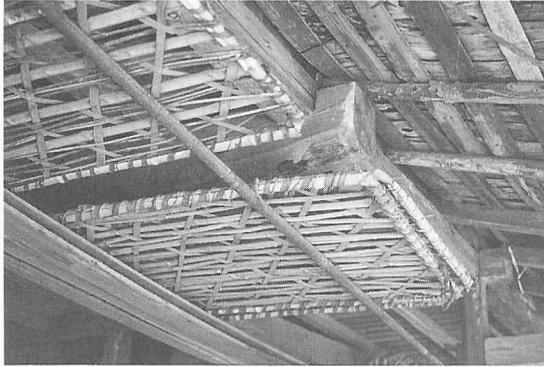


写真3-16 納屋の天井に残る養蚕用具（葛山）

述べる。

桑の木の種類には昔から「ヨヘイ」、「イワセソウ」（岩瀬桑）などがあったが、後、改良種の「ネズミガエシ」が植えられた。イワセソウという桑は、印野^{いんの}（御殿場市）の岩瀬という人が作った樹種であると伝わる。蚕の品種には、戦前「ニッカキンザン」（日華金山）、「ホウネンケンパク」（豊年研白）などがあり、一九五五年頃には「シュンゲツホウキョウ」（春月宝鏡）、四〇年頃「キンシュウギンゲツ」（錦秋銀月）などの品種というように、品種間の掛け合わせや改良が行われたものだという。

蚕には年間三回のハキタテを行わせ、繭を出荷している。それぞれハルゴ（春蚕）、ナツゴ（夏蚕）、バンシュウゴ（晩秋蚕）と称する。ハルゴは五月五日頃から約三〇日間、ナツゴは七月末から約二五日間、バンシュウゴは九月三日頃から始まるという毎年の養蚕作業サイクルであった。

ハキタテを行わせるマブシには、元は山からソノノキという小枝の揃っている木の枝を採ってきて使用したが、しだいに稲藁を編んで作った折り藁マブシや回転マブシ（あるいは回転モズ）を買ってきて使用するようになってきた。

「下和田全体の繭の生産量は年間約三千貫だった。」といわれた同地区の主要生業であったが、「蚕さんは生き物だから、雨が降っても、風が吹いても面倒見なくてはならなかった」とか「家も養蚕の作りに建て、主屋を使っ

て蚕を飼ったから、自分たちはその隅の方で寝起きをしたものだった。」という前記の杉山さんの言葉に、かつての養蚕の苦勞が現れている。

蚕影神社

養蚕が生業として大きな部分を占めていたから、蚕や繭に対する信仰も年中行事の中で見ることができると養蚕

二番正月にほんしょうがつに各家庭で作るダンゴボクには米の粉をねってこしらえたさまざまな形の団子を飾るが、これに欠かせない形の団子が繭型のものであった。蚕の無事な生育と繭のでき具合を予祝する行事となっている。茨城県の蚕影山こかげえ神社は全国各地にある蚕影信仰の本拠地と知られる。須山のコカゲサン(蚕影神社)は、五月五日が祭典日である。

(四) 林業

山と暮らし

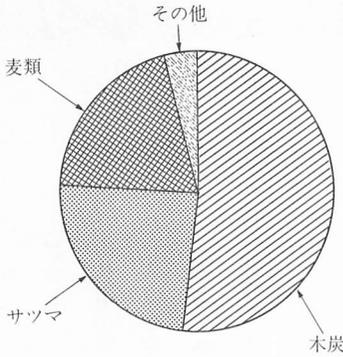
裾野市は山の狭間はざまに位置する町である。地域の西側は富士・愛鷹の山麓であり、東側は箱根山麓である。したがって、両山すそに近接する地区では、市中心部には見られない山林と向き合う暮らしが展開している。その主な暮らしは種々の山仕事であり、地域の人々の生業の大きな部分を占めてきた。ちなみに、『すそのしのうきょう』(一九八〇年五月三一日 裾野市農業協同組合発行)によれば、須山では、炭焼きによる木炭の生産高は戦後の一九五〇(昭和二五)年の五二割をピークに数年間の間、総生産高に対する木炭生産の割合が二〇割から三〇割を占めていた。この数字は堂々たる主生業といえるものである。そして、同地区では、現在でも細々ながら木炭生産は続いているのである。

市域における山仕事には炭焼きのほか、伐木を行うサキヤマとそれを搬出するキンマヒキ、竹行李を作るために何

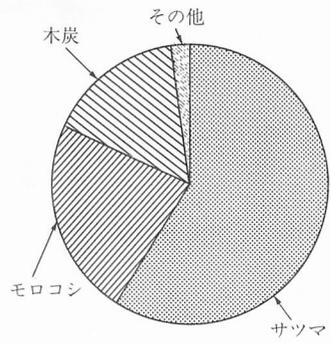
第1節 生活の時間・生産の時間

	1948年	1949年	1950年	1951年	1952年	1953年	1954年
サツマ	59%	46%	24%	15%	16%	11%	12%
モロコシ	23%	12%		24%	10%	21%	16%
木炭	16%	6%	52%	28%	23%	31%	21%
麦類		16%	20%	6%	9%		8%
繭				26%	31%	28%	
その他	2%	20%	4%	1%	11%	9%	43%

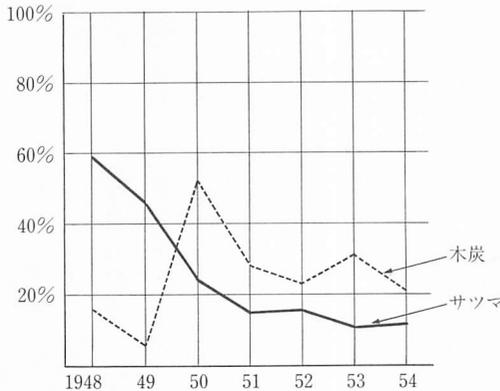
図表3-1 須山の主要生産物編年(総生産高に対する品目別の百分比・1948~54年)



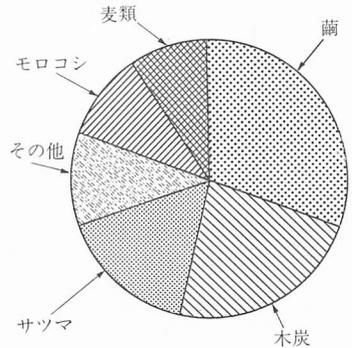
図表3-3 1950年生産物割合



図表3-2 1948年生産物割合



図表3-5 サツマと木炭の生産割合編年



図表3-4 1952年生産物割合

図表3-1~3-5は静岡県史民俗調査報告書第15集『須山の民俗—裾野市—』(1992年)より



写真3-17 浅間さんの秋祭り（須山）

気になりだす季節だったのである。

サキヤマ・
キンマヒキ

市域の山林の大部分はおおむねザツボクリン（雑木林）が占めていて、そうした木材は伐り出して炭焼きの材料とされることが多かったようだ。杉やヒノキなどの建築材として木材は、雑木林を伐採して

植林されたが、植林が特に盛んだったのは戦後になってからのことであつたといわれる。そうした杉やヒノキを伐り

日間か山に入り込んで竹材を伐り出すタケキリなどの仕事があつた。こうした山仕事を総じて、土地の人々はカセギ（稼ぎ）と呼ぶことが多い。その理由は山仕事の時期が冬の間に行われることが多く、生産高の多さよりも、むしろ田や畑の仕事を補う限定された期間での生業であると位置づけているからである。もう一つの理由に、須山では、「ヨーキ（陽気、氣候）が悪く裏作のできないところだから、冬の間、それに代わる何かをやらなければ暮らせなかつた」という地域的な条件もあつたといわれる。

須山ではカセギの期間が決まっていた。冬、カセギに山に入り始めるのは一月二三日の浅間神社の祭りが終わってからで、春は四月一七日の浅間神社の春祭りがカセギの終了の日である。秋のモロコシやサツマの仕事には、「浅間さんの祭り前には終わらせたい」という目標をもつて収穫の仕事に精を出したものだという。その頃は山仕事がなつかしく、

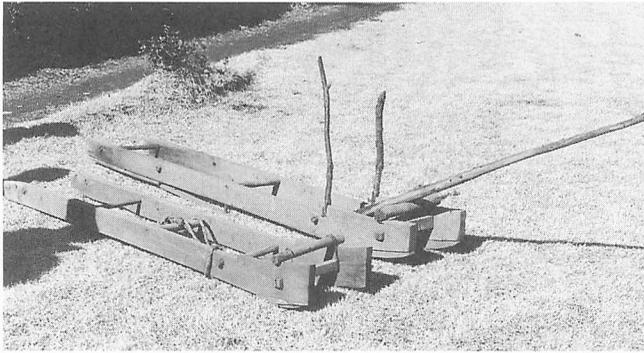


写真3-18 キンマ (葛山)

出し、搬出するという本格的な山仕事は、サキヤマ、キンマヒキなどと称され、男たちの冬のカセギ(賃仕事)となっていた。

愛鷹山麓の須山の場合、同山麓に須山一一三戸共有の山林を所有していて、主に杉を植林していた。そうした植林地の一部(約一町歩)は、駿東猟友会裾野支部須山分会が植林管理をし、同会の維持費等に当てていたという。地区の男衆たちの山仕事の中には、このような共有地での山仕事もあったようである。

炭焼き

下和田、須山、十里木^{じゅうりぎ}では、冬の期間に農間のカセギとしての炭焼きが盛んに行われてきた。冬は炭焼き、夏は養蚕という時代が相当長い期間続いた。現在でも須山の田向^{たむき}の大沢好一さん(一九三三年生)は、自分の炭はもちろん他人から頼まれれば炭を焼くという生活を送っている。最近では、昔はやってきたという山仕事のサキヤマを行わないで、年中炭を焼いているという。須山には大沢さんのほか、もう一人炭を焼く人がいる。彼ら二人がかつてこの地域に盛んだった炭焼きの技術を継承するのみとなった。大沢さんの場合、他人からの注文の炭を焼いて、焼きあがった炭一俵を謝礼分として受け取っているという。

須山では愛鷹山をオクザン(奥山)と呼ぶ。かつて、オクザンは須山の人々の炭焼きの場所だったから、泊まり込みでオクザンに滞在して炭を焼いていたと

いう。

炭の種類

焼きあがった炭には、シロズミ、カジヤズミ、アカズミなどの種類があった。

カジヤズミは鍛冶屋が用いたことからついた名称といわれ、もつとも質の悪い、いわゆるクズ炭のことを指す。カジヤズミは非常に簡単なフセヤキ(伏せ焼き)という焼き方でできたから、昔から自家用の炭はこの焼き方で焼いた炭を使用してきた。フセヤキは文字どおり炭の原木をデロで伏せるように焼いたところからついた名称である。

アカズミは良質の炭をいい、最高級の炭は焼きあがりに白い粉をふくところからシロズミなどと呼ばれた。

炭の原木

炭の原木によってできた炭の質は異なる。自家用か商売用かで原木は異なるものを使用した。

大正から戦前の頃、須山では炭は自家用のために焼いていた。そのころの炭の原木は身近に生えているザツボク(雑木)で、クリ(栗)、ハンノキ、ソノ(シデとも称する)、サルスベリ等であった。やがて、しだいに炭焼きを冬の生業として行うようになり、自家用とは異なる原木で、良い炭を焼くようになった。クヌギ(櫟)、カシ(樺)、ナラ(檜)などが、良い炭の原木と言われた。

炭焼窯

須山の土屋富正さんの炭焼窯は、築いてから一〇年くらい経っている。奥行き約三呎、幅二呎の大きさで、一窯で三〇俵くらいが焼ける。この窯は五人くらい手伝いの人を頼んで一カ月かけて築いたのだという。

窯を築く工程は次のようである。

- (1) デンエンを作る 窯の中の床になる部分である。デロを練って、床を塗り固めて作る。この部分は使っているうちに傷むので、その都度デロを加えては補修を施す。



写真3-19 炭を焼く大沢好一さん（須山）

(2) 腰にマルビ(丸尾)の石を積む 腰石の長円形の大小で窯の大きさが決まる。炭焼きの際に高熱があたるため、耐火度の強い石を必要とした。須山では、マルビのヤケイシ(焼石)が良いとされた。「普通の川原石は、炭焼きの際にハゼル(割れる)」と言われた。マルビの石は須山の奥、十里木の丸尾と呼ばれる富士溶岩地で採れた。現在ここは、付近一帯に別荘地が広がり、自然に生えた灌木類等が密生する森となっている。土地は浅く、肥沃な土の少ない、ごつごつした富士溶岩で被われている。溶岩流の末端の丸くなったところを土地ではマルビと呼び、そこから切り出す溶岩をヤケイシと呼んでいるのである。マルビの腰石は文字どおり、富士山の噴火の際に、流れ出し焼けただれた溶岩が固まった石である。石は炭窯の周囲の腰の部分に積むが、強力な火のあたる部分であり、普通の石ではもたなかったという。その点マルビの石は、溶岩であり、耐火性に優れ、炭窯の腰石として適していたのである。前述の大沢さんの使用している共同の炭焼窯も、今から約二〇年前に築いた窯であるが、やはりマルビの

ヤケイシを使用した窯である。地域の環境的な特性を生かした炭焼窯であると言える。

(3) 天井を作る 床に木材とモシキを積み上げ、その上にデロを塗り、五、六人で土を叩く道具を使って、デロをショブキアゲル(天井に沿って持ち上げる)ように叩いて固め、火を入れてさらに焼き固める。

また、炭焼きには次のような工程があり、約一カ月をかけて炭が作られる。

炭焼きの工程

(1) 焚付け(五、六日)

(2) ホンモエ(五、六日)

(3) 煙が白から青になって、一日半で煙が出なくなる。

(4) 火を止めて、冷えるまで放置(一五日)

ただし、上記の炭焼き時間は、窯の中に入れる木材の量や、木材の乾湿の状態によって異なるもので、二棚(フタタナ)半くらの量であれば、約二日と半日の焚付け時間で焼きあがるといふ。

(五) 芝生の生産

シバハタ 黄瀬川の西岸一帯の丘陵地には一面の芝畑が広がっている。市域では芝生畑をシバハタと呼ぶ。かつて

の広がり は畑や水田として利用されていた土地だったが、戦後になって芝畑に転換してからは地域の生活および

景観が現在のように一変した。

「あんな草なんか作って、バカなことをやっているものだ」と、芝畑が初めて出現したクサワケ(草分け)の頃には他人から冷ややかに嘲笑されたものだったという。ところが、こうした評価が変わって、こぞって芝畑を作るように

なつたのは、それから間もないことだった。その理由には、次のような状況、条件があったといわれている。第二次世界大戦後のことである。

戦後の高度経済成長に伴い、各地で道路工事、河川の改修工事、ホテルや住宅の建設工事、ゴルフ場の開設等々の芝生を必要とする状況があった。それまでは富士山麓の大野原からノシバ(野芝)を切り取って売るといった細々とした生産状況であったものが、それだけでは追いつかず、芝畑で栽培するという方法に転じたのである。

次に、気候や土質などの芝生の栽培に適した地域の好条件があった。須山は高冷地であるうえに元より野芝が自生しているなど、火山灰質表土と「富士マサ」と呼ばれる固い砂状土層の土地であったから、水稻はもとより畑作栽培には向かなかったといわれる。

また、須山地区の場合のように、戦後の米の増産計画に基づいて一九六七年には東富士幹線調整池の完成により六四畝の水田を開いたにもかかわらず、その後の米作転用指導で芝畑に変わるなどのことも大きな理由であった。

さらに、芝生栽培は「畑の維持管理が容易で、収入がよい」「年寄りの仕事でも、兼業でもできる」などと言われ、農村の高齢化、兼業農家の増加現象にもなつて盛んになったともいわれている。

芝生栽培 新しく芝畑を作る場合にはタネが必要である。芝生の苗をタネと呼んでいる。タネは苗場で育成し、植

の技術

える前には株をほぐしておく。芝畑には深さ六呎、間隔は一〇呎の筋をつけておき、筋に沿って二、三

本ずつ植える。約一カ月でタネの伸びがわかるようになる。その後、肥料は一カ月に一度ずつ、化成肥料を撒く。ほかにクサヒキと呼ばれる除草を怠らざうのであるが、このクサヒキが最も重要な世話である。クサヒキは素手あるいは鎌を使って雑草を取り除く作業であるが、単純作業であるために老人の手で行われることが多い。こうしてタネ



写真3-20 芝の出荷風景 (下和田)

は完全に根付く。カッチャク(活着)という。活着率の良いのは、春先の霜が終わった頃植えたタネであるという。芝畑が青々してくると、次に根を強く張らせるために芝の葉切りが行われる。肥料の養分を葉から根に回し、日光を当てて根を丈夫にするためである。葉切りは月二回くらい行う。また、消毒は、シバヨトウムシなどを防ぐ目的や土壌の殺菌、除草等の目的で薬剤散布を行う。こうして芝の出荷となるが、もっとも良い出荷の時期は春先だとされるが、実際は需要者の注文に応じて出荷であるから必ずしも一定ではない。

芝の種類には、寒さに強く、病気にかかりにくく、土地への順応性があるフジシバ(富士芝)、ノシバとも呼ばれる)や芽が細かくてきれいなコウライシバ(高麗芝)などがある。

(六) そのほかの生業

カセギ

カセギ(稼ぎ)という言葉が水田耕作や畑作などの生業と区別して使われる。

カセギは文字どおり、「稼いで」収入を得る意味である。市域には種々のカセギがあるが、その時期は秋から冬にかけて行われる仕事が多い場合が多い。すなわち、春から夏の主な仕事は水田であり、畑作であり、養蚕であるから、カセギはこうした仕事がなくなった時期に、それを補う仕事として行われるのである。カセギという表現

には、主生業ではなく、あくまでも副業であるという意味が込められている。

1 竹 材 業

竹と生活

竹は市域にきわめて多い。竹材を使った職業、商売が多く見られる。このようないわゆる竹商売は夏の水田、畑作といった生業に対する、市域を代表する冬のカセギと言えるだろう。カセギの材料を採る竹やぶは山林の一面に群落を形成している竹やぶもあるが、屋敷近くに人工的に植生させているシセキ(屋敷林)の一部としての竹やぶも多い。

これら竹やぶの竹と人の間に営まれる生活は密接で、市域独特の両者の関係が見られる。一般的によく言われる「地震の時竹やぶに逃げれば安全」ということ。春の竹やぶに芽を出すタケノコを季節の食物とすること。成長した竹を刈った稲を乾燥させるウシ(稲架)にすること。竹やぶの竹は、生活・生業のさまざまな場面に利用される。竹は人の暮らしに欠かせない植物である。竹の種類にはマダケやモウソウチクが多い。

竹やぶの竹以外、市域には愛鷹山や箱根山中にシノダケ・ススダケ・ハコネダケなどと呼ばれる自然植生の竹が豊富である。

このように豊富な竹を利用してのさまざまな暮らしが見られるのであるが、竹の豊富な地域を象徴することとして、市域各地には、竹細工を職業としていたことがわかるいくつかのエーナが残る。「バイスケヤ」「イザロヤ」「カゴヤ」「ステッキヤ」「ラオヤ」などがそれであるが、以下そうした市域における竹と生活を眺めてみる。

竹伐り

竹細工の原料となる竹を伐採して山から出すこと、いわゆる「竹伐り」が地域の各地で冬の一仕事とされてきた。パイプのラオにする竹を伐り出すことが多かった茶畑の竹伐り、行李の材料となる竹を伐り出したのは須山であった。両地区共に、竹伐りは男の仕事とされ、家で待つ女衆たちが伐り出された竹を細工しやすいうように刻んだり、製品を作る作業を分担することが多かった。

茶畑にはパイプのラオを作るラオヤ（ラオ屋）、ラオ生産業を生業としていた家があった。材料にする竹は箱根山西麓一帯に自生している細い竹で、シノダケと呼ばれた。ラオヤが同地区のかなり主な生業となる以前は、シノダケは土蔵や家を建てる際の壁に使うコマイダケとして伐り出すくらいのものであったから、必要に応じて竹伐りを行っていたればよかったのであるが、ラオ生産を行うようになってからは竹を伐り出すこと自体が生業に大きな比重を占める作業となった。

竹伐りの時期については「秋を片付けてから」という。すなわち、秋、稲の収穫を終わってからという意味で、その後に竹伐りの仕事が始められた。一月半ば過ぎから始まり一二月いっぱい竹伐り、という家が多い。正月を過ぎしてから、再び山に入り三月まで竹伐りという場合もあったという。それぞれの家の事情で竹伐りの時期や期間の長さには相違がある。ちなみに、須山の竹伐りの場合、「一二月三日の浅間さんのお祭りが終わってから」といわれてきた。

茶畑のラオ作りのための竹伐りには、後に、季節を問わない専門の竹伐りが職業として行われるようになった。竹伐り専門の仕事には「竹の時期」といわれるときがあり、その時期を選んで出かけることが多い。竹を伐る最も適当な時期は正月から二月にかけての頃で、三月に入ってから竹は伐り出した後に虫が入りやすいといわれるなど、時

期の良し悪しがいわれている。また、専門家が竹を伐り出しに出かけることをヤマユキ(山行き)と呼んでいる。茶畑の山は箱根峠近くの「ウミダイラ」が多く、そのほかに「ニシヤマ」(西山、愛鷹山の通称)、さらに遠くの湯河原、国府津、真鶴など、相模(神奈川県)方面にまで出かけていたものである。

竹伐りには泊まりがけて出かけている。約三日間の竹伐り行きで約一万本の竹が伐り出せたという。竹伐りの道具と衣服だが、寒い時期の作業であることと山中という危険の多い場所であるために平地の農作業のそれとはかなり異なっていた。履き物は古くは草鞋がけだったが、後にズックの裏側に鋺の打ってある地下足袋になった。足裏を保護するためである。ズボンをはき、スネには脚絆を巻いた。上体にはシャツ。寒い時期はハンテン。頭には手ぬぐいのホッカブリ、手に軍手は必需品だった。背にはヤセウマ(シヨイコ、背負子)を背負い、ナタガマ(鉈鎌)をつけ、腰には藁で作ったトブクロ(砥石袋)をぶら下げた。

こうして伐り出された竹は、家に持ち帰られ、さまざまな工程を経て出荷できる状態のラオとなる。これがラオヤの仕事である。ラオヤからは当時あった「箱根竹品株式会社」などという会社を経て京都の会社にまで製品が送られていたという。一九四〇年以前のことであった。

戦後、キセル等の需要が激減してラオ生産業は経営が成り立たず、ステッキやペン軸の生産に変えたりもしているが、それも長続きはしなかった。茶畑のラオヤ柏木重雄さんは、一九六四(昭和三九)年頃、工場を鉄工場に変えたと
いう。

行李作り

昔から裾野、御殿場地域は行李の生産地として知られていた。行李作りの始まりは明治時代と伝えられ、第二次大戦後まで、しばらく盛んに行われてきた。



写真3-21 竹行李(須山)

この地域で行李が作られるようになった当初の理由には、地域を取り囲む愛鷹・箱根などの山林環境との関係があるものと思われる。すなわち、それらの山麓に自然に生えている竹の利用法としての行李作りであったようだ。

また、次のような理由も考えられる。この地方では竹伐りや行李作りを、水田や畑での生産生業と区別してカセギと呼んでいる。これは「稼ぎ」ということで、本業とは異なる副業の意味だという。カセギの利点は手っ取り早い現金収入が得られる点にある。少ない耕作面積の農業を、少しでも補って暮らしをたてようということになれば、何かカセギを考え出さなければいかなかったであろう。その点、周辺に原材料があり比較的簡単な技術で制作できる行李作りは、地域の利を生かした格好の副次的生業となり得たのだった。

須山は市域一番の竹行李の産地であった。同地でも竹行李作りはカセギと呼ばれるなど当地の本業ではなかったが、作った行李を出荷することによって得られる収入は須山の経済を支える大きな割合を占めていた。

竹行李作りは主に冬の間の作業とされていたから「冬のカセギ」などとも呼ばれていた。行李にする竹には、愛鷹、箱根の両山麓に自生する細く、柔らかい竹が使われた。

パイスケ作り

竹製のパイスケと呼ばれる浅い籠がある。用途は田植えのときの苗運搬、道路工事などの土や石運搬など、もっぱらカツギボウ(担ぎ棒)で担ぐ、物の運搬具として使われた。パイスケの利点は、竹

製で軽く都合が良いこと、材料が身近にあるから手軽に作る事ができることなどがあげられる。

パイスケという名称の語源について知っている人はほとんどいない。あまりにも身近な道具であるゆえに、そんなことを考えてもみなかったというのである。

一つだけあったパイスケの名称由来は、「パイスケの語源は英語のバスケット(basket)が転訛したもので」とあるというものである。かつて、もっとも頻繁にパイスケを使ったのは東海道線(現在のJR御殿場線)の線路工事である。人夫が碎石を運ぶためであった。明治中期の東海道線開通当時、工事を見た外国人が、人夫の担いでいる籠を見て「バスケット」と呼んだところ、日本人の耳にはパイスケと聞こえたのだという。

東海道線の工事と関係があったのかは定かではないが、御殿場線に近い地域の茶畑の天理町は昔からパイスケ作りの盛んな町であった。その内の数軒が大規模なパイスケ製造業を営んでいた。雇われてパイスケ作りをした経験のある近所の主婦は多い。小規模に、家族だけでパイスケを作る家もあった。エーナに「パイスケヤ」とあるのも、かつて盛んだったこの町のパイスケ産業を物語るものと言えよう。

最近までパイスケを作っていた天理町の庄司さよさん(一九一四年生)によれば、明治時代頃が最初であろうという。やはり国鉄に盛んに買ってもらっていたという。国鉄で使われなくなつてからは、出荷先は東京深川の工場や、埼玉県製の鑄物工場への出荷に代わり、この傾向はパイスケ作りが全く衰微してしまつてしまつて続いた。

パイスケ作

パイスケ作りのもつとも盛んな頃は、注文に追われて大晦日も正月の準備もできないほど忙しかった。そうだ。季節のない仕事で、一年中がパイスケ作りで回っていた。

「仕事始め」

は正月の四日。この日は一〇枚ほど作るのみで仕事を終わり、その後は雇用先で出してくれたごちそ

うをいただき、夜まで唄など歌って楽しんだ。

いざ仕事が始まると土曜も日曜もなく、毎日毎日が竹とのつきあいであったという。一カ月間の内、休日は天理教の祭りの日だけだった。毎月二一日のツキナミサイである。この日ばかりは休んで天理教会に行っている。

一枚のバ이스ケを作りあげる時間はおよそ二〇分。このペースで材料のある限り一日中作り続けた。作業は分担されていた。子供は学校に行く前と帰ってからにソコフミ(底踏み)を手伝った。親から「今日は何枚ソコフミだ」と言いつけられ、従ったものだという。子供の手もバイスケ作りには欠くことのできない労働力だったのである。

ソコフミはバイスケの底にあたる部分を編むことで、いわば下準備作業である。これを受けて、次に女衆がマワシを行う。マワシはバイスケの胴になる部分を編み上げて行く作業である。基部から上部へと編むことを、シタマワシからウワマワシへ編むという。マワシには手慣れた熟練さと、手早さが要求された。女衆の器用さが必要だったのである。

フチマキは工程の最後である。これを行うのは男衆。文字どおりバイスケの縁を作りあげるもので、フチジン(縁芯)に丸竹を入れ編み込む際に力が必要とされるのである。

次に、バイスケ作りの工程を順を追って述べる。

① ソコフミ

(1) 十文字

(2) エゲタ(井桁)

② マワシ

第1節 生活の時間・生産の時間



4



1



5



2

写真3-22
バ이스ケ作り(茶畑)

- 1 竹の選定
- 2 竹割り
- 3 ソコフミ
- 4 マワシ
- 5 フチマキ



3

(1) シタマワシ(下回し)

(2) ウワマワシ(上回し)

③ スンボウ

物差しで口の直径の寸法を測る

④ フチマキ

スンボウ(寸棒)という物差しで作るべきパイスケの直径を測って決めるわけだが、パイスケの大きさには、イチバン(一番)、ニバン(二番)、サンバン(三番)という三種類があった。また、パイスケを出荷する際の数量の単位を本といい、それぞれの大きさで一単位の量が異なっていた。一本はイチバンの場合で二〇枚、ニバンは二五枚、三番は三〇枚である。

パイスケの材 竹の種類はシノダケと呼んでいる。近くの箱根山でもたくさん採れ、パイスケのための竹伐りを仕事とする家もあったが、それだけでは不足したので多くは福島県方面から送られてくる竹を使用していた。大量の竹を積んだ貨車が御殿場線を走る姿を現在も記憶している人は多い。

2 柿渋作り

柿渋と三島和傘 市域南に隣接する三島市は戦前から唐傘生産地として知られていた。『三島市誌・下巻』における同市の唐傘生産量調査表によれば、静岡県においても群を抜いた生産量であったことがわかる。三島市の唐

傘生産の伝統は明治初期くらいからだったと考えられている。一八八七(明治二〇)年の「三島町唐傘製造組合」の

「太子講」掛軸には、当時すでに一〇数軒の唐傘製造職人が名を連ねていて同業者組合を組織していたことがわかる。ところで、唐傘を作るためにはまず竹と紙が必要であるし、その他にもロクロと呼ばれる木製の竹骨をつなぎ止める部品や種々の小さな金具部品等が必要である。そのような唐傘本体の材料や細々とした部品のための原材料は、生産地の三島をはじめ周辺地域で生産されたり、加工されたりすることで調達されてきた。ここでは、上記の三島の唐傘生産を支えてきた大事な原材料の一つ、柿渋について述べてみる。

唐傘生産工程の中で、柿渋は最終工程近くで使われることになる。唐傘の骨になる竹の部分が完成し、紙が貼られるところまで進んだところで、次に紙に渋を塗るのである。「渋をくれる」という。すなわち、唐傘本来の役割は雨を避けるためであり、紙には防水剤を塗って紙を雨に強くすることが必要とされた。柿渋は水に強いとされる。この性質を利用して、唐傘の紙には柿の渋が塗られるようになった。必要不可欠な材料の一つである。

裾野、御殿場地域は柿の木の多いところである。柿は、その実を採って食料にするばかりではなく、柿渋にすると利用法もあった。柿渋生産者の数は、それほど多くはないが、裾野市域に特徴的に見られる職業であった。彼らが生産した柿渋が、隣接する三島の特徴的な産業を支えてきたとも言える。以下、市域で行われてきた柿渋生産について述べる。

深良須釜 深良地区の須釜すがまに柿渋生産を行っていた農家があった。主生業は稲作だったから柿渋生産は副業のカセのシブヤギではあるが、なにしろ深良では一軒だけの柿渋生産者だった。

深良の須釜の勝又松男宅は、同氏の父親であり先代の文男さんまでは、かなり盛んに柿渋生産を行っていた。勝又家には「カミ(上)」というエーナがあったが、柿渋を盛んにやっている頃は「シブヤ(渋屋)」と呼ばれることの方が

多かったという。勝又家がいつ頃からシブヤであったかは定かではない。「文男さんよりもずっと前から」と伝えられる。

深良地区の農業は稲作および畑作農業が主体であったから、勝又家のような柿渋生産職は地域では異色である。深良を除いた市域では、御宿新田の杉本家で柿渋を生産していた。また、隣接する御殿場市では神山こうやまの塩川家が柿渋を生産していたという。

柿渋生産の時期 柿は夏ごろ結実し、秋に実が熟し収穫される。柿渋も柿の実の成長に合わせた時期に渋採りが行われた。また、柿渋は柿の実があまり熟成しすぎない、いわゆる「青い」柿の実の頃に多いとされる。したがって、柿渋生産は夏から秋の始め頃にかけてとされた。「柿の実がある程度大きくなり、かつ熟してしまわない時期」、すなわち、もっとも渋が採れる時期なのであるが、その作業期間はごく短期間であった。

勝又松男さんの妻秀子さん（一九一七年生）は柿渋の最盛期について「三島のお明神さん頃からお彼岸まで」というすなわち、三嶋大社の夏祭り（八月一五日から一七日）の頃から九月二〇日頃までだというのである。「遅くても彼岸前には終わっていた」という。きわめて短期間勝負の仕事だったのである。勝又家では水田で稲作もやっていたし、開墾の畑では養蚕のための桑の栽培もしていたから、柿渋の仕事に取りかかる前にそうした仕事を終わらせておく必要があり、夏から秋にかけては「無我夢中で仕事に精を出した」というのである。

柿の種類

渋を採るための柿には渋の多い柿が良いことは言うまでもない。一般的には渋柿が良いとされたが、その種類にもさまざまなあった。ヨツミゾガキ（四ツ溝柿）という種類の柿は比較的早い時期に取る柿だった。あまり質は良くなく、絞った際にカスが多く出るといふ点が欠点だった。ヤマツカキ（山柿）は質の良い柿だったが、

実が小さく、効率良く渋を絞ることができない点が欠点だったという。オオジリカキ(尾尻柿)は御殿場市の神山の尾尻で採れたことからの名称だという。「さらしても食えない」といわれた渋柿だが、柿渋は多く、渋採り用には良いといわれた品種であった。

柿渋作りの技術

① 柿を取る 柿取りは柿の木のある家を回り取らせてもらうのだが、毎年のもので、柿のある家はわかっていたから予約しておいて取った。地元深良にはあまり良い柿はなく、御殿場市の神山まで出かけて取ったという。

朝早い仕事だった。荷車にタフブクロ(太布袋)を積んで夫婦で出かけた。男の仕事は木に登って柿を落とす役割。鎌に長い柄をつけた道具を使用した。女は木の下で落とされた柿の枝を拾い、実をもいでタフブクロに詰める仕事だった。午前中は柿取りを行い、また荷車を引いて家路についた。

柿にはナリドシ(豊作の年)とそうでない年があったが、柿の木の下に行けばそれが判断できたという。豊作で忙しい年には、オトコとよばれる雇い人を頼んだ。

② 柿をつぶす 取った柿は家へ持ち帰りつぶす。道具は臼と杵。臼は松の木材で作った柿渋用の臼。柿は臼に八分目くらいを入れ、二人が杵でついた。柿汁が出て「びしょびしょになるくらいついた」という。あまりつきすぎるとカスが多くなりすぎるため、つき加減には注意を払う必要があった。

一日につく柿の量は一〇臼分だった。

- ③ 樽に入れて一晩置く つぶした柿はすぐ樽に入れ、つぶした量の二倍ほどの水を加えて一晩放置しておいた。
- ④ 絞る 翌朝、樽からつぶした柿をすくい出し、藁の俵に入れて絞る。ここで絞られて出る汁が柿渋である。

絞りの作業は、汁をためるたらいの上に丸太を渡しその上に柿を入れた俵を載せ、さらにその上から重石をつけた板で押さえつけて絞るといった方法だった。

⑤ 樽詰め 絞った柿渋は樽に詰めて出荷する。発酵しやすいため、樽には必ず息抜き用の竹を差した。また、カナケ(金気)があると黒く変色するので注意が必要だった。良質な柿渋は茶色をしていた。

⑥ 出荷 出荷は四斗樽に詰め、馬力で運んだ。深良の遠道原には大庭さんという馬力屋がいたのでしばしば頼んだものだという。出荷先は三島の唐傘屋だった。

(七) 民具で見る裾野の生活

「百姓」 鍬や鎌、鋤すきなど、農家が普段使っている道具の総称に、市域の特別な言い方はない。あえて言うならばの財産 「百姓の道具」であろう。現在では「農具」とか「農機具」と呼ばれるが、これは比較的新しい呼称であるという。「牛や馬などの生きものはもともと大事なものだだったが、金を出せば手軽に買い換えができれば、鎌や鍬などの道具も生きものに次ぐ百姓の財産だった。」という。

かつて農具の調達は地元の鍛冶屋で行っていた。御宿には「古田の鍛冶屋」、佐野には「向笠の鍛冶屋」があった。「向笠の鍛冶屋は腕が良かった。④の字の焼き印が入った鎌や鍬、タケノコ掘り用のトングワ(唐鍬)、何でもよく切れた。」と、芹澤正巳さん(葛山)は昔を語る。両鍛冶屋ともに今は鍛冶屋をやめた。そのかわり農協や大工道具センターで簡単に手に入れることができるようになった。

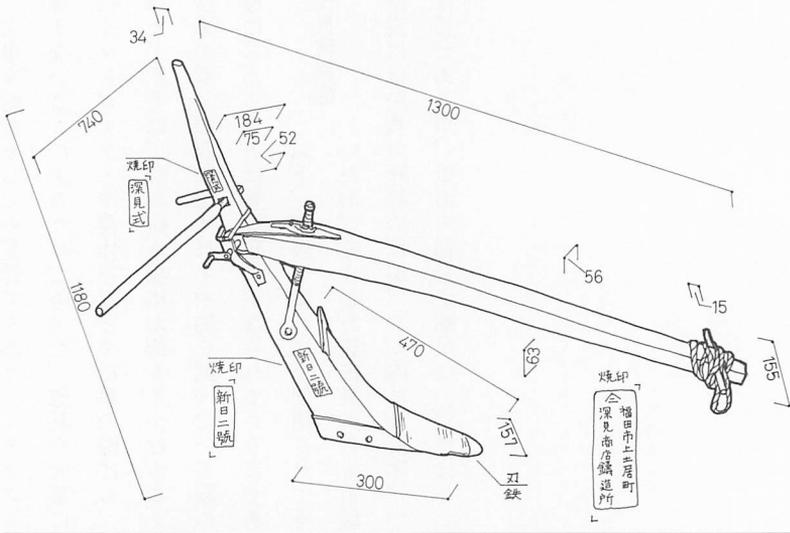
手に入れた農具には、それぞれの農家でエーナ(屋号)、家印、主人の名前の頭文字などを焼き印で入れたものであ

る。大事な財産としての登録でもあり、ミチツクリ(道づくり)、イイやイイガエシなどの共同作業で、他人の道具と間違えないようにするためであった。道具を大事にしようという現れである。そのことは、稲作農家が田植え終了後に行うマンガアライや農休みなどの行事の際にも、鍬などをていねいに洗い、供え物をして納めるという儀式で表現された。正月に、農具置き場にお飾りをつけることも同様の意味がある。

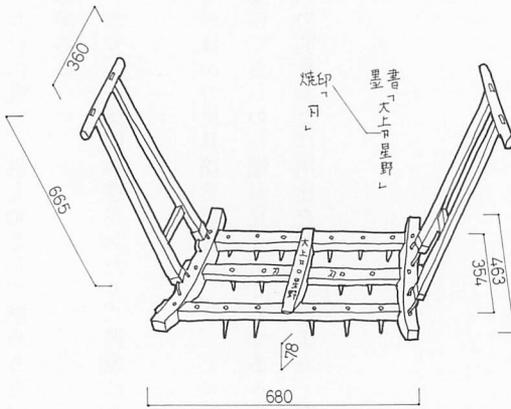
農家の道具の収納場所は牛や馬を飼っている既の横の納屋だったり、長屋門の壁だったり、農家によって異なるが、一様に言えることは整理整頓がなされている点である。

民具実測図

以下、市域でこれまで使用されてきた農具及びそのほかの民具類を図版にとり、その解説を加えておいたが、そうした諸民具からも市域の生業と農業のくらしの一端が見えてくるであろう。なお、図版の解説には民具の呼称のほか、()内には漢字、()内には民具の別称および用途を付した。また、図版の長さの単位は釐であるが、紙面の都合上縮尺は一定ではない。

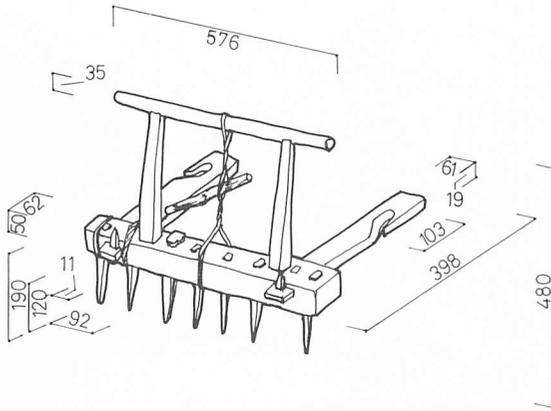


図表 3-6 スキ (犁) 佐野 杉山武博氏所蔵

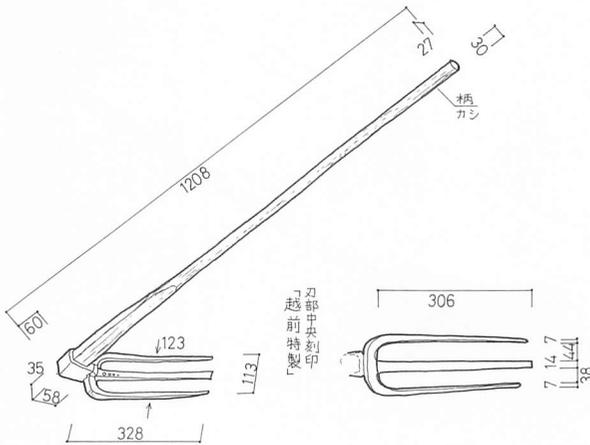


図表 3-7 ニンボウリ (ホウリマンガ) 佐野 杉山武博氏所蔵

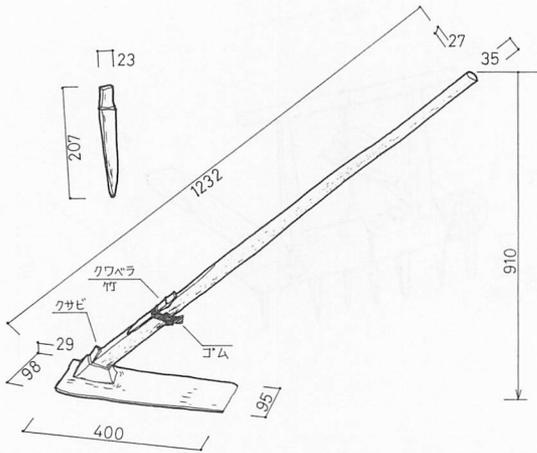
第1節 生活の時間・生産の時間



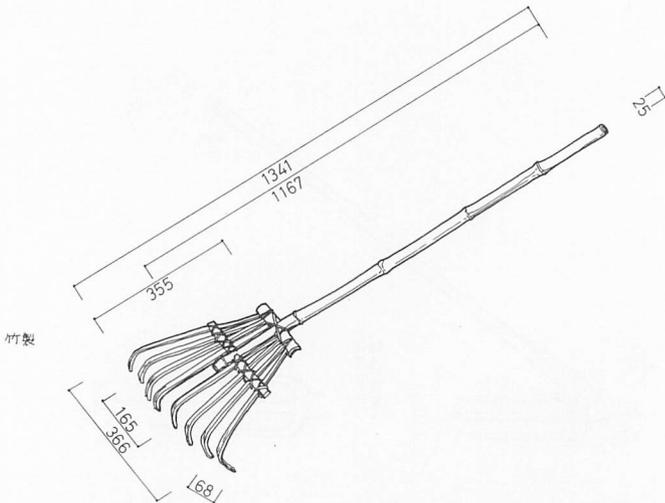
図表 3-8 マンガー (馬鋏) 佐野 杉山武博氏所蔵



図表 3-9 サンボングワ (三本鋏) 佐野 杉山武博氏所蔵

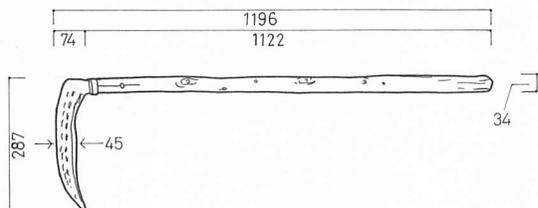


図表3-10 ヒラグワ・クワペラ 佐野 杉山武博氏所蔵

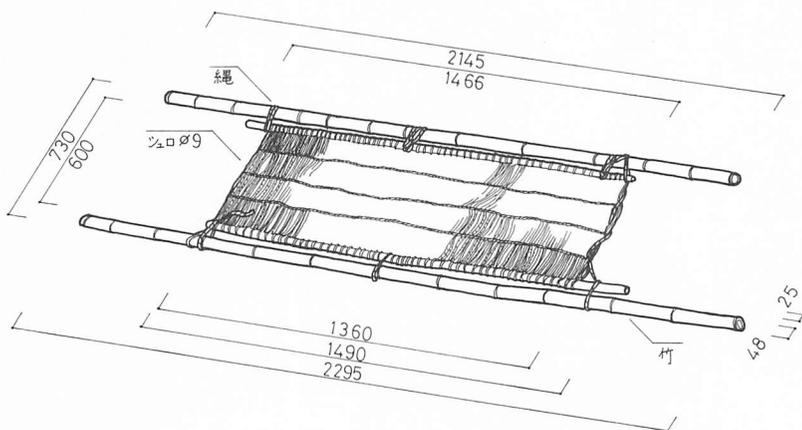


図表3-11 コマンザリャー〈熊手〉 佐野 杉山武博氏所蔵

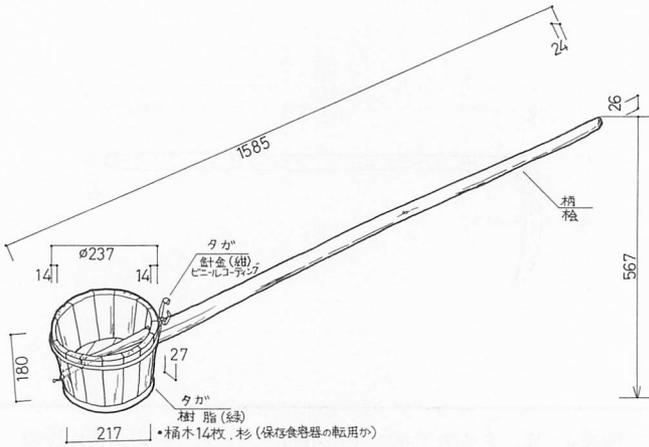
第1節 生活の時間・生産の時間



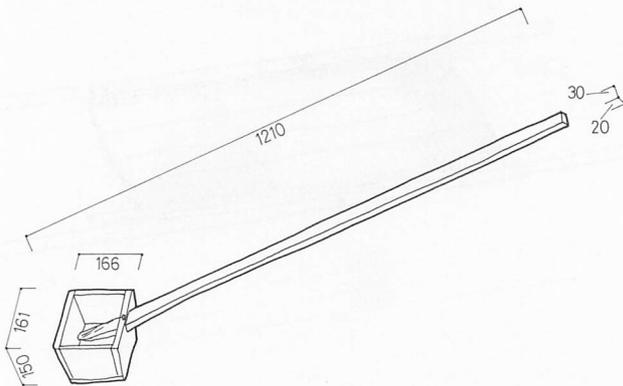
図表 3-12 クサカリガマ (草刈鎌) 佐野 杉山武博氏所蔵



図表 3-13 モッコ 佐野 杉山武博氏所蔵

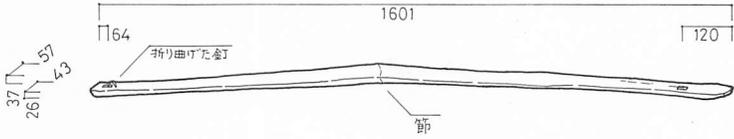


図表 3-14 コエビシャク (桶型) 佐野 杉山武博氏所蔵



図表 3-15 コエビシャク (角型) 佐野 杉山武博氏所蔵

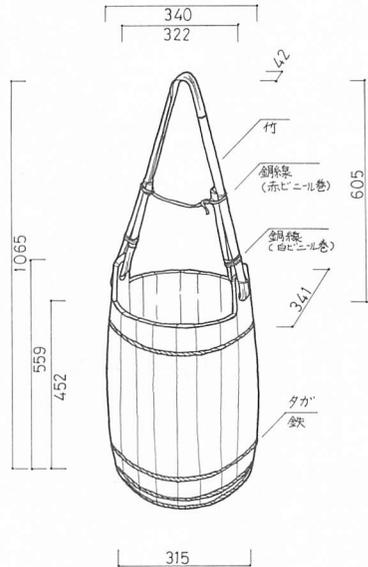
第1節 生活の時間・生産の時間



• コエオケ



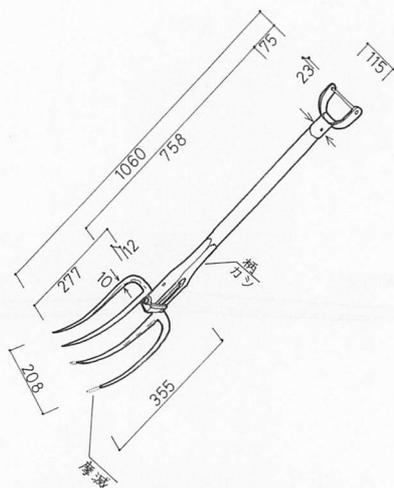
• 桶木16枚



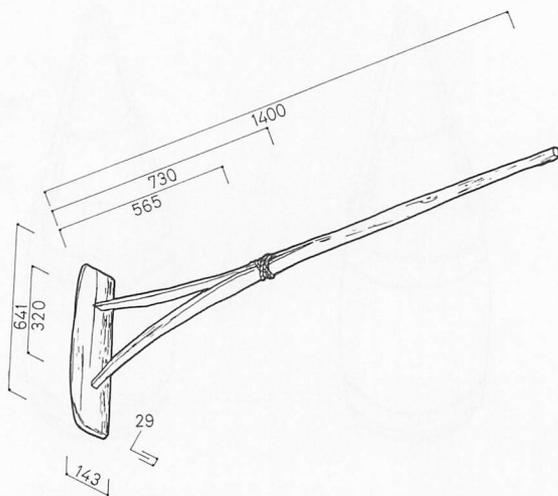
• 桶木17枚

図表3-16 カツギボウ・コエオケ (肥桶)

佐野 杉山武博氏所蔵

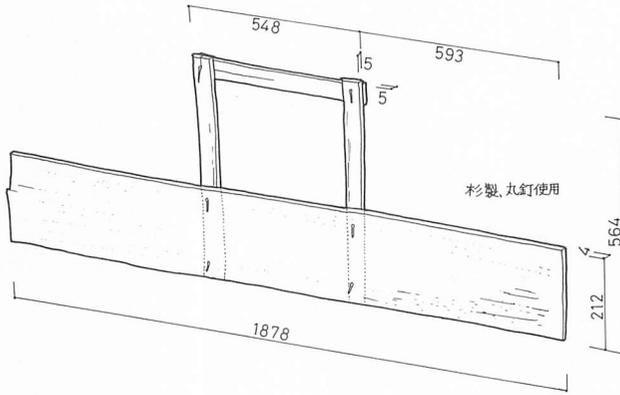


図表 3-17 フォーク 佐野 杉山武博氏所蔵

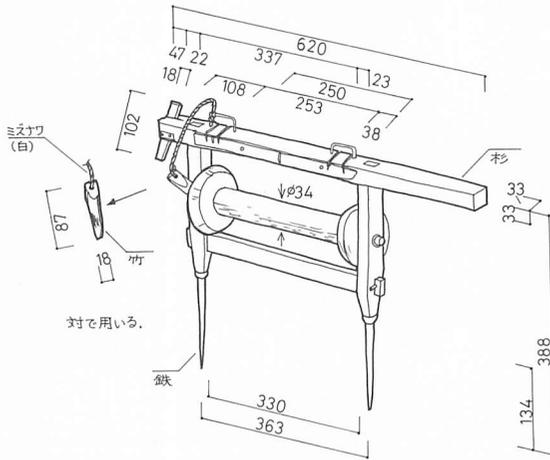


図表 3-18 エブリ 佐野 杉山武博氏所蔵

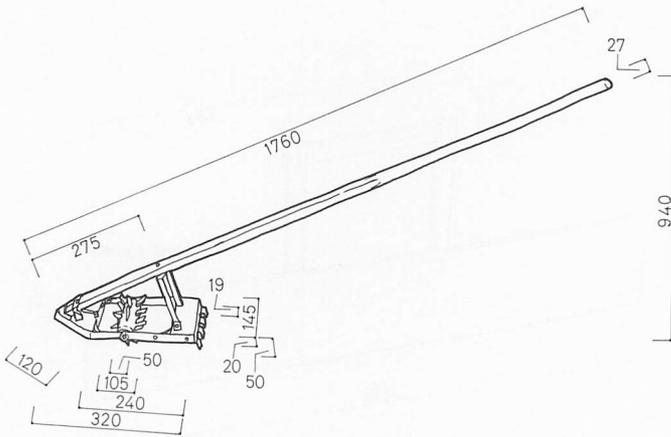
第1節 生活の時間・生産の時間



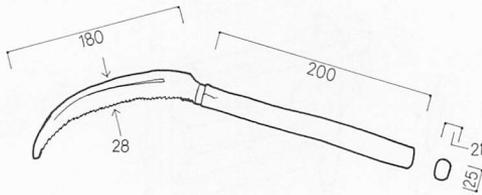
図表 3-19 苗床作りの定規 佐野 杉山武博氏所蔵



図表 3-20 サクナワ〈二条植用〉 佐野 杉山武博氏所蔵



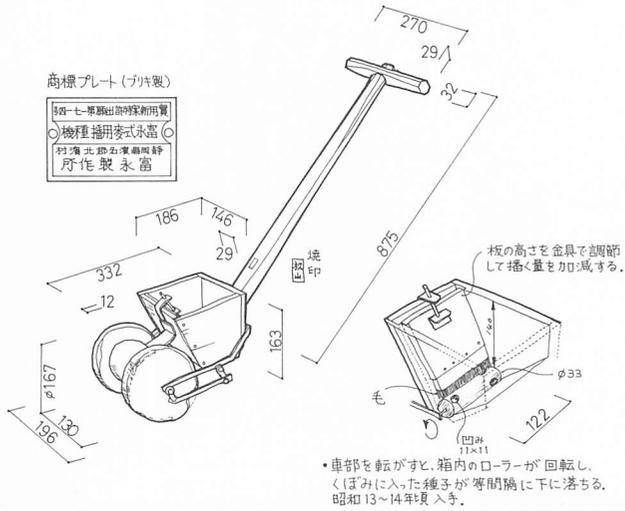
図表 3-21 タコロガシ (一輪車) 佐野 杉山武博氏所蔵



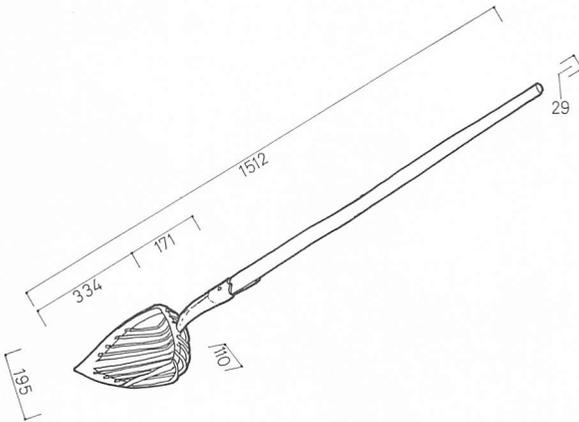
他 3

図表 3-22 イネカリガマ (稲刈鎌) 佐野 杉山武博氏所蔵

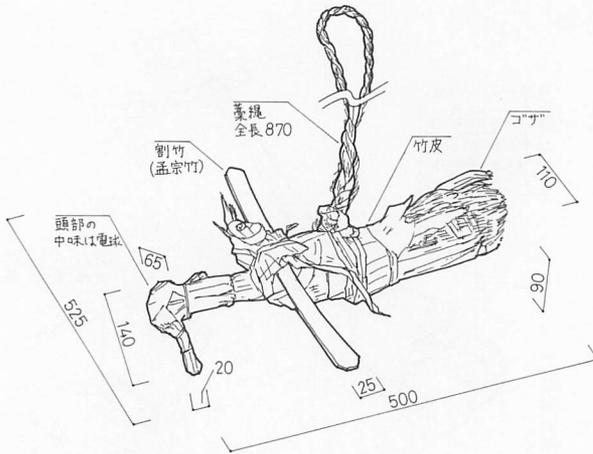
第1節 生活の時間・生産の時間



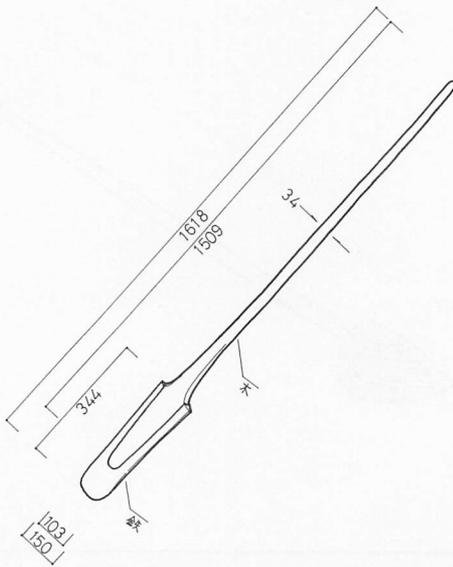
図表 3-23 タネマキキ (麦の種播機) 佐野 杉山武博氏所蔵



図表 3-24 麦の土入れ 佐野 杉山武博氏所蔵

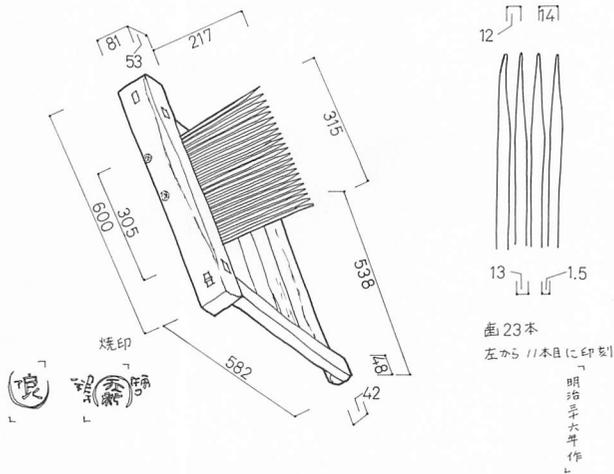


図表 3-25 カカシ〈鳥形〉 佐野 杉山武博氏所蔵

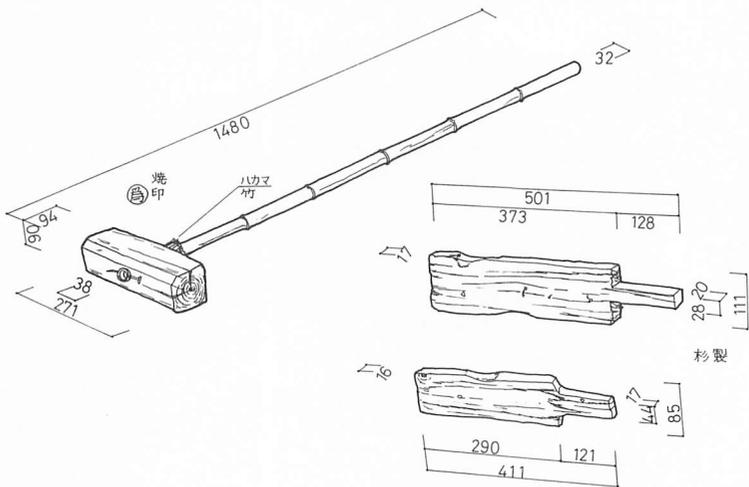


図表 3-26 突鉞〈芋用〉 佐野 杉山武博氏所蔵

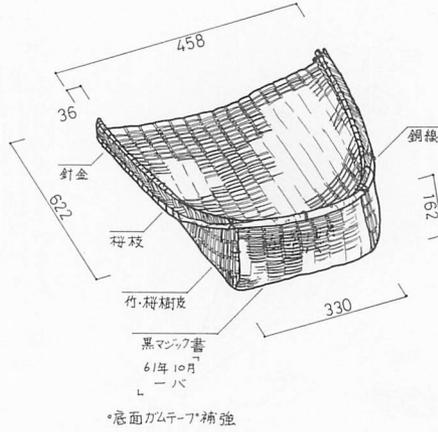
第1節 生活の時間・生産の時間



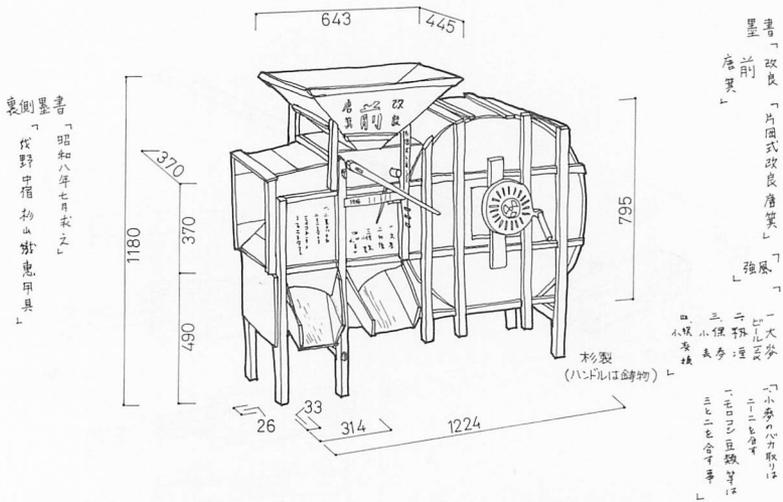
図表 3-27 センバ (千歯抜き) 佐野 杉山武博氏所蔵



図表 3-28 テオノ (穂叩き板) 佐野 杉山武博氏所蔵

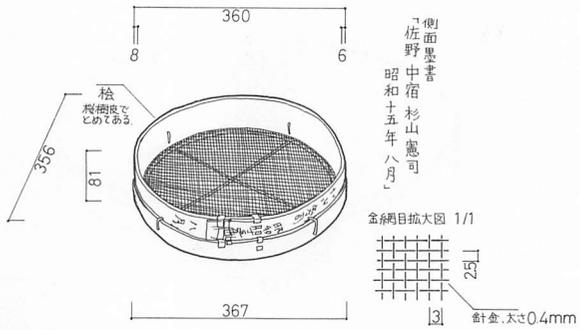


図表 3-29 ミ (箕) 佐野 杉山武博氏所蔵

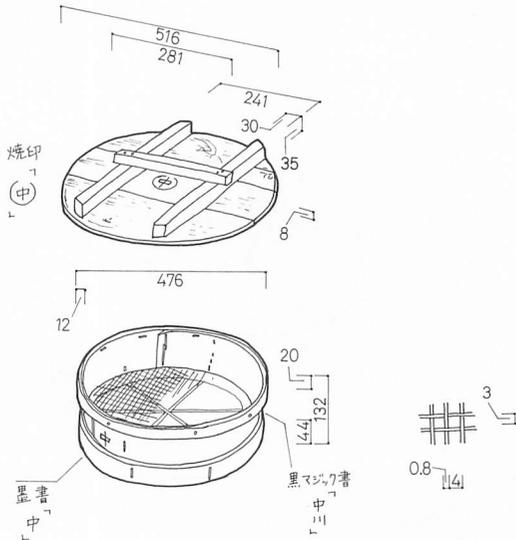


図表 3-30 トーミ (唐箕) 佐野 杉山武博氏所蔵

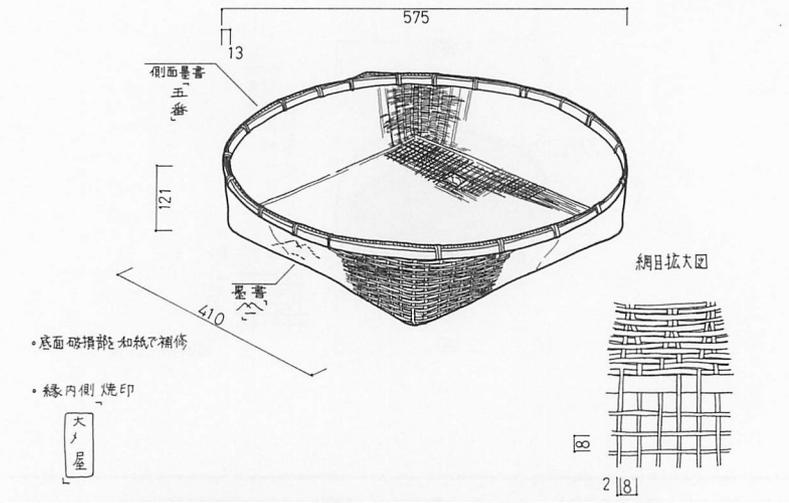
第1節 生活の時間・生産の時間



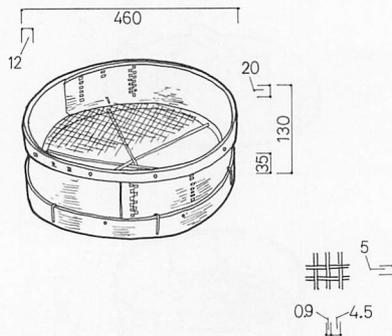
図表 3-31 フルイ (米用) 佐野 杉山武博氏所蔵



図表 3-32 フカシ (蒸籠) 下和田 杉本儀直氏所蔵

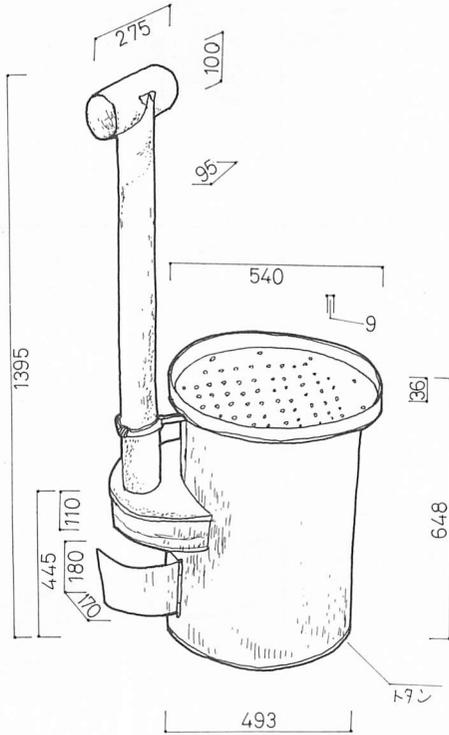


図表 3-33 チャブルイ (旧型) 下和田 杉本儀直氏所蔵

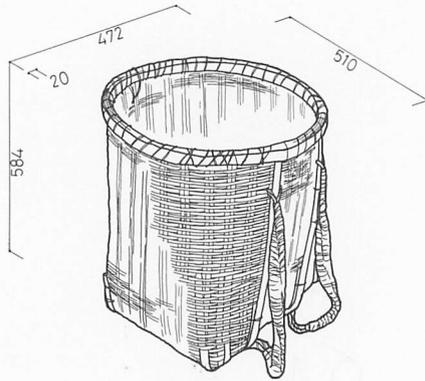


図表 3-34 チャブルイ 下和田 杉本儀直氏所蔵

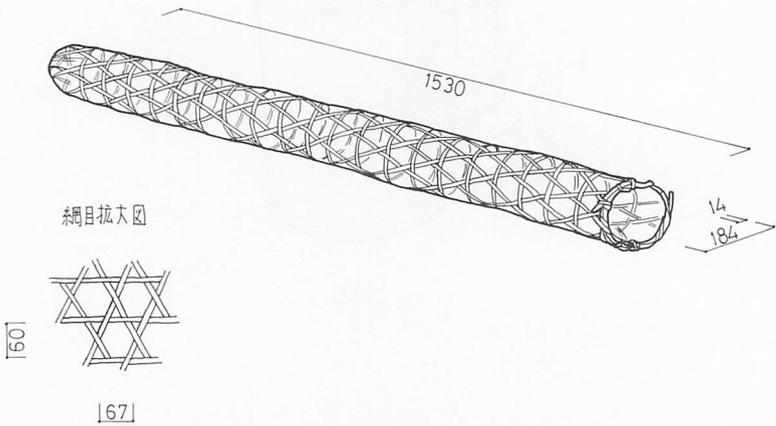
第1節 生活の時間・生産の時間



図表 3-35 フカシキ (蒸かし器) 下和田 杉本儀直氏所蔵

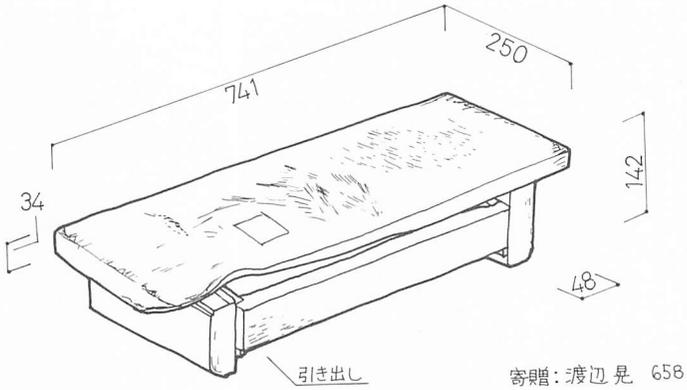


図表 3-36 桑摘み用背負い籠 富士山資料館所蔵

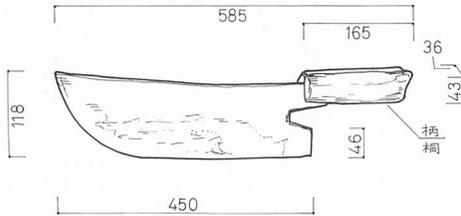


図表 3-37 クワカゴ (桑籠) 富士山資料館所蔵

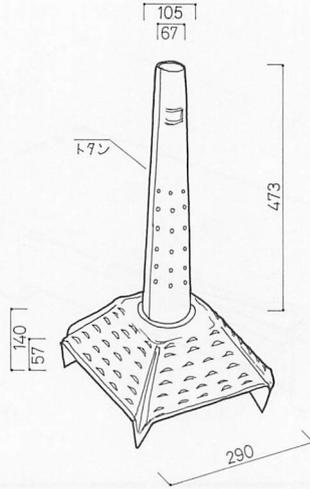
第1節 生活の時間・生産の時間



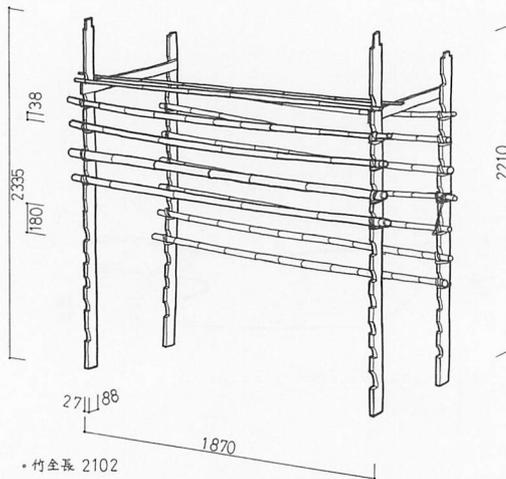
図表 3-38 クワキリバン (桑切り板) 富士山資料館所蔵



図表 3-39 クワキリボウチョウ (桑切り包丁) 富士山資料館所蔵

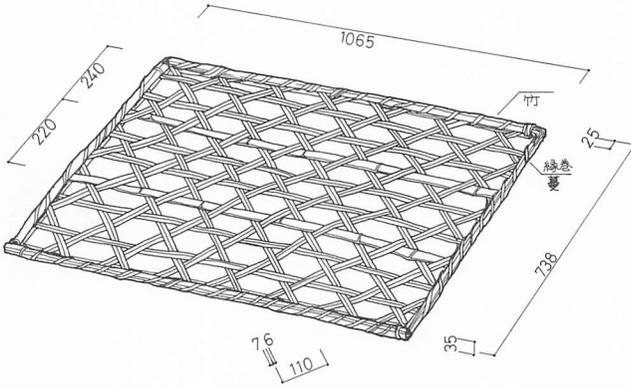


図表 3-40 榎殻焼き用の煙突 富士山資料館所蔵

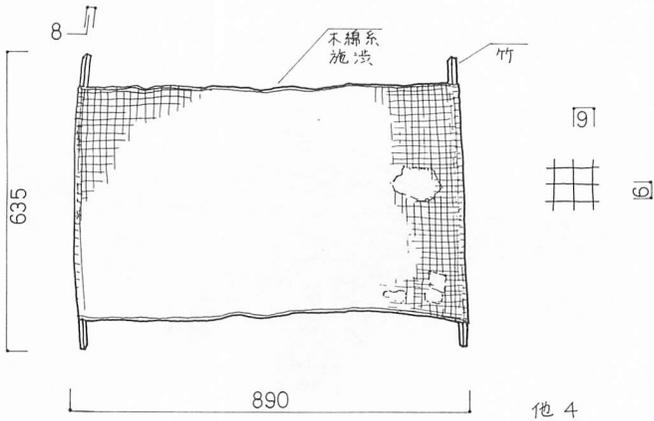


図表 3-41 コノメザン (養蚕棚) 富士山資料館所蔵

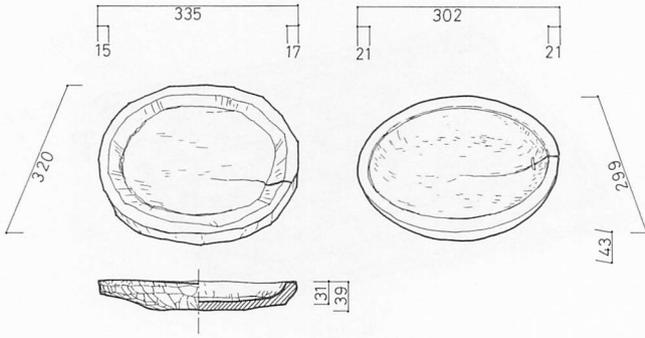
第1節 生活の時間・生産の時間



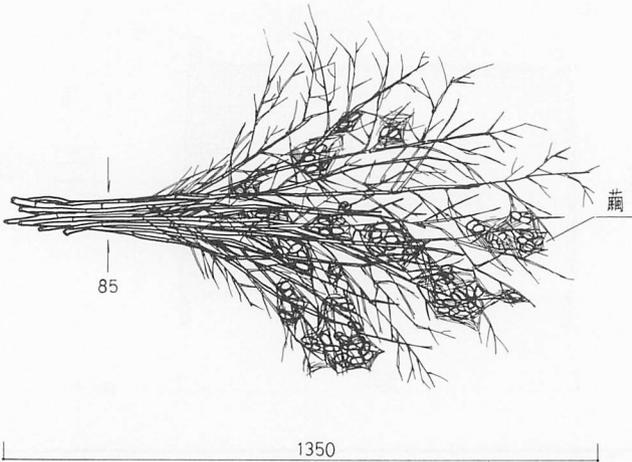
図表 3-42 オカイコッカゴ (養蚕籠) 富士山資料館所蔵



図表 3-43 シリトリアミ (糸網) 富士山資料館所蔵

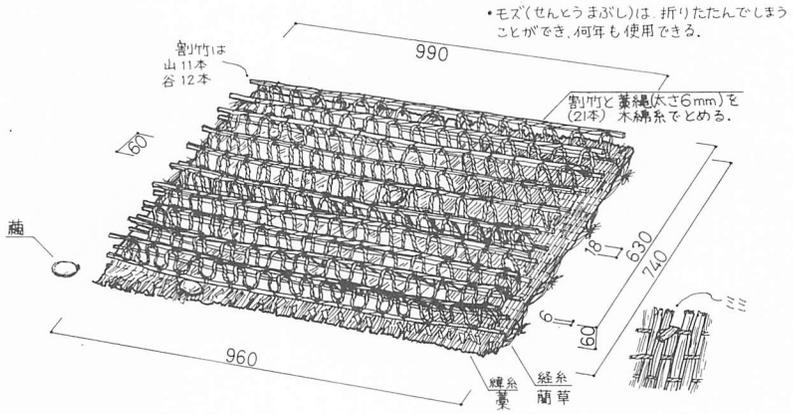


図表 3-44 カルトン (蚕盆) 富士山資料館所蔵

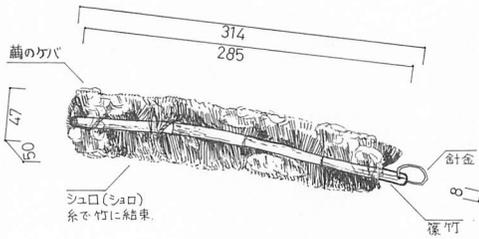


図表 3-45 ササモズ 富士山資料館所蔵

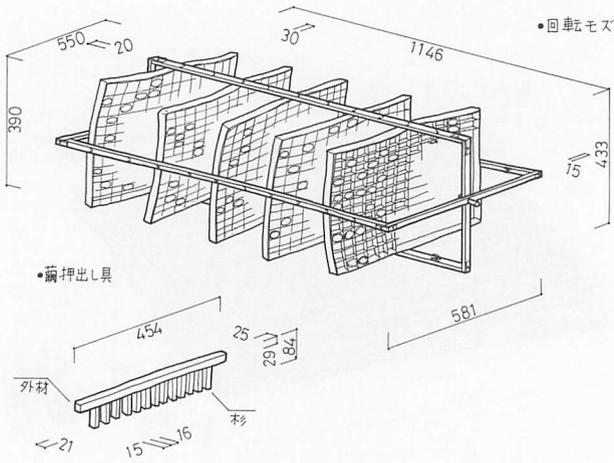
第1節 生活の時間・生産の時間



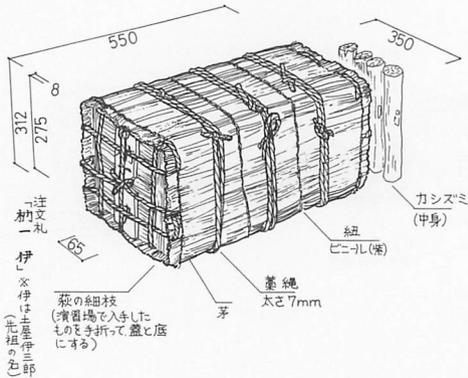
図表 3-46 モズ〈セントウマブシ〉 富士山資料館所蔵



図表 3-47 モズのケバトリ 富士山資料館所蔵

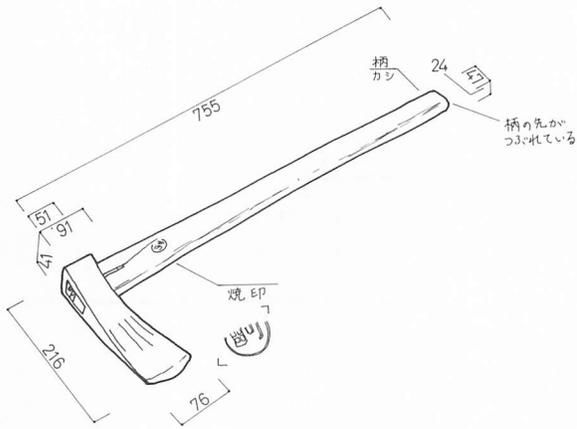


図表 3-48 回転モズ 富士山資料館所蔵

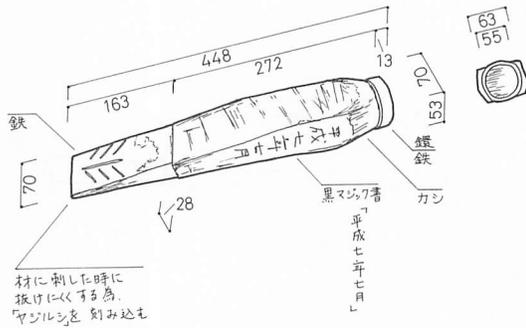


図表 3-49 スミダワラ (炭俵) 須山 土屋富正氏所蔵

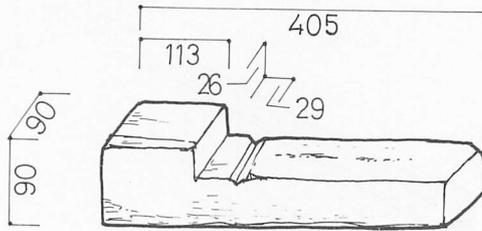
第1節 生活の時間・生産の時間



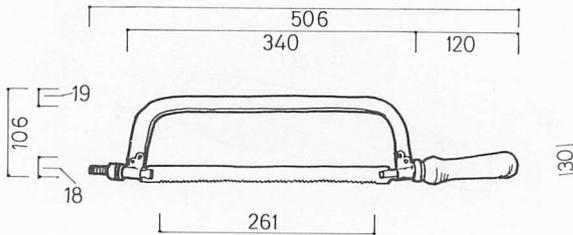
図表 3-50 ヨキ (斧) 須山 土屋富正氏所蔵



図表 3-51 ヤ (楔) 須山 土屋富正氏所蔵

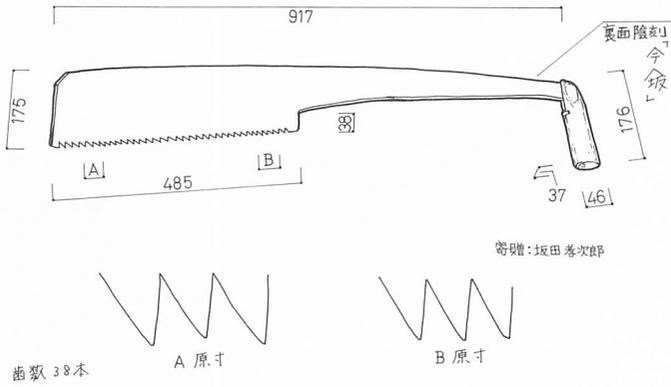


図表 3-52 炭のキリダイ (炭の切台) 須山 土屋富正氏所蔵

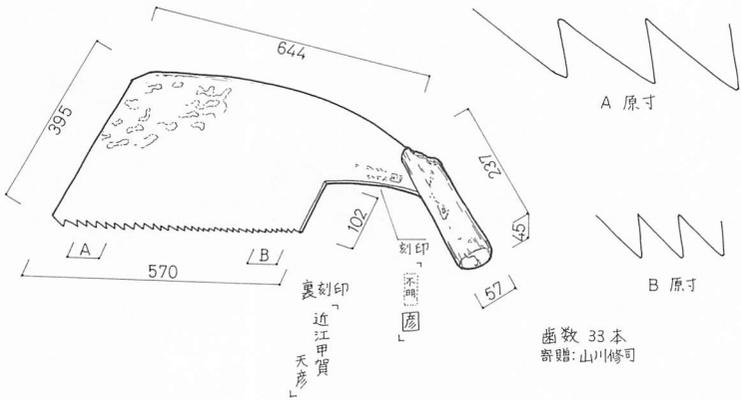


図表 3-53 炭のコギリノコ (炭鋸) 須山 土屋富正氏所蔵

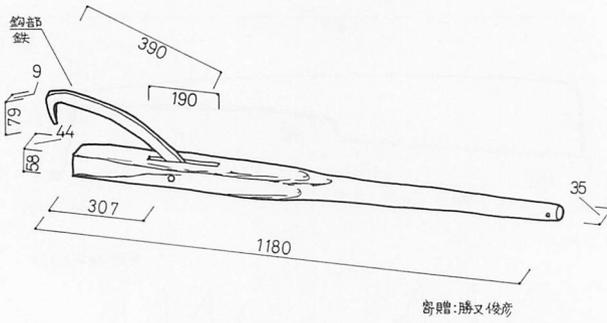
第1節 生活の時間・生産の時間



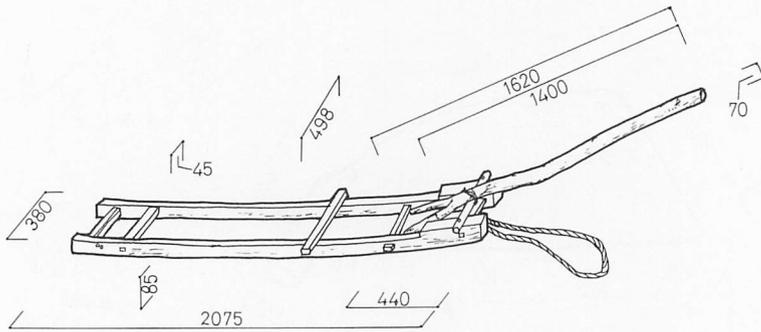
図表 3-54 ヨコビキ (横挽き鋸) 富士山資料館所蔵



図表 3-55 タテビキ (縦挽き鋸) 富士山資料館所蔵

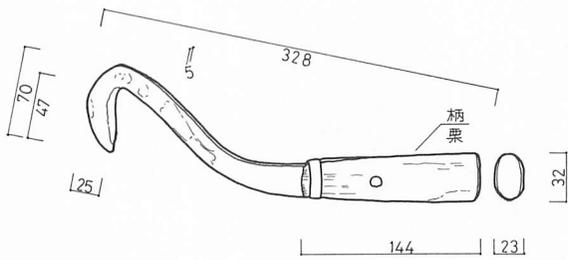


図表 3-56 キマワシ (木廻し) 富士山資料館所蔵

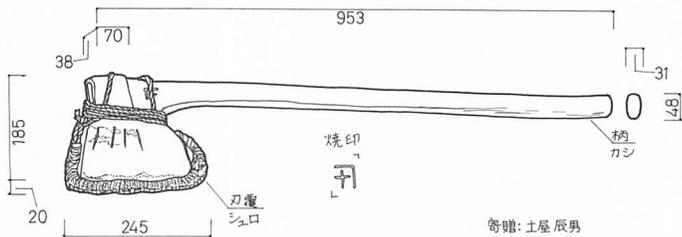


図表 3-57 キンマ (木馬) 富士山資料館所蔵

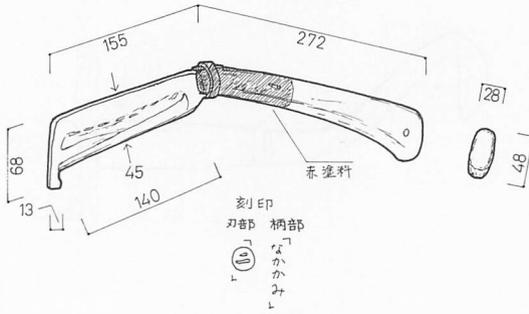
第1節 生活の時間・生産の時間



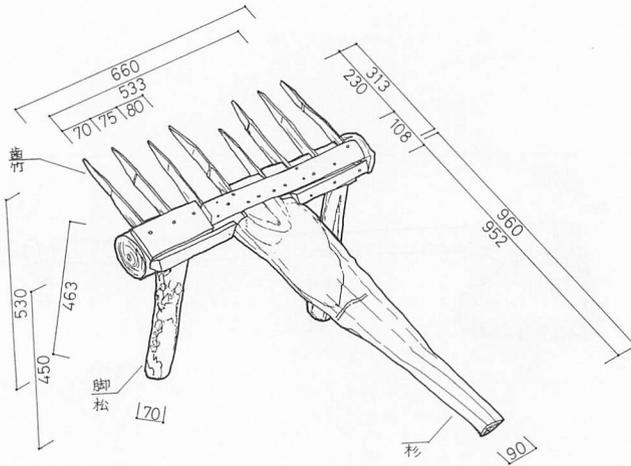
図表 3-58 カワムキ 〈杉の皮むき〉 富士山資料館所蔵



図表 3-59 マサカリ 〈斧〉 富士山資料館所蔵

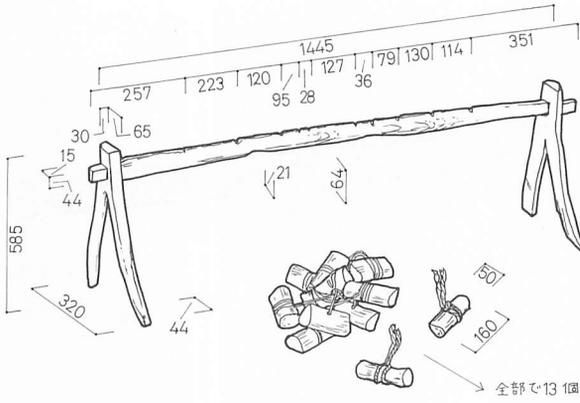


図表 3-60 ナタ (突起付) 富士山資料館所蔵

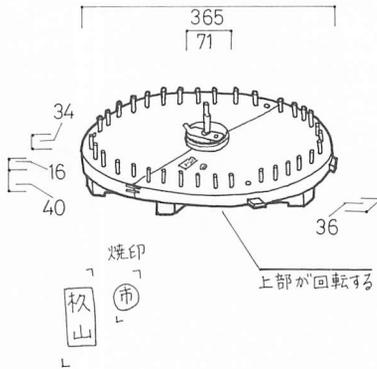


図表 3-61 ワラスグリ 佐野 杉山武博氏所蔵

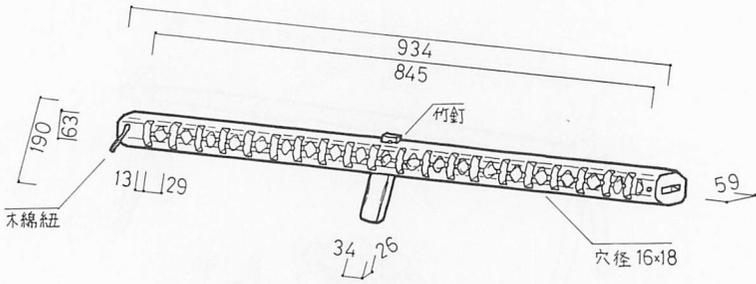
第1節 生活の時間・生産の時間



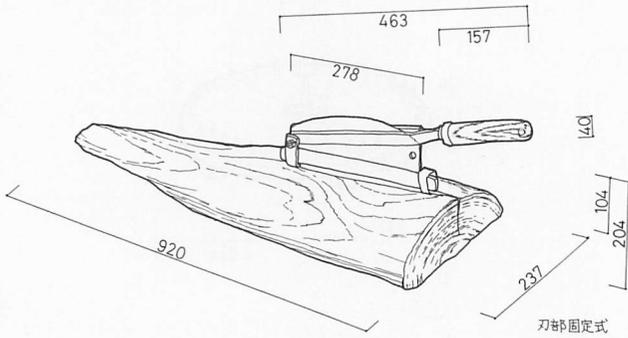
図表 3-62 タワラアミ (袷編み) 佐野 杉山武博氏所蔵



図表 3-63 サンダワラ作りの台 佐野 杉山武博氏所蔵

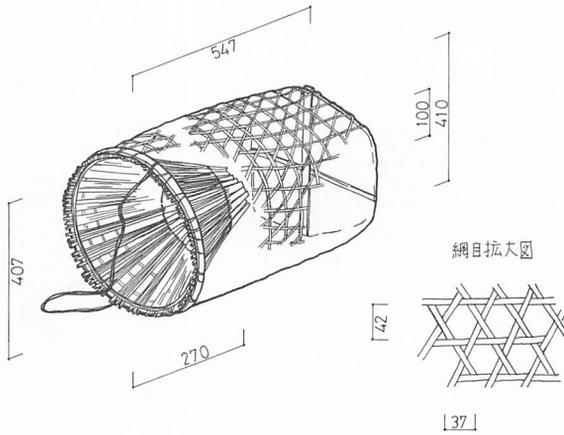


図表 3-64 薙織りのオサ (箆) 佐野 杉山武博氏所蔵

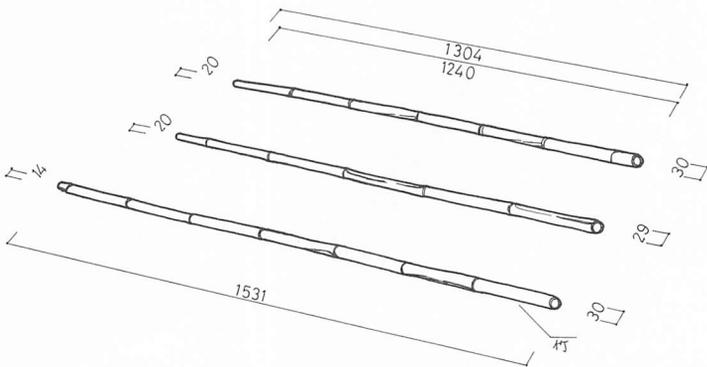


図表 3-65 オシギリ (押切り) 佐野 杉山武博氏所蔵

第1節 生活の時間・生産の時間

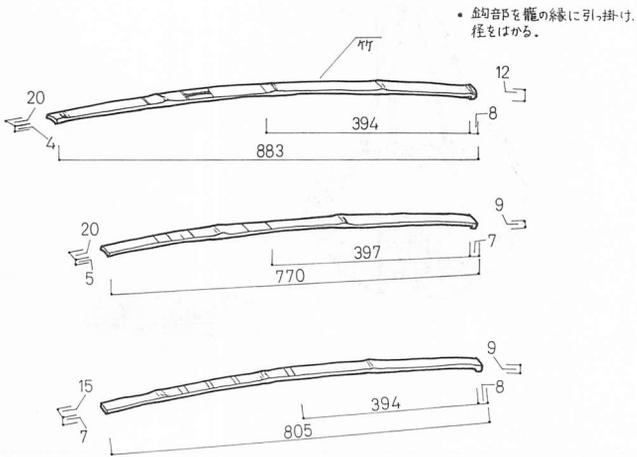


図表 3-66 モジリ (ズガニ用) 佐野 杉山武博氏所蔵

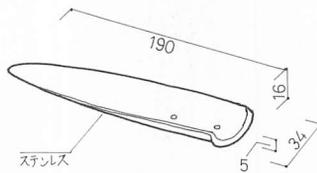


図表 3-67 竹切り用定規 茶畑天理町 鎌野正江氏所蔵

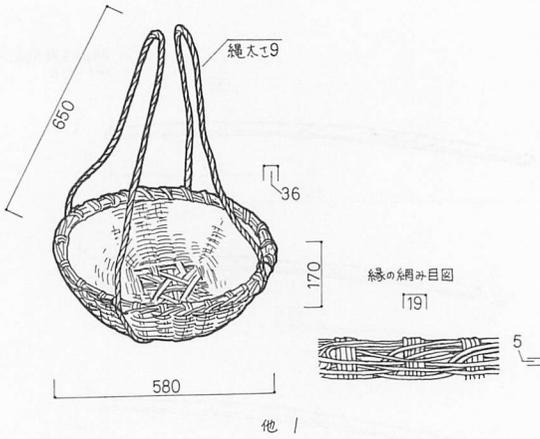
第1節 生活の時間・生産の時間



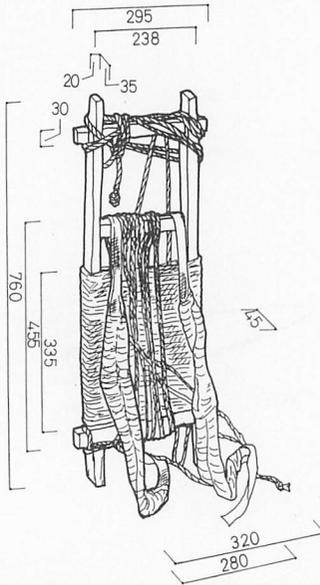
図表 3-70 スンボウ〈竹籠製作用定規〉 茶畑天理町 鎌野正江氏所蔵



図表 3-71 縁巻き用道具 茶畑天理町 鎌野正江氏所蔵

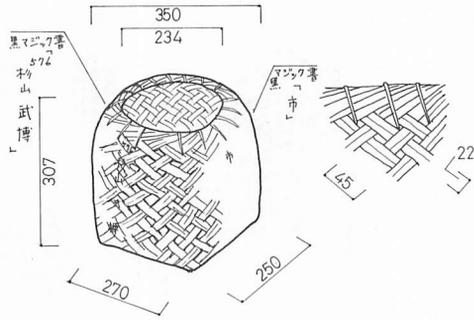


図表 3-72 パイスケ 茶畑天理町 鎌野正江氏所蔵

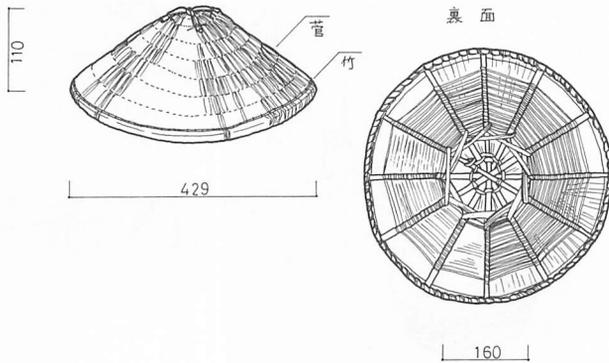


図表 3-73 ショイコ (背負梯子) 佐野 杉山武博氏所蔵

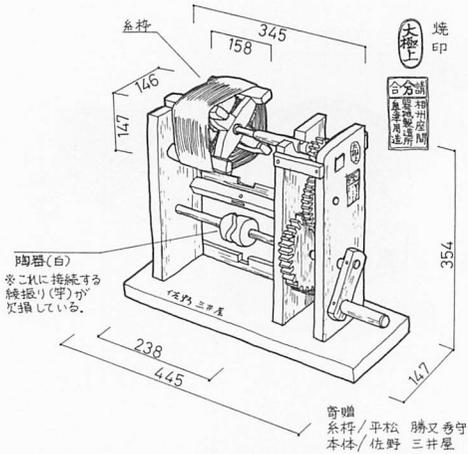
第1節 生活の時間・生産の時間



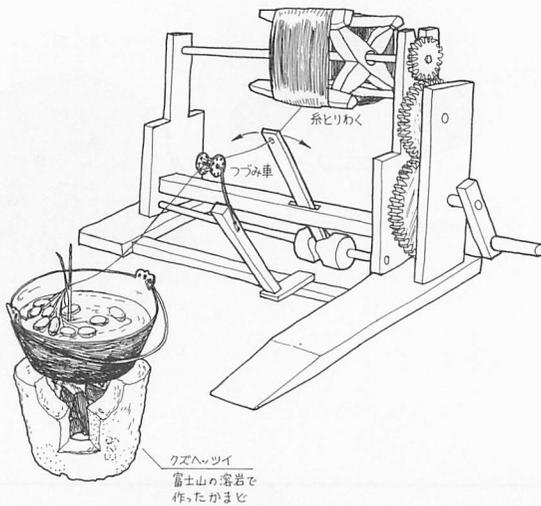
図表 3-74 メカゴ (目籠) 佐野 杉山武博氏所蔵



図表 3-75 トンボガサ (菅笠) 佐野 杉山武博氏所蔵



図表 3-76 ゼンマイ〈座繰〉 富士山資料館所蔵



図表 3-77 ゼンマイ使用復原図 富士山資料館展示解説資料による

図表3-78 農具一覽表

堆肥		農耕						分類						
		No.	名	称				使用法						
3-12	クサカリガマ(草刈鎌)	3-11	コマンザリヤー(熊手)	3-10	ヒラグワ・クワベラ	3-9	サンボングワ(三本鋏)	3-8	マンガー(馬鋏)	3-7	ニニンボウリ (ホウリマンガ)	3-6	スキ(犁)	スキは「スキドウグ」と呼ばれることが多い。田をあら起こしする農具である。農作業に牛馬の力を利用するようになって、改良が加えられた。本資料は、牛用のスキドウグである。
	草刈り用の鎌。木製の長い柄、柄にはほぼ直角についている丈夫な刃、これで山の木の下草を払うように刈り取る。刈り取った草は家に持ち帰り、堆肥に入れたり、サツマガラに入れたり、田畑の大切な緑肥となった。		クマデ(熊手)は「コマンザリヤー」と呼ばれる。サツマガラ(サツマイモの苗床)に入れる木の葉掻きは地域の冬の山仕事であった。		鉄の刃先が平らであることから呼ばれる名称である。畝を切るために用いる鋏のため、柄と刃の角度が鋭角になっている。鋏に付く土を落とすためのクワベラが付属として柄に差してある。		柄はカシで刃は鉄製である。刃が三本に分かれているところからの呼称。田や畑の耕作に使用する。		馬鋏をマンガとかマンガーと呼ぶ。ウマガワからマガワになりマンガと転訛したものである。乾田の土塊をかきまぜたり、水田の代掻きに牛馬に曳かせて用いる。		荒く起こした後の田畑の土塊をさらに細かく砕くための農具。一人用のイチニンボウリ(振り馬鋏)が基本にあり、これを二人で使用するように改良したものである。			

				水稲作				肥料		分類		
	3—21	3—20	3—19	3—18	3—17	3—16	3—15	3—14	3—13	No.	名称	使用法
	タコログシ(一輪車)	サクナワ(二条植用)	苗床作りの定規	エブリ	フオーク	カツギボウ・コエオケ (肥桶)	コエビシヤク(角型)	コエビシヤク(桶型)	モッコ		名称	使用法
	田転がしである。田植え後の稲の成長期に稲株間の除草を行う道具である。いわゆる田の草取りは、一番草取りから三番草取りまでであり、これを怠ると草が増えるだけでなく、稲株に酸素の供給もできないために、稲の生長を妨げることになり欠かせない作業であった。以前は人間が田を這うような姿勢で、手にはガンヅメを	作縄。縄を糸巻き状に巻くことができる。	木製の板。この定規で粃をまっすぐに蒔く。	田植え前の代掻きに用いるほかに、収穫した粃をオモテで乾燥させる時に使用する。木製の長い柄は途中で二股に分かれており、その先端には木製の板がつけられている。長い柄は使用しやすいためであり、先端の板は泥や粃を掻いて平らにならすためである。自家製の素朴な農具である。	長い木製の柄にとがった鉄の刃が四本付いているもので、堆肥の積み替え用に使用する。	担ぎ棒で肥桶を担いで畑に下肥を運んだものである。カツギボウは肩担いの道具として種々の用途があり、農家では複数所有する。	肥柄杓。木の長い柄の先に角形の桶をつけたもので、コエオケにくみ上げた下肥を畑に撒く道具。	肥柄杓。木の長い柄の先に桶をつけたもので、人糞などの下肥をオオドブ(溜)からコエオケ等にくみ上げるのに用いる道具。	シュロを編んだ筵状のものに両端に竹を通し二人で運搬できるようにになっている。堆肥などを運んだ運搬具である。		使用法	

第1節 生活の時間・生産の時間

脱穀調整		畑作		麦作	
3 — 27	3 — 26	3 — 25	3 — 24	3 — 23	3 — 22
センバ(千歯抜き)	突鋏(辛用)	カカシ(鳥形)	麦の土入れ	タネマキキ(麦の種播機)	イネカリガマ(稲刈鎌)
千歯。脚部は木製、歯は鉄でできている。古い形のは歯も木や竹であったという。稲や麦の脱穀に使用する。これが進歩して足踏み脱穀機に改良される。杉山さんの家では、昔、ご主人の妹が嫁ごとしたとき、先方(御殿場)から仲人がやってきて、「センバを見せてくれないか」と言ったそうである。同家では早く案内したそうだが、後になって思うに、あれは口実であって実は家の内部を見たかったのではないかと思うという。娘を嫁にやる際にはしばしば行われた習俗であるという。	長い柄の先端には鉄の刃が巻くようにつけられている。土を突いて掘り起こす道具であるが、土中深い根物(ゴボウ、ニンジン、ヤマイモ)などを掘り起こすために使用する。	モウソウダケ、竹、シュロ、竹皮、布、蕨、藁などを材料として鳥の形に作っている。本物のカラスの死骸などを吊り下げて鳥よけとしたものだが、このような代用品も作ったという。	「麦の土入れ」などと呼ばれる。麦の生えている畝の間の土をすくい、細かく振るいながら麦に土をかける。麦の茎が分けつする三、四月に行われる仕事で、麦の倒伏を抑え、分けつを促すために行う。	麦作は田の稲作の裏作として盛んに行われていた。古くは手で蒔いていたものが、播種機の出現で麦踏み・土入れの管理において作業は楽になったという。	稲刈り鎌は鉄刃の角度が鈍角で、鋸状の刃が付いている。ノコギリガマと呼ばれる。

養 蚕	茶						分類		
	3—36	3—35	3—34	3—33	3—32	3—31		No.	名 称
桑摘み用背負い籠	フカシキ(蒸かし器)	チャブルイ	チャブルイ(旧)	フカシ(蒸籠)	フルイ(米用)	トミミ(唐箕)	3—29	テオノ(稷叩き板)	使 用 法 手斧。杉の木の一枚板を削り、握りの柄をつけた道具。米や麦などのジクやノギを叩いて落とすために使用。 箕の用途は広く、脱穀した穀類の調整(風選)、物の運搬など、時に応じて使用される。全体は竹と桜樹皮を編んで作ってあるが、縁の部分には木の枝を入れ、桜の樹皮で丸めるように編み込んである。丈夫にするためである。かつては御殿場の方から箕を売りにやってきたという。 唐箕。内部の風車をハンドルで回転させ、風力で選別する道具である。脱穀の後に稷をこれにかけて、ノギや藁くずを取り除き、稷を実のはいった粒とシイナ粒に選別する。モーターやエンジンなどの機械化による動力が農家に導入される以前は、トミミはもっとも機械化の進んだ高価な農具だった。したがって、使用されなくなった現在でも捨てられず残している家が多い。
竹を編んだ籠。桑は腰にさげたビクに摘み入れ、いっぱいになると背負い籠へ集火を焚いて用いる。	揉んだ茶をこれに入れて振るい、良い茶と悪い茶、埃などを選別するために使う。揉んだ茶をこれにかけ、良い物と悪い物、埃などを選別するために使用する。	揉んだ茶をこれに入れて振るい、良い茶と悪い茶、埃などを選別するために使う。	揉んだ茶をこれにかけ、良い物と悪い物、埃などを選別するために使用する。	曲げ物。手揉みを行う前の茶葉を蒸かすために使う。蒸籠。	曲げ物。米選別用のフルイ。麦用に比べ金網の目が小さくなっている。ヒノキ、桜樹皮の曲げ物。		3—28		

3—46	モズ(セントウマブシ)	四眠からさめた蚕はいよいよ繭作りにかかる。上簇して透き通った蚕をモズの中
3—45	ササモズ	珍しい。古い形のモズである。
3—44	カルトン(蚕盆)	木製の浅い皿型の器である。上簇した蚕を拾い集めたり、モズに配ったり、繭をモズから取り集める際にも使用する。
3—43	シリトリアミ(糸網)	蚕の就眠に先だって、桑の食べかすや糞などを取り除くが、そうした作業をしやすくするための網である。このアミを蚕座の上に向け桑を与える。蚕が餌を食べるために上にあがったところをアミごと別の座に移す。
3—42	オカイコツカゴ(養蚕籠)	蚕を飼う座となる平らな角型の籠である。この上に蚕座紙を敷き、コノメザンの棚に差し込み飼育する。
3—41	コノメザン(養蚕棚)	蚕は初眠から四眠まで脱皮を繰り返して成長するが、その間の蚕飼育棚である。刻みのついた柱材を天井にさして固定し、竹竿をわたして棚を作った。
3—40	糶殻焼き用の煙突	蚕飼育の間は家の畳を上げ、適度な湿度を維持して蚕室を乾燥させるなど、住まいは蚕に占領された。焼いた糶殻を敷いて湿気を除いた。
3—39	クワキリボウチヨウ(桑切り包丁)	摘んできた桑はキリバンの上で刻んでから蚕に与えた。蚕がまだ小さい二眠くらいの時期まで使う。柄は桐製。
3—38	クワキリバン(桑切り板)	蚕が小さい時期には桑を刻んで与えている。キリバンは桑切り包丁とセットの道具である。引き出し付き。
3—37	クワカゴ(桑籠)	蚕飼育の間は、桑を摘んで運び、蚕に与えることが大仕事である。摘んだ桑を大量に保存するのに圧縮されて熱を持たないようにするため籠の目が大きい。
		蚕が小さい時期には桑を刻んで与えている。キリバンは桑切り包丁とセットの道具である。引き出し付き。
		摘んできた桑が「いきれないよう」に、詰めすぎに注意した。

山 樵						炭 焼				分 類	
3 — 54	3 — 53	3 — 52	3 — 51	3 — 50	3 — 49	3 — 48	3 — 47			No.	
ヨコビキ(横挽き鋸)	炭のコギリノコ(炭鋸)	炭のキリダイ(炭の切台)	ヤ(楔)	ヨキ(斧)	スミダワラ(炭俵)	回転モズ	モズのケバトリ			名 称	
											使 用 法
<p>コピキが大木を伐採するとき用いる横挽き鋸である。長いクビで、普通の鋸である。</p>	<p>普通の鋸であるが、焼きあがった炭を俵に詰めるために均等に切るために使用するものである。</p>	<p>焼き上がった炭を俵に詰めるためにスミノコで切るが、キリダイは炭の寸法(長さ)を均等にするための台である。</p>	<p>炭焼き用の材を割る際に使用。刃はカシの木に鉄をはめ込んだもので、刃と反対側を叩いて木に食い込ませて割る。叩かれるヤの尻には木を潰さないような鉄輪がはめ込まれている。本来は大木の伐採に用いるものである。</p>	<p>ヨキは木を割るために使う。炭焼きの燃料はこれを使って割る。また、家庭用の薪などを割るのにもヨキが使われ、どここの家庭でも備えている道具である。</p>	<p>須山、下和田などの山間地区では今でも炭を焼いているところがある。焼いた炭はスミダワラに入れて出荷するが、これは茅、ハギの細枝、縄などを使って手作りした。</p>	<p>モズが改良されて回転モズとなった。上簇した蚕が上に這いあがる性質を利用した効率の良い道具であった。出荷する蚕はズックのユタンに入れ、編み目の大きな籠に納めて運搬した。繭が痛まないように注意がはらわれた。</p>	<p>繭を取った後のモズには繭のケバ(残り糸)が残るが、それを取り除くブラシ状の道具である。竹、シュロ製。</p>	<p>へ拾い入れ、繭を作らせる。この作業をシキヒロイという。折りたたみ式のため、ケバを取り除いてからしまい、何年も使用できた。</p>			

第1節 生活の時間・生産の時間

藁								
3 — 62	3 — 61	3 — 60	3 — 59	3 — 58	3 — 57	3 — 56	3 — 55	
タワラアミ(俵編み)	ワラスグリ	ナタ(突起付)	マサカリ(斧)	カワムキ(杉の皮むき)	キンマ(木馬)	キマワシ(木廻し)	タテビキ(縦挽き鋸)	
藁は稲の副産物であるが、その用途は多種多様だった。収穫し、脱穀、モミスリのすんだ米は藁製の俵に入れて供出あるいは保存用にした。俵は自家製で、俵編	藁をすぐる道具。形は千歯扱きに類似しているが、歯の部分は竹で、歯と歯の間隔は大きくとってある。これに藁束を通し、藁についているハカマをすぐり落とす。藁細工を行う際に使用する。	ナタは竹を伐ったり、薪を割ったりする道具。太い丸太はヨキで割ったが、細かい薪や竹はナタで割ることができた。盆の松明などを細かく割ることなどはナタで充分であった。突起つきのナタは薪を集める際に木の枝に引っかけて手前にたぐり寄せてハギル(払う)のに使った。突起のないナタとトビアリ、トビナシとい	サキヤマ(木材の伐採)に使用した。樹木の根元にこれで切り口(受け口と追い口)を彫ってから木を倒す。後にはチェーンソーに交代する。	伐採した杉の皮をむいて出荷するカセギは冬の仕事だった。杉丸太に円く筋をつけておいて皮だけをむき取る道具である。	キンマは木の馬。ソリとも呼ぶ。伐採した材木を積んで山から引き降ろす運搬具。坂道に敷いたワイヤーでブレーキをかけながら下った。	鉄製の鈎 ^{かぎ} の部分で伐採した木材(丸太)に打ち込んで、柄を手や肩を使って起こし、太い丸太を転がすのに使用。	コビキの鋸である。横倒しの丸太を縦に挽いて製材する。その際、コビキは腰を降ろしてタテビキをねかしたまま(水平にして)挽いた。	は届かない大木の芯部を挽き伐る。伐採した丸太を適当な長さに切るためにも使用。

		パイスケ		漁撈			分類		
		3—68	3—67	3—66	3—65	3—64	3—63	No.	名称
3—70	3—69	タケワリ(竹割り機)	竹切り用定規	モジリ(ズガニ用)	オシギリ(押切り)	菰織りのオサ(箆)	サンダワラ作りの台		名称
スンボウ	ササハライ(笹払い)								使用法
スンボウは「寸棒」でパイスケ製作用定規の呼称である。茶畑のパイスケには一		パイスケの材料はシノダケの丸竹だが、これらは太さが一様でないため竹割りで材料の太さを勘で見極めながら、四本割り、五本割りの口に入れて割ることが必要である。したがって、一つの台には四通りの割り方ができる挿入口が付けられている。		パイスケを編むための竹の長さを決める定規。長さはパイスケの大きさ(一番、二番、三番)によって異なる。		竹の六つ目編みで、ウナギモジリや雑魚モジリに比較するとはるかに太い。これに魚の頭などの餌を入れて、コシタ(獲物が入ると出られなくした入り口)を川下にして、黄瀬川に仕掛けてズガニを捕った。		牛の飼料とする藁や堆肥にする藁を切る道具。	
パイスケの材料となる竹は、割った後にササハライを使って不要な部分の竹のハカマなどを取り払う。						菰は自家製だった。菰機を使用して、雨降りの日などはニワでの仕事となった。これに縦糸の細い縄を通して、横に藁を一本おきに入れ、このオサで打ち込んで編んでいく。		俵の両端につける丸い藁製の蓋、サンダワラは定規を使って丸く編んだ。	
						み機を使って、ヨナベや雨降り仕事で作っておいた。二股の木を両端の脚として、それに縦糸の位置を刻んだ目盛りのある横材を渡し、細縄を巻いたコマを互いちがいに動かしながら藁を編む。			

第1節 生活の時間・生産の時間

紡織	農耕衣	生活用具	運搬				
3—77	3—76	3—75	3—74	3—73	3—72	3—71	
ゼンマイ使用復原図	ゼンマイ(座繰)	トンボガサ(菅笠)	メカゴ(目籠)	シヨイコ(背負梯子)	パイスケ	縁巻き用道具	
富士山資料館展示解説資料による使用法復原図。	繭を煮ながら糸を引き出すための道具でゼンマイと呼ばれる。座繰。	トンボガサの呼称は駿東地区で使用される。かつては大平(沼津市)で多く生産されていた。日よけ、雨よけとして夏の野良でかぶることが多い。	竹を四ツ目編みに編んで作った籠。野菜などの入れ物に使用する。里芋はメカゴに入れて水洗いして土を落とすという。二月のコトヨウカの日にはこれを竿の先に吊るして目一つ小僧を追い払う呪いに使った。	背中に背負って炭や炭の原木となる木材など、さまざまな物を運ぶ運搬具。この呼称だが、ヤセウマ、ヤシヨウマなどとも呼ばれる。梯子のように木枠を組んだ形から馬の姿が想像されることからついた呼称であろうか。	シノダケを割って編んだ底の浅い入れ物。二個が一對となりカツギボウで担いで土や砂利、石炭などを運搬する。	パイスケの仕上げは男手で行うフチマキである。編み上げてきた竹を束ねて、中に芯を入れつつフチを巻く際に使用する。	番から三番までの大きさの種類があり、直径の見当をつけるスンボウも三種類ある。

第二節 一日の生活

(一) 仕事の一日

時間の目安

今日では、誰もが時計を持ち、正確に時刻を知るようになった。しかしかつては、時計で時刻を知るといふようなことなく、星や太陽のような天体や、鳥の鳴き声などを時間の目安にしていた。あるいは、市域の場合は列車の通過時刻や工場のサイレンを時計代わりにすることもあった。かつては「暗いから暗いまで働く」「ヤネムネ(屋根棟)を見たことがない」などといって、朝暗いうちから家を出て、夕方暗くなつてから家に戻つたものである。「アサボシ、ヨボシ」といふのは、星の見える時間に起きだし、星が瞬く時間まで働いたということである。地主はヤテット(雇人)に、「コザルが降りたらキャアッテコイ(帰ってこい)」と、仕事の区切りの時間を言つたという。コザルというのは、夕方になると草の水分が根元から葉先に上がってくる露のことをいう。時間としては、ちょうど日の暮れる前、「とぼとぼになる」少し前である。

蒸気機関車が通過する音は、沿線地域ばかりでなく、山仕事に出てもよく聞こえた音だった。現在の御殿場線は、一九三四(昭和九)年に三島駅が開設される以前は東海道線であった。この東海道線時代には現在よりも本数が多く、列車の通過する音でときを知ることができた。一番列車は午前六時頃、その後、正午と午後三時、午後五時に上り列車が通過する。上りが通過して四〇分後に、下り列車が来た。

挨拶もまた、一日のときどきによって、また地域によって言い方が変わる。市域では一般的に、朝は「おはようご

ございます」、昼は「こんにちは」、夕方から夜にかけては「おやすみなさいまし」「こんばんは」などと言う。市内でも須山や下和田では、朝は「おはようござんす」、昼は「ごめんさい」、夜は「おぼんです」「おぼんになりがした」などと言う。また天候の挨拶では、天気の良い日は「いいあんばいだなあ」と言い、雨降りでも野良にも行けずに困る日は「ふんなきゃいいなあ」と言う。夏の暑い日は「あついなあ」「なんとあついじゃあか」と言い合い、反対に寒い日は「さびいなあ」と言う。やはり須山や下和田では「おあつうござんす」「おさむうござんす」と挨拶を交わす。家を訪問するときは、「いるかや」「いたきゃあ」と言いながらオオドから入る。仕事をきりあげるときの挨拶は、「おしまいなしゃあやあ」「おしまいなさいまし」「しまうべえよ」「みんなかえるべえよ」と声を掛け合う。ムラの中でのお互い気心の知れた者同士の間柄であり、家においても野良においても遠慮なく声を掛け合う間柄なのである。なお須山や下和田、あるいは富岡地区の一部で言い回しが多少違うのは、これらの地域が御殿場地方の言葉に近いものであると考えられる。

田植えの時間

田植えの一日の時間の流れは、ムラの中で相互に助け合って作業を行っていた時代と比べると、かなり短縮されている。しかも働き手の多くが勤めに出るようになってから、農作業は休日に行われるようになり、機械化が進んでムラの共同作業は家内労働ですませることが多くなった。しかし、かつて田植えはイ(結い)という共同作業の仲間を作って行う重要な稲作の行程の一つであった。また市内でも水田地帯では、御殿場から田植えを専門に行うソートメグミ(早乙女組)を雇い、まるで「お祭りのように」田植えを行ったという。このように多人数で行う田植えは、その日一日の食事作りも専属で女衆がとりかからなければならなかった。

一般的に、農繁期の食事の回数は一日に四回で、アサメシ、ヒルメシ、ユージャ(ヨージャ)、ユーメシ(ヨーマシ、

ヨーハン)をとる。深良のある家の田植えの日の食事は、午前五時にアサメシ、午前一〇時にヒルメシ、午後一時から二時の間にユージャ、午後六時過ぎにユーメシをとる。普段の食事の献立は麦を混ぜた麦飯が主食だが、この日はかりは赤飯にサバの煮付けなどをヒルメシに出し、ユーメシには刺身までつけてごちそうした。作業は、田植え田の代掻きと苗取りを行い、それから一反五、六畝の田植えをする。代掻き、苗取りをしてから田植えをするという行程を、食事をはさんで繰り返すのである。しかし、これは手際の良い御殿場のソートメグミの田植えで、市域では田植えの前日に苗取りをしておいた。水田の広さによって田植えの日数が違ってくるが、富沢では翌日も田植えが続く場合は、ユージャの後、苗取りの作業をした。また、麦刈りの時期と重なったときは、田植えの後、ヤマ(山の畑)に行つて麦刈りをするこゝもあつた。

水窪みづくぼ生まれの故渡辺慎一さん(一八八八年生)の『回想の記』(一九四〇年)には、大正期頃までの田植えの様子が記されている。田植えの当日は、植え付けをする家がイイで手伝いをしてくれる家を起こして歩き、暗いうちにアサメシをすませ、すぐに田植えにとりかかる。夜明け前には一、二枚の水田の植え付けを終わり、午前八時には昼前の仕事を終わつて田から上がり、ヒルメシをとる。その後、男は昼寝をして昼休みをとり、女は翌日の田の苗取りを手伝う。午後二時頃にユージャをとり、再び田に入って田植えをし、夕方は早めに仕事を終えるというものである。

さて田植えをする際に、時間の目安となるのが田植え唄である。代掻き作業をする際には、馬の先導役である鼻取はなとりとマンガ(馬鋤)で掻く代掻きが唄を掛け合つた。その後、田植えではソートメサン(早乙女)の音頭取りの歌い出しによつて田植え唄が歌われた。富沢の服部きよさん(一九〇二年生)によれば、「ここはトノノミオロシ、マエナイシゲク、コウザクニ」などと歌い出すと、ソートメサン全員がそれに唱和した。昼近くになると、「ハーシナンゼン

ソーロエタ」と歌って、ヒルメシを催促したという。前述した渡辺さんの『回想の記』には、以下のような田植え唄が記されている。

- 1 夜深ヨアカに出たらば霧に迷ふたよなァー
- 2 お米を何でとごうよなァー、柳の桶で研ごうよなァー、七桶八桶なァー、研ぎ並べたよなァー
- 3 奥山の赤土をとって籠カを塗って、お籠の段で飯イをあげるものよなァー
- 4 さんさら巻絵の包丁で、まな板で、魚をつくって、箸を何ぜん揃揃そうよなァー
- 5 昼寝をしたらなァー、猫に鼻をかァかれたヨイー、どの猫に、どの猫に、
 どんどにおいてはおの猫に、あの猫に……
- 6 こゝは遠野の見下ろし、前苗しげく大作に、早く植えて、よく植えて、太郎治どんと寝てゆかう。太郎治ど

んは年トシ寄り、小太郎治どんと寝てゆかう。(原文のまま)

このように、田植え唄には一日の時間の目安が巧みに歌いこまれていて、それを励みにして作業を繰り返していたことがわかる。

夏の一 日

通常の農作業の日は、午前四時半頃起きだし、午前七時頃までにアサメシをとった。そのため葛山では、朝食前のことをオチャマエ(お茶前)といい、その時間に簡単に片付ける仕事のことをアサメシマエ(朝食前)、あるいは茶畑ではアサヅクリ(朝作り)といった。アサメシマエは、田の水を見にノマワリ(野回り)をする、牛馬に飼料を与える、馬の飼料用と堆肥用の草刈りに行くというもので、昼間の時間が長い夏の季節ならではの仕事である。



写真3-23 観音の祭りの赤飯（公文名）

サハジメで、アサメシマエにアサクサを二度刈りした。朝暗いうちに家を出て、各自分配された草刈り場の草を刈り、駄馬に六把つけて帰ってくる。それから再び、大野原に行ってもう一度草を刈って戻ってくるのである。しかしアサネ（朝寝坊）をしていると、自分の持ち分の草も人に刈られてしまったものだという。

このようにアサクサは、田植え終了後の夏の暑い時期にしておかなければならない作業の一つだが、昼間の暑い時間を避けて朝暗いうちに起きだし、アサメシを食べる前に出かけ、涼しいうちに草を刈って帰ってくるのが通常であった。しかし、深良や茶畑のように草刈り場が遠い場合には、先にアサメシをとってから出かけ、昼前に帰ってくるというところもある。さらに深良では、その後、午後二時頃にもう一度草刈りに行き、五時半頃に帰ってきた。また水田のない須山では、草刈り場でチャノコという朝食をとっている。須山のアサクサハジメは七月七日で、午前三時

富沢ではこのアサメシマエの草刈りをアサクサ（朝草）といって、愛鷹山の共有地から競争のように刈ってきたものだという。公文名では、七月一八日の馬頭観音の祭りに、念仏講の女性たちが三カ所の馬頭観音前で念仏をあげる。このとき赤飯の握り飯を供えるが、かつてアサクサを刈って山を下りてくる人たちにこの握り飯をアサメシとして振る舞うのが恒例であった。大野原に近い下和田では、七月一〇日はアサヅクリといって、草刈りのためのミチツクリ（道つくり）をした。その翌日がアサク

に起きて馬力を引いて大野原の十里木あたりまで行く。草刈り場には四時半頃着き、草を一三把くらい刈る。午前八時にチャノコをとり、草刈りを終えて帰宅すると、刈ってきた草を既に入れて乾燥させる。このような草刈りは、八月末まで行われ、その間のノウヤスミ(農休み)は七月一五日と盆のときだけであったという(『須山の民俗』)。

アサメシの後の農作業は、田の草取りやノマワリである。午前一〇時にタバコ(タバコ)という軽い休憩をする。深良では、「タバコだよー」「一服してくださいよー」などと言って、休息を促す。正午の目安は、列車の通過時刻でわかる。深良では「やあ、富士が来たから昼になった」などと言い、富沢では「オメシレッシャ(お飯列車)が通るからオヒルにしよう」と昼食の目安にしていた。ユージャは午後三時頃で、五時の列車が上ってくると、まもなく仕事を終えた。

野良から帰宅すると、風呂に入る。風呂は毎日入るわけではないが、沸かすと近所で誘い合ってもらい湯をした。風呂の水をくんで沸かすのは子供の仕事である。風呂の水は毎日入れ替えないので、湯船から上がるときには湯に浮いている汚れがつかないように、身体を振りながら出る。この垢のたまった風呂の湯は、下肥しじえを薄めるときに使う貴重な水である。

ユーマシは日没から午後七時頃までにとり、夜なべ(夜業)をする。夜なべには、男性は縄なわ縋ないや草履ぞうり、草鞋、俵などの藁製品を作り、女性は衣類の繕いや裁縫をする。翌日の仕事のしたくをして、だいたい午後一〇時頃までには床につく。

山でのサ
ツマ作り
稲作の作業が一段落すると、山へ行って畑作物を作ったり、薪を採ったりする。これらの仕事は、主に秋から冬にかけての仕事である。深良や茶畑ではカイコンといい、雑木などを伐採した後、株を掘り起

こして切りひらいた畑で耕作をする。これに対してアラクと云って、植林した木を伐採した後、焼畑をしてから再び木を植える際、稚木が二、三メートルになるまでの四、五年の間、間作に豆類や雑穀類を作る畑もある(第一章第二節参照)。また富沢では、このような畑のことを単にヤマと呼び、ヤマへは弁当持参で一日がかりで行くことが多かった。

深良の山での一日は、次のようである。深良の畑は箱根山にあり、出かけるときには遅くとも午前七時には家を出なければならなかった。それ以前に早く出る場合は、提灯を下げて行く。開墾した畑では主にサツマイモを作っているが、箱根山は赤土で水はけのいいデロ(泥)なので、三島甘藷として関西方面に盛んに出荷した時期があった。サツマイモ掘りの手を休めるのは午前一〇時と午後三時で、たき火をしてイモを焼いて食べた。昼は弁当を食べる。弁当箱にはご飯と煮物のおかずを詰め、すえないように竹で編んだ弁当籠に入れておいた。この弁当は、カラスや虫に食べられないように、ちょうどいい高さの木の枝に吊り下げておく。水は山の上では手に入らないので、モウソウダケの筒にキリで穴をあけた水筒に入れて持っていく。

一一月頃の箱根山からは、およそ午後三時頃になると駿河湾の海が光っているのが見えてくる。そうするとまもなく日が暮れるので、急いで帰りたくをするのである。なお茶畑ではこれを、「大瀬ヶ浜おせがはまの明神さんの海が光ってくると帰りたくをする」といっている。それでも帰り道は、暗い中をとぼとぼと歩かなければならなかった。

冬の副業

市域では農間余業として、自生する豊富な竹を材料にして、夜なべに竹製品を作っていた。須山では竹行李、富岡ではパイプのラオ作り、深良や茶畑ではステッキやパイスケ作りと、仲買の注文に応じて盛んに行われていた(第三章第一節参照)。

須山での竹行李作りは、家族総動員である。男衆が竹伐りに出かけ、女衆と子供が行李を編む。大中小の三組それ

それの本体と蓋の計六枚を一個といい、一日に一個編むのが一人前とされていた。昼間はジアミ(地編み)といって平らな部分を編み、夜なべにスミ(角)を立てて編みあげる。

葛山では、ラオ用の竹を男衆が集団で山に伐りに入り、小屋掛けをして何日も泊まり込んだ。その竹をラオヒキが山から運んでくると、女衆がラオコキをして稼いだという。

深良には、ステッキヤといわれる店が三軒ほどあり、ステッキにする材料の竹を分ける。それをカンナで扱いでステッキヤに持っていく。女衆は昼間から集まって、一緒にステッキを扱うが、男衆は夜だけだった。夫婦でステッキを扱くと、一晩に一把四〇〇本を扱うことができた。

(二) 主婦の一日

朝の水くみ

市域で一樣に聞かれる話が、水の苦労話である。深良用水という豊富な水源を持っていながら、生活用水の苦労は特に水回りの仕事をする主婦が痛感するところだった。市域では、岩盤の上に集落がのっていることが多く、井戸を掘っても水道(みずみち)に突き当たるところだった。そのため、深良用水の付近に井戸を掘ってそのシミミズ(浸透した水)を利用するか、用水の水をくみ上げて使うかのいずれかである。それでも水量が減って、いよいよ困るときには近所の家の井戸にもらい水にいたり、ジスイ(地下水)といわれるほかの川の水をくみに行ったりしたという。水くみの仕事は、主婦や子供の仕事であった。

伊豆島田では、水くみは朝四時に起きてすぐ行う主婦の仕事であった。用水のことをカワというが、オカッテにある水がめに桶を下げた天秤棒で何回も担いで入れたという。また飲料水は、ミズゴシといってカワバタに漉し器を置

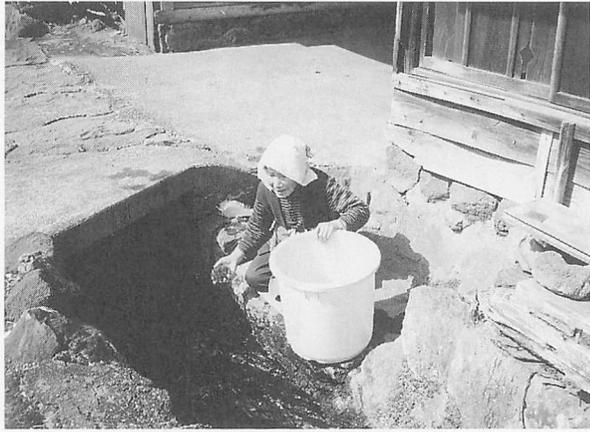


写真3-24 カワでの桶洗い（富沢）

き、それで漉したものを使った。漉し器は直径七、八〇センチ、深さ七、八〇センチのコンクリート製のかめに、木炭や砂、シユロなどを入れたものである。朝早く水をくむのは、水が澄んでいて濁っていないためである。

水窪では、「一間いけばカワの神さんがカワをきれいにしてくれる」といい、水を大事に使ったものだという。飲料水として使うほかカワの水は、風呂、洗濯、米とぎ、ゆでためん類の洗い水などに使っていた。

アサツクリ

茶畑の一九一三（大正二）年生まれの主婦の一日は以下のようである。夏は午前四時半頃起きだし、まず馬に飼料を与える。馬にはオシギリで短く切った藁に米糠めかを混ぜた飼い葉と、サツマイモやニンジン、ダイコンの葉などの菜類、それにバケツ一杯の水を与える。なお餌は飼い葉桶が空になるたびに与えるが、米のとぎ汁やうどんや蕎麦のゆで汁なども捨てず、また食事の残飯などもすべて飼料とした。そのため馬の世話は主に主婦の仕事であった。なお、朝の水くみは共同井戸から飲料水をくんできたが、風呂や洗濯用の生活用水はやはりカワからくんできた。

茶畑ではアサメシの前に片付けなければならない仕事のことをアサツクリといい、アサツクリはこのような馬の世話のほか、外回りの掃除、洗濯、食事のしたく、弁当作りとかなり忙しい。子供も連れて家族全員で野良に行くの

で、ヒルメシの弁当作りとユージヤの準備も容易ではない。この間、男衆は野良へ行くしたくをしたり、田の水を見るノマワリに行ったりしている。

食事のしたく

野良へ行く日のアサメシは、だいたい午前六時頃までにすませる。主食は麦を混ぜたバクメシ(麦飯)だが、朝炊くときに一日分をまとめて炊いてしまう。家によって違いはあるが、米と麦はおよそ五対五から七対三くらいの割合で混ぜる。麦はひき割りを使い、鍋で煮てさまし、麦が膨らんで柔らかくなってから米に混ぜて炊いた。アサメシはこれにオミオツケ(味噌汁)とココ(漬け物)、煮物、ナツパ(菜物)をつけた。オミオツケの具は、ダイコン、サトイモ、菜物、豆腐などを入れた。ココは、ミズナやコマツナ、ハクサイ、ダイコンなどを味噌汁や塩漬けにした。ナツパは、キャベツやト(菜物の脇芽の部分)をゆでてカツプシ(鯉節)をかけておひたしにして食べた。

ヒルメシは午前一一時頃から正午くらいまでの間にとる。野良では弁当を食べる。弁当はアサメシと同じバクメシに、梅干しと新香が入っているくらいのもので、行商が持ってきた塩マスがあるときにはそれを焼いて持っていった。自宅で食事をとるときには、やはりバクメシに金山寺味噌や梅干し、朝のおかずの残り物で簡単にすませた。

ユージヤは午後三時にとる。サツマイモの水煮やナベヤキを焼いて食べた。冬は弁当を二食分持っていきヒルメシとユージヤに分けて食べるが、夏はご飯がすえて(腐って)しまうので、飯盒はんごうにナベヤキを入れて持っていったという。ナベヤキというのはヤキパンともいい、小麦粉を熱湯で溶き、伸のびてせんべい状にし、熱湯でゆでたものを炒り鍋や鉄灸で焼いて作る。なお、葛山ではこれをオヤキといい、須山ではオヤキはモロコシやオオムギの粉でも作った。

野良での仕事を終えて家に戻るとユーマシを作る。ユーマシは夏なら午後八時頃、冬なら午後七時頃に、夏はうど

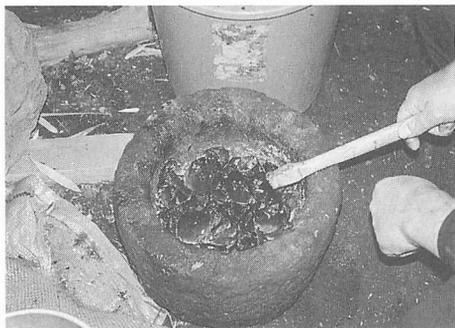


写真3-25 ユージャの食卓(葛山)

ん、冬は蕎麦と決まっていた。帰ってから粉を打っている間に合わないので、前夜のうちに五合くらいの粉を伸しておいた。うどんはキリコミといって、カボチャやジャガイモ、ダイコンなどの野菜を入れた味噌汁に、太く切ったうどんをゆでずにそのまま入れて煮込むいわば「ほうとう」のようなものを食べた。うどんは日持ちがするので、夏にはすえないうどんが重宝だったのである。蕎麦はニンジンやハクサイなどを入れた出汁^{だし}に、ゆでた蕎麦を入れる。蕎麦はツクネ(ツクネイモ)を入れてつなぎにして作り、煮干しやカワでとれるズガニ(モクズガニ)を出汁にした汁で煮る。なお、黄瀬川流域ではズガニがよく捕れたためカニジルの蕎麦を作ったが、それ以外の土地では山鳥などの鳥肉を出汁にした蕎麦を食べる。また蕎麦は日常に食べるだけでなく、祭りや祝いのときのごちそうとしても欠かせないものである。葛山ではこれをソバブルミヤーといっている。

ところでユーメシが手間のかからないものになっているのは、野良から帰ってきてからの時間が少ないためで、子供が留守番をしているときには子供にも用意できるようにしているのである。とはいえ、また翌日の食事の下ごしらえは主婦の大切な仕事である。一九三二、三(昭和七、八)年頃にめんを伸して切る機械が出回り、野良から帰ってすぐユーメシを作るのがとても楽になったという。

第2節 一日の生活



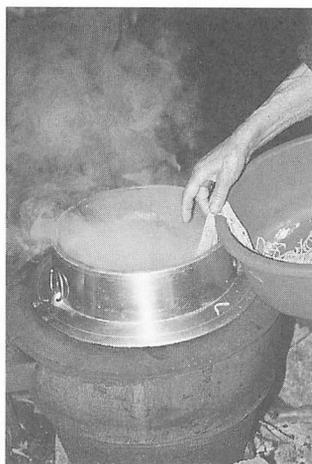
3



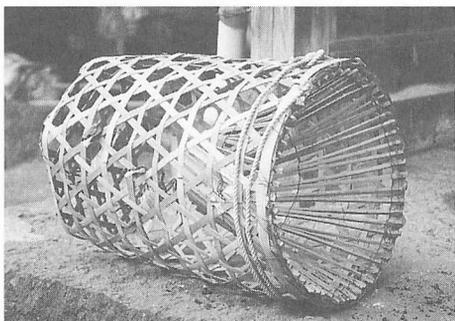
1



4



2



5

写真3-26

カニジルの蕎麦作り（富沢）
（1～3、5は服部克巳氏撮影）

- 1 めんを伸す
- 2 釜で茹でる
- 3 石臼でズガニをつぶす
- 4 カニジル
- 5 カニモジリ

夜なべ仕事

朝早くから仕事をしなければならぬ夏でも、主婦が床につくのは午後一〇時頃である。冬ともなれば、夜なべの仕事は数多くある。洗濯は、夜のうちにすすいで干してしまふ。ポッコギ(繕い物のこと)は肌着から野良着まで、家族中のものをしなければならぬ。また米をといだり、サツマを煮たりして食事の下準備も必要である。翌日野良に行くしたくも、年間を通じて同じである。このような仕事の合間に、風呂に入ったり布団を敷いたりして寝る用意もしておく。このほかに稼ぎ仕事のラオコキヤステッキ、竹行李作りなどをしていれば、寝るのはたいいてい夜中の一一時から一二時にはなってしまう。

夜なべ仕事で遅くなればやはり空腹になり、夜食を食べる。おおかたは仕事をしながら簡単につまめるものを用意した。蒸かしたサツマイモや、サツマイモを混ぜたサツマメシを食べた。なお、茶畑にはヤシヨクネンブツ(夜食念仏)という言葉が残っている。自宅でユーマシを食べた後、ヤドに集まって念仏講を行う。寝る直前まで念仏を唱えるので、休憩に夜食を食べたことから、このような言い回しをしたようである。

第三節 一年の生活

(一) 年中行事

1 正月の行事

ワカシヨーガツ

地域には正月の初めの三日間をワカシヨーガツ(若正月)と呼ぶ習慣がある。二番正月(こしょうがつ)(小正月とも呼ばれる正月半ばの行事)との対照的な呼称である。須山では一日から一日までをワカシヨーガツ、一五日から二〇日までを二番正月と呼んでいるという。ワカシヨーガツの中でも初めの三日間は特にサンガニチ(三が日)と呼ばれ、この間を正月と考えることが一般的である。正月は一年の始まりとされ、年間を通じて最も重要な行事に位置づけられている。

深良原の広瀬のぶさんは「三が日は、お雑煮を、みゃあにち(毎日)にいしく(新しく)煮て、神棚に供えた」といい、正月の三が日の生活を端的に表現する。正月の餅(雑煮)が神聖な食べ物として認識されている。広瀬家の雑煮は、醬油汁で、餅は四角形、具としてダイコンやサトイモを入れた。神棚に供えるお雑煮はだし汁を入れないという。また、三が日の間は、男衆が神棚にお灯明をあげるなどの世話をするものとされ、いわゆる「男の正月」の習俗が過去には存在したことを伝えている。

また、ワカシヨーガツという言葉が生まれた背景には次のような事情があったものと考えられる。暦が旧暦から新暦に変わったのは一八七三(明治六)年のことであるが、各地で行われる年中行事が新しい暦に合わせて行われるよう



写真3-27 ハツマイリ (葛山・浅間神社)

になったのは改暦よりかなり遅れてのことだった。須山の場合は戦前まで正月行事やそのほかの行事も旧暦で行われていたという。同地は高冷地であるために、ちょうど旧暦の正月頃に積雪があり、仕事も暇なときであり、この時期に正月を行った方が都合だったからだったという。新暦の正月の頃は、まだ農作業のできる時期だったのである。したがって、須山では戦後になって初めて新暦による「ワカシヨীগツ」が行われるようになったというのである。須山村議会が新暦による年中行事を決めたのは一九四六(昭和二一)年のことであった。

そのほか、同じ市内でも、須山の十里木のようにかなり特異な「モチなし正月」を過ごす地区もあるなど、正月のありようは市内でも地区によってさまざまである。三が日の間に三島の明神(現在の三嶋大社)に初詣でに出かけたり、五日までの間をゴカンニチ(五カ日)と呼ぶ習慣も市域で広く聞く。以下、市域の正月行事を述べてみる。

元旦

元旦の過ごし方には各家庭で少しずつ異なった形が見られる。

「元旦は朝暗いうちに起きて、霜柱を踏んで氏神様に詣でる。ムラで一番詣でを競った。家では、神棚にお雑煮を供えた後、家族が食卓を囲み、明けましておめでとうございませと新年のあいさつを交わした。」と、これは深良の遠道原で聞いた元旦の朝の光景であるが、市域内各家庭で見られるごく一般的な風景であろう。



1



2

写真3-28 ウナイゾメとハツヤマ (佐野)

1 ウナイゾメ

2 今ではマキ割りがハツヤマの行事

深良南堀みなんぼりの大家庭では、ウジガミ(氏神)の八幡神社へのハツマイリ(初参り)から始まる。家長は早朝六時頃からのムラの元旦祭に出かけ、神前に祈禱し、モシキを焚いた篝火にあたりながらムラの衆とあいさつを交わし、お神酒をいただいで、スルメをかじる。大家庭には、元旦は風呂に入らないという昔からの習慣があった。「福を掃き出すから」という理由である。元旦は掃除もしなかった。二目になって、まず掃除を行い、家族は朝風呂に入ったという。そのほかどこの家庭でも必ず行われてきたことは、年頭の挨拶に出かけることである。いわゆる年始回りで、オー

ヤ、カネオヤなどの主な親戚を回ることから、世話になったところなどの各所が対象となる。

ハツヤマ

正月四日をハツヤマ(初山)とす

るのは全市域で見られる。いわゆる仕事始めの儀礼である。しかし、新曆を採用している現在では、ワカショーガツの時期に行くハツヤマは実際の仕事始めの季節と異なるため

に儀礼的な要素が強くなり、しだいに行われなくなってきたといわれる。また、同じように、かつて市域全域で行われていたウナイゾメの儀礼もその一例であると言える。ウナイゾメは、正月早々、農家の主が鍬くわを手に田に出かけ、数鍬だけ土を起こしてくる行事である。鍬で起こすことをウナウといい、その仕事始めであるからウナイゾメ(うな い初め)と呼ぶ。

佐野、イチバ(市場)のエーナ(家名、屋号)をもつ杉山家で現在も行われているウナイゾメは正月四日に行われる。貴重な事例であると言えよう。ウナイゾメを行う場所は、元は畑だったという屋敷近くにある昔から決まっている水田で、そこには暮れから正月の注連飾りを土に挿しておく。四日の早朝、主人は鍬(ヨンホンダウ、四本鍬)を手に田に出かけ、帽子を取って一礼し、お飾りの周囲を三回ウナウ。行事はこれで終わりだが、毎年必ず行ってきたという杉山家では、この日の行事を「ハツヤマ」とも「ウナイゾメ」とも称している。山がかなり遠方であったことから、いつからか両者を同時に行うようにしてしまったという。杉山さんは「ウナイゾメ」の後、「ハツヤマ」だと称してマキ割りの仕事を形式的に行っている。山に行かなくなった代わりだという。

ナナクサガイ

正月七日、ナナクサ(七草)を祝う家が多い。野で摘んだ七種類の草を入れた粥を作り、食べる日とされる。ナナクサガイ(七草粥)と呼ばれる。粥は家族だけが食べるのではなく、家の中の神々や屋敷内の神々にも供えられる。この日、正月以来供えてきた屋敷および屋内各所の供え餅は、「七日の風を吹かせるもんじゃない」といわれ、取り降ろされる。代わりに七種類の草(野菜)を入れたナナクサガイのオブツキ(仏器)が供えられる。粥に入れる野菜は、必ずしも「セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ」という一般的な春の七草ではなく、近年では、味を良くするためと言い、ニンジンやゴボウなどの野菜を入れて調理する

ことが多い。やはり七草も、新曆による日取りでは季節が早すぎて、簡単に野で摘み取ることができなくなっている。粥に入れる野菜類は六日の晩に用意する。摘んできて、キリバン(切り板)の上で刻む。その際の唄の文句があり、次のようである。

「ナナクサ ナズナ トウドノトリト ニホンノトリガ ワタラヌサキニ アワセテ バッタバタ」(七草、ナズナ、唐土の鳥と 日本の鳥が 渡らぬ先に 合わせて ばったばた)

同様の歌い文句はかなり広範囲で伝えられる。また、唄を歌いつつ行う動作も各地同様である。キリバンに野菜を置いて、しゃもじやアタリボー(すりこぎ)と包丁の背でキリバンを叩き、野菜を刻みながら歌うというものである。

同日、三嶋大社では、恒例の「お田打ち」が行われる。農家では三嶋大社に出かけ「お田打ち」を見学している。両者ともに、生業にかかわる年初の行事と位置づけられる。

この日、子供たちはムラの家々を回り、正月の注連飾りを集めて回る。二番正月のドンドン焼きの準備が始められるのである。

初集会

ムラの一年間の予定は正月一日に開かれる初集会で決められた。この日、各家庭ではオソナエワリ(お供え割り)を行っている。正月に神棚に供えた餅を割って汁粉にして食べる日だという。

初集会には各戸主が出席し、その年に行われるムラの行事と、農作業の予定等が決められる。農作業日程の主なものとは田植えの日取りである。田植えは「イイ」(結い、共同)で行われるため、ムラが一定の時期に揃って行う必要があったのである。また、用水を平等に引くためにも、田植えの時期を談合しておく必要があった。田植えの日取りが決まると、その日を基準に苗代作り、粃蒔き等の日程が決まる。初集会の際、田植えなど、種々の農作業のヤトイド

(雇い人)の日当も決められた。

元旦に新年会を開いて組の主なことを決めるといふ須山地区のような例も見られる。須山田向の新年会は組単位の行事であり、権現に参った後、組長宅に集まり、昼食を食べながら新年を祝っている。この際、次の組長を決めた。また、正月には地区の貴重な飲料水の管理を行うミズゼワニン(水世話人)も決めていた。

葛山の場合は、かつて初集会は正月五日と決まっていたが、現在は日曜日などの都合の良い日となったという。しかし、これは大事な寄り合いだから、必ず戸主が出席してムラの事業計画を検討し、その日程等を決めているという。区の体育祭、農休みの日などである。このようにムラごとく初集会の日取りは市内でも各地区で一定ではない。

正月一日をオソナエワリといい、正月に供えた餅を割って雑煮にして食べる。田場沢たばつきの中野鶴吉さん(一九〇二年生)は、この日をジュイテンチシヨীগアツ(一日正月)と呼んでいる。

ニバンシニバンシ ヨীগアツ(二番正月)はコシヨীগアツ(小正月)とも呼ばれ、正月半ばの一四日から一五日にかけて、各家庭で種々の作りものをもたて諸行事が行われる。サイトヤキが二番正月のムラの共通行事

であるのに対して、家庭で行われる行事は、生業にかかわる豊作祈願の予祝行事など、素材で、興味深いことが多い。ナリモツナリモツは一五日の早朝に行われる行事である。ハツヤマの日に切っておいたカツノキで作った棒の先端を十文字に割ってアズキガユ(小豆粥)をつけ、庭の柿の木を叩く。いわゆる一般で成木責めといわれる行事だが、市域周辺ではナリモツ(ナリモツ)とも呼ぶと称されることが多い。すなわち「成り申そう」で、柿のみに限らず、あらゆる作物が豊作であることを祈願するのである。葛山かみんじょうの上城では「一生懸命叩けばきつと今年もたぐさんの柿の実が成る」と信じられ、「柿の木は叩いていじめることにより実をたぐさんつける」ともいわれている。

第3節 一年の生活



3



1



4



5



2

写真3-29 二番正月

- 1 ダンゴボク (須山)
- 2 サイトヤキのオンベ (御宿)
- 3 道祖神に納められた作り物 (須山)
- 4 サイトヤキ (須山)
- 5 ダンゴ焼き (須山)

柿の木叩きは子供たちの役割だったという。一五日の早朝、庭の柿の木を叩きながら、大声で唱え文句を叫ぶ。親からは「隣に負けんようにやれ」と言われた。あちこちから、子供らの大声が聞こえてきた。

唱え文句は次のようである。

「カーキノキ カキノキ ナールカ、ナンニヤールカ、ナールトモウセ センヒヤクタワラ、カネヒヤクタワラ、タキヤアトケナルト、カラスガトルゾ、シクイトケナルト、コドモガトルゾ、チュウトケ、ターントナレ ターントナレ」(柿の木、柿の木、成るか、成らないか、成ると申せ、千百俵、金百俵、高いところへ成ると、カラスがとるぞ、低いところへ成ると、子供がとるぞ、中ところへ、たんと成れ、たんと成れ)

またニバンシヨーガツをダンゴノシヨーガツ(団子の正月)と呼ぶこともある(葛山)。団子はニバンシヨーガツには欠くことのできない作りもの一つである。米の粉を練り、繭の形、小判型、俵型、丸い型などのさまざまに作り、ダンゴボク(団子木)と呼ぶ木の枝に突き刺し、飾り物とする。また、サイトヤキに持って行く団子も用意される。丸く作り、竹の棒の先端に突き刺し、子供らが担いでサイトヤキに出かける。この団子を食べると風邪をひかないといわれた。

ニバンシヨーガツのアズキガユは、ナナクサのナナクサガイとセットで考えられる。

葛山では「七日のお粥を食べない者は一五日のお粥を食べてはいけない」といわれ、どちらか片方になることをカタツカユ(片粥)と呼んで忌む。つまり片方だけでは縁起が悪いとされた。このように対であるもののどちらか一方を行わないことを忌む習俗は、秋の月見などにも見られる。

ニバンシヨーガツのアズキガユは一五日の朝一番に神棚に供えられ、子供たちが起き出したところでナリモツソを

行い、最後に家族で食べる。

サイトヤキ

正月飾りなどを集めて燃す行事のサイトヤキ(あるいはドンドンヤキ)は、ニバンショーカーツの中心行事であり、各ムラ単位で行われる大行事である。

その呼称だが、サイトヤキ、ドンドンヤキ、オンベヤキなどがあるが、市域だけでも一様ではない。比較的多いのはサイトヤキであろう。三島市あたりまで南下するとドンドンヤキが多くなっているように思われる。サイトヤキとドンドンヤキの呼称の相違について、『静岡県史』(資料編24民俗二)で次のように述べられているので参考までに引用した。

「サイト焼きは修験道で行う柴燈焼と同じで護摩の火祭りであるが、これで悪霊を焼き払うのである。これとは別にサイノカミ(塞の神・道祖神)のまわりでも藁小屋を作り、お飾りやお札などを入れ、そのそばに新築家屋の建前るときに用いたかんなくず四斗樽(こも)の薦(こも)被りを供える。それには巨大な男根を差し込み、シュロの皮で毛をつけておく。サイト焼きをしてから道祖神の小屋を焼く。これをドンドン焼きという」(裾野市須山)。

すなわち、サイトヤキとドンドンヤキは、同じ正月一四日に行うものであっても、焼く時間も意味も異なるというのである。

現在、サイトヤキが行われる日は一四日夕方か一五日の早朝と二通りある。しかしこのようになったのは近年のこととて、かつては一四日の晩と決まっていたようだ。正月の夜空を照らし出す赤々としたサイトヤキの火の風景を思い出す人は多い。

かつてのサイトヤキは子供が主となって催されてきた。葛山での戦前のサイトヤキは次のようだった。「サイトヤ

キの準備は、小学校に入ったばかりの子供から高等科二年までのムラの子供が中心となって正月七日から始められた。七日は正月の飾りはずす日ということになっており、子供らはこれを集めてまわり、コヤ(小屋)の材料とした。コヤの準備の早いムラは四日から始めるところもあった。ハツヤマ(初山)で山に入ったとき、木を伐って材料を揃えるのだという。コヤの屋根にするムギカラ(麦藁)、オンビ(オンベ)、ゴシンボクなどの呼称もある)の竹竿、それに吊るすダルマやキツネの面などを買に行った。そうした費用は、暮れのうちから子供たちがサイノカミのお金として集めておいたものである。コヤ作りは大人が手伝ってくれた。下条では奉納道祖神と書いたのぼりを立てた。

コヤはサイノカミサンの前に作った。田場沢・中村のムラでは、お互い隣ムラより立派なコヤを作ろうと競い合ったものである。戦後になって、コヤはしだいに簡単な作りになってきたという。

中村の杉山喜信さん(一九一八年生)によれば、戦前の中村ではコヤにはサイノカミサンを安置し、子供たちが泊まり込み、サイトヤキではサイノカミサンも火の中に入れたという。その火で餅を焼いたり、サイトヤキ終了後は草鞋わらじを作って供えたりした。

サイトヤキの火の効用は各地で種々いわれている。「サイトヤキで書き初めを燃せば字が上手になる」「厄年に当たる者は、この日集まった子供たちにミカンや菓子振る舞い、サイトヤキの火で厄落としをする」「サイトヤキの火で焼いた餅や団子を食べると一年間風邪をひかない」「虫歯にならない。サイトヤキのモシジリ(燃し尻)でタバコを吸うと身体を病まない」などがある。

山の神講

山の神講は正月と一〇月の二回を行うところ(茶畑は九月に行う)と、正月だけになってしまったところがある。各ムラの行事である。



写真3-30 坂田貝一氏が納めた祠（須山）

葛山田場沢の山の神講は正月と一〇月の二回、その月の一七日に行われている。田場沢では「山神社祭典の日は鉄砲を使わない日」という言い伝えがあった。この日、山神社の掃除を行い、オフルマイを開くのが例年の習わしである。かつてはムラ共有のオフルマイの食器など諸道具が膳椀小屋に保管してあった。ムラの行事に際して使用していたというが現在では個人の道具を使うようになってきている。葛山の他の地区、上城、下条、中里なかざとでも田場沢と同様に山の神講が行われている。

山の神講を行う単位について、須山田向の場合、現在でこそ組単位の行事として行っているが、本来は山の神は個人持ちだったから各戸でまつっていたといい、組単位になったのは新しいことだとされる。また、須山の黒岳・堂ヶ尾どうがには、坂田貝一という炭焼きを生業としていた人がまつたと伝わる山の神がある。この土地は一一三戸の共有の山で、現在は共有でまつり、一二月一七日を祭日としている。須山田向の「山の神」(山の神講の日)は正月、三月、一〇月の一七日で、年三回である。また、戦前までは旧暦にもとづいて行われていたという。

同地区の山の神講について記してみよう。「祭典の日の朝、当番宅ではオコワや、アブラゲメシ、野菜飯といった二種類の混ぜご飯を作る。作ったご飯は袋に入れ、祭典終了後、参拝に集まった子供たちに菓子を添えて配る。また、当番宅では次のような神饌しんげんの準備

も行われる。清酒、オコワ、海のもの(ワカメ、コブ、イワシやサバなどの魚)、山のもの(ニンジン、ゴボウなど)、里のもの(ナツパなど)これらをゴーチ(郷持ち、ムラで共有)のゴーゼン(郷膳、高脚の膳)に乗せ、山ノ神社に供える。なお、煮魚や、サトイモの煮たものといった調理したものを神饌として出す家もある。正月の祭りには御殿場方面より神職を招き、神社で祝詞をあげてもらう。講の人々が参列し、神饌を供える(午後三時)。祭典終了後、各組ごとに当番宅で直会なおひが行われる。

当番宅では床の間に大山祇命と書かれた掛軸を掛け、その前に竹二本を立て、それにしめ縄を張り、祭壇を設けておく。組の男衆だけが、当番宅に集まり、直会を行う。かつてはオコワ、サバの煮付け、煮豆、タケノコの煮付け、刺身といった料理が出たが、近頃はすき焼きや、寄せなべといったなべ料理を出すようになった。直会の費用は組からの当番費でまかなう。かつては若い衆が米、小豆、ニンジン、ゴボウといった材料をあらかじめ集めておき、それらを使って祭りの食事を作った。なお、当番宅に不幸があると当番を代えることになっている。『須山の民俗』

茶畑の山の神祭りは、九月一七日である。茶畑全体でまつる山の神社は大場川だいはがわ上流の箱根山中にある。これと山の道を各モヨリから選出された山岳委員が管理している。祭典前には各戸から人が出て、山の道を整備する作業が行われるが、欠席者は出不足金を科せられる。祭典当日は山の神前に赤飯を供え、祝詞をあげて終了となるが、各モヨリではそれぞれに山の神講が開かれる。茶畑全体の山の神をまつる山は同地区二一一名の共有林となっており、これに参加できるのは共有林の権利を所有する者に限られている。この茶畑山の山の神を「タケノヤマノカミ(岳の山の神)」と呼ぶ場合もある。

ハツカシ ヨーガツ(二十日正月)は正月二〇日の行事を指す。ところがこの日は何をするわけでもない。

ハツカシ ヨーガツ ヨーガツ ヨーガツ目が覚めた」ということは頻繁に言われ、この日にいたり種々の正月行事が終了するという認識が一般化されている。

須山では、ハツカシ ヨーガツまでは仕事を休んでよいといわれ、この日を過ぎればあとは働くだけだったといわれている。また、須山の場合、二〇日をエビス講としている。二番正月の頃買い求めておいた花飾りをエビスと大黒に供えるという行事であったが、今では行われぬ。ハツエビスと称し、旧暦一〇月二〇日のエビスと区別し、多くの供物をエビスに供えることは行われぬ。

天神講

かつて、正月二五日は天神講の日となっていた。天神講は子供中心のムラの行事である。

茶畑では小学校一年生から六年生までの児童が、米二合ずつを上級生の家に持ち寄り、自分たちで料理し、床の間に供え、そのあと全員で食べたという。床の間に食物を供えたということは、おそらく天神の掛軸が掛けられていたものと考えられる。

天神講の習俗は全国的に分布していて、だいたい市域で行われてきたことと似かよっている。また、二五日が天神(菅原道真)の縁日で、学問の神といった伝承も同様であるが、かつての子供組や子供会の衰退にもなっただけに行われなくなってきたようである。

2 二月の行事

ジローノ 二月朔日(一日)をジローノツイタチ(次郎の朔日)とするとところがある。

ツイタチ

須山の田向では、二月朔日に、正月の餅を水餅みずもちにしておき、それを割って雑煮にして食べるという。また、正月一四日(二番正月)の団子はこの日まで食べずにおき、煮て神棚に供えた家もあるという。

シロメシ(白米のご飯)を食べることができたのもジローノツイタチであったとされる。

マメマキ

ムラごとに行われる大山講とは別に、各家庭が行う節分の行事はマメマキ(豆まき)と呼ばれる。

節分は立春の前日の年中行事であるが、一般では、この日を「豆をまいて鬼を追い払う日」と考えられている。いわゆる豆まきの日である。この夜はマメガラ(豆殻)やナスの莖殻で飯を炊き、神棚に供えるものとされていた。「マメ(健康で元気に)に働くことは、ナスガラセ(借金を返す)」といわれている。

また、豆まきの夜を「年取」とする習慣もある。「歳の数だけ豆を食べるもの」という地域が多い(茶畑など)。須山でも「年越し」とされ、この日の晩に、舅がすりこぎで嫁の尻を叩くと子供ができるといわれている。「鬼は外、福は内」と、子供たちが、炒った大豆を家の中や外に向かって大声で投げつける行事が現在も続いている。「鬼は外、ヤッカガシも節分の行事とされる。「棒の先端に差したイワシの頭に唾を吐きかけながら、訪れて欲しくないさま

ざまなものを口にし、ヒジロ(囲炉裏)の火で焼き、家のトンボグチ(玄関口)に挿しておく」というものである。

ヒジロで焼くときの唱えごとは次のようにいう。

「カラスノクチャキ(口焼き)、ヘビノクチャキ、スズメノクチャキ、ネズミノクチャキ、モグラノクチャキ、シヨット(ほおじろ)ノクチャキ(須山)

また、トンボグチに挿すときも次のように唱える。

「ヤツカガシモ、ソーロー、ナガナガモ、ソーロー、トナリノバアサン、ヘヲヒッテ、ウン、クサイ」

「ヤツカガシモソーロー、ナガナガモソーロー、トナリノオタカモ、ナガクサカエソーロー」(須山)

品のない唱えごとだが、品がないほど良いのだという。訪れて欲しくないものへの悪口であるからである。

須山の場合は隣の「おたかさん」を持ち上げている。これに答えて隣では「ありがとよ」と礼を言った。地域によりさまざまである。

田場沢の中野さんは、今では行われなくなったこの行事をカラスノクチャキとかヨーカドーと呼んでいる。カラスノクチャキは、イワシをヒジロの火であぶる際、農耕に害となるさまざまな鳥獣や虫を呪うことから言うものである。

しかし、ヨーカドーは、かつて行われていた二月八日のコトヨウカ(事八日)を指すものと思われる。やはり、害鳥獣、害虫、疫病等の厄払いの行事で、家の軒先に立てかけたメカゴ(目籠)で「目一つ小僧」を退散させるという行事であった。

静岡県の中東部地域では、このコトヨウカの行事を節分に行っているところが多い。

大山講

神奈川県伊勢原市にある大山神社は、神奈川県内はもとより、東京、静岡県東部などの広い地域の人々の信仰を集めている神社として知られる。大山阿夫利神社あかりで行われる「筒粥神事」は、稲の豊作を占うことで知られている。各地域では「大山講」を組織し、節分の日に詣でて「オオヤマサンのお札」をいただいでくることが習わしとなっている。



写真3-31 大山講(葛山)

市域でも各所に大山講が残っている。大山講は節分の前日にムラで開催される。オオヤマサン(神奈川県伊勢原市の大山神社)に詣でたムラの代参者が持ち帰ったお札を分けることが講の主な内容である。

茶畑ではこのときのお札を「山の神、田の神」といい、お札は持ち帰った後、神棚に飾りその年の豊作を祈願する。

葛山では、前年度の大山講でくじ引きをして決められた代参者が、講が開かれる日に伊勢原まで出かけてお札をもらってくる行事を行っている。オオヤマサンへは、現在では自動車を使って日帰りできる距離だが、昔は御殿場線を使ったり、さらに昔は徒歩で行ったりしたものだから、代参者となることはたいへんな役割だったと語り伝えられている。葛山田場沢の大山講は節分の前日開かれているため、これを「マメマキ」と呼ぶことが多く、節分のムラ行事としてとらえられている。なお、同じ日の同じ行事を葛山下条では不動講と称している。

初午
二月最初の午の日をオイナリサマ(お稲荷様)と呼び、祝う習俗が深良などの一部の地域を除き、ほぼ市域全域で見られる。

稲荷神はヤシキガミ(屋敷神)ととらえられることが一般的で、農家などは屋敷の一隅に社を建て、鳥居を構えてまつる場合が多い。また、社を建てる位置は包圍を見て決められ、キモン(鬼門)の方向に建てるものなどといわれる。

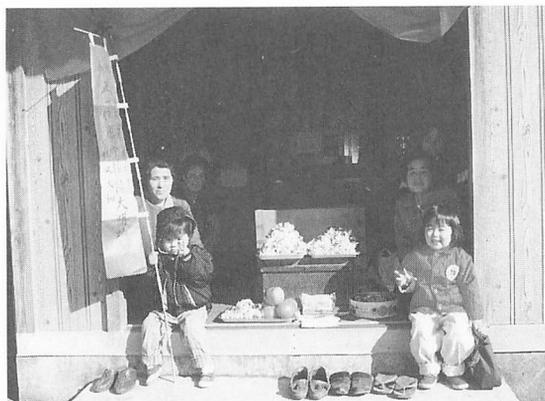


写真3-32 瘡守稲荷の初午（葛山中村）

稲荷神がどこから勧請かんじようされたものであるかという点になると、各家々で異なるが、京都の伏見稲荷神社であったり、愛知の豊川稲荷神社である例が多い。オイナリサマの祭りは次のようである。

茶畑では、社の前に「稲荷大明神」と大書きしたハタ（のぼり）を立てる。ハタには年・月・日、家族の名前を書き込む。ハタは赤、青、緑、紫の四色。お供えは、朝は赤飯、夕は稲荷寿司で、そのほかに油揚げ、生魚などもあげられる。稲荷神をキツネと理解しているところもあれば、キツネは神の使いというところもあって、解釈はまちまちである。

しかし、キツネと稲荷との結びつきは深く、たいいていの社にはキツネの置物が一对並んでいる。ハタは近所の子供たちも立てにやってくるなど、かつては近所同士でのハタの交換が盛んに行われていた。

富沢の渡辺家でまつる稲荷神は、「子供の夜泣きを直す神」として知られ、近隣の信仰を集めている。初午（二月初午）の日には、各地から「正一位稲荷大明神」のハタを立てにやってきたという。「あるお婆さんは、願かけの後のオハタシ（お果たし）を、うっかり忘れたために渡辺家の稲荷様が夢枕に立った」という言い伝えも残っている。同家の渡辺文江さん（一九一〇年生）は、渡辺家稲荷の伝説を伝えている。「昔、伊豆島田の方で、夜な夜な提灯を提げたきれいな女が現れ、通りかかる地元の若い衆をだますという噂がたった。どうやらキツネが女に化けているらしいということがわかり、これを懲らしめてやろうと、先祖の市朗兵衛さんが鉄砲を持っ

て出かけ、しばらく待ちかまえていると果たして噂の女が現れた。市朗兵衛さんは、女の持つ提灯めがけて引き金を引いたところ、確かに手応えがあった。しかし、あたったはずのキツネは付近には見あたらず、市朗兵衛さんは誤って人を撃ってしまったのかと思った。それから七日七晩経った。撃たれたキツネが発見された。渡辺家では、このキツネの首を取ってきて、桐の箱に収め稲荷の社にまつた。渡辺家では、現在でも毎朝のように稲荷の社に温かいご飯とお茶を供えているという。

葛山の初午は二月最初の午の日に屋敷内の稲荷神社にハタを立てて祝う家が多い。ムラでは共有の稲荷社をまつて初午を行っている。

目一つ小僧

深良の南堀では、昔「晩方、一つ目小僧が山から降りてきて不幸をもたらす」といわれ、家では履き物を縁の下に隠したという。二月八日のことであった。こうした伝承は市域周辺でも多く聞くことができる。「一つ目小僧が散らかしてある履き物に判を押していく」などともいわれ、「この日ばかりはアガット(座敷の上がり口)の履き物を整理整頓したもの」と、伝えるところは多い。

この日を「目一つ小僧の日」と呼ぶことが一般的で、コトヨウカなどの名称では聞かれない。前記した葛山の田場沢の「ヨーカドー」と、次に記す須山の「ヨーカーゾー」の二例を聞くことができる。須山にはヨーカーゾーがおよそ二〇年くらい前まで行われていたという。「月の八日に旅立つ人は帰るまいぞよ九日に」などいわれ、毎月の八日に旅立つことを忌み、またこの日は何をするにもヤクビ(厄日)だとされていた。須山のヨーカーゾーは次のようだったという。「目一つ小僧が家の中に入って来られないようにメカゴを竹竿の先に掛け、軒先に立てる。そうしておく、目一つ小僧はカゴの目がこわいと言って逃げ去るといわれる。また、目一つ小僧はグミの木のおいが嫌いであるとい

われ、目一つ小僧が来ないように生のグミの木をイロリで燃やす。この日に下駄を外に出しておく目一つ小僧に判を押されるとか、取られてしまうといい、必ずこの日は履き物すべてをしまっておく。目一つ小僧に出会わないように外出をさける」(『須山の民俗』)。

目一つ小僧が意味するものは定かではないが、春先の農村に訪れて欲しくないものの象徴であるだろう。その対策として、メカゴを先端に吊るした竹の棒を軒先に立てかけ、目一つ小僧を追い返すという習俗が広まった。メカゴのたくさんの目が目一つ小僧を驚かすというのである。

3 三月の行事

ヒーナサ 地域の大部分が旧暦の三月三日から約一カ月遅れの四月三日にヒーナサンの節句を祝う中で、深良の上しやうの節句す、須、伊豆島田、二本松、麦塚むぎづかなどは新暦の三月三日となっている。ヒーナサン、すなわち雛人形を座敷に飾り、女子の成長を祝う家庭の年中行事であるが、その日取りは新暦で行う地区と旧暦のまま行う地区が分離してきた。それぞれの地区の生業の変化に関係するのであろう。

コンピラサン

須山田向の中村組のコンピラサン(金比羅さん)は旧暦の三月一〇日と旧暦の一〇月一〇日に、組の行事として行われている。かつて、コンピラサンは個人持ちであったが、後世になって、現在のよううに組でまつるようになったといわれる。当番は祭りの日までにケングモノ(献供物)を準備しておく。当日は神社の掃除を行い、参道入り口に注連縄しめなわを張り、のぼりを立てる。そして、組の者は神社に集まり、参拝する。お参りに来た子供たちには、ゴック(御供)と呼ばれる菓子が配られる。祭典終了後は、組の当番宅に寄り、「金比羅宮」の掛軸

を床の間に掛け、直会をする(須山の民俗)。

コンピラサンが個人持ちの神として屋敷地内にまつられていた例は水窪にも見られる。同地の関野さん宅では、戦後しばらくの間、コンピラサンの祭りをていねいに行っていたそうである。近所の子供たちが関野さん宅にお参りに来たので菓子などを配ったという。なお、現在はこの年中行事は行われなくなっている。

春の彼岸

春分の日を挟んで前後三日間を春の彼岸とする。彼岸は先祖の墓参りの日というところえ方が一般的である。寺へ行き、墓掃除をする。三日間の第一日目をイリ(入り)、二日目をナカ(中)、三日目はアケ(明け)と呼ぶことも普遍化されている。

深良では三日間それぞれ異なったものを作り、先祖に供える習慣がある。イリは小豆餡あじのぼた餅、ナカは普通の餅をつき、アケには団子を作るといふものである。「イリぼた餅にアケ団子」といわれている。

これが富沢になると「イリ団子、ナカまんじゅう(小麦まんじゅう)にアケ団子」というなど、地域による相違があるように見られるが、必ずしも厳密な地域差とは言えないであろう。それぞれの家庭による相違であるように思える。春の彼岸過ぎが農作業が本格的に始められる頃とすると多い。しかし、これにも地域差があり、須山の場合などは高冷地であるために「彼岸を過ぎてもまだ馬鈴薯を植える程度で、本格的な農作業は浅間さんのお祭り(四月一七日)を過ぎてから」といわれている。

ヨシダサンの

引き継ぎと祭り

毎年四月三日と四日をホンピとする市域黄瀬川東岸一帯(平松↓公文名・稲荷↓久根↓神山・岩波↓石脇↓佐野↓茶畑↓伊豆佐野↓麦塚↓二ツ屋ふたつやと回る)の村々のヨシダサン祭りは、その前月の三月二十八日を神輿(ヨシダサン)の受け渡しの日としている。すなわち祭礼当番となるムラの交代日であり、ヨシダ



写真3-33 浅間神社の春祭り(須山)

サンの神輿は翌年の当番となるムラへ引き渡される。

この日ヨシダサンは当番区の白装束の男衆に担がれてムラ内を回る。カベツ(家別)と呼ばれる神輿の巡行である。元来、ヨシダサンの勧請が江戸時代に流行した疫病の退散祈願にあるというので、きわめて重要な行事に位置づけられている。巡行する家々やムラの道沿いには「奉納 吉田神社」と書かれたのぼりがはためき、そここにオタビシ

ヨ(お旅所)が設けられる。ヨシダサンがムラを浄めて回るのであるという。こうして、ヨシダサンは引き渡し場所まで担がれて回り、引き継ぎ式を行って次の当番となるムラに渡る。

4 四月の行事

春祭りの始まり

まず、四月の最初の賑わいはヨシダサンの祭りである。また、市域各所の氏神社では春祭りを行うところが多い。四月中、市内のあちらこちらで、ヨシダサンの神輿をはじめいくつもの神輿が引き回され、各地のムラは春の祭りで賑わう。

浅間神社の春祭り 須山の浅間神社の春祭りは「浅間さんの祭り」と呼ばれる。四月一七日が祭りのホンビ(本日)である。この祭りで須山

は本格的な春になったという。前年の「秋の浅間さん」(十一月二三日)から「春の浅間さん」までを二年の大きな一区切りと見なしているから、

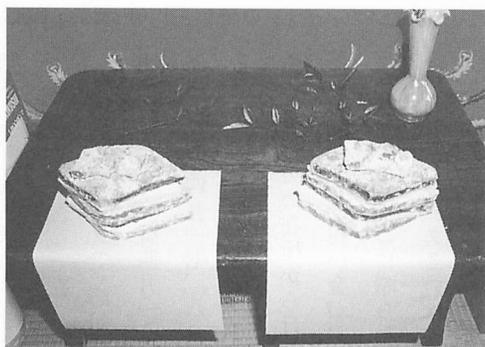
この祭りを迎えることによって本当の意味で冬が明けたと考えられている。また、カセギと呼んでいる冬の間の仕事の行李作り、炭焼き、山仕事等も「春の浅間さん」を期に終わり、本格的な畑仕事が始まるといわれる。したがって、須山ではムラをあげての大祭りとなり盛大である。戦前までは今以上に派手だったという。「春の浅間さん」がいかに地元で待たれていた祭りであるか理解できる。例えば、「青年団による地芝居、旅役者による芝居があり、また、三島や沼津あたりからもお獅子さんが来て、家々をまわり、お払いをした」(『須山の民俗』)というはなやかさであったという。現在も、祭りは十六日の宵宮から盛り上がる。当番区は朝から神社の清掃、参道の注連縄飾り、神輿の準備、神饌などの準備を行う。当番区内では神輿のオタビシヨに当たる家が神輿を迎える準備に忙しい。オタビシヨには氏子総代、区長、副区長、須山振興会などの役員宅があたる。夕方には、子供たちが桜の花で飾られた屋台を引き返し、若い衆による「シャギリ」が演奏される。一七日、ホンビは浅間神社で神主による祭典が執り行われた後、当番区に神輿が渡御とぎよされ、当番区内のオタビシヨを屋台とともに回る。この際演じられるシャギリは「まつばやし、ぎおん、かごまる」などの曲目で、宵宮の曲目とは異なる。神輿がオタビシヨに到着するたびに花火が打ち上がる。後、神輿が浅間神社に還り、須山生まれの女子が舞う「辻引きの舞」が奉納される。当番区内では盛大な直会が行われる。須山では次のようにいわれてきた。「シャギリの音が聞こえる頃、高地の須山も暖かくなり、桜が満開となり、畑仕事や養蚕の仕事に追われるようになる」と。

女の子の節句

五節句のうち、市域で行われている節句は「ヒーナサンの節句」と「端午の節句」である。ヒーナサンの節句は、市域の多くでツキオクレ(一カ月遅れ)の四月三日に行われている。「女の子のお節句」と理解され、雛人形を飾り、菱餅と寿司を供え、女子の成長を祝う行事となっている。特に長女の初節句(誕生



1



2

写真3-34 女の子の節句(須山)

- 1 段飾り
- 2 節句の餅

後初めて迎えるヒーナサン(節句)は盛大に祝う習慣が根付き、近年は華美にすぎると思える傾向がある。

葛山では、雛人形をヒーナサンと称している。初節句を迎え、ヒーナサンは嫁の実家から贈ることが多い。ヒーナサンのほかにも、座布団や毛布、おひつなども贈る。一方、ヒーナサンを贈られた側では、オカエシとしての雛祭り

が盛大である。オフルマイと称する宴会が開かれ、座敷にはヒーナサンを飾り、親類や近所の衆までを招いて披露

することが習わしとなっている。招かれた親類やモヨリでは祝いの品物か金銭を持ってオフルマイに出席する。節句のごちそうには、赤、白、ヨモギの餅をつき、寿司を作り、蕎麦は必ず手打ちのものが振る舞われた。昔は白酒も出たという。現在では、このオフルマイが町のレストランやパーティー会場で行われることも多くなったという。また、「ヒーナサンをいつまでも飾っておくと縁遠くなる」ということもしばしば言われ



写真3-35 アランバサンの祭り (小山町新柴・円通寺)

ることである。このように、「女子の節句」という色合いが強くなり、春先の農事を控えた重要な日という認識は、現在ではほとんど残っていない。

須山のオセック(お節句)は四月一八日に行われ、他地域とは異なる。

明治時代に、旧暦四月一七日の浅間神社の祭りと旧暦三月三日のオセックとを新暦四月一七、八日にまとめて行うようになったことが始まりだという。オセックは女子の成長を祝うものとされ、特に初節句が盛大である。「母方の在所からはヒーナサンが贈られる。仲人からは高砂の人形。親分からは祝い金が贈られる。良い婿が見つかるよう、男の子節句(五月のオセック)に贈られる天神が贈られる場合もあった。初節句の家は、三月三日、あるいは彼岸アケから雛人形を出した」という伝承が残る。同地区では、古くなった人形は、サイノカミサンに納め、サイトヤキの際に燃やすという。

アラシバサ 牛馬は運搬に耕作にと農家にとってはお欠きできない畜力として重用されてきた。したがって、ンマイリ 家族同様に暮らし、飼育している大切な牛馬の健康を祈願したり、また、死んだ後も丁寧に葬ったり、

供養したりという習慣が、古くから市域にはあった。

駿東郡小山町新柴の円通寺は、小山町、御殿場市、裾野市、三島市などの広域から馬の健康を祈願する寺として知

られ信仰を集めている。同寺の本尊は馬頭観音で通称「アラシバサン」と呼ばれ、四月一七、八日の縁日には古い馬の草鞋を納め、代わりに新しい草鞋やお札を買って帰り、それを既に貼って拝むなどしたという。

須山では戦前まで馬の「観音講」があり、旧暦の三月一八日に、現在須山食堂になっている場所にあった「観音堂」で、馬力の衆によって講が開かれていたという。地域での年中行事になっていた。アラシバサンマイリは牛・馬が自動車や機械に変わる直前の最近まで行われてきたが、現在では信仰も衰微している。同地区の坂田政一さん宅では、運搬用としての馬の飼育は、一九六〇、一年頃までで、以後は牛に代わり、一九七〇年頃から耕運機に代わったと伝えている。

牛・馬の飼育が行われなくなった時期とアラシバサン信仰の衰微、動力耕運機の導入時期は時期を同じくしていて、後者が前者と密接に関連していることがわかる。佐野の杉山家の場合、耕運機の導入がきわめて早く、一九六〇年代にはすでに水冷式の耕運機が使用されていた。地域の動力農業の走りと言ってもよいであろう。

5 五月の行事

五月五日

四月の末頃から地域の各地には五月のぼり用の柱が目立ち始める。柱の多くは杉などの木材の皮を剥いで作ったもので、現在一般的になりつつあるアルミのポールなどよりはるかに高い柱である。一軒の家の庭先に多い家では四本から五本、少ない家でも二本の柱がそびえ立ち、天気の良い日などは鯉のぼりのセット(矢車、吹き流し、マゴイ、ヒゴイ)をはじめ、景気の良い武者絵の描かれたのぼりなどがへんぼんとひるがえる。

鯉のぼりやのぼりは、男子の成長を祝う五月の節句の象徴として、嫁のサト(実家)や親類から贈られ、飾るものと



写真3-36 鯉のぼりととのぼり（下和田）

される。特に盛大に行われるのは、長子に男の子が生まれ、一年を経た初節句のときである。初節句の印は、のぼりの柱の先端につけられる杉の葉である。二年目以後は杉の葉の替わりに金色の玉がつけられる。

初節句の祝いを迎えた家では、五月五日の子供の日に、カネオヤや仲人、親類、隣近所の人などを自宅に招いて、武者人形などを飾り付けた座敷で、ごちそうや酒を並べてオフルマイを催す。この宴に招かれた人々は、それぞれが祝儀の品やお金を持って行くことが習わしである。五月節句は、四月三日の女子のヒナゼツクと対をなす形で習慣となっている。かつては五月節句を期に水田の仕事を始められたので、この節句が夏の始まりの一つの目安であった。

また、かつては五月五日にはショウブを風呂に入れてショウブユ(菖蒲湯)につかったり、ショウブを軒先のクサヤネ(草屋根、茅葺き屋根)に挿すなどのことも、行われていた。

五月五日に祭礼を行う神社がある。須山の蚕影神社はコカゲサンと呼ぶ祭りをこの日に行ってきた。コカゲサンは須山集落から大野原を通過して御殿場方面に向かう途中の山林の中にある穂見神社に合祀されている。地元では穂見神社とも蚕影神社とも通称しないで、この地をタカオサン(高尾山)と呼ぶことが一般的となっている。タカオサンは一二月一日が祭礼日となっている。

コカゲサンは養蚕の神と理解され、蚕の無事な成育と繭の豊穰をかなえてくれる神とされている。しかし、現在では養蚕も行われなくなったので、祝詞の中には五穀豊穰を祈願する文言を入れていくという。祭礼は須山の神主を依頼し、総代をはじめムラ諸役が総参加し、神事のあとに拝殿前にてお神酒で直会を行い、後に当番宅でごちそうを振る舞われる。かつて、このタカオサンの近くに射撃を行う場所があって、祭りのあとには射撃大会を行っていたというが、現在は射撃場は別の場所に移動し、そこではリュウソウサン(龍爪さん)をまつり、今でも射撃大会が開かれている。

終戦時を境にほとんど行われなくなった養蚕だが、かつてはコカゲサンの祭りを境にハルゴ(春蚕)の作業が始められたという。養蚕で得たお金でカツオを買うのを楽しみにしたという。

リュウソウサンの祭りは須山猟友会(駿東猟友会裾野支部須山分会)が主になり、龍爪神の石碑前で礼拝を行い、後に射撃大会となる。須山分会員は射撃大会終了後、直会を行う。現在龍爪神の石の祠は、十里木街道近くの射撃場入り口付近にあるが、かつては黒岳の登山道にあったものを一九六七(昭和四二年)に現在地に移転したものだという。

五月五日を種蒔きの日とするところは、市域では一般的である。ナガシロ(苗代)の種蒔き、オカボ(陸稲)の種蒔き、モロコシの種蒔き、サツマの苗さし、ハルゴのハキタテ等々が五日付近に一斉に始まった。

八十八夜

春分から日数を数えて八八日目を八十八夜という。旧暦の中にも雑節の暦注として古くから記載されてきているため、これの一般への浸透は普遍的であり、なじみが深い。「八十八夜の別れ霜」などといわれ、この日を境界に霜も降りなくなるといわれている。茶摘みが始まるのもこの頃であり、そのほかの夏の作業も始められる目安の日となっている。



写真3-37 夏越の祓
(平松・佐野原神社)

しかし、須山などの山間地と、佐野などの平地では気候も異なり一様に八十八夜を迎えるわけではない。その須山でも「八十八夜のお茶を飲むと長生きする」ということがいわれている。八十八夜頃の新芽が特別な力を持っていると信じられているためである。須山の一番茶は五月二〇日頃だという。

6 六月の行事

農繁期の行事

六月は市域各地区で田植えが始まるなど、農作業のもっとも忙しい月と

なる。したがって、ムラでも各家庭でもこれといった年中行事は行われない。この時期には、各地区で行われているのは、各種の講行事である。一日の二本松の念仏講を最初として、月半ばの葛山、深良、下和田、須山、上ヶ田での念仏講が開かれる。二四日には今里いまざとで岩船地藏尊の念仏講が行われる。そのほかの講行事では、淡島講あわしま(伊豆島田)、子安講こやす(下和田、富沢)、観音講、万神講(今里)などさまざまあるが、いずれも老人や女衆の集まりとされ、繁忙期の六月には影響の少ない月ごとの行事となっている。

そうした中で、月遅れで行われる七月三〇日の平松の佐野原神社と茶畑の浅間神社大祓式(夏越なごしの祓はらえ)は、氏子総出の行事となっている。佐野原神社では境内に茅の輪を作り、氏子がそれをくぐって厄を祓う。

7 七月の行事

雨乞いと

気温も高く湿気の多い七月は植物、作物の成長するときで、この時期の農作業は作物の成長を助けるた

日乞い

めに耕作し、作物の根には酸素を供給し同時に根本の雑草を取り除かなければならない。雑草も伸びる

季節なのである。

この頃の耕作をチューコー(中耕)と称し、陸稲、サツマ、モロコシなど畑作物の世話に忙しいときであった。

一方、水田では、田植えが終了し、一番草に始まる草取りが行われるが、田植え時期の繁忙さに比べれば楽なときに入る。そこで、小休みのマンガアライや農休み等が年中行事化され、農村に定着した。

また、梅雨の時期ではあるが、カラツユなどと称される極端に雨の少ない年もあったりすることもあって、この頃「雨乞い」行事も集中しているのである。以下、地域の七月の行事を見てみる。

七月は一日の今里の浅間神社祭礼で始まる。同じ日、須山浅間神社では富士登山開山式が、裾野市と観光協会の主催、須山振興会の助成で開かれ、市長をはじめ地区関係者が多数出席する。田植えも一段落し、夏の到来を告げる祭りとなっている。

天道念仏

地域の年中行事で、この月に顕著に多く行われるのはオテントサン念仏と呼ばれる「天道念仏」である。オテントサン念仏の日は旧暦を採用して行われている。旧暦の八日に行うところは、深良の上須・

南堀・上原・和市、葛山などである。天道(太陽)に農作物や果物などの供物を供え、日の出から日没まで念仏を唱えるものである。「梅雨時であり、雨が長続きしないように祈願する」といわれている。



写真 3-38 天道念仏 (千福)

公文名のオテントサン念仏は「区内の女の年寄り衆が集まり、午前六時頃から夕方の五時頃まで念仏を唱え、御詠歌を唱え、天の神様(日、月)をまつる」という。天道に願いをかける一方で、日照り続きでは稲作に影響が大きいから、そのような年は雨乞いが行われてきた。公文名のオテントサン念仏は、日照りの年には雨乞いの念仏であったという。

「雨乞い」では葛山・下条の行事が盛大で、七月二〇日に行われてきた。祭りは下条の四辻で、下条が主催し、愛鷹山の中腹にある祠までの道刈りは田場沢↓上城↓中村↓下条↓中里という順で当番制で行っている。「雨乞い」は一九六〇年前後までは頻繁に行っていたという。愛鷹山の八合目あたりにある祠が「タケノカミナリサン(嶽の雷さん)」といわれ、葛山の五つの区から必ず一人が出て、泊まりがけで雨乞いに行った。人々は蓑・笠・雨蓑てびさ・お神酒などを手に山に登り、雷神宮ののぼりを立て、一晚中火をともしながら、二手に分かれて「雨降らせたあまいなあ」「雷さまへのりゅうがんだあ」と、大声で交互に繰り返して祈願した。

七月中にはオテンノウサン(お天王さん)も地域の各所で行われてきた。天王社のある地区は葛山の上城・中里、石脇、水窪、麦塚、須山などであり、それぞれ地区の氏神社に合祀する形で鎮座している。石脇では天王祭は三嶋神社で行われている。かつて三嶋神社は「天王さま」と呼ばれていたが、後に事代主命、伊勢神宮、山の神などを合祀することによって神社名が今のようになったという。

各地区のオテンノウサンの祭日は七月一五日(葛山では一四日、一三日はオコモリがあるという)。各地区とも、昔は境内で青年団による相撲が行われるなど、オテンノウサンは盛んだったと聞くが、現在では昔ほどの賑わいがない。

8 八月の行事

地藏盆と地

域の夏祭り

八月の年中行事では盆が主になる。この月市域での盆は地区により日取りは相違する。深良の上須や南堀などは一日から三日にかけての盆が行われ、伊豆島田、大畑おほはた、千福せんふく、富沢などは一三日から一五日にかけての盆である。それぞれにツイタチボン(朔日盆)とか、ミョウジンサンボン(明神様盆)という呼び方があり、盆の行われる時期を区分している。

八月半ばのミョウジンサンボンは、ちょうどこの時期が三嶋大社の夏祭りと重なるための呼称であるが、三嶋明神の影響力が広くおよんでいたことを示すことであろう。

盆の日取りにつき、前記の深良地区では戦前までは七月一四日などの七月中旬や二四日付近で行われてきたものが後に現在のようなツイタチボンに定着したというが、こうした重要な年中行事の開催日の移動は田植えの時期の変化と密接に関係していた。すなわち農作業の機械化、動力化に伴い種々農作業技術の変革がもたらされ、そうしたことにより年中行事の時期とのバランスがとれなくなったことによるものであった。

盆行事と合わせて盆踊りや花火大会などの夏祭りの要素が加えられてきたことも近年の新しい盆行事の傾向といえよう。麦塚では、盆に何か楽しい「ふるさとの行事」ということで一九七七(昭和五二年)から始められ続けているのが「夏祭り盆踊り大会」である。前夜祭も含め二日間、やぐらを立て各戸名入りの提灯の下で盆踊りが行われる。



写真3-39 莊園寺地藏尊祭典 (御宿)

青年会や子供会の出店やゲーム大会、花火大会などもあり、年間でもっとも賑やかな祭りとなっているという。このほかに深良、千福などでも盆踊り大会が開かれている。

八月二三日から二四日にかけては市域各地の地藏堂で地藏盆が開かれる。深良の原地蔵尊祭典は区内の老人による念仏、西安寺住職を招いての祭典、子供相撲大会、盆踊りなどの諸行事が行われている。深良のほかに大畑の地藏堂の「地藏祭り」などが行われている。

二五日には深良上原の日蓮宗車返結社では「お虫干し」行事がある。上原には檀徒はないが、堂の管理運営をし、この日は日蓮宗中部宗務事務所から上人が出席し、「大曼陀羅」を先頭にのぼりを立てて行列を行う。

同二五日には佐野の浅間神社では合社祭が開かれる。ゴウシャサンと呼ばれる祭礼だが、これは明治末年から大正時代にかけて茶畑の各所にあった小社七社を合祀したことから始められた祭りである。合社された神社は「山神社」「舎護神社」「十二天神社」「駒形神社」「天神社」「八幡神社」の七社である。氏子総代をはじめ、区の代表が参集し神事が行われた後、子供相撲、のど自慢大会、盆踊りなどが開かれるなど、夏の大きな祭典として位置づけられている。

第3節 一年の生活



3



1



4



5



2

写真3-40 盆行事

- 1 杉を焚くムカエビ(下和田)
- 2 竹を焚くムカエビ(麦塚)
- 3 水路の淵に土台を作って迎える(公文名)
- 4 買い物に行く日の赤飯のむすび(千福)
- 5 送り盆(茶畑・大場川)

ミョウジン 市域の盆は、七月二四日頃のオジソウサンボン(地藏盆、今里ほかで)と八月一日頃のツイタチボンサンボン(朔日盆、元の泉村で)、八月一五日頃のミョウジンサンボンあるいはオマツリボン(三嶋大社の祭りの時期に行うため)というように、その時期はまちまちである。ここでは、いわゆる旧盆とも呼ばれる八月一五日前後の盆を中心に述べておく。

葛山の盆は八月一三日から一六日までである。盆に当たり、一〇日ごろから墓の掃除、盆道の整備、盆花を用意するなど、さまざまな準備が行われる。八月一三日はホトケサマ(先祖様)が家に来る日だという。各家庭では、盆棚を設け、寺の住職を迎える。盆棚を設けることを「ザシキダナを吊るす」といった。新竹でやぐらを組み、芋の葉、稲の穂で飾り、ナスとキュウリで牛と馬を作り、位牌を真ん中に据え、スイカなどの季節の果物や野菜を供えた。ホトケサンが来るので、ジョーグチではムカエビ(松明)を焚いて迎える。一四日は、ニイボン(新盆)のある家に年寄り衆の念仏が回る。かつては、この日ボンメシ(盆飯)、ボンガマ(盆釜)といって、子供たちが、ニイボンの家々を回って米を集め、その米でアサメシを作って食べる行事を行っていたという。八月一五日は盆の中心日であろう。この日を「ホトケサマが田畑を見回りに行く日」とか「買い物に行く日」という。盆棚の財布にこづかい銭を入れて「買い物に行って来て下さい。」などと言いつつ拝む。ニイボンの家では仙年寺(せんねんじ)の住職に来てもらいセガキ(施餓鬼)を行っている。また、かつては寺の境内で相撲なども行われたという。一六日は送り盆と呼ばれる。「ホトケサンが帰る日」だとされる。朝の涼しいうちに、佐野川にホトケサンを送る。マコモの上にナス、キュウリ、団子などをかたわらに供え、線香をあげる。「ホトケサンにお弁当持たせる」といい、芋の葉に供えた食べ物或少しずつ載せて川に流した。「盆の一三日に死ぬと、ホトケサンが帰ってくる日だから頭をはたかれる」といい、逆に「一六日に死ぬとホトケ

サンが嬉しがって車で連れていってくれる」などといわれる。

9 九月の行事

風祭り

立春から数えて二一〇日目や二二〇日目を「二百十日とか二百二十日」と称して風祭りとするところは多い。ちょうどこの頃が台風シーズンと重なり、襲来した台風による稲の被害が出る頃であるため、これを運良く避けることができるようにと祈願する祭りである。この時期の稲は穂をつけ、穂先が重くなる頃でもあり、台風のような激しい風雨には耐えられない場合が多い。しかし、実が完全に成熟している状態ではないから、ここで稲に転倒されては非常に困る。したがって風祭りとなるのだが、台風に対する実質的な対策は従来なかったのである。

近年になって、稲の品種改良が進み、風に強い、倒れない稲の品種が栽培されるようになった。すなわち、丈の低い稲である。また、かつてのように穂先にたくさんの実をつけさせず、分けつの多い稲の品種も出た。稲の品種改良が思わぬ影響をおよぼしたことは、稲の丈の低さによる正月飾り作り、注連縄作りなどへの影響であったといわれる。つまり、あまりにも稲が短くなったので藁の細工がしにくくなったというのである。このように、従来とは異なる条件下ゆえであろうか、各地において、かつてのような風祭りが行われなくなったり、変化した地区が多いのである。葛山の田場沢では、青年団が集まり、薬師堂の前に土俵を作って相撲をとったというが、現在は行われていない。また、その薬師堂も、今では地区公民館となっている。この時期の同地区では、ソバの種蒔きとバンシユウ(晩秋蚕)のハキタテの時期が重なるなど、きわめて繁忙期であった。

伊豆島田では、昔は、風祭りにはムギカラで大蛇を作って黄瀬川に投げこんだという。



写真3-41 月見(茶畑)

深良の風祭りは「二百十日の風納め」といって、部農会員を中心に簡単な祭りが行われている。この日深良は同地区のヨシダサンの祭礼日である。

深良のヨシダサン

九月一日は深良のヨシダサンの祭礼日である。祭り当番は深良を天田上と天田下に二

分して交代で務める。天田上は新田、原・上須、上原・上原団地が組み、天田下は切り久保・遠道原、和市・南堀町震、とさらに三分割されているので、結局は上下二地区の六組が六年に一度の順番で務めることになる。

ヨシダサンの祭りと言えば、市域黄瀬川東岸一帯の広域ヨシダサン信仰が知られるが、深良はこれと祭礼の期日を異にして行われる。しかし、疫病退散を祈願する祭りである点は変わららず、ヨシダサンの神輿でムラの中を淨めて回ることが中心の祭りとなっている。祭りはしだいに簡略化の傾向をたどり、ヨシダサンの神輿の受け渡しも軽トラックなどを使用するようになり、当番区と各組の役員、神社総代などが集まって直会ですませている。かつては、家庭ではホウソウマンジュウ(抱瘡まんじゅう)なども作ったと聞くが、今日は見られない。

月見

「十五夜」は旧暦の日付で行われるため、新暦の日付に直すと九月の行事となる。「お月見」あるいは「十五夜さん」という呼び方が一般的な呼称である。また、「十五夜に晴れなし」といわれるように、この日が曇ったり雨が降ったりすることの多い悪天候の日であったといわれている。

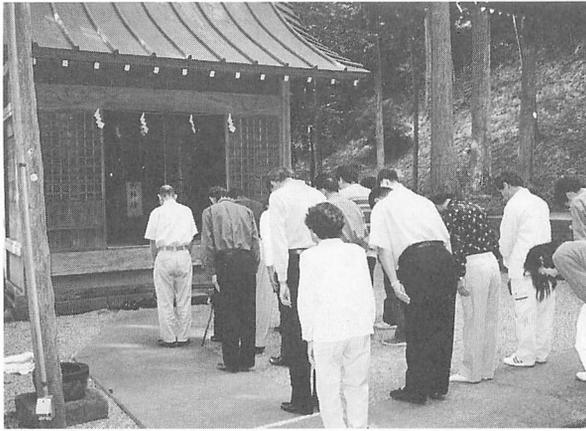


写真3-42 下和田のヨシダサンの祭り

月見はかなり多くの家庭で現在も盛んに行われる行事となっている。月見団子をはじめ、サトイモ、シヨウガ、サツマなどの秋の収穫物と季節の果物、ブッキに盛ったご飯・煮物が、ススキやケイトウ、秋の七草などの花とともに、月が見えるようにと、縁側に供えられる。「十五夜さんに供えるものはきれいなもの、初物」といわれ、サトイモなどは初めて畑から掘ってきたものをよく洗って供える。ブッキにご飯を高盛りにするのは、「鼻の高い良い子ができるように」(茶畑)とのことだという。この夜、ムラの子供たちは近所の家を回って、供え物をこっそり盗るなどの遊びをしたというが、現在では行われず伝承のみが残る。

また、かつては十三夜(旧暦の九月一三日で、新暦の一〇月中、下旬頃)、二十三夜と、三回の月見が行われてきたという。今でも市域全域で「片見月は良くない」といい、十三夜と十五夜は必ず行われている。二十三夜が行われなくなったのは、「この夜の月は深夜になるため、早くすたれた」(葛山)などの理由であるという。

そのほかに、「十三夜にはすぎ芋、十五夜にはきれいに洗った芋」、「十五夜の芋をていねいに洗えば良い子が育つ」、「十五夜をやったら十三夜も必ずやるものだ」などが一般的にいわれている。また、「(新暦の)一〇月に入ってからの十五夜はやるものではない」とか「彼岸の最中の十五夜はやるものではない」などの禁忌も伝えられる。

下和田のヨシダサン

下和田のヨシダサンの祭礼日は昔から十五夜の日と決まっていた。したがって「ヨシダサンは月をまつる」とか、「ヨシダサンと十五夜は一緒」などの伝承を聞く。いつからどのように伝えられたかは

定かではない。現在では、ムラで話し合せて、祭礼日を十五夜に一番近い祭日か、あるいは日曜日ということに決めたという。

下和田のヨシダサンは同地区の氏神社、浅間神社境内にまつられていて、戦後しばらくの間は非常に賑わいのある祭りであったという。参道には夜店が並び、境内にあった土俵では若い衆の相撲が行われ、北駿や沼津などからも力自慢の参加者があったという。しかし、今では昔の賑わいもなく、ムラの役員、当番地区の人々による参拝と、その後の直会で終わっている。

地域の黄瀬川東岸一帯で広く行われているヨシダサンが疫病退散の祭礼であるという例に対して、下和田のヨシダサンは祭日といい、諸点においてきわめて異例のヨシダサンであると言える。

10 一〇月の行事

稲の収穫と祭り

一〇月は稲の収穫の時期である。刈り入れ、脱穀、粃すり等の稲の収穫調整作業が忙しく続く。特に最後の粃すりでは、夜なべで行うなど繁忙をきわめるときである。しかし、一方で嬉しく、

華やかな作業であった。

かつて、粃すりはカラウスを使用して行っていたために人手も多く必要としたから、近所がお互いに共同で助け合う作業となった。また、ムラの青年たちも手助けに回る。

れば、夏の間の田や畑などの野良仕事に対して、副次生業的な意味合いを持ついわば冬のカセギの季節になったということがある。

同じように高地の下和田でも、やはり浅間神社の秋の祭典が一月二三日に盛大に行われ、これをもって、ほぼムラの行事が終了するとされる。

これらのほか、深良神社でも新穀感謝祭が行われ、この日に新しい伊勢神宮のお札が、深良地区の全戸に配られる。正月の神棚に飾るためのお札である。

以上のように、市域では、一月の下旬に入り急速に冬じたくが始められるのであった。以下、次のような行事が見られる。

七五三

一月一日は七五三。男の子も女の子もそれぞれが成長を祝い、氏神などに詣でる。最近では三嶋大社にまで行って、参拝し、祈禱を受けるといふ例も少なくないようである。また須山の田向では、三歳と九歳の男の子と女の子が権現に参拝するという。しかし葛山のように氏神と三嶋大社と両方に参るといふ例も近年は多い。三歳の祝いときは嫁の実家から着物が贈られ、子供の家では赤飯を作り、カネオヤや実家、近所に配る。

エビス講と亥の子のぼた餅

エビス講には旧暦の一〇月二〇日が当てられるので、新暦の一カ月遅れという日を選び、たいいてい一月二〇頃に行われている。

エビス講は商店の行事という認識が一般的である。この日には子供たちは佐野の方の商店まで出かけて、ミカンをもらったという思い出を多く聞く。

須山では、家庭で、普段まつてある棚から「エビスさん」を下ろして、台の上に据え置き、丸ダイコン、尾頭付

きの魚、オコワ、蕎麦、一升榊トウモロコシに入れたお金などを供えた。葛山では、俵の上に「エビスさん」を据え、ダイコン二本と尾頭付きの魚とお金を供えた。前日の晩には蕎麦を供えたという。家では尾頭付きの魚で赤飯を食べ、子供たちは商人の家にミカンをもらいに出かけたものであったという。

葛山には、「亥の子のぼた餅、やったり、取ったり」といい、かつて旧暦の一〇月の亥の日にぼた餅を作るという習慣があったというが、現在はほとんど行われていない。須山でも戦前くらいまではぼた餅を作って近所に配ったりなどしていたが、やはり今は聞かれなくなっている。

12 一二月の行事

カービタリ

一二月には中旬を過ぎると各ムラや家庭では正月準備が始められる。中旬前には高尾神社祭典や秋葉神社祭典がムラをあげて行われ、これらの神社をまつる地域では、この祭りがすまないと正月が迎えられないという。また、このほかに、淡島講、子安講、観音講、念仏講、薬師如来講などの各種講もいつもどおりに開かれる。

一方、かつては一二月一日に行われていたというカービタリ(川浸り)は、現在では行われなくなった。伝承さえも消えかかっているのが現状である。須山には「師走朔日をカービタリと呼び、ぼた餅を作って祝う慣行が戦前まで行われていた」(『須山の民俗』)という、かつて行われていたことの報告例がある。葛山にもカービタリの伝承例がある。

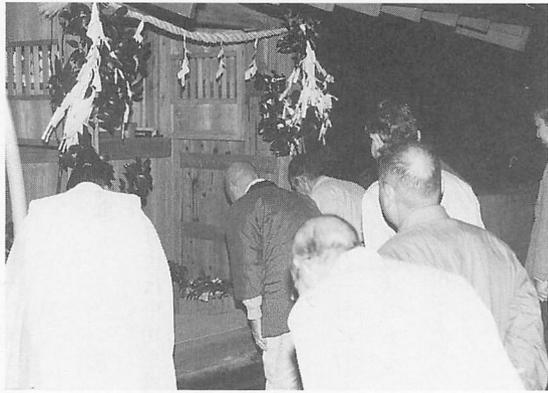


写真3-43 高尾神社祭典（深良）

高尾と秋 高尾の祭りを一年の最後の祭りとして位置づけているところが多い。一二月一日、深良地区では町震、切久保で高尾神社の祭葉の祭り

りがあり、須山では穂見神社で行われる祭典が「高尾さん」と呼ばれている。深良町震の高尾神社境内では、早朝、役員揃っての拝礼、直会を行って解散という非常に簡単な現在の祭りであるが、これが「高尾さん」である。かつては地域から多くの人々が参拝に來たので境内でコマンザライ（熊手）やバケツなどの日用品を売ったこともあったという。「高尾さん」は商売の神ということが伝えられる。このほか、盛大に行うことで知られているのは公文名と稲荷地区の高尾神社祭典である。神社は同地区の氏神社の鹿島神社境内に合祀されている。

秋葉山は火伏せの神として広く信仰を集めている。市域にも秋葉神社をまつり、秋葉講を行っている地区がいくつかある。深良の切久保・遠道一二月一五日が祭典日である。また、富岡地域では、金沢かねざわや葛山で一五日に開かれる秋葉講が見られる。

原・和市や下和田には秋葉神社があり、ムラの代表が参詣してお札をもらって帰り、ムラの各戸に配る。代参人は当番制で決められ、お札をもらってきたその晩に講を開くことになっている。葛山の場合、かつては代参当番の家が講の宿となったが、現在は公民館が宿に当てられている。

正月準備

一二月も中旬過ぎからはさまざまな正月準備が進められる。正月が極めて重要な行事として位置づけられていたためである。各種の、集中する正月準備が、昔からそれほど様変わりすることもなく家庭やムラで行われている。

ススハライ(煤払い)は、家族総出で丸一日をかけて屋敷内や家屋の隅々までをきれいにする大掃除のことで、それぞれの家庭の暮れの年中行事となっている。家中の全部の畳を上げてオモテと呼ばれる主屋前の庭に出して陽に干したり、竹筐で作った払い箒で天井の煤を落としたり、この日ばかりは普段できないようなところまで掃いたり拭いたりして清めるのである。最も重要なススハライの場所は神棚である。年神を迎えるためである。深良遠道原の羽田家では、神棚の掃除がすんだあとに「奉斎大年神鎮護」と書かれたお札を神棚に納める習わしだった。また、深良村だった時代には、役場の衛生係が来てススハライのすんだ家を検査し、ススハライずみの札をトンボグチ(玄関)に貼って回ったことがあったという。このように正月を迎えるための重要な行事であったから、ススハライを行う日も暦を見て仏滅を避けるなど、日の吉凶にも気をつけて行って来た。しかし、何よりも天気が良い日でないといけない行事だったから、晴れた日に行うことが優先された。ススハライがすみ、ダイコンやサトイモ、団子を入れたダンゴジル(団子汁)が作られ、これを家族で食べるのが習わしであった。このときに作られる団子はススハキダンゴと呼ばれた。各家庭で行われるススハキに対してムラごとくに神社などで行われる大掃除をオオバライと呼びムラの年末の年中行事としている例が見られる。一二月二五日に深良神社で行われるオオバライ(大祓)はムラの年中行事となっている神社の大掃除の日である。各地区(町震・南堀・和市・切久保・遠道原・舞台団地・柳端^{やなぎはた}団地)の区長と各神社総代が参加し、神社や境内を掃除し、そのあとに伊勢神宮の幣束各種をもらいうけ、これを区内に持ち帰って各戸に配る。同



写真3-44 正月準備のお飾り作り
(葛山)

日、それぞれが持ち寄った古い幣束は、神社内で焼却する。このオオバライの日が神社当番の交代の日とされている。

これ以外の正月準備として、正月飾り作りや餅つきなどが大晦日まで続く。

お飾り作り
現在では市域でも他人が作ったお飾りと餅つきを店で買って飾るといふ家庭が増えて

いる。正月用の注連縄の飾りが、雑貨屋、スーパーマーケットなどでも販売されるようになっていく。

ごく近年までは、注連縄などは各家庭がそれぞれ手作りするものとされていた。「トシガミサン(歳神様)の飾りだけは自分で作るものだ」(深良南堀、大庭敬一さん)といわれるように、それは当然のことだったのである。大庭家ではさらに「ウラ(俺)のシロ(城すなわち家)はダイダイ(代々)にユズリハ(譲ることができ、繁栄する)」と言い伝え、お飾りに添える材料の意味を語り伝えている。

お飾りの材料は、新葉、ユズリハ、ダイダイ、ウラジロ、オシメ(御幣)などである。ただし、ホカエ(外家)に飾るお飾りにはダイダイやユズリハを省いた簡略なお飾りが使用される。また、玄関用の飾りに稲穂をつけたり、宝船型に作った豪華なお飾りも見ることができ、比較的新しい傾向だと思える。

お飾りの基本形はワカザリ(輪飾り)と称されるもので、藁をない、輪型に作られる。飾る場所はトンボグチのほか、

マヤ(既)、納屋、便所、井戸、稻荷社、墓地など屋敷内外各所である。家の中では歳神棚、荒神こうじんなどの神々に飾る。

お飾りを飾る場所は家々によって異なるが、たいていの家で一〇カ所を超える家屋内の各所に飾ることが習わしとなっている。佐野の杉山家では、床の間、神棚の大神宮・歳神、茶の間のエビス・大黒、勝手場の荒神、屋外では納屋、便所、井戸などの神にお飾りを飾り、お供え餅を供えることが習わしとなっている。

正月のお供え餅や雑煮で食べる餅は暮れのうちについて用意しておくものとされ、餅つきは正月直前の大仕事であった。

餅をつく日は「縁起の良い日」が選ばれるために、日の制約があった。クンチモチ(九日餅)ということをおぼろしく習慣がある。九はク(苦)に通じるので特に嫌われ、すなわち一二月二九日には餅はつかないというのである。したがって、たいてい二八日か三〇日が餅つきの日とされることが多い。イチヤモチ(一夜餅)も好まれない。すなわち大晦日になって餅つきをすることをいい、お飾りの「イチヤカザリ(一夜飾り)」と同様に、土壇場になってバタバタと正月準備はするものではないとされる。餅つきのすんだ白は注連縄を締め、ニワ(土間)に据えて白神として正月中まつることもあったが、最近では行われなくなっている。

深良上須の勝又家には、正月用の餅つきの際、餅をつく者(たいていの場合が戸主)はアキノカタ(恵方)に向かって餅をつくという言い伝えが残っている。歳神の来る方向(恵方)を暦で調べて、その方角に向かって餅をつくというものである。こうした習慣も正月の餅を重要なものとしてとらえていることを物語るものと言えよう。

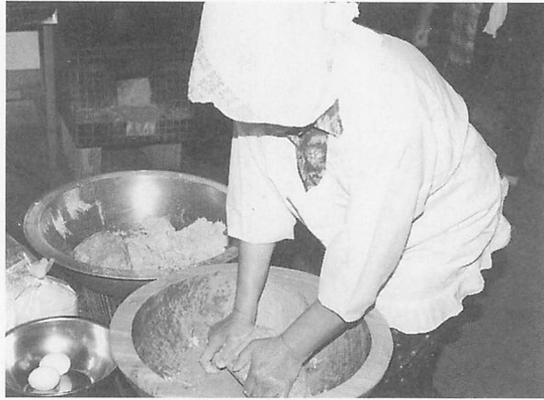


写真3-45 蕎麦作り（葛山）

大晦日の ススハライや餅つき、お飾りの飾りつけもすんだ大晦日は、
過ごし方 落ちついて新年を迎えるための「年越し」の日である。

一月三十一日の夜を「年越し」と考えることが一般的になっている。一夜明けて「年齢が一つ増した」とは、近年までいわれてきたことだったが、最近では満年齢を数えるようになり、大晦日で「年を取った」とはあまり言われなくなっている。「年越し蕎麦」はほとんどの家庭で、習慣として食べる。

地域の食生活において、蕎麦が占める割合は大きい。かつて農家では、ソバの栽培が盛んだった。したがって蕎麦粉は自家製であった。蕎麦は日常にも食べられたが、祭礼日のオフルマイや節句、祝言などのハレの日にも必ず食べるものだったという。市域で昔から、オフルマイで出された蕎麦は「せめて蕎麦くりゃあ、食っていけ」と言われたように、なじみの深い食べ物だったのである。

蕎麦つゆには、ニンジン、シイタケ、鳥肉を入れた醤油汁と、黄瀬川で採れたモズクガニでだし汁にしたカニジルがあったが、カニは季節物でもあり（ソバの花が咲く秋頃といわれる）、年越しはニンジンの蕎麦つゆだった。

大晦日に、正月三が日分の「お雑煮」を作っておく家もあったという（深良）。正月はなるべく手間がかからない方が良くとされた。また、前日についた餅も四角に切ってモロバコに入れて置くことも大晦日の仕事であった。

女衆(主婦)がクチトリ(お節料理)を作った。きんとん、ようかん、オヒラ用の煮物など。煮物はゴボウ、ニンジン、こんにゃく、サトイモ、昆布などを煮染めたもので、こうした野菜は必ず奇数の数だけ使用したという。偶数は嫌ったという。

大晦日には子供たちや家族の着物や、箸・茶碗などを新調したという。特に子供たちには下駄、足袋、股引、シャツなどを新しく買い揃え、眠っている枕元に置いたものである。

十里木の餅 餅はハレの食物として正月には欠くことのできない重要な食べ物であるが、これを正月にまったく用なし正月 いないところが市域にもある。

十里木では昔から正月の餅をつかないし、当然食べることもしなかった。餅のかわりに米の粉を練って細長くし、それをふかしたコメダango(米団子)を雑煮にして食べる。餅は一月一三日頃について、ニバンショウガツに食べる。なお、餅なし正月の由来として「幕末、水戸の侍がこの地で首を切って自害した。地元須山ではこれを供養するため殉難三士の墓を建て、以来、正月の餅を作らなくなった。今でも墓をオクビサン(お首さん)と称してまつる」という伝説が伝えられている。

(二) 一年の衣生活

1 衣生活と四季の変化

野良着と 衣生活は季節や作業に合わせて変わる。四季のうちでも、特に夏と冬で、衣生活の相違が大きい。すなわち、夏の暑さと、冬の寒さ対策としての着る技術や衣料に相違が現れる。また、衣料分類に普段着と晴れ着

図表3-79 茶畑の農耕暦と年中行事等

6月中旬		5月中旬		4月中旬		3月中旬		2月中旬		1月中旬		
上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	上旬	下旬	
田植え	代掻き	苗代	種もみ(塩水選)									稲
								(竹伐り)				竹切り、麦、サツマ
								(麦)				ツマ)
		五月節句(5日)		彼岸				節分、初午				年中行事
				ヒーナサンの節句(3日)								(祭礼等)
				ヨシダサン(3日)		ヨシダサン引継(28日)		弘法大師縁日		大山講		山(農耕儀礼)
										不動講(毎月28日)		初山(4日)
										山の神講(17日)		ウナイゾメ(田打ち11日)
										金比羅神社例祭		サイトヤキ
												柿の木たたき
												ヤツカガシ
												カチキ休み
												八十八夜

第3節 一年の生活

12月中旬	12月上旬	11月中旬	11月上旬	10月中旬	10月上旬	9月中旬	9月上旬	8月中旬	8月上旬	7月中旬	7月上旬	下旬
		籾すり	脱穀	稲干し	稲刈り					ウンカ防除		除草 一番草取り 二番草取り 三番草取り
← (竹伐り) →												
(麦) →												(サ)
		エビス講(旧10月20日)		十三夜(旧9月13日)		彼岸	十五夜(旧8月15日)			盆(1日〜3日)	七夕	
正月準備(ススハキ、餅つき、お飾り作り)												
日、大祓い(31日)	オタキアゲ(浅間神社31日)			浅間神社例大祭(15日)			山の神講(17日)	合社祭(25日)				夏越の祓(30日)
							風祭り			七夕を田に立てる	マンガアライ	農休み



写真3-46 アネサンカブリ (葛山)

いう分類があるが、日常の生活の中で着る衣料と、そうでないときの衣料にはかつて明確な相違があった。つまり一般的に言われる普段着とハレギ(晴れ着)の区分である。農村を主体としてきた市域では普段着はノラギ(野良着、すなわち仕事着)と称され、晴れ着は野良着と区別されてモノビの着物などといわれてきた。以下、季節、気候の変化に留意しつつ、野良着と晴れ着について述べる。

野良着は 野良着は野良(田や畑)で着ることからの呼称であ

普段着 り、いわゆる普段着である。

大部分が農村地帯で占められている市域に居住する人々の生活は、水田や畑、山林などでの野良仕事の日々が主であって、そのような野良仕事で着たり、つけたりする衣料が普段着であり、それは野良着と呼ばれてきた。野良着はあまりにも日常的であるゆえに、あらたまって普段着などと言うことはなく、野良に着て仕事するときの衣料だから野良着と呼ぶことが習慣となったのであろう。

男の野良着は、春から夏にかけて緋かすりのキモン(着物)が上体で、下体はモモヒキ(股引)が一般的だった。履き物にはジョウリ(草履)、頭には鳥打ち帽子か麦藁帽子、夏の炎天下や雨降りの日は茅で編んだトンボガサをかぶり、背には蓑や蓑座を着たものであるが、これも野良着と言えるだろう。足のすねに巻くのはキャハン(脚絆)かマキキャハン(巻脚絆)で、手にはテッコウ(手甲)だった。ただし、キャハンをつけるのは山仕事の際などに脚を保護する必要がある

る場合とされた。下着には六尺ふんどしを下体に、上体には木綿のシャツであった。これが冬になるとキモンの上に裕あわせのハンテンや袖無しのチャンチャンコをかさねて着た。

女性の野良着もキモンが主である。ナガギモン(長着物)を端折って作業を行った。下着には、上体にハダジュバン(肌襦袢)、下体はコシマキ(腰巻き)だけであった。頭には手拭いなどをアネサンカブリにかぶるのみで、足にはジヨウリを履いた。また手にはテッコウをつけた。

晴れ着

野良着と呼ばれる普段着に対して、モノビなどに着る衣料を晴れ着と称することが一般的になってはいるが、晴れ着という語彙が昔から市域の言葉として定着していたかという点になると疑問である。むしろ「モノビに着る良いキモン」(モノビの着物)とかヨソユキ(よそ行き)などと言ひ、普段とは異なる特別な日に着る衣料を指したものであり、後になって晴れ着という呼称が使われるようになったのではないだろうか。

モノビであるが、市域では次のような日やとき、あるいは行事において、あらたまつた衣料を身につける習慣がある。年中行事では正月、盆、ムラの祭礼等で晴れ着を着る。家族や自分の通過儀礼の各種の祝いごとにも大切なモノビとして考えられている。誕生日もなく着る産着、七五三、入学式、成人式などの成長期の祝いごときに着る衣料、祝言の婚礼衣装等々が人生儀礼上の晴れ着と言えるであろう。また、このような祝いごとの行事に参列する親族なども礼服と称する特別な衣料を着る。これも晴れ着と言えよう。市域において晴れ着がどのような場合に、どのようなものが着られたのかということについて、次のような須山の報告例がある。

「正月や祭りのときには、メリンスや銘仙を着る者もいるが、木綿の緋等でもそうしたモノビにおろすことが多い。盛夏に細など着て出かける人は、オダイサマ(財産家)でなければ見られなかった。男は外出というと縞や格子の着物

に角帯や兵児帯をしめて、中折れ帽やカンカン帽をかぶった。男は下駄だったが、女は普通の下駄の他に莫莖つき下駄やフェルトの草履ぞうりを履く者もいた。又白足袋の他にベッチンの足袋を、祭りや正月用に御殿場で買い求める者もいた。女はもちろんだが、男でも、戦前は外出といえは着物で、服を着て外出する者は軍人と役人くらいであった。」

2 衣料の調整

繊維の調達

衣料調製にも、糸になる原料を確保すること、原料から糸をとること、その糸を染めること、染めた糸を布に織ること、着物に仕立てることなど種々の段階がある。

まず、糸を作るための原料を採集したり、栽培したり、飼育したりすることが第一段階としてある。採集は繊維となるクズ、アサ、フジ、ヤマユなど山野に求めることであるが、現在となつてはこうした古代の繊維の求め方を伝える者はほとんどなく、聞き取り調査は不可能である。栽培は綿の栽培が考えられるが、これも少ない。

もっとも最近まで行われていたのは蚕の飼育である。すなわち、養蚕は明治期以来の国策もあって、たいいていの農家が蚕を飼育して繭を取っていた。しかし、農家が行っていた養蚕は生業としての養蚕であり、目的が繭の出荷にあるためで、家庭の衣料を作り出す目的で行っていたのではなかったから、出荷後のクズマユ(余剩繭)を利用するくらいの補完的な衣料調製であった。しかも、クズマユとはいえ、作り出される糸は絹糸だったから、家庭用の衣料材としては一般的とは言えなかったのである。「クズマユが出たから、主人や子供の着物用にする」という程度である。すなわちヨソユキと呼ばれる晴れ着を織るくらいがせいぜいであり、これも満足できるほどの調達量とは言えない。

一方、普段着としての衣料材料は、化学繊維が出てくるまでは大部分を綿糸が占めていた。綿糸は商店で購入する

ことができたため、必要に応じ、これを求めて使用していたようだ。市域では「昔は小山の紡績工場から糸がヤミで流れてきたので買って使用した。」という話が伝わるが、これもかつての綿糸の流入ルートと言えよう。

農村の女性と イトとハタ

イト、ハタ知らなきや嫁にも行けない」「ハタもよく織る、田もよく植える、三十三把の稲も扱イトとハタ く」「ハタ一反おろせば一人前」などと言われるなど、イトとハタに象徴される生活の衣料調整は女性の仕事と見なされてきた。

イトの調達ができたら次はハタである。上記の言葉は市域で昔からいわれてきた農村の女性の一人前の基準である。かつて、農村の主婦たちはイトがとれて、ハタが織れて一人前である、と言われたものであるという。

ハタゴ、すなわち織機は、家庭の衣料を補うための道具として、ほとんどの農家に備えられていた。ハタゴを使うのは主婦。女の道具であった。ハタゴは大きな道具であった。家の中かなりの据え置く空間を必要とした。ハタベヤ(機部屋)と呼ばれる特別な女の空間を備えていた家もあったというが、多くの場合、エンガワ(縁側)がハタゴの置き場所になっていた。

ハタゴの種類はタカハタ(高機)。いわゆる腰掛けて織ることができるハタゴで、進歩したハタゴだった。それ以前に使用されていたハタゴで、織り手が床に尻を下ろし、自分の腰で縦糸をひっぱりながら織るジバタ(地機)については記憶している人は少ないが、昔はあったという伝承は残っている。近年までタカハタで織っていたという富沢の服部さんに聞いた話は次のようである。服部カツさん(一九〇〇年生)は深良から嫁に来了。深良では「オダイヤ(大百姓)」の松井家に奉公し、そこでハタをおぼえた(習得した)。ハタが好きだったから、嫁に来てからも、たくさんハタを織ってきたのである。次のように語る。「マユ(繭、養蚕のこと)をやっていると、たくさんの二等繭が出た。ク



写真3-47 もんぺ
(茶畑・仁科洋品店)

縞模様は、縞本を自分用に作り、男の子には茶と白、女の子には赤い糸を入れて織った」

農家の主婦がハタゴに向かうのはたいてい雨降りの日か、子供たちが寝静まってからであったという。ハタはあくまでも個人的な生活であり、ハタを専業とする女性はいなかったようだ。それにもかかわらずハタと女性のかかわりは深く、ハタゴが不要になったから捨ててしまおうということとはなかった。前記の服部カツさんは、「歳とってハタを織らなくなってから、自分が使ってきたハタを処分しなければならなくなったときは、涙が出るほど悲しかった」という。

もんぺの流行

女性が野良仕事などの作業を行う際に履く衣類をもんぺと呼ぶ。もんぺの流行は比較的近年のこと
で、それ以前、女性はデロッタ(泥田)に入って行う田植えのような野良仕事のとときでもキモン(着物)を着て田に入り、せいぜいシリッパシヨリ(尻端折り)をする程度の姿で作業していた。したがって、もんぺのよ

ズマユといった。出荷できない不良品で、家族の着物の糸に使った。クズマユは鍋で煮て、ザグリ(座繰)で糸を引き出し、ヨリグルマ(撚糸車)でヨリをくれた。ヨコイト(緯糸)はクダ(管)に巻き、ヒ(杼)に入れた。タテイト(経糸)は一反分(二八尺)をヘダイ(整形台)にかけた。アヤ(綾)をこしらえ、タテイトをオサ(箆)に通してハタを織る準備ができた。クズマユでは家族のヨソユキを、買った綿糸では子供の普段着や布団皮を織った。織物の

うに足二本が別々に包み込める衣類は画期的な形態と言える。寒さをしのげる点、着用に手軽で便利な点、そして何よりも風俗上安心できる衣類として女性に大歓迎を受けて流行した。

もんぺが市域に流行する以前、キモンのほかにもんぺの基本形となるような衣類がほかにあったのだろうか。須山におけるカルサン着用の調査報告がある。「現在七〇代から八〇代の話者の祖父の代には、(男は)筒袖の長着を着て、下はカルサンを履いていたが、父親の代くらいになると、カルサンを履く者は、ごく少数になったという」(『須山の民俗』。すなわち、一九〇〇年代くらいまで、男が作業に履く衣類、カルサン姿が見られたというのである。カルサンの履き方は二本の足を別々に通すようになっていて、そのあとから前身と後身を合わせるように身体を巻く履き方で、後に流行したもんぺとほぼ同じ形、履き方である。この、男のカルサンがもんぺの原型であるという話しは伝わる。

市域で女性がもんぺを履くようになったのは「グンニャー(山梨県郡内地方)の女性たちの真似」が初めて、市域の女性たちにはもんぺを履くことにながりの抵抗感があったという。戦後になって、陸軍の演習場が米軍に接收され、女性が危険であるという噂が流れてもんぺが履かれるようになったという。もんぺは一度履くと、冬は暖かく働きやすく、手放せなくなったと伝えられている。

深良から伊豆島田へ嫁に來たという瀬戸みどりさん(一九一七年生)は、女子青年の頃、自分で半反の布を使って緋のもんぺを作っている。その当時、年寄りたちはもんぺ姿を見て「女がズボンをはいたみたいだ」と言って、笑ったという。当時はまだ店で売られていなかったのであった。瀬戸さんは、「自分はオタイコ(帯の結び方であるが、着物のことを指す)で田植えの田に入った最後である」という。その後、もんぺになったという。

こうして、市域内でももんぺは女性の作業着として定着したが、当初のもんぺは女性たちが自ら工夫、改良して手

作りしたものであった。その後、既製のもんぺが衣料品屋等で売り出されるようになり、彼女らはこれを求めた。もんぺは女性衣料の既製品の初めであるといわれる。

3 衣生活の知恵

イトコドリ

イトコドリということが言われる。すなわち、古くなった衣類の作りなおしであり、リサイクルによる利用である。前記してきたように、かつての農村における生活は大部分が女性の手により細々とまかなわれてきたものであり、数少ない晴れ着はきわめて貴重な財産であった。現在のように古くなったから捨てるということは全くなかったことである。イトコドリは、そうした時代の衣生活の知恵の一つである。

新しい着物を求めることは貴重で、前の代の人が織った布や、嫁に来たときに持参した着物や、奉公に出て盆や正月にももらった着物を作りなおしたりして大切に使用した。着続けてすり切れそうになった着物は別布でくるんだり、継ぎを当てたりするが、どうにも縫えなくなると、薄くなったところを切って半着にしたり、綿入れや羽織にした。半着物や綿入れや羽織などもすれてくると、再び継ぎを当てたり別の布で作りのせたりしたので無駄がなかった。

また、イトコドリの果てに、どうにも着られなくなった着物でも、それを細く裂いてハタにかけて帯に作りなおし、裂き織りとかボッコオビなどと呼ばれる衣料に再生させている。

季節や天候に 対する衣料

市域における衣生活の知恵として、冬の寒さに対する衣料の工夫があげられる。黄瀬川の西岸に広がる丘陵地は富士山麓および愛鷹山麓の寒冷地である。冬季の寒さは厳しく、八十八夜を過ぎた五月中旬になっても遅霜が降りることがしばしばであるという。特に今里から上の地区の下和田や須山、十里木になる

と、黄瀬川沿岸の里に比べて雪の降る日が圧倒的に多い。里では雨でもこちらは雪という現象は毎年のように見られる。

そのような高冷地では、ハンテンなどに綿を入れたワタイレは寒い冬の防寒衣料として一般的であった。須山の老人たちは、九月の末頃からワタイレのハンテンなどを着用することが多く、五月の半ば過ぎまで着ていたという。普通の人でも四月半ばの浅間社の春祭りが終わるまではワタイレが脱げない、などと言われている。子供の冬の衣料もワタイレの袖無しだった。これは昔はボンシンと呼ばれていたが、今ではチャンチャンコと呼ばれることが普通となっている。また、かつては衣料が乏しい時代であり、「寒くなれば重ね着」と



1



2

写真3-48 雨具

- 1 ミノとトンボガサ(葛山)
- 2 チヤガのミノ作り(葛山)

いわれるように、キモンを何枚も重ねて着ることも防寒対策としては普通のことであった。防寒の野良着としては、冬の山仕事に、男はドウギ(胴着)と呼ばれる筒袖の綿入れを着る者が多く、雪の日にはシヨロ蓑を着たり、足には豚皮やイノシシの皮で作ったツラヌキを履いたりもした。ツラヌキの中には藁を入れ、さらに保温をしたという。

夏の暑さ対策は基本的には薄着になることであった。木綿の衣料が多く、女の野良着は木綿のキモンであり、男は木綿のシャツ一枚で野良仕事に出かけている。下着でも女の腰巻きが冬のネルの腰巻きから、夏には木綿になるなど、汗を吸い取り肌触りの良いものへと変わっている。家の中では人目をはばかりこともなかったから、女も男も腰巻き一枚、ふんどし一丁という裸同然の姿で過ごしたものだという。田植えや田の草取りの頃は、梅雨時とも重なり、雨が降る日が続くが、野良仕事は休むことができなかった。雨具は手作りのシュロ蓑やチャガ(茅のこと)の蓑、ゴザ(オカイコミシロなどとも呼ばれる)を背に着て、頭にはトンボガサをかぶった。チャガはかつては大野原などで調達できたが、現在では箱根山麓まで採りに行く人もいる。故御宿きよ江さん(一九一七年生)はかつて母親から習ったというチャガの蓑作りができる数少ない伝承者であった。

第四節 一生の生活

(一) 産 育

1 妊娠と出産前

富士宮市杉田にある子安神社は、コヤスサン(子安さん)と呼び親しまれ子授け祈願をする神として有名で

子授け

ある。富沢では安産の神として、念仏講の人たちがこの杉田のコヤスサンを勧請かんじようしてまつている。市域

における出産と子育ての技術と儀礼は、特に子授けや子育て祈願、ほろろ抱瘡や夏病みなどの疫病よけ祈願に特徴が見られる。たとえば須山では、子授け祈願には田向の権現(十二神社)に午の刻参りをしたり、山梨県山中湖村の山中明神、同県の昇仙峽しょうせんきょう近くの夫婦木神社などの祭りに行つて参拝してきたりしたという。このように広域の神仏を頼んでの子授け祈願は、近年の交通機関の発達のためのものであるが、ムラの年中行事、特に小正月行事の中で受け継がれてきたやり方を行っているところもある。須山ではサイトヤキの火で腰をあぶったり、サイノカミに納められた建前の際のイワイダルにつけられた男根の作り物や、ナリモツソ(成木責め)の祝い棒で尻をたたいたりする。こうした小正月の子宝・子授けの儀礼は、御殿場市や山梨県などで盛んに行われている。

また子供がなかなか授からないときには、大畑のサイノカミの石を借りてくるという方法もある。子宝に恵まれな人が石を持っていて抱いて寝ると子供を授かるといい、大畑以外のムラからもやってくる。サイノカミに納められた石は増えもしなければ減りもしないというが、サイノカミの子授けの力を借りた祈願だといえよう。

こうしてめでたく子供が授かるわけだが、妊娠したと気付くのは、生理が止まったときである。妊娠をまず最初に告げるのは、夫と姑である。妊娠していることをハランデル、妊婦のことをハラミットなどといった。

トリアゲバアサン

妊娠すると、出産の手助けをしてくれる手慣れた経験者の助言と介助が必要である。かつては家

ンから産婆へ

の姑や年寄りが最も適任であった。また近所の手慣れた年配の女性に取り上げてもらったり、慣れてくると自分一人で出産したりした。この近所の女性はトリアゲバアサン(取り上げ婆さん)と呼ばれ、産婆を負かすくらいたくさんの子供を取り上げたものだったという。千福では、戦前は七七、八歳くらいのトリアゲバアサンに取り上げてもらっていたという。トリアゲバアサンは、エナ(胞衣、後産のこと)を首に巻いて生まれると、エナを首から取って逆さにして泣かせたりした。

下和田ではトリアゲバアサンではなく、年配の男性が取り上げていたこともあった。一九三三(昭和八)年に生まれた子供を取り上げたのは、夫の父親だという女性もいる。一九四九(昭和二四)年に生まれた子供も妊娠中は産婆に診てもらいながら、取り上げたのはこの父親だった。以前にいたトリアゲバアサンが亡くなった後、ほとんどの下和田の人が取り上げてもらったが、腹を見て逆子だとすぐわかる人だったという。

しかし裾野市では比較的早くから産婆の開業が行われており、佐野の芹沢チエさん(一九〇一年生)は一九二九(昭和四)年に最も早く開業した人である。特に市域でも佐野や茶畑のような駅周辺と御殿場街道沿いの商店の多い地域では、一九〇五(明治三八)年生まれの女性の昭和初期の出産でも、すでに産婆が手助けをしている。

出産に関しては、産婆の場合には妊娠の直後から検診などがかかわってくるが、トリアゲバアサンの場合は出産時に頼むのみであった。しかし、カネオヤとなってたくさんのコブンをかかえる家では、その家の年寄りがコブン衆の

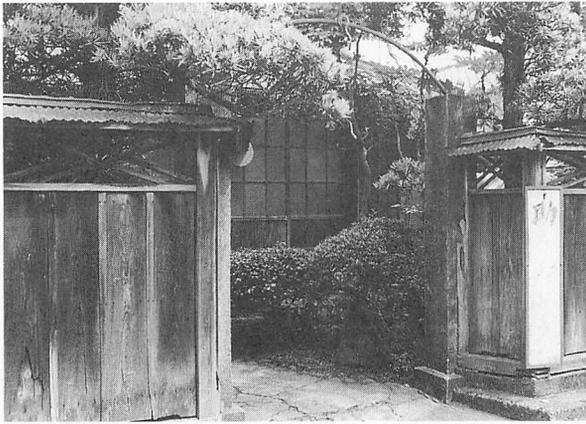


写真 3-49 助産所の入口 (平松)

子供たちを取り上げることもあった。このようなトリアゲバアサンとのつきあいは、七五三のような子供の成長儀礼にともなつて長く続いた。逆に、産婆のような専門職ともなると、出産前後のつきあいだけで終わることが多い。つまり、お七夜あるいは宮参りにはトリアゲバアサンもしくは産婆への謝礼を行い、以後産婆と生児とのつながりはなくなる。しかしトリアゲバアサンの場合は、その女性が亡くなると、取り上げてもらった子供たちは葬儀に出たものだといひ、その関係はトリアゲバアサンの死まで続くこともある。

出産の準備

最初に生まれる子供のことをハツノコあるいはハツッコ、ハツゴ(初子)というが、この初子のお産時には多くの安産祈願の儀礼がともなう。なかでもカネオヤ(婚姻の項参照)や産婆がかかわる最初の儀礼が、オビイワイ(帯祝い)である。ハラオビイワイ(腹帯祝い)ともいわれるが、妊娠五カ月目の戌の日に腹帯を締めて安産を祈るものである。犬が多産で安産なので、それにあやかつて戌の日を選ぶのだという。腹帯は、妊娠を知つたカネオヤや嫁の実家の親から贈られ、産婆に締めてもらう。カネオヤは腹帯のほかに赤飯、あるいは小豆一升と糯米もちあは三升などを添える人もいた。またオビイワイには赤飯を炊いてカネオヤや産婆、組の人に振る舞つたり、嫁の実家から餅を持ってきて近所に配つたりした。

なお腹帯は紅白の木綿の布で、紅い腹帯は二、三尺程度の形だけのもの

のだが、白い腹帯は実際に締めるため一反の長さになっている。白帯には、産婆が角に赤い糸で七五三の針目で縫い取りをしたり、墨で「寿」という字を書いたり、あるいは赤い布を一寸か二寸くらい縫いつけたりしてくれる。この腹帯はいずれ赤ん坊をおぶうときの背負い紐となり、紅い帯は女兒の場合には初節句のときの雛壇の敷物となる。

妊娠中の禁

忌・俗信

子供を無事出産するために、妊婦とその夫には多くの禁忌が課せられている。妊婦は重労働をしてはいけない、「揺らしてはいけない」、「足踏みをしてはいけない」、「高いところに手を挙げると乳の腺が切れる」などと母胎の安全を守るためのものがある。その一方で、「力を落とす(落胆する)ものではない、生まれる子供の言葉が不自由になる」、「井など大きな器で飲むと口の大きい子が生まれる」、「かますに腰を掛けてはいけない、口の大きい子ができる」、「イカを食べると骨のない子ができる」、「田の尻口じゃない所を三つ口に搔くと(三つ口に搔いて水を出すと)三つ口の子ができる」などと生まれてくる子供を気遣うものもある。

妊婦の夫には、仕事のうえで気をつけるべき禁忌がある。「シシ(イノシシ)狩りをしてはならない」、「ウサギを撃ってはならない」、「鳥を撃ってはならない」などといって動物の殺生をいましめるものがある。また、最も注意を要するのが葬式の禁忌で、「身持ちの人は鏡を帯の間に入れておけ」、「コシアゲ(興上げ、棺担ぎのこと)をしてはならない、やむを得ないときには餅を撒けばよい」というものがある。

生まれてくる子供の性別の判断は、「お腹が大きいと男の子」、「ケンガオ(険のある顔)、ズナイカオ(きつい顔)だから男の子、優しい顔だから女の子」と、妊婦の顔つきで予測することもある。

淡島講と

安産祈願

かつては難産で命を落とす妊婦も多く、市域でも安産を願っての淡島講あわしまや子安講が盛んに行われていた。特に淡島講は嫁たちによるもので、出産が安全になった現在でも、女性たちの交流の場として形を変え



て続けられている。深良の淡島講は、毎月一回輪番制で夕飯のオフルマイ(お振る舞い)をした。床の間には女神像の淡島明神の掛軸を掛け、レイコウゼン(霊供膳)を供えてコウゴト(講ごと)をする。葛山や須山のように、掛け金を集めて妊婦に貸し付けるといふ無^む尽^{じん}をして、その利息で講の運営費を賄っていたところもあったようだ。伊豆島田では、現在でも女性の守り神として淡島明神の祭りをを行い、毎月三日には淡島講も続けている。安産祈願のゴシユクガン(御宿願)をして無事出産をすると、オハタシ(願果たし)に赤い幡を奉納する。また茶畑の滝頭^{たきがしら}では、講の後、子供た

1
写真 3-50 安産祈願
(伊豆島田)

- 1 淡島講
- 2 オハタシの幡



ちを呼んでご飯を食べさせたこともあったという。深良では、この淡島講で使用したろうそくを妊婦が持ち帰り、陣痛が始まるとそれに火を灯した。このろうそくが短いほどお産が軽く、子供が早く生まれるのだという。現在では、年に数回、公民館などの公共施設を借りて行うことが多い、積み立てをして子連れで旅行に行くところもある。

2

淡島講が嫁たちの講であるのに対して、富沢の子安講は念仏講の姑たちが行っている。毎月一〇日の子安講の日や三月一〇日の祭りの日に、念仏講が安産の宿願をする。富士宮市杉田のコヤスサンにも願をかける。それで無事

に生まれると、オハタシには供物を供えて礼をする。富沢のコヤスサンは現在公民館にまつられているが、公民館のあるところはもとは桃園ももぞのの定輪寺じやうりんじのインキョデラ(隠居寺)があったが廃寺になっていた。そこに一九〇二(明治三五)年生まれの人のお母親たちが、勸進をして杉田のコヤスサンを勸請してまつた。かつて難産で亡くなる人がたくさんいたが、コヤスサンをまつるようになってからはお産で亡くなる人がなくなったのだという。

このほか、今里では岩船地藏に、水窪では水窪神社に安産祈願をする。水窪神社の祭神は女の神で、お産のときには神社で使ったろうそくをもらってくる。なるべく短いろうそくを借りてきて、産気づいたら灯をつけて、このろうそくが消えるまでに産ませてくれと願う。子供が無事生まれたらオツイタチ(一日)にろうそくを納め、赤飯や菓子をお供えてオハタシをしたのだという。また須山の田向では、地藏堂で念仏講に「南無阿弥陀仏」を三回唱えてもらい安産祈願をする。産後には同じく地藏堂で、「お産のお果たし念仏」をあげてもらおうという(『須山の民俗』)。

臨月に入ると、母親となる女性は一つ身の襦袢じゆばんに一つ身着物とおむつの用意をしておく。また妊婦の実家からは産着やボンシン(子供用の綿入れちゃんちゃんこ)のほか、簞笥などの家具も贈られる。また、出産予定日の一カ月から二、三日前の大安の日に、デミマイ(出見舞い)といって、餡あんの入ったアンピンモチが重箱に入れられて実家から届く。葛山では「まるく育つように」と丸餅にし、茶畑や富沢では大きな餅ほど良いといい、届いた餅のほかにも餅をついて補充し近所や親戚に配る。アンピンモチなのは安産と「餡」入りをかけて安産を願うためで、最近では紅白の餅やまんじゅう、大福餅などを配るところもある。

出産の場

子だくさんだった時代、須山では嫁と姑がウミツクラ(産み比べ)をしたものだといひ、一五人家族では一日に一斗何升かのご飯が必要だったという。当時の家族の写真を見ても、小姑と孫の年齢が逆転していることがままある。また子供は「小さく産んで大きく育てろ」といひ、妊婦は出産直前まで働いていて胎児が大きくなりすぎるといふことはなかった。初産のときのように常に用意周到に準備して出産できるとは限らない。第二、第三子のときには、妊婦も慣れていふという油断から、急に産気づいて産婆が出産に間に合わなかったといふこともたびたびあったようだ。「妊婦は障子の骨(棧)が見えなくなるまで、辛くても耐えるものだ」とか、「障子の棧が見えなくなるまで生まれない」など、出産が決して楽なものではないといふ教訓がよく聞かれる。一方産婆は、出産間近の妊婦がいふと暦を見て潮の干満を調べておくものだという。人は潮の満ちるときに生まれ、潮の引くときに死ぬものだという考え方は根強く、産婆は経験上、潮の満ち引きで妊婦が産気づくことをふまえて暦を見ておくのである。

子供を産む場所は、多くが婚家のナンド(納戸)であった。かつては「畳の上で子を産むものではない」といふて、ろうそくのあかりだけのナンドは「アカ(赤ん坊)を産む部屋」であるといふ意識が強かった。明治時代まではナンドで畳を上げて^{むしろ}蓆を敷き、その上で座って子を産んだ。昭和の初め頃になると同じナンドでも、畳を敷いたままそこに布団を敷き、その上に油紙や養蚕で使うサンザシ(蚕座紙)を敷く。さらにその上に布団の皮やポッコ(ぼろ布)など捨ててもいいものを敷いて、丸めた布団を抱え込むようにした姿勢で産んだ。医学知識のある産婆の指導によって、産室は暗いナンドから明るいザシキ(座敷)へ、板の間の上の蓆は畳の上の布団へと改良されていった。戦前の須山では、陣痛が始まると急いで髪を洗い、湯に入ってから、ザシキに産褥^{さんじよくふとん}布団を敷きその上に油紙などを敷いて寝た。産婆の介助によって多くは寝て産んだが、それ以前はウツブケ(うつ向き)で四つん這いになって産んだり、天井から吊るし

た綱につかまってしゃがんで産んだりしていた。

臍へその緒おは、トリアゲバアサンの時代にはノチザン(後産)が下りてからイトソウという麻の糸で縛はきって切った。

下和田のトリアゲバアサンは、背骨のある位置を押してノチザンを下ろしていた。かつては、このノチザンが下りずに上に上がって死んでしまった産婦が多かったという。須山では、ノチザンが下りないときは馬ぞうりの草履を屋根越しに投げると下りるといっていた。

臍の緒を切った後は、産婦側の切り口には晒しを巻き、生児側は一センチくらいの麻の布でくるんでおいた。臍の緒がとれると箱に入れて保管しておき、瀕死の病気のときに湯に浸して飲むと効果があるといった。また、嫁入りの際に持っていくと幸せになれるともいう。

産後の処理

子どもが生まれるとすぐに近所の年配の女性たちが白いご飯を炊き、釜の蓋を裏返してその上にご飯を山盛り一杯載せて子供の枕元に置いた。子供が無事生まれたことを感謝し、全員でそのご飯を食べ

た。このご飯のことをオブツナサンのご飯、またはウブツナサン(産土神さん)のご飯などというが、須山ではウブノカミサン(産の神さん)のご飯ともいっている。茶畑では生まれた子供がオオグラシ(大暮らし)、裕福な暮らしのこと)ができるようにと、ダイジングウサン(神棚)にも供える。下和田では「おおがないように(大勢になるように)」といった意味合いが込められているという。また麦塚では、シオガマサン(塩竈神)、安産の神(安産の神)に供えるといっている。釜の蓋に山盛りのご飯を載せて床の間に置く。葛山では、上手に高く盛ると子供の鼻が高くなるともいった。

オブユ(産湯)は男の人などがカワ(深良用水)の水をくんできて沸かし、たらいに湯を入れて姑や舅、産婆を入れる。汚れた産湯は、産室であるナンドやザシキの床下にこぼしたり、屋敷のアキノカタ(明きの方)、その年の恵方のこと

に捨てたりするほか、便所、納屋、堆肥小屋など目立たない場所に捨てたという。またトリアゲミズ(産湯)はやたらのところにあけるじゃない、ひなたに出すといけない、鬼門を避ける、「がしゃっ」とあけない、などという禁忌がともなっている。生児の入浴は、産婆が一週間来て入れてくれたという。

ノチザンは紙やボッコ、サンザシなどにくるんで、家の男衆か年寄りが多くは屋敷内にある先祖の墓へ持っていき、石塔の裏側や竹やぶに捨てたり、土を掘って埋めたりした。あるいは産湯と一緒に産室の床下に埋けたともいう。ノチザンは別名エナ(胞衣)ともいい、葛山では届けを出すエナサントリ(胞衣さん取り)という人が家まで取りに来たという。

乳付けと産

昔はミズツチ(水乳)はいけないといって初乳はやらす、絞ってナンテンや柿の木の下にこぼした。乳後の清めは三日目からやり、それまではヒヤクヒトエ(後述)のときに着る白絹しろぎぬの端で乳房の形に作り、砂糖湯を吸わせていた。あるいはマブリというものを薬局で買ってガーゼに包んで子供に吸わせていた。葉草のセンブリを煎じて生児に吸わせると、虫がわかないともいった。後には初乳をやるカニババ(胎便)が早く出るといって、生まれてまもなく子供が泣くと初乳を与えるようになった。

乳が出ない人は、長泉町下土狩しもがりにある大銀杏や茶畑の峰下なみくだの大日堂境内にある大銀杏に出乳祈願に行った。峰下の枝垂れ銀杏は樹齡が一八〇年以上あるが、大きな乳房(氣根)がたくさん垂れ下がっており、乳が出ない人がゴシユクガン(御宿願)をかける。白い大きな布で乳房をかたどり、木の乳房に吊り下げ、無事子供が育ったときには礼参りをしておハタシをする。またチ(乳)がよく出た人は、チの出が悪い人の子供にも分けてやることもあった。

産婦の食事は粗末なご飯でないと産後の肥立ちが悪いといい、ユカケ(湯かけ、湯漬けともいう)のご飯だけだった。

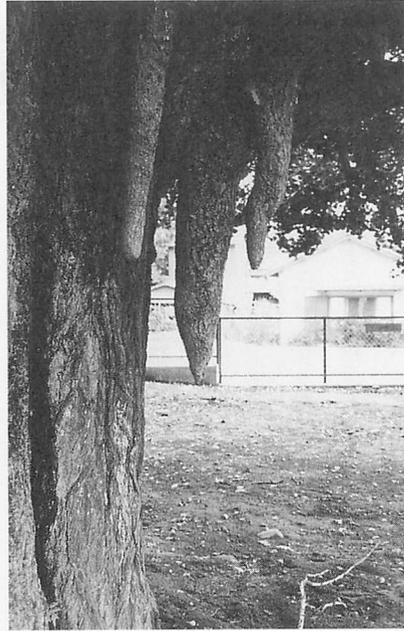


写真 3-51 大日堂の大銀杏（茶畑）

シオダチといって塩気のある物とはとってはいけなかったので、三日から一週間くらいは塩気のおかずを食べなかつた。またつくねを焼いた物を食べると、フルチ（ノチザン）が下りる（下がる）といった。茶畑では、湯漬けや粥に鯉節や卵焼きをつけて食べたという。須山では乳の出が良いようにと、餅やサトイモ、ヤマトイモを焼いて食べたり、ハツタマゴ（鶏が成長して初めて産んだ卵）を食べたりしたという人もいる。

産婦は三日から一週間くらいで床を上げたが、子供の世話をするくらいでショウバイ（仕事）はしなかった。特に冬は水を使わないよう、湯を沸かして寒い思いをしないようにした。また針は一カ月持つてはいけないといわれた。

床上げまでの産の忌みがかかっている期間は、神聖なものに近づいてはいけなさとされていた。たとえば、起きるまでは神棚に水を供えてはいけない。出産後初めてヘツイヤイロリのマッコ（縁）の前に行くときには、障りのないようにとシオバナ（潮花）を三回ふる。産褥期間は「七十五日は泥の海」といって、男の人に接してはいけないなどともいった。また二週間は湯に入らず、入っても腰湯程度だった。

お産で命を落とすことも多かった時代には、葬式のとくに特別な供養を行った。富沢では大正の初め頃まで、お産で亡くなった人の葬式ときには、「三途の川」といって一尺か一尺五寸の幡に「南無阿弥陀仏」と書いて川の縁に

立てておいた。その側を歩く人は、その幡に手向けの水を掛けて通ったという。また御宿あたりでも、昭和の初め頃にこういった水向け供養を行っていた。

出産見舞い

とお七夜

子供が生まれて一、二日すると、ネネミとかウブミマイ(産見舞い)といって近所の女衆や懇意にして
いる人、親戚などが見舞い、祝いを言いに来る。そのとき祝儀として、水分補給の砂糖水や子供のお
しめ、衣服、一つ身分の布地、農作物などの品物を持ってくる。また初子に限り、産婦の実家から紋付きの産着が届
き、カネオヤも出産祝いとしてオブイバンテンや着物を贈ってくる。子供には飴を寝床に持ってくる。

誕生七日目には、お七夜の祝いをする。産婆にブンノクボ(盆の窪、うなじの窪み)だけを残して産毛を剃ってもら
う。この後アカメシ(赤いご飯)を炊き、カネオヤや産婦の実家の親、親戚、仲人、産婆を呼んでオフルマイ(お振
舞い)をする。葛山では、赤飯またはオコワメシ(お強飯)、尾頭付きの魚、吸物などを振る舞った。子供は産婆が風
呂に入れ、頭を剃っておしろいをつけ、新しい着物を着せてくれたという。またこの日に近所の子供を呼んでごちそ
うし、「子供の仲間入り」をさせてもらう。佐野ではこのことを、コドモブルマイ(子供振る舞い)といっている。祝
いを盛大にやらない場合にも、カネオヤを始め近所の人たちにも赤飯に品物をつけて配り、出産祝いの返礼をする。

茶畑ではこのオフルマイのとき、味噌汁の中に石を入れ、膳を作って生まれたばかりの子供の前に置いておくという。
名付けは三日目くらいからお七夜までの間に行う。名前は子供の親がつけるほか、その家や近所の年配の人に画数
を見てつけてもらったり、カネオヤやオーヤ(本家)の年配者、三嶋大社などの神社の神主、寺の住職といった知識人
につけてもらったりする。オジイサン(この場合、生まれた子供にとっては祖父にあたる)の「林蔵」と子供父親の
「作蔵」という名前をとって、オバアサンが「林作」という名前をつけたという話も聞かれた。お七夜までに命名の



1



2

写真 3-52 命名と宮参り

- 1 命名(茶畑)
- 2 宮参り(三嶋大社)

リをするといひ、稲荷など七カ所に参っておひねりを置いてくるという。須山では、ツバキの葉にオコワ(強飯)を盛って鳥居の柱元に供えてくる。またこの日をハシワタシ(橋渡し)ともいひ、この日までは外出も、石橋を渡することも禁じられていた。初めて外出するときには、鍋底の墨を子供の額につけて出ると魔物がとりつかないといった。

生後一〇一日目はヒヤクヒトエといひ、やはり産土神に宮参りに行く。それまでは神社の鳥居をくぐれないが、この日からは鳥居をくぐって参ることができる。神社は産土神のほか、モヨリの山の神で、長男長女の場合は三嶋大

紙を神棚の下に貼っておき、名前の披露をする。

宮参り

生後五一日目に子供は初め

て外出する。これをトリイマイリ(鳥居参り)といひ、産土神に参る。これは産んだ母親が子供を抱いて鳥居の前まで行き、鳥居をくぐらずに参ってくるのである。麦塚ではこのときナトコマイ

社まで行くこともある。子供の母親や祖母が子供にオプギ(産着)を着せて参り、洗米、塩、赤飯と賽銭などを供え、子供をウジガミ(氏神)の石段に一度寝かせてきた。オプギは江戸棲のような祝着で、背紋と五色の色糸で縫いとりをした魔よけが背中についており、宮参りまでに産婦の実家から届けられる。宮参りの後、カネオヤや仲人、親戚を挨拶して回る。そうすると回った先で、子供のオプギの紐に御祝儀を水引で結わえつけてくれる。また麦塚では、外出の際に紅絹もみの布を一センチ幅に一〇センチの長さに切って結び、着物の紐の所に縫いつけ、魔よけにしたという。

家に帰ってくると、カネオヤ、仲人、親戚、実家の親、近所の衆、産婆などと呼んでオフルマイをする。このヒヤクヒトエのオフルマイをオビタテ(帯立て)ともいうが、現在では初誕生や初節句に合わせて行うようになった。産婆には、この日に診察代を支払い、それに祝いの品を添える。またこの日に近所の子供たちへのオフルマイを行うところもあり、葛山では「子供らの仲間入りをさせてもらうのだ」といっている。

オクイゾメ(お食い初め)は、このヒヤクヒトエのとき子供に赤飯や汁物などを箸で食べさせる。食べても食べなくても、まねごとをさせるのである。

子捨てと子供の生まれ年 御宿新田のある家では、「丑年生まれはアンニイ(兄)をうっちゃる(捨てる)」(弟が家を継ぎたがる)といつて、弟であるその子供を一度寺に捨てるまねをしたことがある。その子供は誰も拾ってくれ

なかったもので、しかたなくその家のオジイサンが拾った。そうしたら、兄をうっちゃってしまったという。同様のことは須山でもいわれ、「シャテイウシ(舎弟丑)がアニイ(兄)をコギダス」などという。また、母親の厄年に生まれたヤクゴ(厄子)も、あらかじめ頼んでおいた家に捨ててくる。須山ではその家のジョーグチに、生後間もない子供を箕に入れて捨ててきた。捨てられた家では、すぐにその家で作った着物を着せてから改めて子供を親元へ送っていった。

その拾い親と子供とは仮の親子関係となり、深くはないが一生のつきあいになるという。葛山では子供が生まれてもすぐに死んでしまうなど、子供のハリアイ(運、行く末)が悪い人は、生まれた子供をいったん道に捨て、ハリアイのいい人に拾ってもらい、その家の子供の着物を着せてもらって返してもらったという。

子供の生まれ年で、巳年生まれは金がいい(財産に恵まれる)、申年生まれは馬を使うと馬がいうことを聞く、丙午ひのえまの女はよくないなどという。また須山では、子供の生まれない家で、近所の子供をその家の廊下に置いてもらおうと子供が生まれるともいっている。

3 成長過程

初節句

初節句を祝うのは長男長女の場合だけであるが、ほとんどの地域で女兒の節句を四月三日、男児の節句を五月五日に行っている。現在は会社勤めの関係もあり、その前後の日曜日とか大安などの吉日に祝う家も多い。しかしかつては、男女を問わず四月三日を節句としていた時期もあり、この日までに贈られた人形を飾る習慣は現在でも続けられている。この日をジンムサンと呼んでいたといい、かつての大祭日であった神武天皇祭と、月遅れの節句が混同されていたとも考えられる。また須山のように、四月一六、一七日の浅間神社の春祭りにあわせて、その翌日一八日を女兒の節句としてるところもある。もっともこれは明治時代以降に始められたというが(『須山の民俗』、同様のことは下和田でも行われており、やはり秋葉神社の祭りと浅間神社の春祭りの翌日、四月一日が節句となっている。また、男児の節句に立てる外のぼりは大正時代に立てられるようになり、終戦後には内のぼりとなったが、最近また外のぼりや鯉のぼりを立てるようになってきたという。麦塚ではかつてのぼりを立てるのはオデヤ



1



2

写真3-53 初節句

- 1 男児の初節句(石脇)
- 2 女児の初節句(今里)

ージン(お大尽)の家だけで、コブンたちが寄り集まって大騒ぎして立てたものだったという。

四月三日の初節句の一カ月前に、女兒にはカネオヤや母親の実家から御殿雛や内裏雛などの雛人形が、仲人からは高砂の人形が届き、男児にはカネオヤから潮汲みや鍾馗、神武天皇、武者などの人形が、母親の実家からは武者絵などが描かれたのぼりや鯉のぼりが贈られる。深良や茶畑では、これらの節句の人形を男女にかかわらずすべてヒーナサンと呼んでいる。麦塚では五月五日の男児の初節句には、カネオヤからのぼり竿が贈られた家もある。その場合は、

カネオヤ所有の山林からヒノキを伐ってきて、ウラ(先端部分)だけ葉を残したまま削って竿にし、その翌年からウラも切って使う。切ってしまったウラの代わりに、矢車をつける家もある。のぼりを立てるときは近所の衆を頼み、四月中に立てておく。のぼりの絵は武者絵で、昔は鯉のぼりはなかったという。つまり、のぼり竿を見れば初節句の家

がわかるのである。なおこののぼり竿は、下和田では杉を使うが、細くて長い木を探し前年の暮れ前に切っておくと、木が水を上げていないので切りやすいといい、皮をむいて翌年の節句までねかせておくという。

初節句のオフルマイは、家の事情によってさまざまやり方があるが、基本的にはモヨリとか組単位で近所の人たちを招き、カネオヤや仲人、母親の実家、親戚など贈り物をしてくれた人たちを呼んで、子供の成長を祝うものである。また深良では、大人を招くオフルマイとは別に、近所の子供たちを招いて「子供の仲間入り」をさせてもらうこともある。「子供の仲間入り」というのは、生まれた子供を披露して子供仲間の承認を得ようとするものである。初節句のほかに、お七夜やヒヤクヒトエなどの機会に行われることもあった。なお、オフルマイのような祝い膳をしない場合には、重箱に柏餅やまんじゅうなどの菓子を詰めて配り膳をしたという。このように、他の生育儀礼が簡略化される傾向にありながら、この初節句だけはほとんどの家が行ってきたものである。また、初節句のオフルマイに欠かせない食べ物として寿司があり、富沢では組の人たちがスシダライを贈る習慣もある。

今里のA家の長女（一九九四年一月一九日生）の初節句は、一九九五年四月二日に次のように行われた。高砂の人形は夫方の仲人から贈られるもので、共白髪まで長生きするようにという願いがこめられている。七段飾りは子供の母親の実家から贈られ、「日がいい（縁起のいい日）」三月一日に飾った。祝い事はミツキマタガリ（三月またがり）をしてはいけないといい、実家では一月に人形を買ってA家に贈り届けてあった。人形は早く飾って早くしまうもので、天気の良い（湿気のない）日にしまえ、ともいう。雛人形は嫁に行くときに段飾りを持たせてやるものだが、現在では内裏雑だけというように小さく持たせてやる。また親戚のオフルマイは午前一一時から、近所の衆（A家の場合は石船組一四軒）のオフルマイは午後三時から行われた。

一歳まで
の子育て

初誕生に祝いをするということはあまりないが、この日に母親の実家やカネオヤ、親戚などから着物が届いた。須山では母親の実家からウイバンテン(背負い半纏)が届き、子供が丈夫に育つようにとオフルマイをしたという。葛山では誕生日前に子供が歩くと、餅一升を風呂敷で背負わせて歩かせた。また茶畑では、誕生日前に歯が生えてもよくないといった。

市域では戦争前後まで、子供が生まれて初めて人の家を訪ねると、シンキャク(新客)とかハツキャク(初客)などといっておひねりや豆などが贈られる習慣があった。麦塚では、生まれて一年以内の抱かれている子供が初めての家を訪ねると、一〇銭くらいのおひねりをもたらした。深良では、生まれたばかりではなくても初めて家を訪ねてきたときには、やはり小遣いをやったものだという。赤ん坊のときにおひねりのほかに大豆や共白髪も贈ったりするのは、「まめで丈夫に育つように」という願いをこめるからである。

七五三

葛山では「七つの祝い」といって、七歳のときに盛大に祝う。初子のときには、母親の実家から祝い着が届き、祖父母が同行して三嶋大社に参拝する。親戚からも祝儀や祝い物が届き、赤飯や引き物を実家・カネオヤ・仲人・近所の人たちに配る。ところで市域全体では、一般的には男児が数え歳の五歳、女児が数え歳の七歳または三歳と七歳のときに祝う。母親の実家から祝い着が贈られ、それを着て産土神や三嶋大社に参拝する程度で、特に盛大にやらないという家も多い。「七つの祝い」という言葉があるように、本来なら男女とも数えの七歳で祝うものだという。

麦塚では、男児の五歳と女児の七歳の祝いには、着物や入学祝の鞆かばんが贈られた。長男長女の場合には親戚や組の人を呼んでオフルマイをするが、やらない家も多い。また富沢では、初子に限り男女とも七歳のときにオフルマイをし



写真3-54 三嶋大社での七五三 (三島市)

て祝う。カネオチャや仲人、近所の人、親戚の衆を呼んで一晩中飲食し、酒を一樽飲みあかしたものだ。かつては富沢青年団が太鼓を叩き、笛を吹き、擦り鉦すをすって、七つの祝いの家に踊り込んだ。子供のオフルマイなので、青年がヨッピデがね(夜通し)飲めたという。

なお深良の一九一四(大正三)年生まれの男性は、七歳のときに祖父に連れられて、小山町竹之下の地藏ほうきょうじ(宝鏡寺)の延命地藏の八月二三、二四日の縁日に、箒を持って参ったという。賽銭をあげ、住

職にお祓いをしてもらってから、奥の決められた場所を掃くまねをしてきた。この地藏には延命子育て祈願をするのとで近隣では有名であるが、現在でも身体の弱い子供は頭髪を剃って地藏の弟子となり、七歳まで願かけを続けると健康に育つといわれ、これを「七つ坊主」と称している(『小山町史』第九巻民俗編)。

子守

葛山では、年寄りが家で子守をする場合もあったが、母親が子供を連れて畑へ出ることも多かった。薙むしろを敷いたりハンモックを吊ったりして寝かせておいたり、カジキダワラ(サツマイモなどを運ぶもの)に入れて畑に置いておいたりした。また富沢では子供が泣いたとき、「お寺の大門においてくるぞ」というと泣きやんだもので、それほど定輪寺の大門の跡は昼間でも暗かったために、子供をなだめるのに引き合いに出された。



写真3-55 宝鏡寺本堂 (小山町竹之下)

ところで、深良の一九〇二(明治三五年)年生まれの男性が覚えていた子守唄には、次のようなものがある。

お月さん 神さん / いくつになやる / 三十三になやる /

三十三の歳に / 赤ちゃん持って / 子守を終えて / 油買いにやたらば /

油屋のセドに / 氷が張って / 滑って転んで / 油一升こべえた /

その油どうした / 犬なめ申した /

その犬どうした / あの山越して / その山越して / 奥の山にすっとなだ

疱瘡 須山では、疱瘡のことを「モンシャー(不器量)定め」の疫病神」といい、昔から命を奪いかねない厄病として恐れられて

きた。富沢では天然痘のことをホンボウソウ(本疱瘡)といい、幕末以降に始められた種痘のことをウエボウソウ(植え疱瘡)と呼んでいるが、子供が生まれて一歳くらいになると役場から通知が来て種痘をした。種痘は小学校三年生のときにもう一度行う。現在では種痘も行われなくなったが、かつては疱瘡を植えるとホウソウダナ(疱瘡柵)を作ってホウソウガミ(疱瘡神)をまつり、疱瘡がつくとホウソウマンジュウ(疱瘡まんじゅう)を作って近所に配り、疱瘡が治るとホウソウイワイ(疱瘡祝い)をしたものだった。

富沢では、ホウソウダナにはいくつかの種類があった。一つはカツノキ(マルデ)で作った枠の上に棧俵(米俵の丸い藁製の蓋)を載せ、紅白のオシンメイ(紙垂)を切った幣束を四隅に立ててそれに注連縄を張ってつなぐ。これをナカバシラ(中柱)に縛り付け、その柵の上に赤飯を供える。また別の作り方は、棧俵か簾状に編んだ藁製の柵に紅白の紙垂の幣束を差し立て、縄で吊ってナカバシラに掛ける。この幣束には紙で人形を作ってつけるが、男児なら羽織袴、女児なら袂の着物を着た人形を作る。今一つの作り方は、桑の木などを縦に割った板五枚くらいで筏状に組み、柵の正面に色紙の紙垂と男児の袴か女児の袂の着物を型どった切り紙を垂らし、柵の上に幣束を立てる。これをナカバシラに掛けてまつた。市内の各地域でもこのような柵の形態がいくつかあるが、このほかに茶畑では、柵の正面に鳥居・ナンテンをさしたオミキドックリ(お神酒徳利)・三方に載せた供え餅の形に切り抜いた紙を下げる。このような飾り紙をつけるのは、市内では須山や下和田、葛山などでも聞かれたが、御殿場市内でも盛んに作られていたようである(『御殿場市史』別巻Ⅰ考古・民俗編)。また須山や下和田、千福では柵の枠や台を竹で作り、箕の子状に渡した竹を藁で編み込んだ四角形の柵を作ったところもある。こういった精巧な柵は誰もが作れるというわけではなく、そのムラの熟練者がムラ中から頼まれて作ることも多く、個人の特別な技術に頼っていた場合もある。ホウソウガミをまつる場所は、家によってまちまちで、ナカバシラのほか神棚、床の間、荒神といった屋内の神聖な場所が多い。また屋外にまつる例として、須山の田向ではムラのサイノカミや地藏堂側のヒイラギの木に柵を吊るすところもある。

抱瘡を植えてつくと、母親の実家からホウソウマンジュウが届く。ホウソウマンジュウは普通のまんじゅうより少し盛り高、あるいは円錐形に作り、頂点に紅点をつける。市内全域でホウソウマンジュウと称しているが、実際には

小麦粉で作る蒸かしまんじゅうと、米の粉を湯で溶いて蒸かした餅(あるいは団子)の二種類がある。いずれも中に餡を入れるが、黄瀬川東岸の深良・公文名・佐野・茶畑・堰原(せきばら)では米の粉で作り、黄瀬川西岸の千福・御宿・富沢では小麦まんじゅうを作る。また、このどちらも作るというのが須山・下和田・葛山などである。水窪では、母親の実家から四〇個のホウソウマンジュウが届き、それを班の人に三個ずつ配る。これをホウソウミマイ(疱瘡見舞い)といい、このホウソウマンジュウをもらうと縁故のある人はヒトジュウ(一重)、フタジュウ(二重)とまんじゅうを重箱に詰めて持ってきた。富沢では、ホウソウダナを作ってから三日くらいで疱瘡が盛り上がってやることをヤマアゲといい、親戚がホウソウマンジュウを一重(ひとえじゅう)重(四つ重ねの重箱)に一段につき一六個人れて持ってくる。これを近所に三〜六個ずつ配る。公文名では、まんじゅうをあんまり大きくしてはいけないといって小さくこしらえ、重箱に詰めるときもくつつけてはいけないといって、疱瘡が癒着して跡が残るのを忌んだのである。

疱瘡はカセル(黒くかさぶたになる)まで一週間くらいかかり、さらに五日経てば完治する。茶畑では、ユカケ(湯かけ)といって桶に棧俵を一つ入れてその上に子供を腰掛けさせ、さらに子供の頭にもう一つ棧俵を載せる。そして頭の上で、ヤブコウジを煮出した湯を筐で振り落として子供の身体を祓い清め、ホウソウダナとともに川に流すか、サイノカミに納める。葛山では、このような清めは一九五五(昭和三〇)年頃までやっていたという。富沢ではタナオサメ(棚納め)といい、ホウソウダナをモヨリのサイノカミか、産土神の愛鷹神社の境内社である疱瘡神社に納めていた。水窪では赤飯を棚に供えてから、御宿新田ではホウソウマンジュウを棚に供えてから、サイノカミに納めた。さらに、疱瘡が無事すんだことを感謝し、見舞いをくれた人たちへの返礼をした。下和田ではホウソウマンジュウを近所に配り、水窪では赤飯を配った。また富沢では、赤飯にニンジン・ゴボウ・コンブの煮染め、しらあえ、アゲ(油

揚げ)などのおかずを作って重箱に詰め、弁当のようにして配ったという家もある。このように、疱瘡がカセテから返礼までの一連の流れを、多くの地域でホウソウイワイと称している。

疱瘡にかかっているときには、ホウソウダナにホウソウマンジュウのほか赤飯や赤いご飯、白いご飯、珍しい物を毎日供え、富沢ではカドグチにオロウ(ろうそく)を灯し水を供えて、「まるで神さんのように」大事にホウソウガミをまつり、疱瘡が無事完治するようと願ったものだという。このホウソウイワイをしたのは長男長女の最初の種痘のときだけで、次男次女以下は内祝い程度だった。公文名では冷やしてはいけないといって、半纏はんてんを掛けて子供をおぶっていた。御宿新田では疱瘡は「一歳の厄」だといひ、須山では心ある人(思いやりのある人)が紅い手ぬぐいをくれたともいふ。手ぬぐいを腕に巻くと疱瘡がきれいに治る、と信じられていたのである。疱瘡には多くの禁忌と手間のかかる儀礼がともなっていたが、これは疱瘡がかつては決してあなどれないはやり病だったため、御宿の入谷いりやでは大人が三人死んだという話も残っているほどである。富沢の愛鷹神社や須山の浅間神社のように、地域のいくつかの神社の境内に疱瘡神社がまつられていることも、かつてこの地で疱瘡が猛威をふるったことを想起させるのである。

子供の病氣

須山の新井にいにある第六天神社には、子供の夜泣きを封じるといふ信仰がある。第六天神社の近くの年配の女性に頼んで一緒に参ってもらい、夜泣きが治るとドジョウ、ハヤなどの小魚と縄を一握りスガイ(輪)にしたものを奉納して礼参りする。須山ではこのほかの夜泣き封じの方法として、熊くまの足を子供の枕の下に置く、馬の杓しやくをこしらえて屋根の上に放り上げておく、というものがある(『須山の民俗』)。沼津の出口(現在、幸町)には癩かたの虫封じをしてくれる人がおり、深良のある家では子供の襦袢を持って行って祈禱して治してもらったという。

富沢の不動は「寝小便の神様」、「子供の神様」として知られ、子供が寝小便をすると、寝小便をしないようにと願

をかけた。オハタシ(願果たし)には、一尺四方のコモ(薦)を藁で編んで供えた。三月二八日が不動の例祭日だが、その祭りに行くとかつてはそういうコモが上がつていたものだった。現在では、子供に限らず年配者でも願をかける人がいる。例祭には近所の子供たちが参り、供えた赤飯の握り飯をもらっていく。

ところで、子供が成長するまでにはささいなことでも病気にかかりやすいが、そういうとき大人たちは医学的処置を施しながらも、神仏を頼って呪いや祈願をし、子供の病気を早く治そうと努力する。子供のできものや風邪、喉の病気などのときに、須山の田向では地蔵に平癒祈願をして、そのヨダレガケを一枚借りてくる。ヨダレガケを子供に掛けさせ、病気が治るとヨダレガケを二枚にして地蔵に納める。また富沢では子供が病気になったとき、コヤスサン(子安さん)に願をかける。子供の名前と歳を書いて祈願し、オハタシには経をあげる。またコヤスサンに上がっていた短いろうそくをもらっていくと、早く良くなるという。

病気よけ祈願

茶畑の市ノ瀬いちのせの厄よけ地蔵は、子育て中の若い母親たちがまつり、子育て祈願もする。深良の原の地蔵は「子供の神さん」だといわれ、子供が病気になると願をかけて、八月二三日の縁日にはそのオハタシをする。地蔵が子供の神であるという信仰は、七月あるいは八月の地蔵盆に裾野中で子供相撲が催されることからもうかがえよう。稲荷の祭りでも、やはり子育て祈願をする。茶畑の滝頭や大畑では、初午に稲荷をまつる家に行つて、子供の名前を書いた紙幡をゴクウ(御供物)とともに奉納する。また深良の上原では、子供が生まれると赤子神社に行き、赤ん坊の着物を借りてきて着せ、子供が無事育つと翌年新しい着物を納める。このほか子育て祈願をするのは、子授け・安産祈願と同様、子安講、淡島講などであるが、夏のはやり病にかかりやすい子供たちを守るため、大人たちがさまざまな呪いや祈願を毎年行ってきたものもある。公文名では、七月一八日の馬頭観音の祭りや念

のショウデンサン(聖天堂)の祭りや三島市山中新田の芝切り地蔵の祭りには、子供を背負って毎年必ず参ったという信心深い母親もいた。

ホウエンサン(法印さん)と呼ばれた富士峰行者のお祓いも、子供たちの無病息災を祈願する大切な行事だった。富士山での夏山修行を終えた法印が、富士宮市村山への帰路、愛鷹山麓の村々を巡りながら行や護摩ごま焚ただきをしていく。富下和田では、九月八日にホウエンサンが立ち寄るため、タナノサカダイというところでホラノキャー(法螺貝)を吹く



写真 3-56

子供の守り神

- 1 不動の祭りの子供
の参拝(富沢)
- 2 芝切り地蔵のお札
(三島市山中新田)

1

〇月になってから再び念仏をあげて行こう。また、小山町竹之下
の神さん)にゴシユクガン(御宿願)をかける。オハタシは、一
後、鹿島神社前のサイノカミのところではカゼノカミサン(風邪
後、鹿島神社前のサイノカミのところではカゼノカミサン(風邪
後、鹿島神社前のサイノカミのところではカゼノカミサン(風邪
後、鹿島神社前のサイノカミのところではカゼノカミサン(風邪



2

のが聞こえると、子供から年配者までムラ中がお祓いを受けた。富沢でも、ホウエンサンが来ると子供たちが賽銭や米を持っていき、鈴でお祓いしてもらった。小さな子供は背負ったままで、お祓いしてもらったものだった。法印にまたいでもらおうと風邪をひかないなどといい、法印の霊力を信じる沿道の人々の信仰は篤かった。

4 子供から大人へ

子供の日 富沢の一九〇二(明治三五)年生まれの女性が佐野小学校に入学したときは、泉・小泉村が合併して学校常生活 できたばかりだった。児童数は、一学年に女子が二六、七人、男子が二〇人で合わせて五〇人もいなかった。

通学には、風呂敷に本を包んで、藁草履を履いて通い、黄瀬川は浅いところを歩いて渡った。上モヨリの子供たちはウワガワラを、中モヨリの子供たちはナカヤカイドウを、下モヨリの子供たちはサクラバタというところを渡った。雨が降ると花園橋を通ったが、雨のときには下駄を履いたため、橋の板の隙間に歯が挟まってしまい困ったものだった。弁当にはサトイモかサツマイモを入れていった。深良では、昭和初年代の子供たちは弁当を持たずに、家に帰って昼食をとったという。弁当を持ってくる場合は、バクメシ(麦飯)かサツマ弁当で、米が多い部分を詰めて持っていた。おかずは梅干しかココロ(漬け物)くらいで、サバや塩マスなどの魚を入れてくるのは裕福な家の子供だけだった。

子供たちは、子守をしながらでもよく遊ぶ。男児はメンコやベーゴマ、竹馬で遊んだり、トリモチでホオジロを捕ったり、川でドジョウやウナギ、貝採りなどをして食卓の一品に一役を担ったりした。女兒はオジャンメ(お手玉)やまりつき、あやとりなどをし、正月には羽根つきやカルタをして遊んだ。しかし遊んでばかりもいられず、家の仕事

の手伝いもよくした。深良では、蚕の糞の始末、桑の葉摘み、草取り、土寄せなどや、麦蒔き前の土起こし、田植え前の代掻き牛の鼻取りなどが子供の仕事だった。葛山では、麦踏みやカラウス（モミスリ）を手伝い、水くみやモシキ拾いも子供の大切な仕事だった。

子供の行事

子供たちが主体的に行う行事は、小正月のサイトヤキ（ドンドンヤキ、ドンドヤキ）である。深良では、子供たちが各家を回り、一月七日にはずした正月のお飾りを集めて歩いた。このお飾りでオンペヤサイノカミの小屋を作り、小屋に泊まり込んで遊んだ。茶畑の子供たちはお飾りとともに寄付も集め、そのお金でオンペを飾るだるまや羽子板、羽根などを買った。子供たちはドンドンヤキまでの間に、近隣のオンペのお飾りの盗みっこをしたものだった。サイノカミ行事が子供たち中心であるのは、サイノカミが子供の成長の無事を見守ったり、子守をしてくれたりする子供の神だからだという。

茶畑の峰下では、戦前には夏休みになると大日堂で自治学校と称して小学生が勉強をさせてもらっていた。大日堂の境内には、天神社と駒形神社がまつられているが、祭りは大日如来の祭りのときに一緒に行く。かつては天神講といて、二月頃、子供がいる家で少しづつ米や野菜を出してごちそうを作り、子供たちが大日堂に持ち寄ってそこで食事をしたものだった。このような天神講は、現在でも子供会の行事として深良や須山で行われており、ヤドは子供の家を輪番制で回っていたものが公民館になっている。須山の田向では、子供たちが屋敷に天神をまつる家に行って参拝した後、公民館で自分たちが調理した食事を全員でとる。このときには余興もあり、景品も出る。天神の掛軸は、翌年のリーダーとなる中学二年生が引き継ぐことになる。かつての天神講では、白飯が何杯でも食べられるという楽しみが子供たちにはあったものだという『須山の民俗』。ところで、天神講が現在も続けられているのは、学問の神



写真3-57 道祖神のお札配り(須山)



写真3-58 大日堂の子供相撲(茶畑)

である菅原道真をまつっているのもその一因で、田向のように行事として天神講をやっている地域以外でも、ことに受験生の合格祈願の参拝は多いという。

若い衆入り
と青年団

深良では、満一六歳になると若い衆の仲間入りをした。結婚前はワカイシユ(若い衆)、結婚後はチュウロウシユウ(中老衆)といった。若い衆はヨビヤ(ヨバイ)など夜遊びもし、若い女性たちが個人の家に集まっているところへ遊びに行ったものだった。後に、政策によって編制された青年団、青年会の組織名から、

若い衆のことを単にセイネン(青年)と呼ぶようになった(第二章第五節参照)。富沢では、この青年が大正初期に建てられたクラブ(青年倶楽部)に寝泊まりしていた。市域では、富沢のように青年たちがクラブで寝泊まりすることも多く、産土神の祭りには奉納相撲やシャギリ(車切り、囃子のこと)などの芸能を奉納することが盛んに行われた。下和田のテンノウサン(大六天神社)の祭りには、青年

の奉納相撲があった。他の地区からの参加者も多く、下和田の青年は風呂焚き役だった。また下和田からも、須山の観音のゴマズモウ（護摩相撲）、印野（現御殿場市）や今里の地蔵、葛山の中里の天神の祭りには相撲を取りに行った。茶畑の峰下の大日堂大祭には、かつて青年が主催する相撲が興行された。ハマ（沼津市千本浜^{せんほんはま}）の方からは浜千鳥、今里からは桜川、御殿場からは早房^{はやぶさ}などというしこ名の専門の相撲取りが来た。横綱から小結までの取り組み表を作り、専門の行司を雇って正式に興行した。賞品は、青年がマチに行つて洋品や家具などを商店に寄付してもらい、懸賞には世話人が赤飯の握り飯を出した。一九二〇（大正九）年四月から電気が通つたが、ホンズモウ（本相撲）は夜行われたため、電気が通る以前はランプの灯のもとでやっていた。戦争前くらいから青年の相撲となり、戦中は中止され、戦後しばらくして昼間に子供相撲をやるようになった。現在、子供相撲は多くの子供たちの参加によってさかんに行われており、相撲が終わるとやはり赤飯などの握り飯が参加者に配られる。かつて、多くのムラで神社や堂の祭りに奉納されていた青年相撲は、現在ではほとんどが子供相撲にとつて変わられている。

シャギリもまた、青年が盛んに行つた芸能活動の一つである。堰原では、熊野神社の祭りにシャギリをやっていた。箱根山の秣^{まぐさ}場の草を売つて屋台を買い、近隣では一番評判が良かったという。三嶋大社の祭りにも呼ばれて披露したこともあったという。富沢でも愛鷹神社の宵祭りやホウソウイワイに青年が一晩中シャギッタものだといひ、水窪では青年団が祝言のときによつてきてシャギッタという。一時期裾野中ではやつたシャギリは、現在では一九七四（昭和四九）年に須山の須山囃子と田向囃子が、一九八一（昭和五六）年に岩波のシャギリが復活し、それぞれ保存会を結成して祭りに演じられているのみである。

一人前

葛山の田場沢の一九〇二(明治三五)年生まれの男性は、佐野学校を卒業した一六歳のときに伊勢参りに行った。京都、大阪、奈良と回り、伊勢では古市に泊まった。帰ってくると、親戚や近所の衆が佐野駅まで馬で迎えに来ていて、それに乗って帰った。ムラに入ると馬上からメンコや菓子を撒き、家に着くとオフルマイをし伊勢音頭を歌った。また富沢の一九二四(大正一三)年生まれの男性は、中学校で伊勢参りに行ったが、フナイワイと言ってムラ中が佐野駅に馬で迎えに来ていて、その場で魚子織ななこおりの三紋の羽織と袴を着せられて全員でムラに帰ってきたという。ムラに入ると、富沢のイセミヤサン(伊勢宮、渡辺家の屋敷神)にまず参った。こういう出迎えは、長男のときのみだったという。伊勢参りは青年の代参という形を取っているが、青年が一人前になるための旅でもあった。女性も、初潮がきて初めて大人になる準備段階に入る。富沢では、生理の物はオテントサン(お天道さん、太陽のこと)に見せないように、陽の目にあわないと、既の隅に干したものだ。一九〇二年生まれの女性が生理になったのは一五、六歳の頃で、とてもびっくりしたが、年上の友達に聞いて処理した。綿を手ぬぐいに包んで処置し、汚れた綿は捨て、手ぬぐいは洗って日陰干しをしてまた使ったという。

一人前というのは、身体の成長だけではなく、イエやムラの一員として責任を果たすための仕事量によって判断されてきた。深良では、一人前というのは「イエをやる(運営できる)程度の人」「結婚して生活が少し安定しており、仕事を任せられる程度の人」をいった。そのためケンザイミヤ(経済前)は一人前とはいわず、「イエを継げば一人前」といい、イエのシンショウ(身上)をわたされて、初めて一人前のムラ人として認められることもあった。また、二一歳の「徴兵検査に通れば一人前」などといわれる時代もあった。富沢では、男はクラブにある一六貫のタワライシ(俵石)を担げれば一人前だといった。女は、「三十三把のイナ(稻)を扱ければ一人前」「機織りで一日に二

丈八尺じちゆう(一反のこと)織れば一人前」だといひ、それらができなければ嫁のもらひ手がないといった。また多くの女性が、結婚前に農閑期を利用して裁縫を習いに行っていた。

(二) 婚 姻

1 縁談の成立

結婚相手の決 定と通婚圏 葛山では「シンセキツナギにほしい。そうすれば先祖が浮かばれるから」といって、親戚同士で婚

姻を結ぶ場合があったという。このような話は、市内全域で聞かれ、たとえば上ヶ田から深良の上原へ嫁いだ人の孫が、「先祖の血が切れるから」といって深良から上ヶ田に嫁に来ることもあった。このことをエンツナギ(縁つなぎ)といっているが、戦前まではエンツナギをすることが盛んに行われていた。またエンツナギの一つの方法として、イトコゾイがある。今里の一九二二(大正一一)年生まれ的女性は、一九四二(昭和一七)年に親に言われるがまま同じムラの同じ組のいとこに嫁いだ。戦前までは結婚の最終的な決定権は、多くが親にあった。金沢では「嫁にくれるにはカワバタ見てくれろ(水に苦勞しないように)」などといひ、平松では「おついたシンシヨウのところに行ったもの(分相応の家に行くもの)」というように、親や周囲の大人たちの判断によって、結婚相手が決められていた。なお、葛山や千福には、ウチウマレとかウチムスメと呼ばれる婿取りが、大正時代生まれまでの女性に多い。

嫁取り婿取りをする範囲は、下和田では「一日で歩いて帰る範囲」、麦塚では二里か三里以内の通婚圏で、ムラウチ(村内)での結婚はかつては葛山や深良でも多かった。下和田ではムラウチの家と家との結婚が多く、「シヨウ(素



写真3-59 坊津平 (御殿場市神山)

性が知れているからいい」といった。嫁が里帰りしても、客扱いをしてもらえず泊まらずに帰ってきたものだったという。ムラウチ以外では、近隣のムラや旧村(戦前の行政村)内での結婚が多かった。ところで市域には、「転ばばシモへ」という言い回しを使う地域がある。どうせ転ぶなら下へ転べ、というのは嫁へに行く方向性を示している。下和田や御宿、岩波などで聞くことができたが、その理由として「上(北)は寒く下(南)は陽気が良くて、農作物がた

くさんとれて暮らしが楽だ」というのである。岩波では、御厨(御殿場)地方からの縁談が来ることを嫌った娘もいたといわれる。比較の問題ではあるが、駿東地方の中でも北駿(小山・御殿場)地方の方が霧深く気温も低い。中駿(裾野・長泉)地方では須山・下和田あたりが最も霧の発生しやすい地域である。霧は、須山街道では下和田・今里境の通称馬の目坂(うまめざか)から上で、岩波では神山(御殿場市)・大坂(同市)境の通称ナミキ(坊津平)を境に深く立ちこめるといふ。このような自然環境の差から、少しでも条件の良い南方への結婚を望んでいた。

しかし、「今里は水がなくて大野越しなのでいやだ」といったり、「富沢のセギ(堰)と山道を見たら、嫁へにくれるな」、「公文名は祭りが多くてたいへんだ、石脇は祭りが少ないから休みが少ない」などといって、生まれ育った土地よりも苦勞する土地への婚入を忌んだ。同様に、黄瀬川を挟んで嫁へにくれる土地を嫌う地域もある。岩波や深良では川の東岸と西岸地域

同士の結婚は、習慣が違うのでやらなかったという。カワムコウからヨメッコ・ムコに来て、橋が架かっているのに、ので里帰りができないともいう。ちなみに深良にとってのカワムコウというのは旧富岡村で、逆に旧富岡村の方でも御宿などでは対岸の深良・公文名とは仲が悪いといっている。これは、子供たちが遊びの中で、石合戦をするというようなところにも現れてくる。ところで、黄瀬川の兩岸地域同士の結婚はすべての地域で行われなかったわけではなく、たとえば富沢と深良では嫁婿取りが盛んに行われていた。一説には、富沢では大野原の草を深良から買っていた縁があったためだともいわれている。富沢から深良へは、黄瀬川の橋がいくつか架かっており、川を渡るのに不自由しなかったため川による遮断性が双方の土地には感じられなかったことも理由の一つであろう。

このような通婚圏を持つ市域の中では、特に一定の地域との姻戚関係を結ぶところがある。須山には御殿場市印野・原里はらさとから嫁に来た人が多くいる。現在ではしだいに減ってきているというが、それでも三〇人ほどいる。そこで近年、印野出身者で婦人会の五〇代のメンバーが中心となって「印野会」という親睦会を作ったりしている。印野方面からの嫁たちは、互いに姻戚関係にあるだけでなく生活上でもつきあいが深いのである。印野から須山への嫁入りは、一つにはセワニン(世話人)の力量によってもいる。上手なセワニンの存在は、ある時期の通婚圏に影響を与えることもある。

見合いと恋愛

一九四〇年代までに結婚した人の多くは、見合い結婚であった。この場合、まずクチキキ(口利き)とかハシワタシ(橋渡し)と呼ばれる人が縁談を持ってくる。須山ではこの人をナイゼワ(内世話)とかナイゼワニン(内世話人)ともいう。クチキキはシンルイや親しい友人が、年頃の若い衆や娘の縁談を持ってくることをいう。深良ではこのクチキキが仲人をすることもあるが、一般には仲人とは別に、男女を引き合わせ見合いを設

定するまでの仲介役をさすようである。

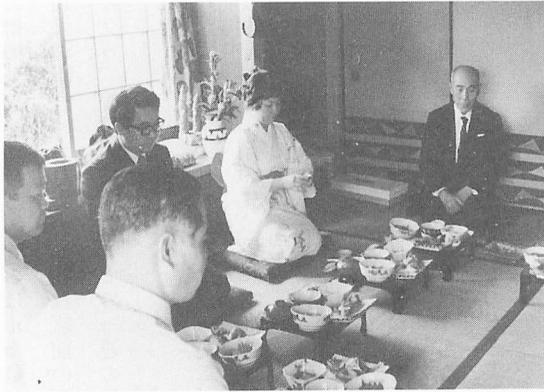
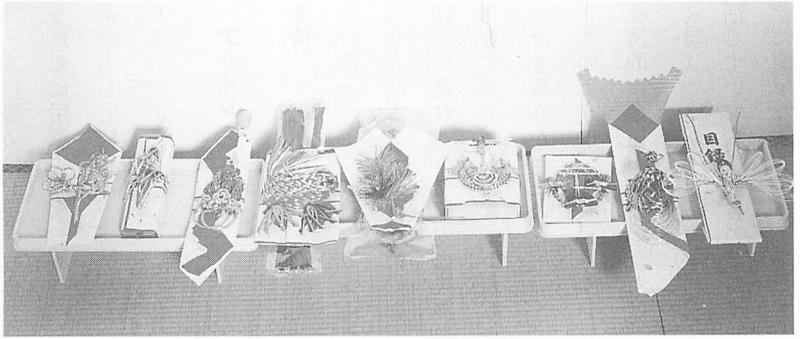
いよいよ見合いとなると、仲人をたて、仲人の家か女性の家で初めて顔を合わせる。仲人のほかに男性側では当人だけが、女性側では両親が待っている程度のものであった。見合いの席に当の女性が同席することはあまりなく、お茶を出すのがその役目だった。出したお茶を婿になる男性が飲まなければ、この話はブク(破談)となった。つまり相手を気に入らなければ茶を飲まなくてもいいわけで、縁談の主導権はあくまでも男性にあった。それに対して女性は、親が嫁に行けといえ嫁に行つたといひ、縁談はあくまでも受け身の立場であった。一九四一(昭和一六)年に結婚した茶畑の男性は、小山町藤曲ふじまがりから嫁を迎えたが、こういう暗黙の了解の約束ごとがあった見合いはそんなに古い話ではなかったという。かつては親が決めた相手とは祝言のときに初めて顔を合わせた、という場合の方が多かったようである。そのために、祝言を挙げたあとで実家に戻ってしまう嫁も少なくなつたという。

このような見合い結婚とは別に、恋愛結婚で結ばれた夫婦もいる。現在でこそ珍しくなくなったが、親に結婚の決定権があつた時代には若者たちにもそれなりの手順が必要であつた。下和田では、親が恋愛結婚を許さない場合は女性が隠れ、よその家に頼んで身を置かせてもらひ、その家の人に仮親になつてもらつて嫁入りをした。葛山ではこれをカケイリ(駆け入り)といっている。また市域では、ヨビヤ(ヨバイ)で子供ができたために親が結婚を認めたり、駆け落ちをしてよその土地で所帯を持つたりすることをドラブチとかドラブッタと称している。須山では、こうして生まれた子供をドラッコと呼んでいた。県内でドラブチ(ドラウチ)をする地域は、伊豆から県東部地方にかけてであるが、県外でも神奈川県・山梨県など関東地方に広く分布する習俗である。ドラブチは前述の例のほかに、若者仲間による「嫁盗み」などと解されることもある。

サケ

見合いで話がまとまると、サケとって祝言の約束をする儀式を行う。須山ではサケスマシともいう。仲人は婿側・嫁側それぞれ一組ずつ二組たて、見合いから祝言までの世話を見てもらう。特にもらう側の仲人は、サケで祝言の日時の取り決めなどをする重要な役割を担う。この仲人のことを須山ではセワニン(世話人)という。仲人はつきあいの深い家に頼んだり、本家やイットー(第二章第三節参照)の家に頼んだりする。水窪の一九一七(大正六)年生まれの女性の場合は、タノマレナコウド(頼まれ仲人)で、懇意の人を頼んだ。茶畑では、仲人というのは自分の子供の人数と同じ回数だけ仲人を務めれば、一人前の恩返しができたとことになるという。また、仲人はやりすぎると身上を傾けるともいい、二、三回やれば恩返しをしたとみなされた。後述するカネオヤとは違い、仲人のつきあいは祝言のときのみ、あるいは深良のように初子が七歳になるまでとする期間であるが、中には一生つきあう人もいる。

麦塚では、サケは嫁となる女性の家でやる。婿側からは親戚総代二人、タルカツギ(樽担ぎ)、仲人、親、本人などが来る。このとき、迎える嫁側では婿側よりも多い人数になるようにした。戦争中、相手に召集令状が来たために祝言を急いであげた須山の女性は、サケスマシにはセワニン二人、オモナシンセキ二人、本人などが奇数人数で来たという。ナキヤの神棚の下でセワニン二人とその他の人たちが向かい合い、婿側のセワニンが持参した酒一升を、嫁となる女性が酌をして回ったという。一九一五(大正四)年生まれの茶畑の男性の場合は、オシヨウバン(お相伴)という司会役がいて婿、嫁、仲人、オヤサン(カネオヤ)、オサメ(納め)の仲人の順に盃を交わしたという。しかし一般的には特にサカズキゴトはなく、酒を酌み交わす程度のものであった。祝言の日取りや参列する人数を具体的に決める日でもあり、茶畑ではサケの後ほだいたい一カ月くらいのイト(間)に祝言をあげるようにしていた。祝言の日取りは、



1
写真3-60 結納
1 結納品(平松・千代田屋)
2 サケ(1972年・茶畑・鎌野公種氏提供)

農閑期の大安吉日が選ばれた。このサケの最中に、富沢では嫁の仲人に伴われて婿の近所回りをすませた人もいる。嫁の実家が遠く、一般に行われる祝言の際のムコイレ(後述)が難しかったためである。またこのサケを、見合いで話がまとまった後、すぐに引き続いて行うこともあった。茶畑の峰下では、男性が見合いで女性

2
性の出した茶を飲めば、すぐにサケになったという。水窪の女性の中には、サケで初めて相手に会ったという人もいた。くれる側の実家が遠かったり、時間的余裕がないときにはこのように簡略化されていたようである。

サケがすむと、イイノウ(結納)をする。実際には、このイイノウをサケと同時にやっている。イツイロ、ナナイロなどといって五種類とか七種類の品物を用意するが、葛山ではもらう側が持参する結納品は、目録・結納金・寿留女・末広・子生婦・長鬘

斗・友白髪ともしらがりのほかにのしをつけた柳樽などをつける。このほか下駄は、仲人が「足を運ぶから」といって履いてもらうために用意する家があった。市域の場合、これらの品物は駅前前の商店で調達することが多い。イイノウの後、嫁が茶を出して終わる。サケからイイノウ、祝言の披露宴までの一連の行事の締めくくりは、常にこの嫁のお茶出しで終わるのである。

アシイレ

堰原の一九〇七(明治四〇)年生まれ的女性は、一九二七(昭和二年)四月に祝言をあげた。実家の深良から歩いてまず婿側の仲人の家へ行くが、婚家の前を通らないようにして回り道をしていき、夜になるのを待って婚家に入った。嫁側からは嫁、両親、仲人の男性一人、親戚総代一人が行き、客はシュウト(姑)の兄弟夫婦ら이었다。これはホンシユウゲン(本祝言)ではなく、アシイレ(足入れ)だったので、客はあまり呼ばなかった。嫁入り衣装もアシイレなのでよそ行きを着ていった。翌日、墓参りをして、檀那寺である水窪ちよとくまの長教寺ちよとくまへも報告に行き、仲人に連れられて組内に挨拶に行った。アシイレではサケはやらなかったが、婿の仲人が一人で来た。また、イイノウもアシイレが過ぎてからもらった。後から祝言をやるものだと実家の方では待っていたが、とうとうホンシユウゲンはやらなかったのだという。

このように、ホンシユウゲン前に仮に祝言をあげて、婚家の家族の一員として生活を共にするのがアシイレである。経済的に余裕がない場合には、ホンシユウゲンをあげずアシイレだけですませ、婚姻を成立させてしまうこともある。しかしアシイレの後、約半年でホンシユウゲンをあげる場合も少なくない。その場合には、アシイレをして婚家で生活していても、祝言の前には一度実家に帰り、そこから嫁入りするようにしていた。また、茶畑のようにサケの後すぐに簡単なオフルマイをして、嫁入りをすませるところもある。姑に気に入れないときには、このアシイレ

の最中に嫁が実家に帰されてしまうこともあった。つまり、婚家にとって嫁は大切な労働力の一助となると同時に、婚家にとってふさわしい嫁であるかどうかの試験期間でもあるわけで、アシイレがすんで共同生活を送っても嫁にとっては安心できない時期なのである。嫁は初子を産んで初めて籍を入れてもらうという場合も、決して珍しくなかった。なお深良には、アシイレ期間には実家と婚家とを行ったり来たりの生活をしたという人もいる。

カネオヤ 仲人とは別に、もらう側ではカネオヤの夫婦一組を頼む。カネオヤというのはオヤサン、オヤブン(親

分)、オヤブンサンなどと呼ばれ、深良では結婚に際して親代わりとなって新婚夫婦の面倒をみてくれる人である。一方カネオヤは、新婚夫婦をコブン(子分)、コブンサンと呼んでいる。

葛山ではカネオヤをオモナシンセキに頼むこともあったが、チエン(血縁)でない方がいいともいい、縁のある「他人」を頼むことが多かったという。しかし、大方はコブンの経済的援助ができる財力のある家に頼むものだとしている。したがって、オーヤなどの本家筋に頼む家もある。深良の町田では、カネオヤの家は代々決まっております、両親と同じカネオヤの家の当主に世代交代しても頼んでいる。また同じ深良でも、原では特定の家に頼むのではなく、互いにオヤブン・コブンの関係結びあうところもある。これは、その地域によって財力のある地主やもと名主だった旧家の影響力に差があるためであろう。たとえば御宿の湯山の三家は、御宿の大半の家のカネオヤをつとめてきた。仲人が、祝言を挙げた夫婦一代限りのつきあいが終わることが多いのに対し、カネオヤは昔から二代も三代も同じ家に頼むものと決まっている。富沢には戦争中、コブンの家で主人が出征して子供供だけの生活を強いられたとき、カネオヤには物心両面ですいぶん世話になったという家もある。戦後その関係は薄れてきてしまっているが、それでもなおコブンが、初物がとれたときや旅行に行ったときには土産を持って行くとか、カネオヤの家の盆の墓参りやお



写真 3-61 カナダライ
(平松・ことぶきや金物店)

供えは欠かさないという家もある(第二章第三節参照)。

かつて、女性は結婚すると眉を落としお歯黒をつけた。カネオヤとは鉄漿^{かね}つけ親のことで、嫁のお歯黒をつけてくれる親のことをいい、その名残として結婚祝いにカナダライ(金だらい)を贈る習慣があった。お歯黒の道具の代用として、洗面用具や化粧品をそれにつける。近年までこの習慣を守っているカネオヤもいたようだ。カネオヤの贈り物は、祝言の当日床の間に飾られる。

嫁入り道具

嫁入り婚の場合、祝言の一週間くらい前に嫁入り道具を先に婚家に送った。深良のある女性は和^わ箆^{だんす}、夜具、下駄箱、鏡台、整理ダンスなどを持ってきたといい、須山のある女性は鏡台、針箱、箆^{だんす}、長持^{ながもち}、挟み箱、張り板、裁縫台、布団、座布団などを馬力で運んだという。着物は、かつては自分で農閑期に糸を染めて機織りをし、それを仕立ててひととおり持っていたものだという。水窪のある女性は、農閑期の冬に養蚕の繭から糸を取って布を織り、裁縫を習いながら仕立てていった。鉾^{かほ}仙^{せん}が最高の普段着で、もんぺなどの野良着、襦袢、普段着、よそ行き、訪問着など羽織だけでも二〇〜三〇枚持ってきたという。婚家に着いた嫁入り道具は、須山ではザシキに並べられて披露されたが、手伝いのオンナシ(女衆)が箆^{だんす}などを開けて見たものだった。これをオカタミという。

2 祝言

ムコイレ

結婚式のことをオシユウゲン(お祝言)という。また花嫁のことを須山ではハナジヨロといていたが、現在ではヨメツコとかオヨメサンなどと呼んでいる。ここでは嫁入り婚を中心と述べることにする。祝言はまず婿方が嫁方を迎えに行くムコイレ(婿入れ)から始まる。深良では、婿方は婿と婿の仲人一人、オモシンセキが父親方から一人、母親方から一人、タルカツギ(樽担ぎ)のワカイシ(若い衆)が一人の計五人で嫁の仲人の家に行く。ここで昼食を取った後、午後一時頃嫁方の仲人に連れられて嫁の実家に行く。嫁方では嫁と嫁の両親、嫁の仲人、オモシンセキ一人、オコシヅキ(お腰つき)といわれる嫁の介添え役の女性などが婿方よりも多い人数で待っている。嫁の実家では盃を交わし、簡単なオフルマイをする。この宴会の最中に、婿は嫁の仲人に連れられて近所への挨拶回りをする。須山ではこの祝言をクレシユウゲンといい、葛山では盃は、仲人、嫁、家族、親戚総代の順に交わすという。また須山では婿の近所回りのことをカオミセ(顔見せ)という。茶畑ではこのときに、半紙を三つ折りにし、一寸五分くらいの幅の半紙で帯をして、婿の苗字を書いたのし紙をつけたものを持参し、各家にそれを配って歩いた。その後、婿方は嫁方よりも一足先に婚家に戻る。

嫁入り

嫁入り行列が出発するのは、多くが夕方である。富沢では、行列は嫁のほか仲人、嫁の両親、親戚総代、コショウヅケ(小姓づけ)などで構成され、婿方の人数より多くし、必ず奇数の人数で行くことになっている。また茶畑の道^{みちうえ}上ではニモチ(荷持ち)という荷担ぎ役がついて、荷を馬に載せて持っていたが、やがて自動車にとって変わられた。なお前述した深良ではオコシヅキといっているが、地域のほぼ全域でコショウヅケと呼ばれ、年輩の女性が嫁の世話をするためにつきそう。嫁の母親の実家の女性など嫁の叔母にあたる人で、後には仲人の妻が代



写真3-62 嫁入り
(1959年頃・葛山田場沢・芹澤正己氏提供)

理でやることもあった。

さて、嫁入り行列は嫁の実家を出ると、婿方の仲人のところ
に寄る。葛山では知り合いの家に寄らせてもらうといい、そこ
でお茶を飲んで時間調整をし、夜になるのを待って婿家に向か
う。祝言は戻ることを忌むので、休憩をする家は婿家より手前
にある家を選ばれる。ムラウチでの結婚は歩いていくことがで
きたが、一九四〇年代以降の結婚は村外婚が増え、タクシーや
ハイヤーを使っただけの嫁入りとなる。こういうときでも、婿家
に入る前に立ち寄る家で自動車を降りて休憩をし、そこから歩い
て嫁入りをする。また茶畑の道上のように、氏神の浅間神社に

参り、仲人とともに道上全戸にカオミセに回ってから初めて婿家の入り口をくぐったという地域もある。

花嫁衣装は一九一〇〜四〇年代頃までは、裾模様のある紋付きの江戸褌が多かった。しかし財力や家の事情などで、親のものを着たり古着を借りたりすることもあったという。また日中戦争などの戦争のために、江戸褌でも派手すぎるといわれる時代もあった。経済的に余裕のある家では、白無垢を着て嫁入りをし、オフルマイで江戸褌に着替えたという。髪は髪結いに高島田に結ってもらい、角隠しをした。婿は紋付きの羽織袴を着た。

嫁の一行は、婿家でのマエブルマイ(前振る舞い、後述)が終わるのを待って出発することになる。深良では仲人の家に婿方が迎えにきていて、その人たちに連れられて提灯をつけて向かう。いよいよ婿家のジョーグチに入ると、葛

山では嫁入り唄が歌われる。また富沢では、男女の子供が家のトンボグチの両脇に立って提灯を持って出迎える。この子供たちは、両親がそろっている子供たちのうち長男および長女で、だいたい小学校三年生くらい(七、八歳くらい)の子供があたり、サカズキの際には雄蝶雌蝶おちようめちようとなる。子供たちが立っているのは場合によっては門の前だったり、ジョーグチだったりするが、嫁がこの提灯の間を通ると同時に位置を入れ替わったり、提灯を交換したりする。須山では右回りで位置を替え、提灯の火を消してトグチ(戸口)を閉める。この「門を閉める」ということは、「一度入ったらもう二度と出ないように」という意味である。

オオドから入った嫁は、深良ではザシキの入り口に座って列席者に挨拶をする。また富沢でも、祝言をあげる部屋の入り口に座ってまず挨拶をし、婚家の神棚と仏壇を拜んでからザシキに上がったという人もいる。ザシキに上がるとすぐに祝言が始まるのではなく、茶や菓子をもらうこともある。このとき嫁は土産を持参してくるので、嫁方の仲人から婚方の仲人に手渡され、それを床の間に飾ったり神棚に上げたりして披露する。下和田では嫁の土産は袴料のほか、サケ(この場合はサケに引き続いて行われた結納のこと)の品物七品の中から二品だけ抜いて持ってくる。また茶畑では、嫁が婚家の家族一人一人に見合った品物を用意したという。特に駿東地域ではチャブクロ(茶袋)やコブクロ、コンブクロ(米袋)などといわれる手製の袋に、茶や米を入れて持ってくる。富沢ではこの袋のことをチャコンブクロ(茶米袋)ともいい、市域では二つではなく一つの袋に米や茶を入れて持ってくることが多い。茶畑ではチャブクロに米一升と茶を入れ、台の上に乗せて持っていく。あるいはこの袋には、「マメで育つように」と大豆などの豆類を入れて持っていくともいう。この土産は膳か盆に載せ、その上にジュウカケ(重かけ)か袱紗ふくさをかける。コブクロは米一升から「一生ここにいろ」という嫁の親の願いをこめると同時に、「子供ができるように」と「子袋」という意



写真3-63 コブクロ (深良)

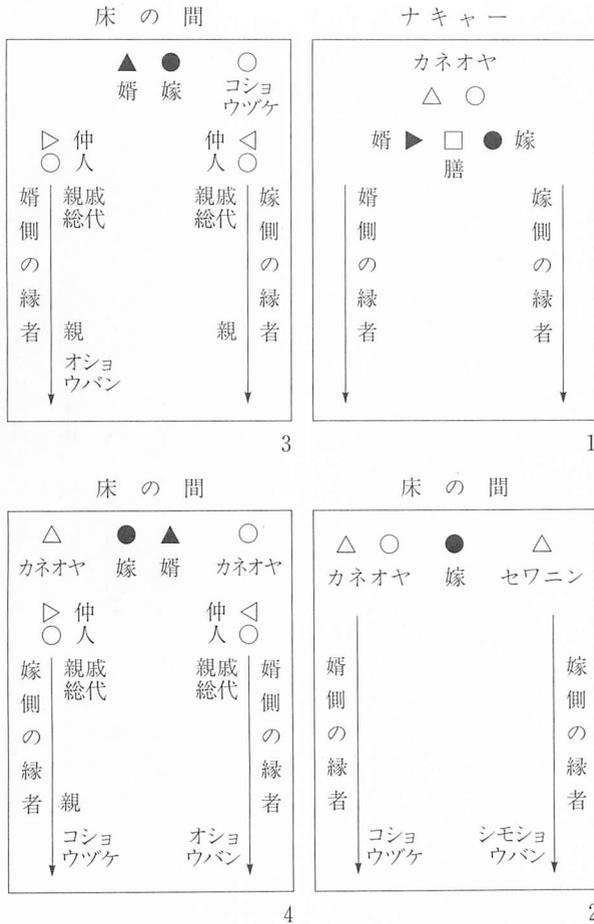
味も兼ねている。嫁の母親が、一升^{ます}杓の底を使って測り、端切れを縫い合わせて作る娘の門出を祝う品である。このコブクロは、祝儀・不祝儀のつきあいの中で米一升を持っていくときに入れるための袋となり、嫁入り道具の必需品であった。

祝言

祝言は、現在のような総合結婚式場で行われるようになったのが一九七〇年代からで、それ以前は自宅で行われていた。また一九五〇年代半ば頃からの一時期には、農協の会場を借りて行うこともあったという。かつての祝言は、準備を含めて少なくとも三日間はかかり、イエによっては一週間とか一〇日間と続くこともあった。また水窪では、このようなホンシユウゲン(本祝言)は長男のときのみで、次男以下の子供たちはやらないことも多かったという。

さて自宅での祝言の場合は、サカズキを行う部屋と本膳を行う部屋を別にする場合と、サカズキから本膳までを場を変えずに引き続いて行う場合とがある。富沢では祝言の部屋は家によって違うが、床の間付きのザシキとナキヤ一の二間をつなげるか、オクザシキ・ナカザシキ・ナキヤ一の三部屋をつなげて使った。そこに親戚や組の衆が座って待っていた。また親戚の衆の祝儀は、袋に入れた米をオハチに入れて持ってくる。これらはざらっと縁側に並べられたという。座順は図のようにイエやムラによって多様だが、上座に婿と嫁、その両側にカネオヤ夫婦か仲人が座ることが多い。また茶畑では、婿側の末席にはオシヨウバン(お相伴)と呼ばれる進行係が座り、嫁側の末席にはコシヨウツケが座った。また須山では、カミシヨウバン(上相伴)とシモシヨウバン(下相伴)という二人のオシヨウバンをたてた。葛山では本膳の列席者は必ず「はす(端)の数(奇数)」にするといい、一三人から一九人くらい、多いときには二五人

第4節 一生の生活



図表 3-80 祝言の座順 (例)

- 1 サカズキの席
- 2 須山の本膳
- 3 水窪の本膳
- 4 茶畑の本膳

くらしいの人を招いた。
 三三九度の盃を交わすことをサカズキといい、雄蝶雌蝶は先の嫁入りの際、提灯を持って迎えた男女の子供がつとめる。本膳の座順のまま行う場合には、茶畑ではミョウトサカズキ(夫婦盃)の後、カネオヤ、親子とそれぞれ盃を交わす。あるいは夫婦の三三九度の後、婿人、カネオヤ、親戚の順に盃を回し、最後に親子の固めのサカズキをする。

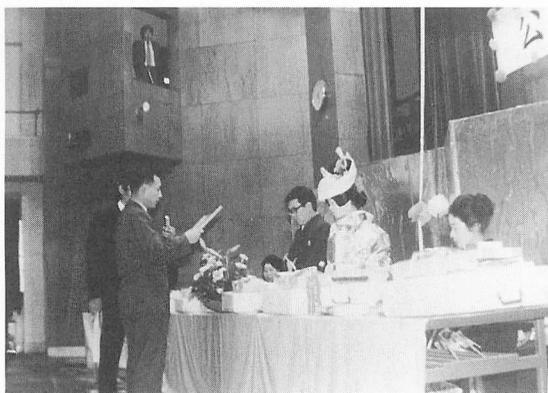
また、サカズキは夫婦で交わすものだけという場合もあり、そのときにはザシキの真ん中の畳一枚に膳を挟んで婿と嫁が向かい合い、三三九度を行う。麦塚では、この三三九度の前にカネオヤが「おまえたちは死ぬまでちゃんとしているか、オヤのいうことを聞くか」と列席者の前で因果を含ませたという。須山の十里木では、このサカズキをナキヤードでした。このようにサカズキを本膳の部屋とは異なる部屋で行う場合には、サカズキの当事者だけでナンドなどでやることもあったようだが、富沢では別室でやるのはオダイ(お大尽)だけだともいう。

サカズキが終わると、オシヨウバンの司会進行で披露宴が行われる。披露宴のうちカネオヤや仲人のほかコイミウチ(濃い身内)やコイシンセキ(濃い親戚)などを招く正式の宴会をホンセン(本膳)といい、マエブルマイに対してホンブルマイ(本振る舞い)ともいっている。本膳の料理は、茶畑では奥にクチトリ(口取り魚)、手前に高足膳が置かれる。膳にはオチツキの吸物、ネギシラガ、ハス、かまぼこ、羊羹ようかんかきんとん、なます、オヒラ(煮物)、酒など七、八品がつく。クチトリはタイの尾頭付きかエビなどで、手伝いの男衆がオモテで焼く。オチツキの吸物というのは歯固めの吸物でもあり、丸餅かダイコンのようなものを入れる。ネギシラガは白髪ネギを束ねたもので、「共白髪」という意味の縁起物である。膳椀などの道具一式は本家筋にあたる家が三〇組ほど所有しており、分家の祝言の際には無償で貸し出したものだった。これで二の膳くらいまでは出すことができ、料理はすべて近所の女衆が手伝って何日も前からしたくをした。水窪では、かまぼこは職人が米の粉を紅白に染めて蒸して作ったという。須山では、このほかに縁起物として大豆二粒が添えられた。

本膳になると、嫁はラクザ(楽座)となり、角隠しをはずす。また二度ほどよそ行きに着替える。婿は席を立って、客の相手をする。須山では、婿はサカズキが終わるとすぐに席を立てて袴を脱ぎ酒の番をするので、客の前に出てこ



1



2

写真3-64 祝言
(1972年・茶畑・鎌野公種氏提供)

- 1 結納品のお返し
- 2 市民会館での披露宴

ない。そのため本膳での婿の席はない。

この祝言の最中、ノゾキとかノゾクコミなどといって、ムラの子供や若い衆が障子に穴をあけて宴会の様子を覗きに来て、外からからかったりした。葛山では、本膳の席で嫁がものを食べたり飲んだりすると、あとでさんざん冷やかされた。下和田では、祝言のために貼りなおした障子がびりびりに破かれてしまったものだという。また水窪では、青年団がシャギリをやった。異装をした若い衆が、オモテで囃子に合わせて踊ったりしていた。こうして本膳が終わ

るのは夜が更けてから、あるいは明け方近くになり、嫁が島田に結っていた髪を丸髷まげになおしてもらい、少し上等の普段着に着替えてから、客一人一人に茶を出してこの宴席は終わりとなる。須山では、この嫁のお茶をイケツチャという。本膳以外にもオフルマイのたびに、嫁はお茶を出す。

オフルマイ

披露宴は本膳だけで終わらず、座を替えて何度かオフルマイをする。家によっては、オフルマイを本膳のあとと引き続いて行う場合と、祝言の翌日行う場合がある。須山では本膳のことを一番座といい、

その後二番座、三番座まで引き続いて宴席があった。一番座のことをホンザシキ(本座敷)ともいい、二番座には組内の男衆が、三番座には女衆が呼ばれた『須山の民俗』。また同じ須山でも、二番座までという家もあり、一番座に親戚と近所の男衆を、二番座に女衆を呼ぶという。下和田では本膳の前にマエブルマイをし、本膳でホンブルマイ、ホンブルマイの翌日や翌々日にワカイシブルマイ(若い衆振る舞い)とオンナシブルマイ(女衆振る舞い)をした。マエブルマイというのは、近所の男衆やウスイシンセキ(薄い親戚)を招く、嫁入りの前に婚家で行われるオフルマイのことである。マエブルマイが終わる頃、嫁入り行列が入るように調節するが、ヨメッコを賑やかに呼び込む効果もあった。葛山では、膳は本膳より簡略化したものだったという。しかし、必ずしもマエブルマイをやるというわけではない。祝言の翌日に、若い衆を招くワカイシブルマイ、セイネンブルマイ(青年振る舞い)も市域ではほとんどの地域で行われていた。

水窪では、祝言の手伝いはモヨリごとだが、旧家でつきあいが多い場合には手伝いの人を多く頼む。御宿では一九三〇年代前半までは、長男の祝言にはイットーも手伝いに行ったものだった。こういう手伝いの人、特に女衆に対しては一席設けてその労をねぎらった。オンナシブルマイでは、取り持つのは嫁と婚家の家人と親戚の人たちで、婿は酌をして回った。現在では、ほとんどの人が総合結婚式場で結婚式を挙げているが、このようなモヨリや近所づきあいはいまだに続いているところもあり、披露宴には互いに招待し合っている。また須山では、長男の結婚式に限り須山の自宅に戻って披露宴の二次会のようなものを行っている。いわば現代の二番座のようなものかもしれない。

嫁のムラ入り

葛山では、祝言の翌日にオモナシンセキが米などを持って祝いにやってくる。これがオカタミセというが、この返礼としてその翌日ぼた餅を嫁に作らせて配った。また富沢では、祝言の翌朝はオカタミといつて、近所の女衆が集まってぼた餅作りをする。このとき祝儀として、近所の人たちは米を一、二升持つてくる。ぼた餅はヨメッコにまず最初の一つか二つぐらいを作らせる。そうすると「早くこしらえなよ」などと言いつて、テンダイ(手伝い)の衆が全員で作りを始める。このぼた餅をスワリ(ノ)ポタモチ(座りのぼた餅)とかオカタミ(ノ)ポタモチとかいい、このぼた餅を一緒に食べて手伝いの人たちをねぎらう。これが女の人たちのオフルマイとなる。現在では自宅で祝言を挙げないが、式場での結婚式の翌日、あるいは新婚旅行から帰ってきた翌日に婚家だけでやはりぼた餅作りをする。公文名のぼた餅は長円形の餡を入れたまんじゅうで、餡が多いとシンシヨウモチ(身上持ち)が悪いといつた。水窪のスワリノポタモチは糯米のお焦げを丸めて、嫁に作らせる。焦げ付いてもらわないと困る、居座ってもらわないと困るといふ意味が込められているといふ。現在でもやはり、近所の衆は来ないがウチニンズウ(内人数)で縁起もんだからといふ、一個でも二個でも嫁が作る。市域ではこれをオチツキ(ノ)ポタモチ(落ちて着きのぼた餅)といふところもあるが、叩いてつぶしたご飯を丸め、餡を煮た鍋に入れてまぶして作る。この餡は塩味で、嫁が甘くならないようにするためである。なお、須山ではオチツキ(ノ)ポタモチを作らない。ぼた餅は不祝儀に作るもののだとして、縁起物に向かないからだといふ。

嫁の近所への挨拶回りは、祝言の当日か翌日に行われる。富沢ではサカズキの後、宴会中半ばが過ぎた頃にコシヨウツケ(小姓付け)が嫁を連れて近所に挨拶に歩いた。このとき土産に持ってきたチャコンブクロを、盆に載せてコシヨウツケが持つて歩く。須山では茶の葉をぎっしり詰めたコブクロを盆に載せ、ジュウカケをかけて持つて歩く。半

紙を抱き合わせたものに水引をかけ、それに嫁の名前を書いたものを配った。後にこの半紙は、名前を染め抜いたタオルになった。このときは、近所だけでなく氏神にも参ることになる。また葛山では、近所回りをしなければ村民として認められないし、周りの人も村民として扱わなくてよいことになっていたという。須山の田向では、組内だけでなくムラ中を回り、四月一八日の須山浅間神社の例祭には髪を結いなおして参拝に行く〔須山の民俗〕。

里帰り

祝言後三日目に、赤飯を持って里帰りすることをミツメといている。葛山では、婿や姑、仲人が同行し、赤飯のほか土産物を持っていく。嫁の実家では仮の祝言のようなものを行ったり、婿が仲人に連れられて近所回りをしたりした人もいる。須山では、嫁の実家で「マメで一升(一生)暮らすように」と、大豆か小豆を一升持たせて帰した。また婿取りの場合、深良では婿と嫁、嫁方の仲人、嫁の両親の五人くらいで里帰りをし、名入りの手ぬぐいを婿の実家の組内に配った。茶畑では、嫁入りで一一緒にやってきた嫁方のコショウツケが、ミツメのときに嫁と婿方の姑とともに祝言以来初めて帰るともいう。つまりコショウツケは、本膳のあと嫁方の客とともに帰らず、そのまま婚家にとどまって、確かに嫁が婚家におさまったことを見届ける役目なのである。ところでミツメには泊まらずに帰ってくるのが一般的だが、実家が遠かったり時間が遅くなったりしたときには一泊して帰ってくる。このようなときは、葛山ではメシジュウ(飯重)にまんじゅうを入れて持ち帰り、里帰りの土産として近所に配ることもある。嫁の里帰りは、これ以降は盆と正月、節句のときくらいで、自分からはなかなか言い出せなかったという。葛山では、嫁は「親があれば(生きていれば)ヒガンメエリ(彼岸参り)なんて行かなくていい」とも言われた。

新婚への

泥投げ

深良では、かつて田植えの際に祝言を挙げたばかりの新婚夫婦が泥を投げられたり、田の中にフンゴマレ(落とされ)たりしたという。また葛山では、一九六〇(昭和三五)年頃までは田植え完了間際に、デロ

ブチあるいはデロカケといって青年が新婚の夫婦に田の泥を投げつけていた。全身泥だらけになり、逃げると家まで泥を持って追いかけた。嫁が田に入らずに留守番をしているときには、家まで泥を持っていったという。豊作と子宝を願って行かう泥打ちの儀礼である。

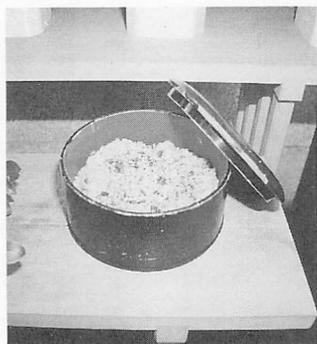
(三) 厄年と年祝い

1 病氣平癒祈願

公文名のはや 公文名では、七月一六日の馬頭観音の祭りにはサイノカミの念仏もあわせて行い、夏のはやり病をり病よけ祈願 よけるための祈願をする。まず馬場があったデハライの山の観音で念仏をあげ、次にウマツクレー

バの観音で同様に念仏をし、最後に鹿島神社前の観音に念仏をあげる。供物は赤飯の握り飯(もとは小豆ご飯)と決まっています、かつては山で草刈りをした若い衆が必ず寄って握り飯を食べていったものだという。最後にサイノカミとカゼの神にはやり病にならないようにと願をかける。文言は以下のとおりでそれぞれ三回ずつ唱え、オハタシは一〇月頃に行う。

- 1 サイノ神よくしておくれよ つじのばん
はやりびょうきをのがしたまへよ
- 2 ゆわふねに のぼりておがむじぞうさん
はやりびょうきをのがしたまへよ
- 3 はこねやま のぼりておがむじぞうさん



4



1



5



2

写真3-65 夏病みよけ祈願

- 1 サイノカミへの願かけ
(公文名)
- 2 厄神社の祭り(上ヶ田)
- 3 地藏盆の百万遍(今里)
- 4 供物の赤飯(上ヶ田)
- 5 ミツムネサンの念仏
(伊豆島田)



3

しばつみあげて はらのりゅうがん

4 風の神 よけてとおれよこのかどを

くうかいくうの あらんかぎりは

5 とうとやとう あらしばやまをふみわけて

まいりおがみて ぼだいいのらん

この歌念仏は、近隣の神仏への宿願となっており、まず公文名のサイノカミ、次に今里の岩船地藏、三島市山中新田の芝切り地藏、カゼ(風邪)の神、最後に小山町新柴田通寺の馬頭観音などを次々と拝んでいる。子供のはやり病をよけるためとはいえ、夏のはやり病は大人でも死に至る恐ろしい病気だった。このようなはやり病よけ祈願が、市内全域の各地で行われ、ムラごとに祈願をする神仏がまつられていた。

はやり病よ 上ケ田には、ヤクジンサンと呼ばれる厄神社がまつられている。かつて、はやり病がたいへんはやっ

けの神仏 たときにまつり始めたといわれている。本来は七月の地藏盆に祭りを行っていたが、氏子の都合で祭

日を日曜日になっている。赤飯のゴクウ(御供物)をもらって食べるのが習わしとなっている。

伊豆島田のミツムネサン(三峰さん)は子供の神で、かつては大山の行者が拝みに来てくれたという。祭日は七月一日で、念仏講がまずこの一年間の村内の無事の礼の念仏をあげてから、これからの一年間、はやり病がないようにと願をかける。ミツムネサンはエキビヨウサンともいっていて、ムラの疫病神をまつっている。他のムラで疫病がはやっ

ったときにも、伊豆島田ではミツムネサンをまつっていたのではやらなかったのだと言っている。大畑では、疫病や悪い風邪がはやると、石屋で身代わり地藏を作ってもらって弘法大師堂境内の六地藏のところに、

子供の病氣平癒を願って親が奉納する。無事平癒したときには、賽銭を供えて礼参りをする。

富沢では疫病がはやったときに、年寄りがアンデラサン（庵寺さん）に集まって、「南無阿弥陀仏」を唱えながら大きな一〇〇粒（一〇八粒か）の数珠を全員で回した。この数珠をオジュズと呼び、シンギョウ（般若心経）を詠みながらやったこともある。この念仏を百万回唱える百万遍ひゃくまんべんは、夏の温氣うんきにムラ中が丈夫に過ごせるようにと願って回すのだという。

病氣平癒

大畑では、入院していても病人の具合が悪いときには、その家で「不動さんを申しもらいたい」と念の祈願

仏講に申し出て、病氣平癒の不動経を唱えてもらい治してもらう。石脇では病人が危篤状態になると、不動堂に念仏講を始めムラ中の人が集まって念仏をした。富沢でも同様に、大病になった人の家で不動経を唱える。

富沢では、公民館にまつられているすべての仏にも願をかける。特にギヤアキバアサンは、風邪を治してくれるので、無事平癒すれば願果たしをする。また今里では、岩船地蔵に病氣平癒祈願をするとご利益があるという。このほか茶畑のアシワラサンには、足が不自由な人が願かけに草履を供えて拜んだりする。

2 厄年と年祝い

厄年

男の厄年は数え年の二五歳と四二歳で、四二歳が本厄となる。女は一九歳と三三歳で、三三歳が本厄である。茶畑では、節分に年の数の豆かお金を道の四つ角に撒いてくる。帰ってくるときには、決して振り向いてはいけないという。深良でも、ムラの四辻に年齢と同額のお金を置いてきたり、女性の場合には櫛を捨ててきたりする。こうすることで、一つ年をとってくるのだという。葛山では、厄落としといって家のカドにお金を捨てたり、

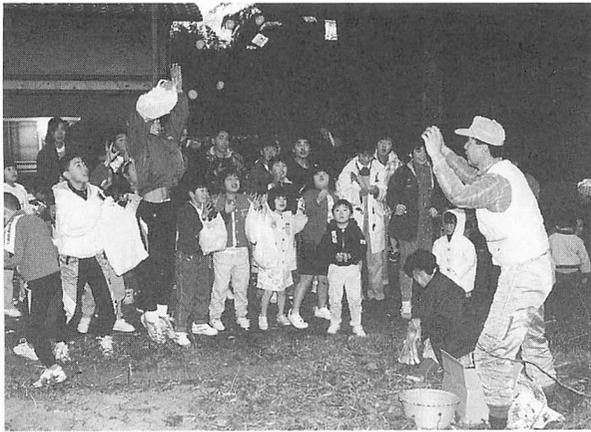


写真3-66 サイトヤキでの厄落とし(須山)

大山詣でや成田詣でをしたりする。富沢ではこのお金を拾うと厄を背負うと忌んだ。市域で最も一般的に行われているのは、一月一日に行われるサイトヤキでの厄落としである。団子を焼きに来た子供たちにミカンや菓子、小銭を撒く習慣は、現在でも続けられている。富沢では、このときサイトヤキの焼け残りの竹に酒を入れて飲んで厄祓いをした。

神社に参拝して厄祓いをすることもある。深良では、節分に氏神や三鳴大社に参って祓いをしてもらう。上ヶ田では、厄神社の祭日に厄祓いをする。

また女性は、一九歳の厄年には髪を桃割れに結ったり、三三歳の厄年には厄よけの着物を着たりしたという。富沢では、そういう年齢を厄年とするのはそのころに体質が変わるからだという。何か良くないことが起こると「厄年だ」と人から言われるのは、厄年が人生の節目であると考えられているためである。

年祝い

年祝いとしては、還暦(六〇歳)、喜寿(七〇歳)、米寿(八八歳)、白寿(九九歳)があるが、特に派手にやるわけではない。祝いごとをするのは、八八歳の米寿で、満八七歳数えの八八歳)のときに内祝い程度に子供たちが祝い物を贈る。かつてはそのような祝いをすることはなく、赤い帽子やちゃんちゃんこなどの着物を着るようなこと

は最近覚えた(知った)ことだという。

(四) 葬送の儀礼と墓制

1 葬儀の準備

死の予兆

「カラス鳴きが悪い」といって、死人が出る予兆とみなされるのは、市域だけでなく一般的にもよく聞かれる。カラス鳴きを聞き分ける人は、普段のカアカアという鳴き声がギヤギヤという異常な鳴き声に変わったときに、不吉なことが起こるのではないかと不安になるといふ。富沢では、人が亡くなったときには、カラスが囁かれたような声で鳴きながら頭上をくるくると回る。これは身内にはわからないが、他人にはわかるのだという。また茶畑では、田植えの夢を見ると不吉なことが起こるといふ、富沢でも大水や田植えなどの水の夢を見たり、歯が抜ける夢を見たりするとよくないことがあるという。このことをユメジラセ(夢知らせ)といっている。

須山では、農作物の作柄が不相応に良すぎると、近所の人からそれとなく、あの人は死ぬんじゃないかなどといわれる。このことをワカレザクという。サクというのの畝のことで、ヒコザクは枝畝を出すこと、マクラザクは畝を直交させることをいい、どちらも病人が出るといって忌んだ(『須山の民俗』)。

臨終

下和田では、病人が危篤状態になると、近所の衆が草葺き屋根の棟に上って穴をあけるしぐさをし、そこから下の病人に向かって名前を呼ぶ。「〇〇やー、こっちだよー」などと大声で呼びかけていた。これは一九一〇年頃のことだが、須山でも同様のことが一九〇〇年頃まで行われていたという。また重病人には、本人の臍(へそ)の緒を煎じて飲ませる習慣があった。

介護も魂呼びの効もなく病人が息を引き取ると、家人はまず組のオモナシユウ(主な衆)に知らせる。組の人たちはイイツギ(言い継ぎ)で知らせ、人々はさっそく死者が出た家に集まる。富沢では、近所の衆はあらかじめ様子がわかってるので、自発的にやってきて、まず神棚に白い紙を貼り、家の中を少しづつ片付け始めている。葛山では、竹枝を取ってきて、それを神棚にかぶせる。深良では、笹竹の枝を一本横にしてあげたり、半紙を貼ったりしている。これらは忌中の期間そのまましておくが、地域によって三十五日とか四十九日、長いときにはヒヤツカンチ(百日)とその期間はさまざまである。

北枕と枕団子

亡くなるとすぐに、死者の枕の向きを北向きに直す。下和田では、死者をナキヤーに北枕で寝かせておく。富沢では、北枕に直さないと死者が息を吹き返すという。年配の女性や身内が死者の体を拭き、着物を替えてから、よそ行きの着物を逆さにして体に掛ける。四国八十八カ所の順礼をした人が亡くなった場合には、遍路の白装束を着せる。そして、深良では鎌などの刃物を布団の下や死者の胸の上に置く。また葛山では、死者の腹の上に機織りに使う箆おさを置いた。いずれも魔よけのためで、富沢では猫がまたがないようにするためだといっている。

ところで死者を仏として扱う時期が、市域の中でも多少異なっている。富沢では、亡くなってから二四時間(一日間)はそのままにしておき、線香も団子もご飯も供えないという。しかし富岡では、日が落ちれば(日没になれば)死者を仏として扱うことができる。その日が友引であっても、トブライ(弔い)の役割分担を決めてしまう。

北枕にした死者への供物は、枕団子と枕飯である。年配の女性たちが中心になって行うが、富沢では米の粉で団子を作って蒸かし、深良ではご飯をつぶして団子を作る。あるいは、米を水につけて柔らかくし、それをすり鉢ですり

つぶして粉にしたものを団子にしてゆでる。枕団子は三個と決まっております、茶畑ではミツボダンゴ(三粒団子)といっている。

枕飯は、チャメシ(茶飯)のところと白飯のところがある。深良ではオチャハンといい、茶の煮汁に塩味をつけた水で茶飯を炊く。これを故人が使っていた飯茶碗に盛り、箸を立てて枕元に置く。葛山では、団子をゆでた湯でご飯を炊き、皿に盛って、その上に箸を立てる。団子もご飯も黒いほど「後生がいい」という。現在では、炊飯器のご飯をそのまま使用する地域が多い。

枕元には枕団子と枕飯を供えるほか、花を一本供える。茶畑ではコウバナ(香花)といい、においが強く魔よけになるシキミを供える。深良ではイッポンバナ(一本花)といい、死者に供えるためのものなので普段はイッポンバナは縁起が悪いといつて忌む。

シニミマイ

死者が出た家では、組長などを通じてムラ中に知らされるのは前述したとおりだが、知らされた家で自宅で床についていたりした場合は、生前ビョウキミマイ(病氣見舞い)を持って行くが、急に亡くなった場合は悔やみとビョウキミマイが同時に行われる。また深良や茶畑では、とりあえず何も持たずに悔やみに行くことを、シニミマイ(死に見舞い)という。麦塚では、シニミマイのときに米をコンブクロに一升か二升入れて持って行ったという。下和田では、悔やみには女衆がミマイを持って行き、葬儀には男衆が香典を持って行くことになっている。ミマイに行くとき、綿を水に浸しておいたもので死者の唇を湿してお別れをする。これをシニミズ(死に水)とかワカレミズ(別れ水)という。



写真3-67 葬式組による受付(茶畑)

葬式組

葬儀の準備から後始末までのすべての仕事は、葬儀を出す家が属している組の人々によって行われる。各家からは、一人ずつあるいは夫婦一組が必ず出て葬儀の手伝いをする。組内の人々は、組長や区長からのイイツギなどで真ッ先に葬儀を出す家に集まり、経験豊富な年配者の指揮によっていろいろな段取りの手はずを整えるのである。近年では、組長が葬儀委員長となって全体を取り仕切るところもある。このような葬儀の手伝いは、ムラの内部区分である組と同じ組が行うことが多いが、その組が小さかったり葬儀の規模が大きかったりするときには、

範囲を広げて隣接している組も手伝いに出ることがある。この場合には、手伝いの比重が小さく各家から一人出ればよいとされることが多い。市域では、こうした葬儀の際に手伝い合う組のことをトブライグミ(吊い組)と呼んでいる。須山では、葬儀の家の組以外のトブライグミの人をタチアイといった。

さて、亡くなった日の晩、葬儀を出す家の一室で葬儀委員長によってトブライグミの役割分担が決められる。茶畑での主な役割は、ヒト、アナホリ(穴掘り)、コシアゲ、葬具の準備などで、葬列の順番もこのときに決められる。ヒトというのは、亡くなったことを親戚などに知らせる役で、男が二人一組で行くことになっている。また、土葬のときの名残であるアナホリは四人必要である。棺桶かんぼくを担ぐコシアゲはやはり四人だが、アナホリがこれを兼ねることもある。またコシアゲ用の食事を用意する飯炊き、香

典を預かる帳場が二、三人、寺との連絡係が二人などで、その他の人たちが葬具の準備をすることになっている。こういうことを決めてから、酒を飲んで解散となる。

死の通知

死亡の連絡に行くことをヒトニイクとかヒトニアルクなどといい、葬儀を出す家からすればヒトヲダスという。目的地別に出かけるが、ヒトニイクのは必ず男が二人一組で行くことと決まっている。これを

葛山では、「一人で行くとオオカミに襲われるからだ」といい、普段二人連れで歩いていると「葬式のような」といって忌む。また茶畑では、「オチ(落ち度)があつてはいけないからだ」としており、施主の礼儀でもあるという。親戚が多く、六、七組がヒトに出してしまうと、残った人たちで葬儀の準備をしなければならないのでたいへんであった。

ヒトニイクのはイエやムラによって多様だが、たとえば葛山の下条のC家では、①村内、②御殿場方面、③三島・長泉方面、④今里・下和田方面、⑤御宿・深良方面、⑥沼津方面、⑦役場関係、⑧寺関係というように全部で八組のヒトが出た。割り振られた方面の通知すべき家々の住所と名前を書いた紙片をもらって出かけ、到着すると亡くなった人の氏名と年齢、通夜と葬儀の日時を告げた。目的地へは自転車や電車など、後には自動車も使って行ったが、遠いところへは電報ですませてしまった。先方ではすでにヒトが来ることを知っていて、御殿場方面のオモナシンセキなどは食事を用意して待っていた。帰路は寄り道をしないでまっすぐ帰らなければならないが、かつてはどんなに遠くても徒歩で行ったものだという。また須山では、ヒトが来て葬式を知ると、コイシンセキやオヤブン・仲人は、すぐにぼた餅か茶飯を葬儀を出す家に届けた。ヒトもやがて一九六〇(昭和三五)年代半ば頃から電話で知らせるようになり、今ではほとんどヒトニイクことはない。しかし富沢では、現在でもテラユキ(寺行き)とヤクバユキ(役場行き)の二組だけは親戚の中から二人一組でヒトを出している。ヤクバユキのヒトは、まず医者に行つて死亡診断書をもら

い、それから市役所で火葬証明書と埋葬許可証をもらってくる。火葬証明書は火葬場に提出するが、土葬時代には土葬許可証が必要であった。

キチユウ 葬儀の日の朝、組内の男は普段着で、女は割烹着で葬儀を出す家に集まる。深良では男衆が午前八時、

ミマイ

女衆が午前七時三〇分頃に集合し、葬儀の準備を始める。このとき、香典のほかカケゴメといって、女衆がコブクロに一升の米を入れて持って行く。その米は炊いて、手伝いに来てくれた人に食べてもらう。

また富沢ではキチユウミマイ(忌中見舞い)といって、やはり手伝いの人が米を持って来る。手伝いが一戸から一人出る場合には五合、二人出る場合には一升と決まっている。これらは組長がまとめて持って来るが、このほかにこんにやくも持って来る。こんにやくの場合は多くて五丁だが、それでもまとめると三〇丁にもなることがある。

茶畑では、会葬者や組の人たちが一戸につき一升の米を持参する。現在では一人につき米一升を持って行くが、何升かはその家のギリ(義理)によって異なるというモヨリもある。葬儀の後に行われるキチユウ(後述)という、精進落としのときに食べるための米を持ち寄るわけだが、この米は四十九日の期間に持って行けばよいともいわれる。さらに、キチユウに食べるおかずや調味料も持ち寄ることもある。

葬儀の準備

まず男は葬具の製作を行う。葬具は現在ではほとんど葬具屋が用意してくるが、それでも竹やコウバナなどは採りに行かなければならない。深良では、コウバナの花立て一对、提灯一对、リュウ(竜)一对、カミバタ(紙旗)四本、カリモン(仮門)一对の合計一二本のモウソウダケが必要となる。このほか、八〇歳以上の長寿者が亡くなった場合にはハナカゴ(花籠)がつくので、その竹も一对必要である。

葬具屋が葬具一式を用意する以前は、ムラの年配者によってすべての葬具が手作りされた。茶畑では、ジャ(蛇、



写真3-68 一對の竜（葛山）

深良のリユウと同義）やコシアゲが履くアシナカゾウリ（足半草履）などの藁細工、ヒヨケ（日よけ）、ハナダンゴ（花団子）なども作っていた。深良では、これらの葬具を作る大工道具は各ムラで所有していたが、現在では葬儀を出す家の物を借りて作る。これらは野辺送りまでにこしらえておく。

棺桶はガンとかガンバコといい、かつては深良や茶畑ではこれも組の人たちの手作りだった。葛山では、深さ二、三メートルのタテガン（豎棺）と、普通のネセガン（寝棺）との両方が使用された。土葬の頃の方が棺桶は小さく、ガンヤと呼ばれる葬具屋で買ったという。死者に直接日光があたらないようにするために棺桶にさしかけるヒヨケも作っていた。市域では、テンガイ（天蓋）、コテンガイ（小天蓋）などともいい、もとは棺桶をしっかりと覆うほどの大きさだったが、しだいに小さくなって現在では三〇センチ四方ほどの屋根形のものとなった。茶畑では、

各モヨリあるいは寺に保管されている。また深良では、長寿者が亡くなったときには、このコテンガイに細かい切れ込みを入れた赤い布を垂らす。長生きにあやかるといって、この布をもらい子供の着物などに縫いつけておいたものだという。

藁細工は藁を叩かずに、ジャやアシナカゾウリを作る。茶畑では、ジャとかヘビといわれる藁製の蛇状のものを雌雄二匹作り、竹竿の先端につける。これは魔よけの意味があるといい、地域によってはリユウとかタツ（竜）と呼ぶところもある。ジャは埋葬する際に墓に立ててくるか、土葬時代には棺桶に載せて一緒に埋めてしまった。アシナカゾ



写真3-69 カリモンとサトヤ (葛山)

ウリは棺桶を担ぐコシアゲが履くためのもので、四足分編む。富沢では、アシナカゾウリを履くときは縦結びをする。これは「ママシに刺されないようにするためだ」という。また、棺桶を縛る荒縄は二〇尋の長さなに綯なった。

カリモンは、トンボグチといわれる玄関口に立てる竹製の門である。二本の笹竹を入り口の両側に立て、先端の笹葉をより合わせて門の形にし、棺桶はこの門をくぐって出発する。葛山や下和田では、カリモンの横にサトヤと呼ばれる門牌をオオドの柱にくくりつけ、線香とコウバナを供えるようになっていた。茶畑では、このカリモンは出棺の後、野辺送りの行列について行き墓に立ててくる。

ハナダンゴは、葬儀の祭壇に飾る供物で、団子を挿した竹串を一〇数本藁つと(藁束)の台に挿したものを一対作る。竹串の数や団子の数は、ムラによって多少の異同はある。富沢では、竹串は八寸(約二四セ)の長さのものを二四本と、一尺二寸(約三六セ)の長さのものを一二本用意する。八寸の竹串には麩ふのせんべいを挟み、一尺二寸の竹串には団子を挿す。団子は上新粉で作り、一本の竹串に三個挿してから隙間を空け、さらに三個挿して計六個の団子を挿す。これらを、富沢の公民館に保管しているダンゴサシという一対の藁製のつとの台に挿し分ける。茶畑では、小麦粉でできたせんべいをハナセンベイといい、台は寺に常備しているものを一対借りてくる。また団子は一串に二、四、二個

というように数を分けて挿すという。ハナダンゴの作り方はおおむね同じだが、深良の南堀では念仏講の人たちが、亡くなった日のうちに一升三合の米を水に浸し、柔らかくしたものについて粉にして団子を作る。竹串一本につき五個ずつ挿し、ワラッポ(薬つと)に二一本ずつ挿す。このときハナダンゴとは別に三個余分に団子を作り、サトヤの位牌にそれを供えるという。

最後に、長寿で亡くなった人につくハナカゴであるが、竹で目籠を編み、縁の部分を始末しないで先端を放射状に垂らす。この籠に長い柄をつける。籠に金銀などの色紙を貼って飾り付けをしたものを一対用意するが、その中に赤い紐や赤いテープをつけた小銭と飴玉などを入れておく。野辺送りのときにこれを辻で振って金などを撒くと、人々がそれを拾って長生きにあやかろうする。また拾った金は魔よけになるともいい、子供の着物に縫いつけた。現在では、ハナカゴは二本松の籠屋に作ってもらうことが多い。

以前は葬式するとき、祭壇を作ったり遺影を飾ったりしなかった。これらは、一九六〇(昭和三五)年代半ば以降に登場した。

トブライ トブライグミの女衆の仕事は食事のしたくである。葬儀の日の昼食、キチュウなどのほか、アナホリに

の料理 届ける昼食も用意する。葛山のある葬儀では、次のような献立のメモをもとにして料理を作った。なお、

オザクというのは煮物のことで、他の地域ではザク煮とかザクピラなどともいう。

昼食用……「おごはん」(醤油・しいたけ・にんじんの味つけごはん)

オザク(大根・にんじん・こんにゃく・ちくわ・さとしいも)

おから(にんじん・油揚げ・ねぎ)

みそ汁(とうふ・ねぎ)

漬物(のぎわ菜・たくあん)

忌中用……「おごはん」(茶めし)

皿盛用(こんにゃく・きんぴら・しいたけ・竹の子・がんもどき)

酢物(きゅうり・わかめ)

みそ汁(とうふ・ねぎ)

とうふ(しょうが・ねぎ)

さしみ

漬物(のぎわ菜・たくあん)

アナホリと アナホリ、アナツポリ(穴掘り)などといわれる役は、土葬当時に四人で棺桶を納める穴を掘り、ある

コシアゲ いは棺桶も担いだ。棺桶を担ぐためにコシアゲ、カツギ(担ぎ)ともいう。穴は六尺(約一八〇センチ)以上

掘るところから、ロクシヤクとも呼ばれている。あるいは、棺桶を担ぐときに六尺の晒しを使うところからもロクシ

ヤクと呼ばれている。火葬の現在では、単に墓のカロウト(石室)の蓋を移動するだけの仕事となり、人数を四人から

二人に減らしているムラもある。

アナホリの決め方もさまざまであるが、葛山では通夜にモヨリのコシアゲテヨウ(「腰上げ帳」とかアナホリテヨウ

〔穴掘り帳〕と呼ばれる帳面の記載順にしたがって担当する人を決める。アナホリはタニン(他人)が行うものであり、

葬式を出す組以外の別の組が担当することになっている。これは茶畑の滝頭なども同様である。また茶畑の本茶では、



1



2

写真3-70 アナホリとコシアゲ

- 1 線香の火を点けるアナホリ(下和田)
- 2 コシアゲ(1963年頃・葛山田場沢・芹澤正己氏提供)

る場所を確認することから始まる。六尺余り掘ると土が崩れてしまうので、不要になった塔婆などを土留めに使いながら掘り進める。以前に埋めた骨が出てきた場合は、一度すべて掘り起こしたあとで穴の底に再度埋め戻す。その上に新しい棺桶を埋める。異臭が強いため、「アナッポリ一升」といって、酒一升をヒルメシとともに届けてもらい、それを飲みながら、また穴にふりかけながら掘る。千福では、土葬は一九五五(昭和三〇)年頃まで行われていたが、穴を掘って深くなると竹の先端を割いて底をつき、先端に土を挟ませて取り除いた。また穴掘りの道具は、葬儀

本来アナホリとコシアゲは別の人があたったが、一九七七(昭和五二)年のモヨリの総会から、アナホリの順番制をやめてコシアゲが兼務することが決められている。ただし、アナホリもコシアゲも、妻が妊娠している者はその役を遠慮するというのは、市内全域で聞かれることである。

深良の南堀での穴掘りは、葬儀の日の朝、家人に埋葬す

を出す家の物を使うというのが市域では一般的である。このように、アナホリは重労働のうえ大切な役割を担っていたので、葬儀が終わった後の供養の念仏のときにも、招待されて大事にされたという。

一方コシアゲは、深良の南堀ではアナホリとは別になたて。本来は身内の者がやるか、「血の濃い人」、コブン(子分)やナコウドッコ(仲人子)のような死者と親しかった人があたる。現在では火葬になったため、同じく深良の上原では、コシアゲの仕事は霊柩車に棺桶を運び入れるまでの仕事となった。深良の原では、火葬場でのコツヒロイ(骨拾い)もコシアゲの仕事だとしている。

2 トブライの儀礼

葬儀と火葬

市域では、葬儀のことをトブライとかトムライ、トブチャーなどといい、一九六〇年代半ばまでは土葬であった。土葬から火葬に変わったことから、葬儀の手順ややり方に変化が見られた。しかし多くは、基本的には土葬での葬儀の仕方を踏襲している。また火葬に移行する段階で、伝染病などで亡くなった人はノヤキ(野焼き)といってモヨリゴとあるいは旧村単位のヤキバといわれる火葬場を使っていた。この場合は、葬儀を出す家とその家が属している組がモシキを持参して、一晚中燃やし続けて二日がかりのトブライを行った。

現在の火葬での葬儀は、葬儀の当日午前中に火葬を行う。火葬場に行く前に、家庭葬といい僧による読経と、念仏講によるタチネンブツ(梵ち念仏)あるいはマクラネンブツ(枕念仏)がある。その後棺桶は、写真、位牌、野膳とともに霊柩車で火葬場に行く。骨になって戻ってきてから午後一時頃告別式(本葬ともいう)をし、あらためて野辺送りをして墓地に向かい、骨を墓に納める。あるいは、寺で葬儀を行う場合は、野辺送りをしながら寺に向かい、そこで告

別式を行って墓地での納骨となる。ここでは、土葬の時代に行われていたトブライの儀礼を中心に、火葬でのトブライと比較しながら記述していくこととする。なお、市域では須山が神葬祭地域であるが、明治以降の改宗なのでトブライの儀礼はほとんど従来の仏式に則^{つと}って行われている。

お通夜

トブライの前夜、親族と組の人が中心になってオツウヤ(お通夜)をする。通夜の日は友引を避け、友引の日にはトブライのしたくもしないで翌日にまわす。まず、僧侶が枕経をあげる。茶畑では、この枕経をあげるようになったのは、比較的最近のことだという。深良や公文名では、枕経の後、念仏講によるマクラネンプツ(枕念仏)がある。また会葬者の焼香がすむと、酒と豆腐が振る舞われるが、この日の料理も、組の女衆が作る。この後、組の人たちが残って、野辺送りの行列の役割を決める。そしてこの晩は、親族が一晩中線香とろうそくの火を絶やさないように寝ずの番をしている。

なお須山では、かつて通夜はしなかったというが、現在では身内がシビト(死人)と添い寝をして、ときどきシビトの唇を真水に浸した真綿で湿してやる。また通夜にはぼた餅とご飯、菓子などを三方に載せて供える。

湯灌

トブライの日の午前中に、湯灌^{ゆかん}を行う。葛山では、まず死者をザシキに移し、配偶者、子供あるいは本家の竈ではなく庭に臨時の火所を設けて沸かした。三本の竹の上部を縛り、下部を三脚のように広げて立て、縛った部分に鍋を吊るした。茶畑では、湯灌はたらいを使って観音経を唱えながら行うという。須山では、ザシキの畳を二枚上げ、そこにたらいを置いて水を入れ、その中に沸かした湯を加える。これをサカサミズ(逆さ水)といい、普段はこのように水の中に湯を加えることを忌む。湯灌をした湯は、人の踏まない日陰に捨てるものだといい、縁の下に流し

た(須山の民俗)。

湯灌がすむと、死者に白い着物を左前に着せ、紐を結んで結び目をオッタテ(縦結び)にし、草鞋わらじを履かせた。この死装束は、トブライの日の前日かその日の朝に年配の女性たちが死者の家に集まって、へらや物差しを使わずに縫う。晒して着物、手甲、脚絆、帽子、紐、頭陀袋ずだぶくろなどの旅装束を縫う。なお、普段の日にへらや物差しを使わずに着物を縫うことを忌む。深良では、一反の晒しを四等分し、腰くらいまでの丈の袖なしのオイズリを縫う。残った布は布巾にして葬式の際に使い、使った針や糸は縫った人たちが持ち帰る。このほか茶畑では、生前、善光寺参りをした死者には、そこでもらってきたオケチミヤク(お血脈)を持たせる。また葛山では、人によっては白装束ではなく、故人のもっとも良い衣装を着せたという人もいた。しかし火葬が一般化すると、このようないい着物も、故人の上には掛けるだけで燃やしてしまうことはせず、寺に寄付することもあるという。また手作りの死装束も、茶畑では一九七〇(昭和四五)年頃から葬具屋が用意してくるようになり、これは市域全体の傾向であると言える。

納棺

納棺は死者の子供や近親者が行う。前述したように、現在では棺桶はネセガン(寝棺)だが、土葬の時代には埋葬する墓の広さによってタテガンかネセガンかを決めた。棺桶に納めると、死者の首に頭陀袋を掛けるが、その中に数珠、灰、小糠こぬか、六文銭のおひねりを入れる。このほか深良では、トウガラシなども入れる。六文銭は三途の川を渡るために必要だといひ、火葬の現在では銅貨が焼け残ってしまうので、葬具屋が紙に印刷した六文銭を入れる。また土葬のときには、棺桶の中に生前使っていた物をたくさん入れたが、火葬になってからは減ったといふ。

棺桶の蓋をしてから身内が釘を打つ。これも、かつては石で叩いていたが、今では木槌きづになった。

トブライ

トブライの朝、会葬者は受付に香典と米を出す。深良の場合、米は組内であれば一人五合、夫婦の場合は一升となる。親戚は一升から三升くらい出す。また須山では、香典は昔から「一升到百」といって、米一升到銭百文を持っていくものだと言われた。このようにムラの人はずべて、香典のほかにうるちまい粳米か糯米をコブクロに入れて持参するのである。

トブライは床の間のあるザシキで行われる。下和田でも、納棺をナキヤの前行った後、棺桶をザシキに移してそこで葬儀をする。深良では、インキョの葬儀もホンヤのザシキで行う。僧侶は、ザシキの前から直接家の中に入り読経を行う。この後、引導が渡されると、すぐに棺桶をイロリのヨコザにすえ、その家の嫁が湯飲み茶碗に茶を入れて棺桶の上に置く。千福では、棺桶の蓋を開けた状態でイロリのヨコザにすえ、イロリのマッコ(縁)に嫁が茶を置く。それから棺桶をザシキに戻して蓋をする。この出棺の直前に死者に茶を供えるという習慣は、ほぼ市内全域で行われている。深良では、分家して別に家を構えた人のトブライのときにも、一度実家に戻って棺桶をヨコザにすえてからお茶を進ぜるといふ。

別れのお茶が置かれるとすぐに、四人のコシアゲがザシキの中からアシナカを履いたまま棺桶を台に載せて担ぎ、トンボグチのカリモンから出る。棺桶がカリモンから出るとすぐに、手伝いの女衆が家の中から外に向かって足や手でメカゴやザルをケカラガシ(蹴り転がし)ながら追い出す。茶畑では、このときできるだけ遠くに飛ぶと「後生がいい」といわれる。そしてメカゴが追い出されると同時に、ほうきで掃き出す。これは清めの意味だという。なお日常生活では、人が家を出るときに掃き出すことを忌む。

カリモンをくぐってオモテに出ると、葬列はそこで左回りに三周回る。この最中に、富沢では念仏講による念仏が

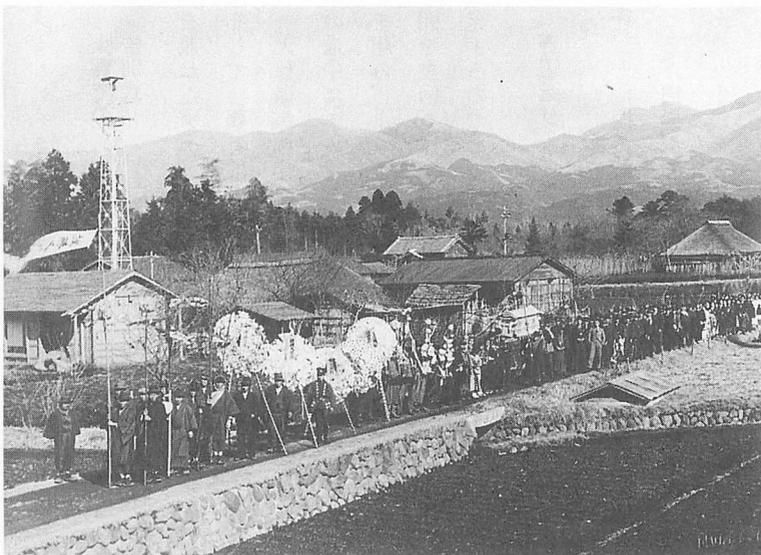


写真3-71 葬列 (1953年・葛山下条・勝又常一氏提供)

あげられる。公文名ではこれをオクリネンブツ(送り念仏)という。そして葬列がジョーグチを出る前に、タチザケ(莞ち酒)といって会葬者全員に酒と豆腐が振る舞われる。葛山や御宿、深良などでは猪口ちよこなど一杯の酒と、賽さいの目に切った豆腐を会葬者がいただく。またチカラモチ(力餅)といって、茶畑や富沢、水窪では僧の読経が始まる頃から一斗くらいの餅をつく。白と杵でできる限り大きな音をさせて餅をつくものだとされ、多いときには一俵はついたという。茶畑では「ホトケサンの出る前に音させる」というが、このように大きな音をさせてつくのは、魔よけの意味があると考えられる。この餅に餡を入れ、アンピンモチにしてこの日のヨージャに出す。葬式のときには塩餡にするものだったが、現在では砂糖で煮た甘い餡を入れる。なお千福では、五升ついで直径五センチほどの餅を二つ、重ねないで仏に供え、今一つはヒザノモチといって祭壇の一番下段に供える。残った餅をアンピンにする。

さて、いよいよ葬列がジョーグチを出るといふとき、コシ

アゲは門の外で履いていたアシナカを脱ぎ捨てる。深良では、本来は埋葬して家に戻ってきたときに、家に入る前にジョーグチでアシナカを脱ぎ捨てたという。

火葬での告別式 現在行われている火葬での葬儀の様子を、富沢を例に追ってみる。まず、出棺の際のお茶だしまでは土葬時代と同様に行われる。棺桶を担ぐのは家の中までは親族が行い、トンボグチを出るときにコシアゲ

を兼ねたアナッポリに交代する。アナッポリは霊柩車に載せるまで担ぐが、キャード(屋敷の入口)でアシナカを脱ぐ。そして会葬者は火葬場まで一緒に行き、そこで昼食をとる。火葬場での昼食の世話も、組の人たちの役割で行う。

火葬場から骨になって戻ってくると、全員ジョーグチのところ塩で清めて家に入る。告別式では、僧による読経の最中にチカラモチをつく。引導が渡されると、弔辞、施主の挨拶となる。それから野辺送りに出発するために葬列を組み、トンボグチのカリモンをくぐってオモテに出る。カリモンが葬列の最後尾につき、経を唱えている僧侶の周囲を左回りに三周回る。この間、その葬列の外で念仏講の女性たちが御詠歌を唱えている。こうして、野辺送りに出発するのである。

野辺送り

施主の家から墓地まで、葬列を組んで歩いていく。野辺送りの経路はムラごとに決まっており、葛山ではそれをトブライミチと呼んでいる。このとき長寿者のトブライにつくハナカゴは、人が集まっている辻ごとに振るわせて小銭や菓子を撒きながら歩く。葛山の田場沢のある家の葬儀では、自宅の庭、家から道に出たところ、田場沢の辻、下条の辻、中村公民館前、そして仙年寺の前庭の六カ所でハナカゴが振られた。ハナカゴから撒かれた小銭を、長寿にあやかるとするために人々は競って拾う。

野辺送りの行列はムラや宗旨・宗派によって若干の差異はあるが、茶畑ではおよそ次のような構成になっている。



写真3-72 ハナカゴ (下和田)

①松明^{たいまつ}、②提灯、③リュウウ、④ハナカゴ、⑤紙旗^{かみばた}、⑥施主花、⑦写真、⑧棺服^{かんだんぐく}、⑨ノゼン(野膳)、⑩ノイハイ(野位牌)、⑪棺、⑫シカバナ(四化花)、⑬親族。このほか道祓いとしてほうきが先頭につくこともあり、カリモンが最後尾につくこともある。富沢の一九九一年のある葬儀では、①提灯(二名)、②旗(大旗二名、小旗二名)、③リュウウタツ(二名)、④施主花(二名)、⑤シカバナ(四名)、⑥杖(二名)、⑦香炉(一名)、⑧棺服(一名)、⑨茶器(一名)、⑩ノゼン(一名)、⑪写真(一名)、⑫位牌(一名)、⑬骨(一名)、⑭カリモン(一名)、⑮親族、⑯一般会葬者という順になっていた。④から⑬までは身内の主な人が、そのほかは組の人たちが担う。またこれ以外に、長寿者の葬儀につくハナカゴの二名はリュウウタツのあとに入り、まだ墓石を建てていない家の場合はカリモンの後ろに墓標がくる。墓標は六尺の晒しを巻いて、アナホリが二人で担いでいく。この晒しをロクシヤクといい、野辺送りが終わるとアナホリが四人で

分ける。また曹洞宗の葬儀の場合には、鉦や太鼓で賑やかに囃しながら野辺送りをする。堰原や深良の切久保では、念仏講の女性たちが先頭で鉦を叩きながら念仏を唱えて歩く。

寺で本葬を行うときは、葛山の田場沢では次のようになる。寺に着くと、葬列は本堂の前庭で三周回り、そこで最後の撒き銭をして、それから本堂へ上がる。右側に女性、左側に男性が座り、老人による御詠歌の後、住職の読経がある。それから埋葬する墓地へと向かう。

埋葬と納骨

茶畑では、先回りしたカリモンを墓地の入り口に立てておき、葬列はそれをくぐって墓地に入る。深良では、縄を棺桶の上下につけ、ロクシヤクの四人で静かに穴に下ろす。まずオモナミウチ(主身身内)が一掴みの土を掛け、その後はロクシヤクが土を掛けて埋める。このとき、リユウや旗、ノゼンの団子なども一緒に埋めてしまうところもある。茶畑ではこの上に土まんじゅうを作って石を置き、その上にヒオイ(日覆)またはヒヨケ、あるいはテンガイなどと呼ばれる覆いをかぶせる。白木の位牌をその下か前に置いてノゼンを供え、ハスの造花を棺桶が埋められているあたりの地面を囲むようにして挿し、提灯も挿し立てる。深良では、ヒヨケの後ろ側にクサカリガマを立て、長寿者の墓には杖も挿す。

なお、深良の文明寺もんみやうじの檀家の葬儀では、葬列が死者の家や寺の庭で回るとき、シカバナが四隅に立ち、骨が中心に立っている。シカバナはヨホウバナ(四方花)ともいって大役で、棺桶の前後に二人ずつ歩いて歩く。シカバナは、「ケタモノ(獣)がエラクテ(多くて)」埋葬してからも死体を掘り出してしまうので、それから守る役目があるのだという。そのため、埋葬した後にヒヨケをかぶせると、その四隅にシカバナを立てておく。古鎌は須山でも犬よけとして立てるといふことから、鎌もシカバナも一種の魔よけと考えられよう。

火葬での納骨は、アナホリがカロウトの蓋を開けておき、コツイレ(骨入れ)もアナホリが行う。深良では納骨した後、蓋は閉めるが目地はしない。これは家人が四十九日が過ぎてから行うためである。そして石塔にヒヨケをして、会葬者に線香をあげてもらふ。カロウトのある墓にするようになったのは、火葬になってからである。

なお、深良の上原ではロクシヤクは晒しの布を一人六尺分ずつ切つて分け、肩から掛けて棺桶を下げるときの補助する物として使っていた。火葬の現在ではこの晒しの必要はなくなったが、ロクシヤクに晒しを切つて分ける習慣は



1



2

写真 3-73 ハマオリ

- 1 河原に置かれたノイハイ(下和田)
- 2 ハマオリの清め(下和田)

残っている。また富沢でも、前述した墓標に巻いた六尺の晒しの布は、やはりアナホリが四人で分けることになっている。

ハマオリ

埋葬がすむと、墓地から帰る途中の河原でハマオリ(浜降り)をする。ムラによってハマオリをする場所は決まっていて、ハマオリの世話はやはり組の人がやる。たとえば茶畑の滝頭では不動の滝の下で行い、御宿の入谷上組では柳端、みやかわはし宮川橋のたもと(現在では久保川の河原)で行う。河原の石を数個積み上げ、その上や前に

白木のノイハイを置く。ろうそくと線香を立て、団子などを供え、会葬者全員が順番に拜む。河原まで下りるのが難しい場合には、河原の位牌に向かって土手や橋の上から拜むことになる。また茶畑の滝頭や富沢では、拜むときに位牌に笹やコウバナで水を振り掛けて水向けをする。

次に拜んだ人から、豆腐や菓子を肴に酒を飲んで身を清

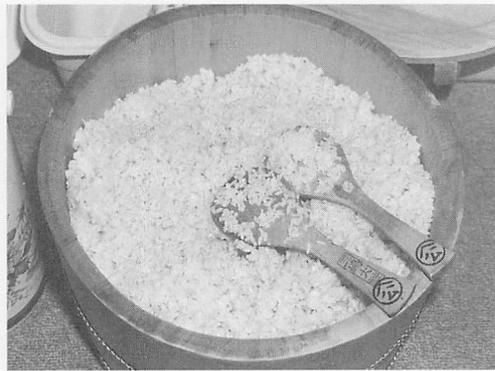


写真3-74 キチュウのおチャハン（茶畑）

める。この後、深良では会葬者全員で土手から石を投げて、位牌を水に流す。これは「早く海に行って、成仏するように」という意味だと説明している。このとき位牌を倒さずにそのまま河原に放置し、三十五日に倒して川に流すという下和田の例もある。現在では、位牌を流すと川が汚れるという理由で、茶畑のように檀那寺である伊豆佐野の耕月寺の六地藏に納めるところもある。

キチュウ

ハマオリから帰ってくると、施主の家のトンボグチで水と塩で手を清める。この後キチュウ（忌中）またはキチュウバライ（忌中被い）といい、会食をする。本来は死者の出家で行うが、現在では公民館を利用するところも少なくない。埋葬の後やハマオリの際に、身内や親族が「キチュウをいただいでください」と言って案内をするが、墓地に行かない人もキチュウだけにして帰ってもらうものだという。

キチュウではおチャハン（お茶飯）のほか豆腐の味噌汁や吸物、しらあえ、なます、ザクニ（煮物）、漬け物などが出るが、これらの料理を手伝いの女衆が一品ずつ持ち寄ったり、前日から用意したりする。葛山では、がんもどきが必ず出され、一つを四人で分けて食べる。まず一般の会葬者がキチュウをし、その後組の人たちのキチュウがある。組の人たちのキチュウのときには、身内が接待をする。茶畑では、かつてモヨリ中の子供までやってきて、昼からごちそうを食べたものだという。

なお、深良ではこのときにぼた餅が出る。これをオチツキ(ノ)ボタモチというが、御殿場市内でも同様であるという。前述した出棺の際にチカラモチをつく地域では、アンピンモチが出される。また田方郡下では一膳目に赤飯、二膳目にチャメシが出るというが、茶畑ではむしろ「かえて食べると重なる」と言って、ご飯をおかわりすることを忌む。子供のト 子供が親より先に死ぬことをサカサという。茶畑では、名前もついでいない赤ん坊が死んだときには、トブライ トブライもしないでその家の墓に埋めた。また須山などでも、子供の葬式は一歳を過ぎてから行うものだとしている。しかし後には、その家の誰かのネンカイ(年回、後述)のときに、一緒に供養をして墓石を建てたという家もある。

3 葬儀後の供養

トブライ トブライの当日、施主は檀那寺の住職に頼んで紙に戒名を書いたものを、故人の子供の人数分だけ用意の直後 してもらい、帰宅するときにそれをひとつずつ持ち帰ってもらう。葛山では、現在ではクリイハイ(繰

り位牌)と呼ばれる厚さ七、八センチの黒塗り、金縁の位牌が一つのみ仏壇に納められており、死者が出るとその人の戒名等を記した板をその中に納めるようになっていいる。そのため、戒名が書かれた紙をもらった者は、それをクリイハイの上に貼り付ける。この紙に書かれた戒名のことを、カミイハイ(紙位牌)、あるいはハリイハイ(貼り位牌)と呼び、まつられている人のことを、施主以外の家ではその家の仏ではないことからキャクボトケ(客仏)と呼んでいる。カミイハイをもらうのは故人の子供たちであるが、ときには故人の兄弟姉妹も希望してもらって帰ることがある。

このように施主の家だけでなく、故人の子供や親族までが位牌をもらっていくというのは、裾野市域だけに限らず



写真3-75 クリイハイとカミイハイ (茶畑)

行く」といい、夕方一人でつけに行く。

七日ごと

の念仏

亡くなった日から数えて七日目をヒトナヌカ(一七日)あるいはシヨナノカ(初七日)といい、以後七日ごと
 とにフタナノカ(二七日)、ミナノカ(三七日)と続き、ナナノカ(七七日)まで七日ごとの念仏供養を行
 う。なお深良では、ヨナノカ(四七日)とムナノカ(六七日)は、縁起が悪いなどといって行わない場合もある。特に親
 が亡くなった場合には、故人の子供が順番に念仏供養をする。これをオヤネンプツというが、ヒトナヌカだけはイセ

周辺の市町村でも行われているが、その多くは紙に戒名が書かれたものを希望者が持ち帰り、各自でその供養を行うというものである。茶畑のように、寺の住職によっては子供たちの希望にかかわらず子供の人数分の位牌を用意するということもある。茶畑の場合には、このカミイハイは各自が白木の位牌に貼り、七日ごとの念仏供養を行うときにまつるのである。また深良では、オヤネンプツ(親念仏、後述)のために白木に戒名を書いてもらい、それを持ち帰って供養をするということがかつて行われていた。しかし僧侶によっては、位牌を分けるとホトケサンが迷うともいい、家のホトケサンでないので仏壇には飾らず引き出しに納めるようにということもあった。

死後一週間は、毎日墓参りをする。深良では、提灯のあかりを灯し団子などを供え線香をあげてきた。現在では、墓に建っている石灯籠に火を入れてくる。また、四十九日まで毎日参る家もある。葛山では、「お灯明をつけに

キ(跡継ぎ)である施主の家で行い、以後は施主の兄弟姉妹が順次担当をする。そして最後の四十九日に、再び施主の家で念仏をあげる。葛山の場合、念仏をあげるときには施主の家の位牌を持ち回るが、その他の地域では葬儀でもらってきたカミイハイをまつって念仏をあげる。茶畑では、施主以外の家で行う念仏はキャクネンブツ(客念仏)と呼ばれる。また御宿ではコネンブツ(子念仏)という人もいる。

念仏の内容は施主の家で行うものと同じもので、その人が住んでいる地域の念仏講の人たちに供養をしてもらう。このとき、念仏をあげてもらう家では飲食の接待をしたり、簡単な引き物を用意したりした。しかし費用がかさむことから、今日では各地区で申し合わせがありオヤネンブツを簡略化する傾向にある。たとえば富沢では、一九七七(昭和五二)年に婦人会の申し合わせで「親念仏は廃止」することになり、現在ではほとんど定着しているという。あるいは茶畑のある家のように、七日ごとの念仏を施主の家ですべて行い、その費用を子供たちが持ち回るという例もある。

オヤネンブツを行った翌日、まつったカミイハイは川に持っていき、笹で水を掛けてから流して送る。下和田では盆の供物を送る場所で流すといい、清浄なところを選ぶ。また茶畑では、川に流すほか、施主の家に持って行ったり、墓に持って行って納めたり焼いたりするという。

深良では、施主の家にナナホントウバ(七本塔婆)という葬儀の際に用意した小型の七本の塔婆があり、七日ごとの念仏がすむと一本ずつ裏返していく。最後の四十九日が終わると墓に納めるといふ。三島市佐野の耕月寺は茶畑の檀那寺であるが、六地藏のところに佐野の人たちが先のカミイハイと共に塔婆を納めている。

三十五日

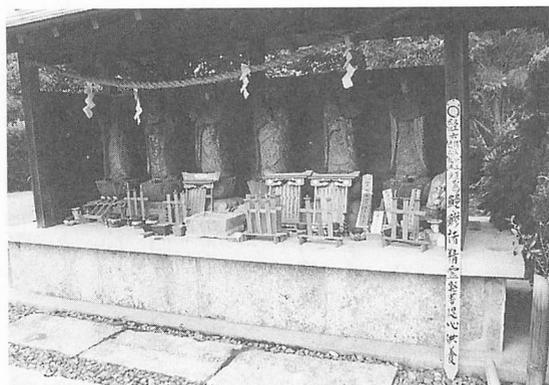
亡くなった日から数えて三五日目をイツナノカ(五七日)、あるいは三十五日といい、富岡地区ではその供養を特に盛大に行う。葛山や御宿などでは、三十五日の朝、沼津の千本浜まで行ってサトヤを流してくる。浜に着くとまず波打ち際に石を数個積んで、その前にサトヤを置き、線香とろうそくを灯して拜んだ後、「養の河原へ無事渡れるように」と祈りながらサトヤを倒す。サトヤが波に流ながされて流されるのを見届けてから、後ろを振り返らずに帰ってくる。潮が早く満ちて流れてしまえば「成仏した」ということになり、なかなか流れないときには「未練があるからだ」という。帰るときには平らな石を三五個拾ってくるが、現在では一〇個前後と数を減らしている。御宿ではこの石のことをサイノガラともいい、後に墓に供える。また須山では、かつて帰りにキャージャクシ(貝杓子)を買ってきて近所に配ったという。この日出かけるのは、現在では故人の家族とコイシンセキの者数名だが、かつては組の人たちも一緒に佐野駅まで歩き、そこから汽車に乗って沼津まで出たという。サトヤを流した後、沼津の幸町のアタマヤ(頭屋、仕出屋旅館)で早めの昼食をとるのが通例である。このときは、故人の家族が親戚や近所の人たちから振る舞われる。自宅に戻ってくると、今度は施主の家でヨーハン(夕飯)が振る舞われる。

この三十五日の千本浜行きをハマオリ(浜降り)といい、埋葬後のハマオリと混同することがある。しかし、かつては深良や茶畑などでも千本浜に行っていたということから、一種の忌中明けを意味していたのではないかと考えられる。なお茶畑では、このとき持っていく位牌をキチュウイハイ(忌中位牌)といっている。御宿新田ではこれを四十九日にやっており、葛山ではこの三十五日に神棚を隠していた笹を取り外すという。また市域に限らず、駿河・伊豆地方では海や川に行つてハマオリという忌中祓いをする地域が多い『静岡県史』別編1『民俗文化史』。

ハマオリが二度行われる理由として、下和田では次のような経緯がある。三十五日の供養は、生活改善によってト



1



2

写真3-76 三十五日と四十九日

- 1 千本浜で拾ってきた石(御宿・共同墓地)
- 2 六地藏に納められた七本塔婆(三島市佐野・耕月寺)

ブライのあとその日のうちに行うようになった。キチュウの後、三十五日の念仏をあげてしまうのである。下和田でも、かつては組中で千本浜に行ってサトヤを流していたが、現在では大勢で行くことはしない。埋葬後に河原に位牌を置いてハマオリをするときには、位牌は倒さずにそのまま放置し、三十五日の朝、家族が石をぶつけて倒す。その後、身内だけで沼津の千本浜に行ってハマオリをするというのである。つまり富岡地区以外の地域では、埋葬後のハマオリの際に、位牌を倒したり流したりして終えてしまうが、富岡では位牌をそのままにしておき、三十五日の千本

浜のハマオリで初めて位牌を流すというわけである。ハマオリが忌中明けを意味するものだとすれば、本来は三十五日などの忌中の期間が終わったあとで行われるものである。海岸から遠く離れた市域ではハマオリを千本浜で行うのが従来のやり方なのかは不明である。しかし、下和田の例のように、何らかの契機で三十五日を埋葬後に続けて行うよ

うになってから、ハマオリを二重に行うようになったのは明らかである。

四十九日

「四十九日まではヤノネ(屋の棟)に魂がいる」といい、寺へは四九個の餅を持って行き、経をあげてもらう。これがすむとようやく「ホトケサンの仲間になれた」という。この餅のことを茶畑ではシジュークンチモチ(四十九日餅)といい、一升三合の餅を手でつき、四九個の餅とヒザモチあるいはヒザノモチといわれる少し大きめの餅を二個作る。ヒザノモチというのは、ひとつがホトケ(死者)に、ひとつがガキ(餓鬼)に供えるための餅である。ヒザノモチが一個の場合もある。竹製の籠に杉やヒノキの葉を敷いて四九個の餅を入れ、その上に二個のヒザノモチを載せる。現在では、菓子屋に注文して作ってもらう家もあるが、葛山では餅ではなく団子を作るといふ。

四十九日の供養を行うのは、茶畑ではゴナノカ(三十五日)あたりからでもよいといい、むしろ「ミツキゴシ(三月越し)はいけない」といって死亡月の翌々月である三カ月目に入ってはいけないと早めにすませるところもある。しかし多くは葛山のように、「アタリ(当日のこと)にやらないとホトケサンがかわいそうだ。先にやると、その日までホトケサンは団子を頭に抱えていなければならない」といふ。深良では、「餅は、新しいホトケサンがホトケサンの仲間入りをするときの土産になる」といい、やはり早めに四十九日を行うことを忌む。

四十九日の法要の後、墓参りをしておはぎや果物を供え、火葬後の墓の場合はカロウトの蓋の目地をする。トブライの葬具を片付けるのもこのときで、深良の上原ではかぶせてあったヒヨケもとってしまふ。

茶畑では、施主の家での四十九日の念仏供養後、故人の子供たちの取り持ちで、葬儀で世話になった組や近所の人たち、念仏講の年寄りたちに食事してもらう。特にアナホリには別に礼をする。富沢では、組の男衆とアナホリには地下足袋やつっかけなどの履き物で礼をする。深良の原ではこれを三十五日に行い、オチャハンを振る舞い、引き



写真3-77 葬儀の後の墓（佐野）

物を用意する。忌中明けが三十五日か四十九日かの違いであるが、富岡地区では三十五日を盛大にやっても四十九日の供養も略さずに行っている。

百カ日

死後百日目をヒヤッカランチ（百カ日）という。深良では、故人の子供たちと身内くらいが集まって念仏講に念仏をあげてもらい、墓参りをする。このときに墓の葬具を取り払い、燃やしてしまう。この後、夜食を

食べるが、葬式まんじゅうとして小判型の焼きまんじゅう五個を配る。

かつては、沼津の千本浜にハマオリに行ったこともあった。また富沢では、ヒヤッカランチに神棚を隠していた白い紙をはずす。このように、四十九日以外にも、この日までを忌中の期間としているところもある。

忌中の期間、死者の家族にはさまざまな禁忌が科される。たとえば茶畑では、仏壇にあげる線香は「道に迷わないように」と一本ずつあげる。また、「四十九日までは針を持ってはならない。針を持つならほかのヤノネ（屋の棟）の下で」という。葛山では、神参りをしたり、鳥居をくぐったり、祭典の当番になったりすることを控えるが、忌中が明ければそのような日常の神事は平常どおり参加するようになる。また深良では、死者の子供は家を出た子供でも忌みがかかり、神社の鳥居はくぐらない、神には一切手をつけないという。ヒヤッカランチを過ぎて死者が「ホトケサンの仲間入り」をすれば、忌中は明けることになる。

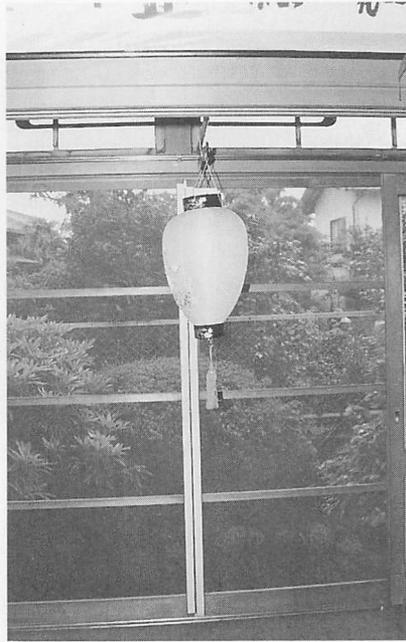


写真3-78 新盆の提灯（富沢）

ボンにはジュースンプツサン（十三仏さん）と呼ぶ上新粉で作った餅を供える。平たい一三個の餅を積み重ね、その上にヒザノモチというやや大きめの餅をのせる。

ニイボンの念仏は、念仏講の人たちが施主に依頼されなくても念仏をあげて回る。盆の初日に、亡くなったときの年齢の高い順に回るので、訪問する時刻をあらかじめ施主に伝えておく。深良での念仏の内容は帳面にしたがって、香燭、三宝礼、懺悔文、般若心経、舍利礼、舍利文、西国三十三所、秩父三十四所、坂東三十三所、十句観音経、薬師菩薩、地藏菩薩、弘法大師、光明真言、十三仏、善光寺御詠歌などである。なお神葬祭の須山でも、ニイボンには今里の浄土院の住職が経をあげて回り、念仏講も回っている。

ニイボンの家を持っていく付け届けは、だいたい決まっていた。茶畑の場合は、砂糖か麩を持っていった。しかし

新盆と春 秋の彼岸

亡くなってから初めて迎える盆をニイボン（新盆）という。茶畑では、盆の初

日にまず墓参りに行き、そこからホトケサンを迎える。家人がホトケサンを背中に背負うようなしぐさをして自宅まで連れてきて、エンガワから家の中に入る。このとき、ホトケサンの足を洗う洗面器と拭うためのタオルをエンガワに用意しておく。また、ニイボンには必ずエンガワに提灯を下げて、帰ってくるホトケサンの目印とする。また富沢では、ニイ

これも一九七〇年代までで、現在では現金を持っていくことが多い。また須山では、戦争前まではうどんが三把と決まっており、つきあいの軽い家は二把とした。やはり現在では、ビールを一ケースとか現金などですませている。

深良の原では、八月二三、二四日の地蔵の縁日にニイボンの家が供物を供えることになっている。長寿で亡くなった人の場合には、オオモリモノ(大盛物)といって大きな供え餅を作ってあげる。それ以外の人は、コモリモノ(小盛物)といって串団子を供える。オオモリモノは大きいときには五升の米で、後には三升の米で二段重ねの餅を作る。

ニイボンの家がない年には、モヨリで作ったり寄付したりする。

伊豆地方では、人が亡くなると、家人が春秋の彼岸に熱海市にある日金山ひがねさんという山に三年間参る習慣がある。日金山は死者が行く山として近隣には有名で、参れば行き交う人やまつられている石仏の中で、亡くなった人とよく似た人に会えるというのである。実際裾野市と境を接している三島市佐野では、やはり一年のうちに一度は日金山にお参りに行ったものだという。かつては市域でも、彼岸に日金山にお参りに行くことが行われていたようだが、現在ではまったく行われていない。しかし、深良の原の地蔵にも同様の話が伝わる。下和田では原の地蔵の祭りにお参りに行くとき、亡くなった人と同じようなメンボウ(顔つき)の人がいるといって、必ず参っていた。一九二〇年前後に、交通費がかさむからといって原から下和田に勧請してきたという。死者が出た家では、その年の祭日には必ずお参りに行っていた。

ネンカイ

死後一年後に、イッスイキ(一周忌)の法事をし、念仏講に念仏をあげてもらう。葛山では、この日まで死者をホトケサンと呼ぶが、これ以後はセンゾサン(先祖さん)と呼ぶようになるという。死者の近親は、一年間講があっても「一講抜ける」といって加わらなったり、暮れの神社のお札分けのタイマ(大麻)を断わっ

たりするが、二年目からは平常のつきあいに戻る。一方死者が出た家とつきあいのある側からすれば、茶畑では、この一年間に「新しいホトケのある家からは、糶・種をもらってはいけない」などともいっている。一九九三年に茶畑にヨシダサンが巡行した際には、一年間の喪がかかっている家では、屋外には出ずに家の中から神輿を静かに見送っていた。このように、家内から死者が出た家では忌中が明けても、なお一年間はムラのつきあいの中でも特に神ごとには一切かかわらないように心がけている。

年忌の法事のことにはネンカイ(年回)と呼ぶ。イッスイキの後、三年、七年、一三年、一七年、一三年(あるいは二五年、二七年)、三三年、五〇年目に供養をする。茶畑では、家内で二、三年の間に複数のセンゾのトキブツ(齋仏、法要をするホトケ)が続く場合は、翌年、翌々年のトキブツを「ひっぱって」やって、一度に法事をすることも許される。しかし、当年のトキブツを翌(翌)年に先送りして、他のトキブツと同時に行うことはできない。つまり、年忌が早い方にあわせ時期が遅れないように注意するのである。また葛山では、最近になって二人以上の法事をまとめてするようになった。この場合は、「大きい年忌の人」、つまり年忌の数が多い人にあわせた形で行い、やはり時期が遅れないように留意するのである。

ネンカイの当日は、檀那寺の住職を自宅に呼んで法要をする。富沢では、かつて住職は家に入るときにザシキかヒロマのエンガワから直接入ったが、現在ではトンボグチから入っている。葛山ではザシキに祭壇を作り、そこで僧侶が読経をし、一列目に座っている人から順に焼香をする。一列目には、死んだ人に一番コイミウチが座ることになっている。

この後、念仏講によるネンカイの念仏がある。茶畑では十三仏のヒョウゴ(掛軸)を掛け、一三個の餅を供えて行う。



写真3-79 トイバライの塔婆 (下和田)

茶畑の中丸なかまるでは、このとき唱える善光寺の御詠歌の中に日金山の御詠歌も含まれている。

トイバライ

最終年忌は五〇年で、トイバライ(テイバライ)とかトリバライ、トリハラエなどと呼ばれる。これ
 でひととおりの供養は終わったことになり、深良では「ホトケサンがトリバライ」などといって、以
 後「ご先祖様」として供養するという。また茶畑や富沢では、これで「ホトケサンでなくなり、神さんになる」とい
 う。

通常のネンカイでは板の塔婆を墓に立てるが、トイバライには生の杉の木を切り、先端に葉をつけたまま幹の皮を
 削り、そこに戒名を書いて墓に立てる。これを茶畑ではイキトウバ(生き塔婆)という。茶畑の中丸ではトリバライは
 骨を出して地に戻すことだとし、コツガメから骨を出して、土の地面がむき出しになっているカロウトの底にあげて
 しまい、その上から土を掛け、最後にイキトウバを立て
 る。またトイバライがすむと、仏壇にまつられていた古
 い位牌は、川や浜で流したり燃やしたりするか、寺の六
 地藏のところへ納めたりする。

4 墓 制

土葬から かつては市域のどこのムラでも土葬であっ
 火葬へ た。埋葬する墓はそのほとんどが屋敷内に

あるか、屋敷に隣接している所有地、それに近い田畑の

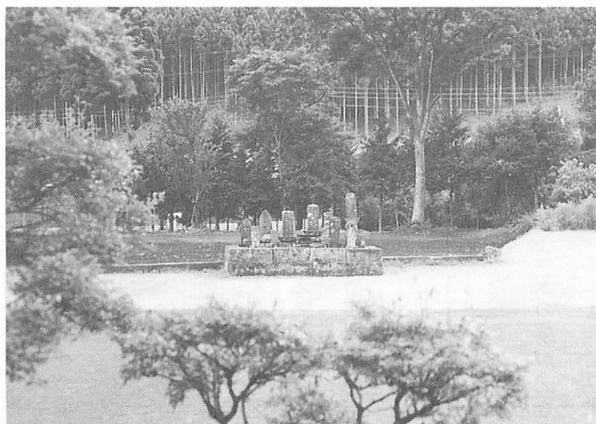
中、あるいは所有している山のふもとなどにある。しかし明治以降の土葬には土葬許可証が必要で、鉄道から六〇間、人家から三〇間以上離れていなければ土葬ができなかった。そこで、古い墓はそのままにして、あらたにムラやモヨリごとに共同墓地を作ることになった。

土葬の時代でも、伝染病で亡くなるなど通常の死に方をしなかった人はヤキバ(焼き場)で火葬した。深良や茶畑では、ヤキバは共同墓地の一角にあった。また葛山や富沢では、山の高いところに穴を大きく掘ってあったという。ヤキバの多くは共有地に作られ、富沢の場合は観音坂と馬のツクリバ(灸をすえるところ)の近辺の二カ所にあった。

市域で火葬が始まったのは、戦後から一九六五(昭和四〇)年前後までの間である。比較的早く火葬を導入した富沢では、戦争前後が土葬から火葬への過渡期だった。ムラのヤキバを使っていた時代には、すべて葬式組が取り仕切って行わなければならず、モシキの準備から火の番まで一晩中かかって火葬していた。ヤキバまで行った葬列は、棺桶と葬具を置いて一度戻り、火葬が終わった翌朝もう一度骨上げにヤキバに行き、再び葬列を組んで墓まで行ったという。深良では、一九三一(昭和六)年に村設の火葬場を作ってそれを利用していた。しかし戦争後、市域では施設の整った長泉や三島、沼津の火葬場を借りて火葬するようになった。裾野市の火葬場は一九七五(昭和五〇)年に完成した。

屋敷墓

屋敷内あるいは屋敷に隣接している墓地が、もっとも古い埋葬場所であった。特にキュウコ(旧戸)とかフルシイ(古しい)家などと呼ばれる家には屋敷墓があり、その家が所有している墓の中でももっとも古い墓となっている。また本家筋にあたるような旧家には、センゾサン(先祖さん)とかヤシキセンゾサン(屋敷先祖さん)などと呼ばれる墓や屋敷神がまつられている。たとえば茶畑の本茶のD家にはセンゾサンといわれている石塔があり、家人が病気にかかったときに占ってもらったところ、まつる場所を移動するようにいわれ、屋敷の入り口の東北隅か



1



2

写真3-80 屋敷墓とイットー墓

- 1 屋敷墓(下和田)
- 2 ホッケヅカ(麦塚)

ら屋敷内の西南隅に動かしたという。さらに、同じ茶畑の本茶のE家では水田の中にセンゾサンと呼ぶ石塔があり、この水田を売却して所有者が移ってもそれを移動せずに同家でまつり続けているという。この場合、センゾサンはその土地でまつられるべきもので、土地の所有権が移ってももとの子孫がその場所でまつり続けるものだと考えられている。

富沢には、旧戸の集落の南
はずれに屋敷墓がまとまって
いるところがある。ここは多
くの石塔がいくつかの固まり
を作っており、その向きも石塔群
によってさまざまである。こ
れは一見共同墓地のような様
相を呈しているが、実際はそ
れぞれが個人の所有地にそれ
ぞれの屋敷墓をまつっている。
ここには服部本家の墓とその
最初の分家といわれる古い墓

がある。

イットーの墓

佐野の八幡神社の東側水田内に、ダタラの上に盛り土をした墓地がある。ここはヤマブシキと呼ばれ、杉山本家とその分家および親戚のイットーバカ（一統墓）となっている。このように同族でまとまって持つ墓をイットーバカというが、市域ではそう多く見かけるものではない。イットーバカは、この杉山イットーのように水田内のダタラの上に土盛りをして墓地とすることがある。たとえば麦塚のホッケヅカ（法華塚）は、市域でも数少ない沼津市大岡の日蓮宗（うぢまうし）光長寺西院の檀家の墓地で、飯塚姓の七軒でまつつていているという。

イットーバカは、ダタラを利用した墓地だけに限らない。御宿の共同墓地はシンボチ（新墓地）と呼ばれているが、中にはイットーごとと石塔が向かい合ってかたまっているものがある。これは、この共同墓地が作られる以前からそれらのイットーがイットーごとと墓地を持っていたことを意味している。御宿では、親族の集まりを勝又イットー、西川イットー、外川イットーなどといい、イットーによっては屋敷がかたまっているものもあった。本来、屋敷内に墓を建てるが多かったために、本家の墓地に分家の墓も建てることしばしば行われた。富沢のF家の屋敷墓には、F家から分家したG家の墓が向き合うようにして建っている。このように市域のイットーバカは、本家筋の屋敷墓に分家が墓を持つことによって結果的に同族墓となった形跡がある。そういう意味では、イットーバカも屋敷墓の一種だと考えられよう。

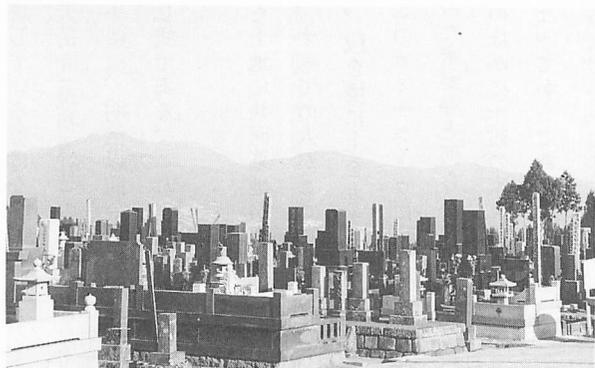
共同墓地と

寺の墓地

前述したように、明治以降、屋敷や家屋の近くに土葬することが禁止されたため、ムラで共同墓地を設けてそこに埋葬するようになった。現在、このような共同墓地が二カ所にあるムラもある。当初作った墓地が手狭になったために、新たに別の場所に墓地を設けたのである。この場合、古い方の墓をキュウハカ（旧



1



2

写真3-81 共同墓地

- 1 テラヤマの共同墓地(深良)
- 2 新しい共同墓地(須山)

墓とかキューボチ(旧墓地)といい、新しい方をシンハカ(新墓)とかシンボチと呼び分けている。特に、キューコ(旧戸)と呼ばれる家には、屋敷墓のほか古い共同墓地にも墓を持ち、さらに新しい共同墓地にも墓を持つ家がある。その一方で、シンコ(新戸)といわれる家は、新しい共同墓地に墓を持つのみであったり、まだその家から死者を出していない場合は墓を持っていないことが多い。

深良の南堀には、興禪寺(こうぜんじ)の裏山にテラヤマ(寺山)という共同墓地がある。ここには、興禪寺の檀家だけではなく、天田下(深良内の南半分のムラムラ、第二章第四節参照)の家々の墓も建っている。テラヤマの墓地は明治末期に新たに区画を整理して広げ、各家では「先祖代々之墓」と石塔に刻んで建てた。それ以前の石塔は、同じテラヤマ敷地内のもとの場所に建っている。

つまり、テラヤマには旧墓地と新墓地が同居している形になっている。

須山には、屋敷墓のほかにも廃寺となった天岳寺(現祖霊社)の裏にキュウボチ、集落の南端にシンボチがある。市域で唯一の神葬祭の村である須山のキュウボチには、明治以前の石塔が並んでいる。石塔の多くは近世中期以降のもので、神道に改宗する前なので戒名はすべて仏式である。これに対して、シンボチの方は明治以降に設けられたもので、石塔には神道名が刻まれている。

以上のように、明治以前にも寺に隣接した土地に共同墓地が作られることがある。このような墓地は、近世の初期、あるいは中期以降に作られた形跡があるが、すべての人がここに葬られたわけではない。たとえば桃園の定輪寺には、やはり「寺の墓地」と呼ばれる墓地がある。段を境に上をカクガンボラ、下をカミナントウといい、フルシイ(古しい)家の墓はカミナントウにあるという。このカミナントウには、富沢の渡辺本家のもっとも古い一六七〇(寛文一〇)年の墓があり、江戸時代に名主をつとめた家が寺と何らかのかかわりがあったのではないかと考えられる。しかし寺の墓地が、このようなごく限られた家のほかに一般の家々に広く利用されるようになるのは、土葬から火葬になり墓が骨を納めるカロウトを備えるようになってからである。